

# 三日市 A 遺跡 5

2012

石川県野々市市教育委員会

みっかいち  
三日市 A 遺跡 5

2012

石川県野々市市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、三日市A遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は、石川県野々市市三日市町地内である。
- 3 調査原因は、野々市市北西部土地区画整理事業にともなうものである。
- 4 調査は、野々市市北西部土地区画整理組合からの依頼を受けて野々市市教育委員会が実施した。
- 5 調査にかかる費用は、野々市市北西部土地区画整理組合が負担した。
- 6 現地調査の年度・期間・面積・担当者は以下のとおりである。

平成13年度	第4次
期 間	平成14年2月8日～平成14年3月26日
面 積	830 m <sup>2</sup>
担当者	横山貴広 野々市町教育委員会文化課 主査
平成15年度	第9次
期 間	平成15年4月18日～平成15年7月7日
面 積	2,770 m <sup>2</sup>
担当者	横山貴広 立原秀明 野々市町教育委員会文化課 主査
平成16年度	第16次
期 間	平成16年4月12日～平成16年7月16日
面 積	1,387 m <sup>2</sup>
担当者	田村昌宏 野々市町教育委員会文化振興課 主査
平成17年度	第21次
期 間	平成17年10月18日～平成18年3月29日
面 積	570 m <sup>2</sup>
担当者	田村昌宏
平成17年度	第22次
期 間	平成18年1月20日～平成18年2月23日
面 積	822 m <sup>2</sup>
担当者	横山貴広 野々市町教育委員会文化振興課 専門員
平成19年度	第30次
期 間	平成19年5月7日～平成19年6月29日
面 積	1,795 m <sup>2</sup>
担当者	田村昌宏
平成19年度	第33次
期 間	平成19年10月23日～平成19年11月27日
面 積	1,642 m <sup>2</sup>
担当者	横山貴広

- 7 出土品整理は平成17年度～平成23年度に野々市市教育委員会が実施した。
- 8 報告書の刊行は平成23年度に野々市市教育委員会文化振興課が実施した。担当分担は以下のとおりである。  
第1章 第2章 第5章 第6章 第8章 田村昌宏  
第3章 第4章 第7章 横山貴広
- 9 遺物写真撮影及び編集は、菊地由里子（臨時職員）が実施した。
- 10 現地調査から出土品整理、報告書刊行に至るまでに、野々市市北西部土地区画整理組合、柿田祐司、向井裕知の協力を得た。（敬称略）
- 11 本書についての凡例は以下のとおりである。
  - (1) 方位は座標北を指し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅷ系に準拠している。
  - (2) 水平基準は海拔高であり、T. P.（東京湾平均海面標高）による。
  - (3) 出土遺物番号は、本文・観察表・挿図・写真に対応する。
  - (4) 挿図の縮尺は図に示すとおりである。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。
  - (5) 土層図の注記は、農林水産省農林水産技術会事務局・財団法人 日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』に拠った。
  - (6) 遺構名称の略号は以下のとおりである。  
柵列：S A 掘立柱建物：S B 竪穴建物：S I 土坑：S K 溝：S D  
小穴：P 性格不明遺構：S X
- 12 調査に関する記録と出土遺物は、野々市市教育委員会が一括して保管・管理している。
- 13 例言、本文中に記載されている野々市町の名称は、2011年11月11日の市制施行に伴い、現在は野々市市となっている。

## 目 次

第1章 調査の経緯 …… 1	第3節 遺物 …… 15	第7章 第22・33次調査 …… 56
第2章 遺跡の位置と環境 …… 3	第4節 小結 …… 15	第1節 調査の経過 …… 56
第1節 地理的環境 …… 3	第5章 第16次調査 …… 37	第2節 遺構 …… 56
第2節 歴史的環境 …… 3	第1節 調査の経過 …… 37	第3節 遺物 …… 57
第3節 基本層序 …… 6	第2節 遺構 …… 38	第4節 小結 …… 57
第3章 第4次調査 …… 7	第3節 遺物 …… 45	第8章 第30次調査 …… 68
第1節 調査の経過 …… 7	第4節 小結 …… 45	第1節 調査の経過 …… 68
第2節 遺構 …… 7	第6章 第21次調査 …… 49	第2節 層序 …… 72
第3節 小結 …… 7	第1節 調査の経過 …… 49	第3節 遺構 …… 73
第4章 第9次調査 …… 15	第2節 遺構 …… 50	第4節 遺物 …… 85
第1節 調査の経過 …… 15	第3節 遺物 …… 54	第5節 小結 …… 94
第2節 遺構 …… 15	第4節 小結 …… 55	

## 挿 図 目 次

第1図 北西部土地区画整理事業地区遺跡位置図 …… 1	第42図 工事計画図 …… 49
第2図 調査区位置図 …… 2	第43図 調査区全体図 …… 49
第3図 野々市市位置図 …… 3	第44図 SK1土層断面図 …… 51
第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 5	第45図 トレンチ1～7、11遺構平面図 …… 51
第5図 土層断面模式図 …… 6	第46図 トレンチ8、9遺構平面図 …… 52
第6図 調査区遺構図1 …… 8	第47図 トレンチ9道路状遺構土層断面図 …… 52
第7図 調査区遺構図2 …… 9	第48図 トレンチ10遺構平面図 …… 53
第8図 調査区遺構図3 …… 10	第49図 トレンチ10道路状遺構土層断面図 …… 53
第9図 調査区遺構図4 …… 11	第50図 土器・陶磁器実測図 …… 54
第10図 調査区遺構図5 …… 12	第51図 遺構全体図 …… 58
第11図 調査区遺構図6 …… 13	第52図 SI1遺構図・土層断面図 …… 59
第12図 調査区遺構図7 …… 14	第53図 SI2、SI3遺構図・土層断面図 …… 60
第13図 SB1遺構図・断面図 …… 16	第54図 SK、SI、P遺構図・土層断面図 …… 61
第14図 SB2遺構図・断面図 …… 17	第55図 SD、近代河道、畝溝群土層断面図 …… 62
第15図 SB3遺構図・土層断面図 …… 18	第56図 SX遺構図・土層断面図 …… 63
第16図 SB4遺構図・土層断面図 …… 19	第57図 22次、33次土器・石製品実測図 …… 64
第17図 SB5遺構図・土層断面図 …… 20	第58図 33次土器実測図1 …… 65
第18図 SB6遺構図・土層断面図 …… 21	第59図 33次土器実測図2 …… 66
第19図 SB7遺構図・土層断面図 …… 22	第60図 工事計画図 …… 69
第20図 SB8遺構図・土層断面図 …… 23	第61図 調査区全体図 …… 69
第21図 SB8土層断面図 …… 24	第62図 I区遺構全体図 …… 70
第22図 SB9遺構図・断面図 …… 25	第63図 II区遺構全体図 …… 71
第23図 SB10遺構図・土層断面図 …… 26	第64図 III区遺構全体図 …… 72
第24図 SB11遺構図・断面図 …… 27	第65図 基本土層図 …… 72
第25図 SD2～7土層断面図 …… 28	第66図 SI1遺構図・土層断面図 …… 77
第26図 主要遺構模式図 …… 29	第67図 SI2、SI3遺構図・土層断面図 …… 78
第27図 土器、石製品実測図1 …… 31	第68図 SI4遺構図・土層断面図 …… 79
第28図 土器実測図1 …… 32	第69図 SI4、SK遺構図・土層断面図 …… 80
第29図 土器実測図2 …… 33	第70図 SK遺構図・土層断面図1 …… 81
第30図 土器実測図3 …… 34	第71図 SK遺構図・土層断面図2 …… 82
第31図 調査区グリッド図 …… 37	第72図 SK遺構図・土層断面図3 …… 83
第32図 I、II区遺構平面図 …… 39	第73図 SK、SD遺構図・土層断面図 …… 84
第33図 III、IV区遺構平面図 …… 40	第74図 土器実測図1 …… 86
第34図 V区遺構平面図 …… 41	第75図 土器実測図2 …… 87
第35図 SB1遺構図・土層断面図 …… 41	第76図 土器、陶磁器実測図 …… 88
第36図 SK1遺構図・土層断面図 …… 41	第77図 土器、陶磁器、石製品実測図 …… 89
第37図 SD1、SX1遺構図・土層断面図 …… 42	第78図 石製品実測図1 …… 90
第38図 SD2、SD3、SD4遺構図・土層断面図 …… 43	第79図 石製品実測図2 …… 91
第39図 自然河道平面図・土層断面図 …… 44	第80図 鉄製品実測図 …… 92
第40図 土器、陶磁器、石製品実測図 …… 46	第81図 鉄製品、銅銭実測図 …… 93
第41図 石製品実測図 …… 47	

## 表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表 …… 6	第6表 土器・陶磁器観察表 …… 54
第2表 遺構観察表 …… 30	第7表 土器観察表 …… 67
第3表 遺物観察表1 …… 35	第8表 土器観察表1 …… 96
遺物観察表2 …… 36	土器観察表2 …… 97
第4表 土器・陶磁器観察表 …… 48	第9表 石製品観察表 …… 98
第5表 石製品観察表 …… 48	第10表 鉄製品・銅銭観察表 …… 98

## 図 版 目 次

写真図版 1、2 (第4次) …… 99、100	写真図版 9～11 (第21次) …… 107～109
写真図版 3～6 (第9次) …… 101～104	写真図版 12～15 (第22・33次) …… 110～113
写真図版 7、8 (第16次) …… 105、106	写真図版 16～22 (第30次) …… 114～120

## 第1章 調査の経緯

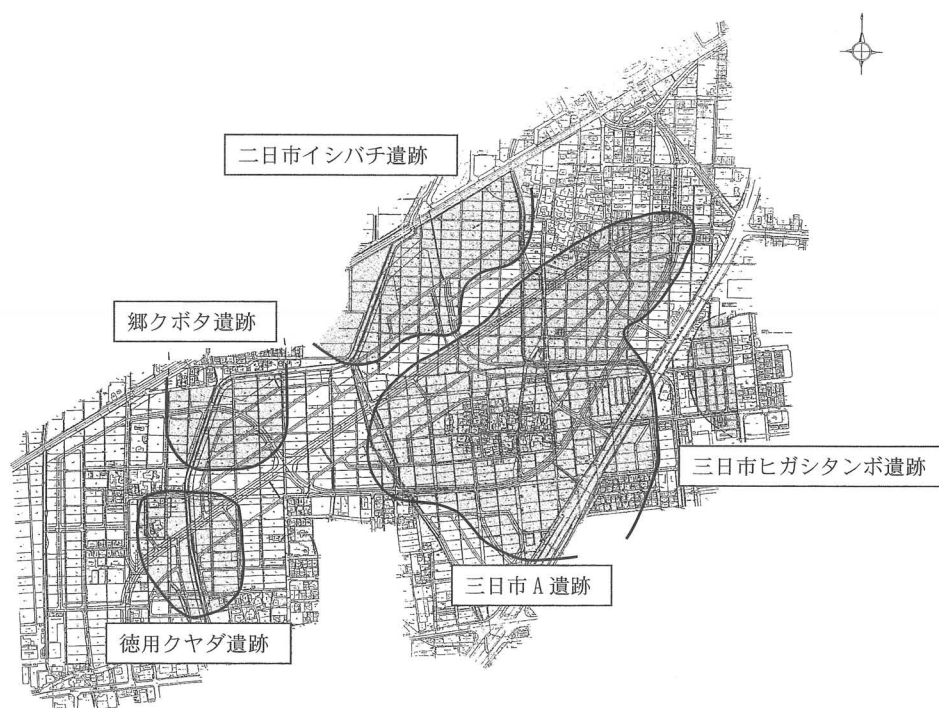
本書収録の三日市A遺跡が所在する野々市市北西部地域は、整然とした水田が広がる農業振興地域であった。しかし、近年における周辺地域の都市化に伴い、本地域も住生活環境の変化が必要となり宅地化の促進が図られることになった。そこで、平成11年に野々市町北西部土地区画整理事業が施行されることが決定した。

北西部土地区画整理施行区域65.4ha内には、埋蔵文化財の存在する可能性があり、詳細な確認調査を行う必要が生じた。そこで、平成11年8月25日付で野々市町産業建設部長から野々市町教育委員会教育長宛に土地区画整理事業区域内の埋蔵文化財の分布調査についての依頼が出され、同年8月31日付で同区域での分布調査を行う旨の回答をした。これに基づき、北西部土地区画整理施行区域内に試掘坑352箇所を設定し、宅地化など掘削作業できない箇所を除いた337箇所を、同年9月27日～10月19日にかけて試掘調査を実施した。その結果、以前より存在が確認されていた二日市イシバチ遺跡の南側の範囲が確定したほか、新たに三日市ヒガシタンボ遺跡、三日市A遺跡、郷クボタ遺跡、徳用クヤダ遺跡を発見した。

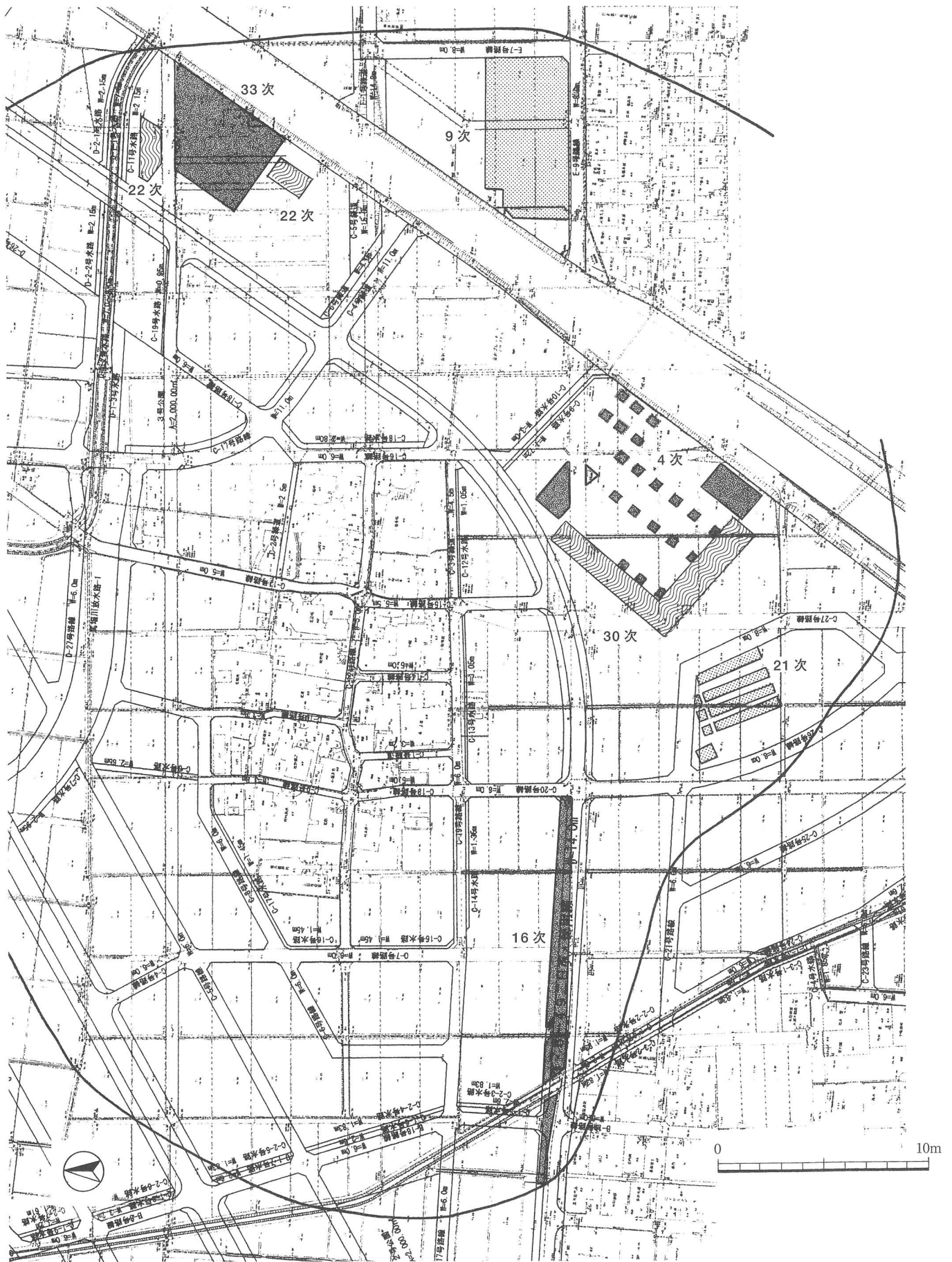
この結果から、野々市町北西部土地区画整理組合、野々市町都市計画課、野々市町教育委員会と協議を重ね、埋蔵文化財包蔵地のうち、道路等恒久化する工事箇所と、民有地内で十分な遺跡の保護層が確保できない箇所については、発掘調査を行うことで合意した。平成12年4月13日付で、野々市町と野々市町北西部土地区画整理組合との間で野々市町北西部土地区画整理事業地区内埋蔵文化財に関する協定書が交わされた。

北西部土地区画整理組合から文化庁長官宛に提出される二日市イシバチ遺跡、三日市ヒガシタンボ遺跡、三日市A遺跡、郷クボタ遺跡、徳用クヤダ遺跡に関する文化財保護法第57条の3に基づく届出は、平成12年3月29日付で野々市町教育委員会教育長から石川県教育委員会教育長宛に進達した。これを受けて、同年3月30日付で石川県教育委員会教育長から野々市町教育委員会教育長宛に埋蔵文化財発掘調査の届出に関する通知がなされた。

以上の手続きを終えて、平成13年度より上記5遺跡の発掘調査が開始された。



第1図 北西部土地区画整理事業地区遺跡位置図



第2図 調査区位置図 (S=1/2500)

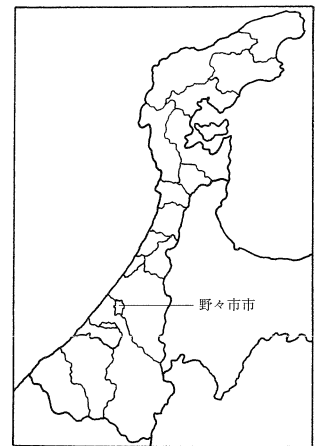
## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

野々市市は石川県のほぼ中央、石川平野の要地に位置する。市の大きさは南北約 6.7km、東西 4.5km で、県内で最も面積の小さい自治体である。市域は霊峰白山を源とする県下第一級河川手取川によって形成された手取川扇状地の北東部にあたり、扇央部と扇端部の狭間に位置する。本市で最も高い標高地は 50 m、最も低い地点は 10 m で、なだらかな緩斜面となる地勢をみせている。

現在の野々市市は平坦な地形が広がっているが、従前は手取川から派生する多くの小河川によって形成された微高地と微低地が混在する地形であった。野々市で人々の生活が認められるのは縄文時代後期前半からで、集落の拠点は標高の高い微高地であった。この時代は扇状地の大部分が未開の原野で、ススキや低木が生い茂る荒地であったようである。これが稲作の伝わる弥生時代から石川平野の中で水田耕作が営まれるようになり、土地の開墾が始まっていった。古代以降、農耕具の発達などにより凸凹の多い土地は次々と開発されていき、未開発地は耕作地として生まれ変わっていった。明治時代以降は、田区改正による耕地整理が各地で急速に広がり、市内全域は起伏のない平坦な地形へと移り変わり、水田区画は碁盤目のように整然となった。このように、大きく広がった田園風景は昭和 30 年代ころまで見られた。

しかし、昭和 40 年代の高度経済成長期以降は、県庁所在地金沢市の隣接地という地理的条件から、住宅地や商業施設の建設などが著しくなり、急速に水田風景は失われていった。特に、北部の御経塚地区や南部の三納・粟田・新庄地区は区画整理事業が進み、新興住宅地として生まれ変わっていった。今回、発掘調査箇所となる市域北西部地区も区画整理事業の一貫として行われており、周辺地は大きな変貌を遂げてきている。また、市内の東部には金沢工業大学、南部には石川県立大学といった教育機関が置かれ、若者が多く集う学園都市としての性格も持ち合わせている。



第3図 野々市市位置図

今回の発掘調査地である三日市 A 遺跡は、標高約 15 m で、手取川から派生する小河川によって形成された微高地上に立地する。ただし、市域上流部と比較して、大きな川原石の堆積は少なく、微低地との高低差も大差ないことから、当時の生活拠点の場としては、非常に適した地であったと思われる。

### 第2節 歴史的環境

三日市 A 遺跡周辺の遺跡を中心として、時代別に概観する。

#### 縄文時代

本遺跡より北東方約 1 km 離れたところには国指定史跡となっている 6 御経塚遺跡が所在する。御経塚遺跡は、縄文時代後期中葉～弥生時代初頭にかけて営まれた地域における拠点集落である。当遺跡で発見された御経塚式土器は縄文時代晩期前半の基準資料となる。御経塚遺跡の近隣には、縄文時代後期後半～晩期後半の 1 チカモリ遺跡や縄文時代後期後半～晩期後半の 2 中屋サワ遺跡といった集落遺跡が点在し、御経塚遺跡の拠点集落を中心に展開した出村的な集落であったようである。これらの遺跡が存在する地点は標高 6 ～ 10 m に立地し、扇状地を伏流する地下水の湧水域であった。また、当時の生活に必要な落葉広葉樹と照葉樹が混在する豊かな林野が大きく広がっていた場所でもあったことから、この地帯は当時の人々にとって生活環境に最適な場であったようである。

本遺跡より南東約 2 km のところには、縄文時代晩期の 17 長竹遺跡がある。長竹遺跡は縄文晩期後半の基準資料となる土器が出土した遺跡で、水田稲作農耕が西日本に波及した極めて重要な時期である。なお、三日市 A 遺跡及び御経塚遺跡からは、当該時期の稲籾の圧痕のついた土器が出土している。

## 弥生時代

手取川扇状地一帯における弥生時代の遺跡分布を見ると、前期～中期にかけては極めて少なく、後期に数多く存在する。御経塚遺跡（ツカダ地区）、15 乾遺跡からは、柴山出村式と呼ばれる弥生時代前期の土器が確認されているが、この時期は弥生文化の波及が十分ではなく、まだ縄文文化の影響が強く残っていたようである。

弥生時代後期になると、鉄器の普及などを要因とする生産力の向上から人口が増え、それに伴い、手取川扇状地一帯にも集落が展開するようになる。本遺跡をはじめ、周辺にある 5 御経塚シンデン遺跡、御経塚遺跡、7 長池ニシタンボ遺跡、9 二日市イシバチ遺跡、10 郷クボタ遺跡、13 三日市ヒガシタンボ遺跡、14 徳丸ジョウジャダ遺跡などからは、竪穴建物や掘立柱建物などで構成される集落跡が見つかっている。これは、農耕社会が急速に広がったことから、安定した農耕地の確保が必要となったため、広範にわたってムラが形成していったと考えられる。

## 古墳時代

古墳時代前半については、本遺跡に隣接する二日市イシバチ遺跡で、弥生時代後期からの流れを汲む集落跡を確認することができるが、扇状地上での集落数は激減し、一旦収束傾向となる。ただし、本遺跡より北方 1 km にある御経塚シンデン遺跡・御経塚シンデン古墳群では、弥生集落廃絶後に 15 基の前方後方墳、方墳からなる大古墳群を造立している。また、二日市イシバチ遺跡でも一辺約 18 m の規模を中心とした大小の方墳 7 基を確認しており、各地域を治める首長層の存在を伺い知ることができる。

古墳時代後半になると、本遺跡から南方約 4 km の市上流域の扇状地扇央部で末松古墳や上林古墳など後期古墳が築かれるようになる。これは河川上流域における開発が広がり始めていったことを意味する。

## 古代

7 世紀後半には、手取川扇状地扇央部に、県内最古の古代寺院である末松廃寺が建立される。末松廃寺跡は、東に塔、西に金堂が置かれた法起寺式の伽藍配置をもち、この寺院建立以降、市内南部地域を含む手取川扇状地扇央部一帯で耕作地開発が急速に進み、特に 8 世紀後半以降は 18 藤平田ナカシンギジ遺跡をはじめとする周辺各地に集落が増大していく。扇状地扇端部には、初期荘園の遺跡である 3 横江荘々家跡、4 上荒屋遺跡が所在する。また、三日市 A 遺跡の南方部には、9 世紀頃に成立した古代の官道である北陸道の跡が見つかり、上記荘園遺跡との関係が指摘されている。

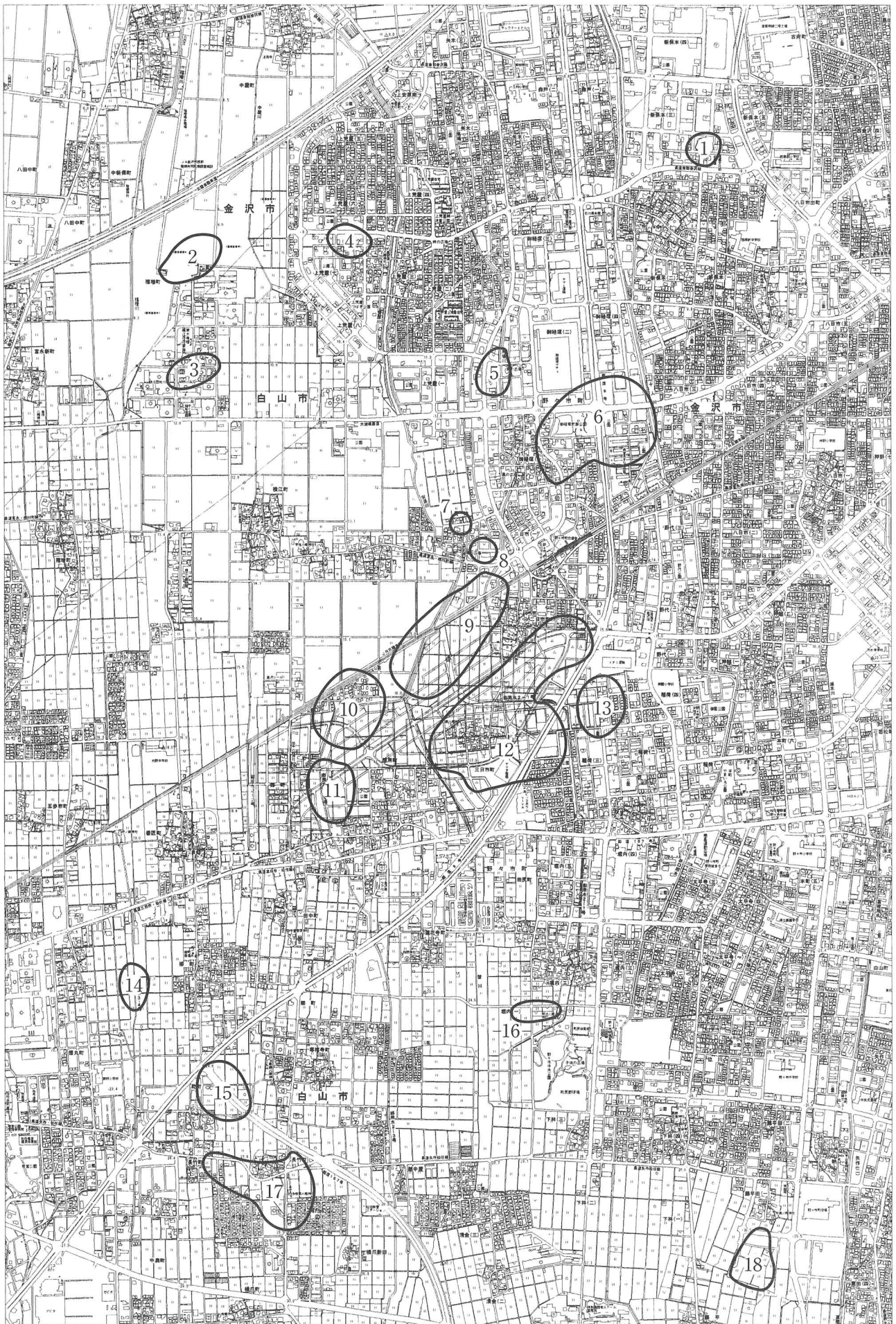
## 中世

11 世紀後半～12 世紀頃から、在地領主層の武士団の形成がはかれるようになった。地元武士団である林氏や富樫氏は、手取川扇状地での新開発や再開発に大きな影響を与えた。ただし、市内において現在のところ中世前半にかけての遺跡はあまり多く確認されていない。中世の遺跡が多く認められるようになるのは、富樫氏が加賀国の守護職に任じられ、野市に守護所を置く 14 世紀頃からである。三日市 A 遺跡をはじめ、近隣の二日市イシバチ遺跡や郷クボタ遺跡、中屋サワ遺跡では、溝で囲まれた中に建物などが配置される散居村のような景観が広がる集落が認められる。また、本遺跡南方 1.5 km にある 16 堀内館跡では、幅 1.5 m、深さ 1 m ほどの大きな堀で囲まれた屋敷地の跡も確認されている。15 世紀以降になると、集落跡である三日市 A 遺跡、8 長池キタノハシ遺跡、11 徳用クヤダ遺跡では、掘立柱建物、竪穴状遺構などの主要遺構が密集した村落形態を示し、14 世紀頃までみられた散村から集村へと大きく変わる様相となる。

## 近世

現在見ることでできる集落は、近世に成立したと考えられる。御経塚集落内（御経塚遺跡デト地区）や郷町集落（徳用クヤダ遺跡）隣接地での発掘調査でも、近世の遺構・遺物を発見している。また、乾遺跡や三日市 A 遺跡からは、当該時期の村落墓地跡を確認している。





第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/20000)

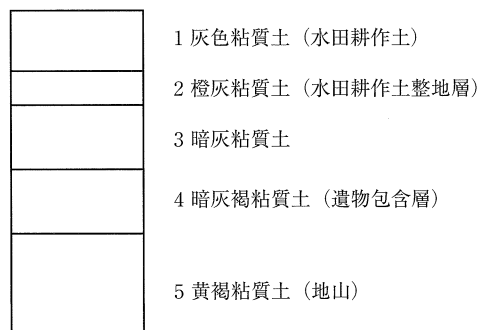
第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代
1	チカモリ遺跡	集落跡	縄文
2	中屋サワ遺跡	集落跡	縄文～中世
3	横江荘々家跡	荘園	古代
4	上荒屋遺跡	集落跡 荘園跡	縄文～中世
5	御経塚シンデン遺跡 御経塚シンデン古墳群	集落跡 古墳	弥生～中世
6	御経塚遺跡	集落跡	縄文～中世
7	長池ニシタンボ遺跡	集落跡	弥生
8	長池キタノハシ遺跡	集落跡	中世
9	二日市イシバチ遺跡	集落跡 古墳	弥生 古墳 中世
10	郷クボタ遺跡	集落跡	弥生 古代 中世
11	徳用クヤダ遺跡	集落跡	古代 中世
12	三日市A遺跡	集落跡	弥生 古代 中世 近世
13	三日市ヒガシタンボ遺跡	集落跡	弥生 古代 中世
14	徳丸ジョウジャダ遺跡	集落跡	弥生 古代
15	乾遺跡	集落跡・墓地	縄文～近世
16	堀内館跡	館跡	中世
17	長竹遺跡	散布地・墓地	縄文～古墳
18	藤平田ナカシンギジ遺跡	集落跡	古代 中世

### 第3節 基本層序

基本層序については、下記のとおりである。ただし、各調査区が広範囲であることから、それぞれの箇所ですら若干の相違が見られる。

1の灰色粘質土は土地区画整理事業以前まで行われていた水田耕作土である。2の橙灰粘質土は耕作土の整地層にあたる。3の暗灰粘質土は中世～近世頃までの耕作土と想定される。4の暗灰褐粘質土は遺物包含層で、中世の遺構面にもあたる。その下面にある5の黄褐粘質土は地山面である。



第5図 土層断面模式図

### 第3章 第4次（平成13年度）調査

#### 第1節 調査の経過

##### 第1項 調査に至る経緯

本調査区は、野々市市北西部土地区画整理地区72街区における家電量販店建設工事に伴う発掘調査である。平成13年9月、北西部土地区画整理組合から野々市町（当時）教育委員会（以下、町教委という。）に対し、当該地において家電量販店建設の計画の打診があった。建設予定地は全域が埋蔵文化財包蔵地であったため、双方でその取扱いについて協議を行った。加えて、この建物が包蔵地に面して接しない、限られた基礎で立ち上がるフローティングともいえるべき構造で、建物の下を駐車場として利用する建築物であったため、並行して石川県教育委員会文化財課（以下、県教委という。）とも協議を進めた結果、22か所の基礎部分と地面から立ち上がる入口及び倉庫部分を調査対象とし、他は盛土造成工事として遺跡を保護することで合意した。調査面積は830㎡である。

町教委は、平成13年11月5日付で県教委に発掘調査報告を提出し、当該地における埋蔵文化財発掘調査の具体的準備に着手した。

##### 第2項 発掘作業の経過

現地における発掘調査は、先行して行っていた第3次調査が終了した後の平成14年2月8日に着手した。計画図をもとに調査区を設定し、重機を用いて遺構上面までの表土を除去し、その後人力による掘削を開始した。調査にあたっては、1か所につき4名1組で担当してもらい、包含層掘り下げから遺構掘削までを一貫して行った。その後調査員が写真撮影を行い、記録を取った。調査区全体の配置図とそれぞれの遺構平面図等については外部委託を行い、同年3月26日に現地での作業を終了した。

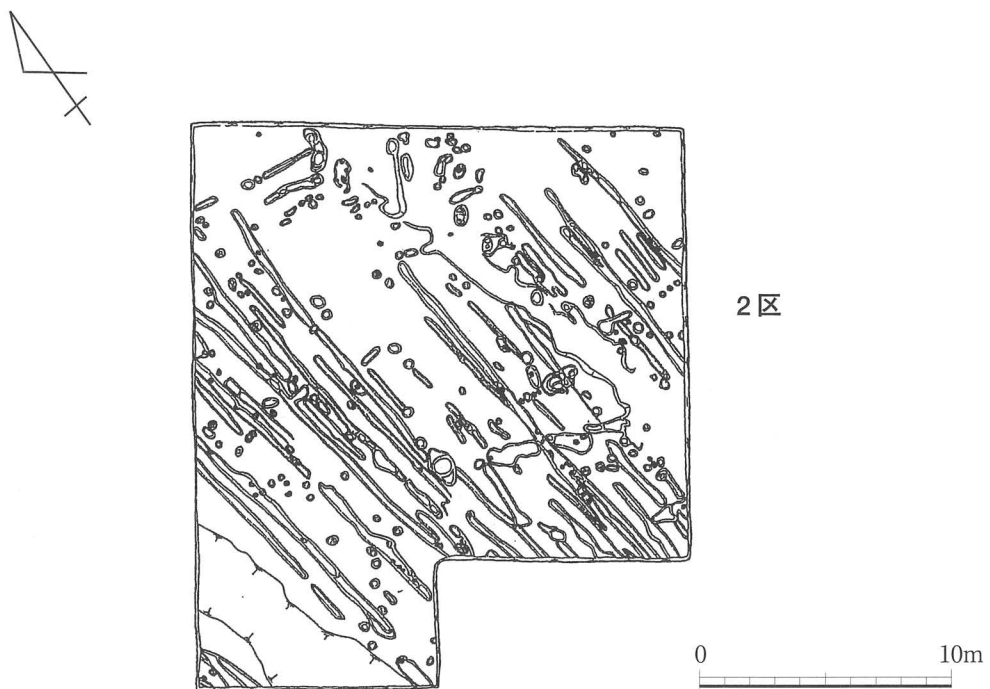
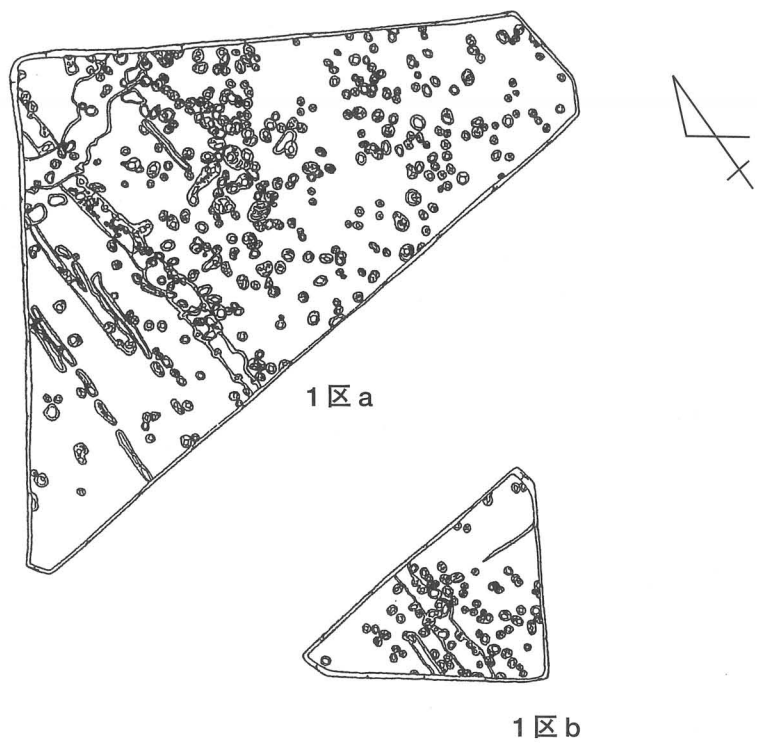
出土した遺物の整理については、平成17年度に行ったが、図化できるほどのものはなく、僅かに時期を判断できるものは9世紀前半代の須恵器盤1点のみであった。

#### 第2節 遺構（第6～12図）

南西から北東にかけてのラインをA～E列、西から東にかけてのラインを1～8列と設定し、各調査区の位置を南西隅よりA3調査区というように標記している。この内、C1調査区及びD1調査区とE列の調査区については遺構全体図の中では第30次の遺構図と重なっている。今次の調査は三日市A遺跡としては早い年次の調査であったため当時は思いもよらなかったが、事後の確認ではA3・A6・B4・C4・D1・D2調査区に古代北陸道と思われる道路状遺構の側溝跡がみられる。各調査区の配置については、遺構全体図でご確認願いたい。

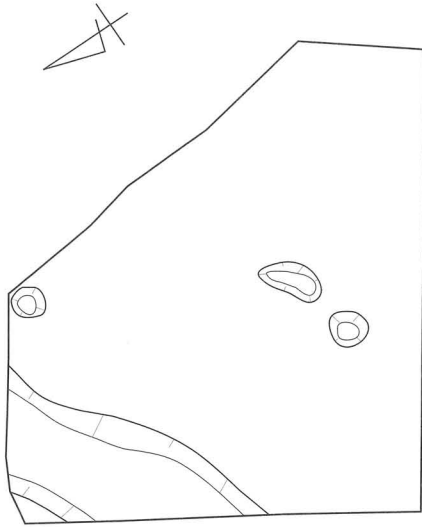
#### 第3節 小結

第4次の調査としてみれば小さな調査区の集合体であるが、これまで積み重ねられた調査成果全体で見れば、古代北陸道と思われる道路状遺構を中心とした位置にあたり、集落としての土地利用は、それより若干遅れた時期になるとと思われる。

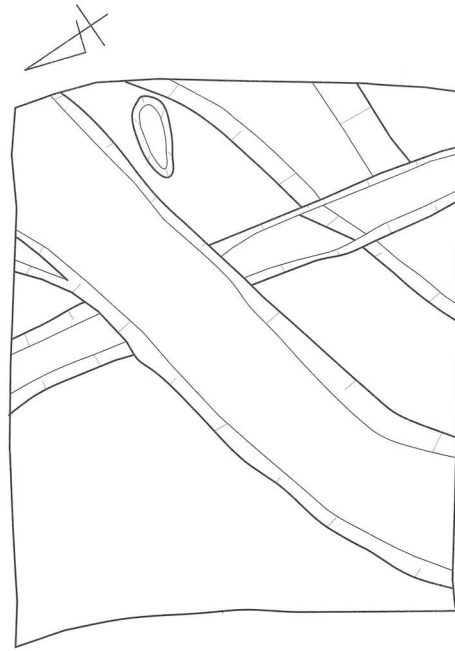


第6図 調査区遺構図1 (S=1/300)

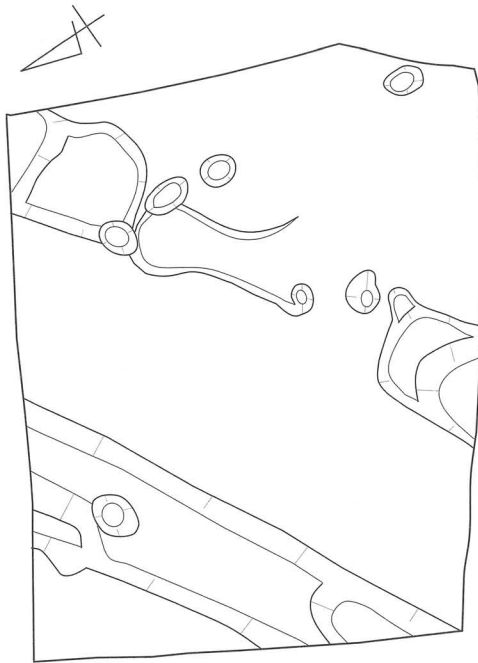
A3 調査区



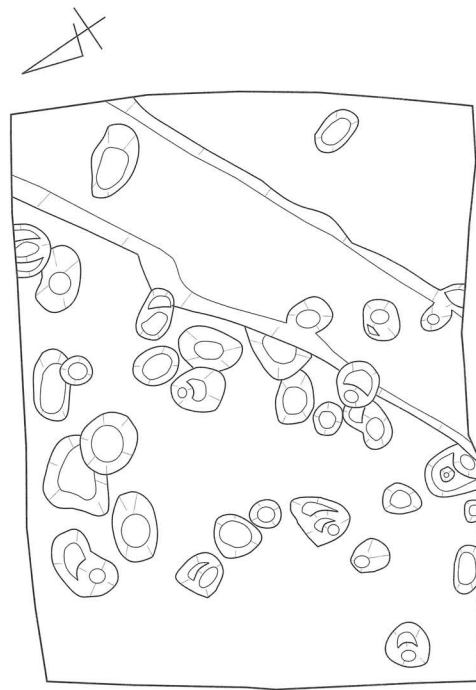
A6 調査区



A7 調査区

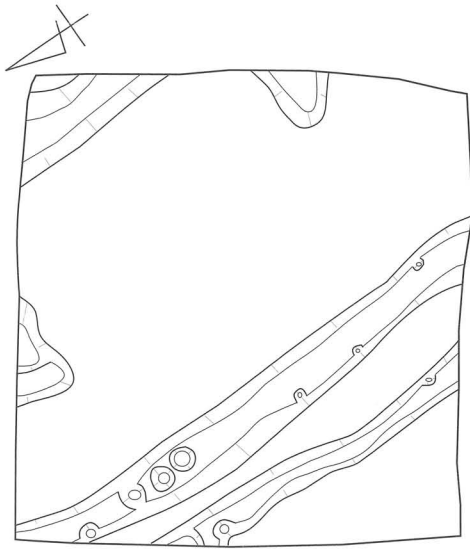


A8 調査区

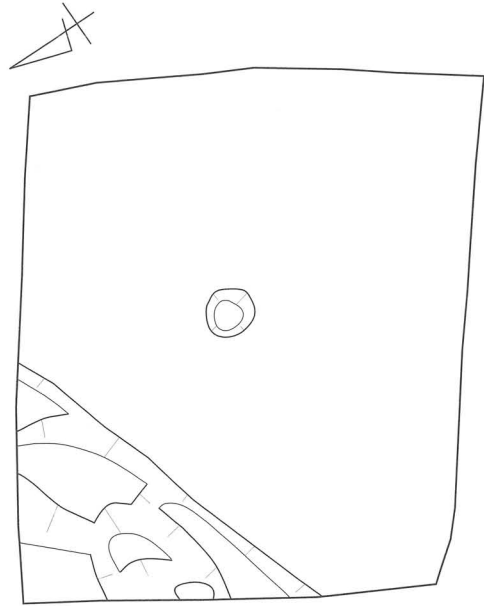


第7図 調査区遺構図2 (S=1/50)

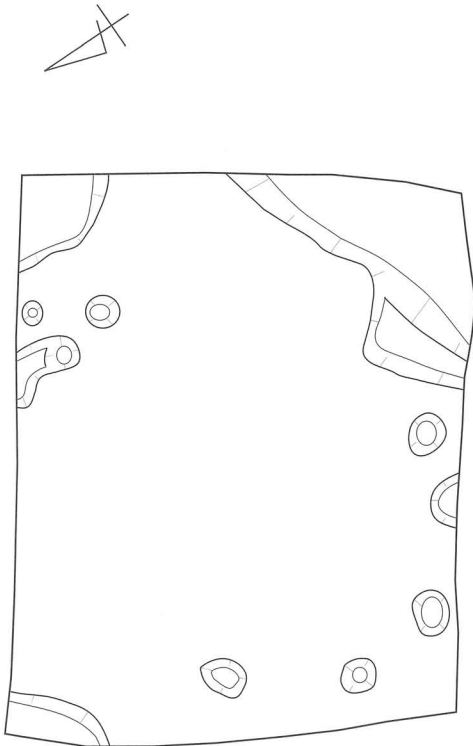
B3 調査区



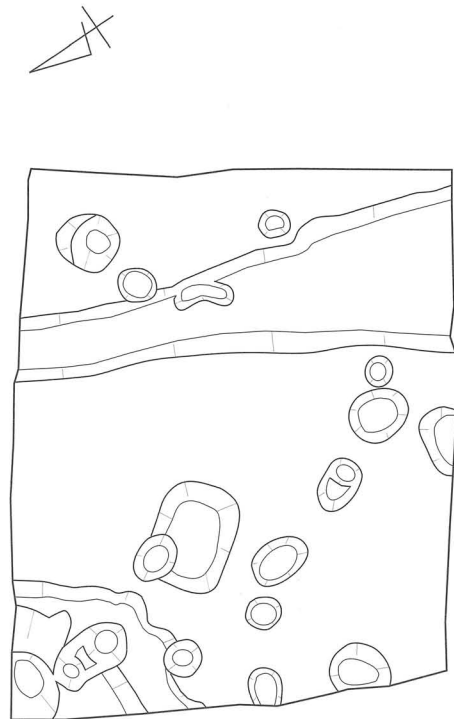
B4 調査区



B6 調査区

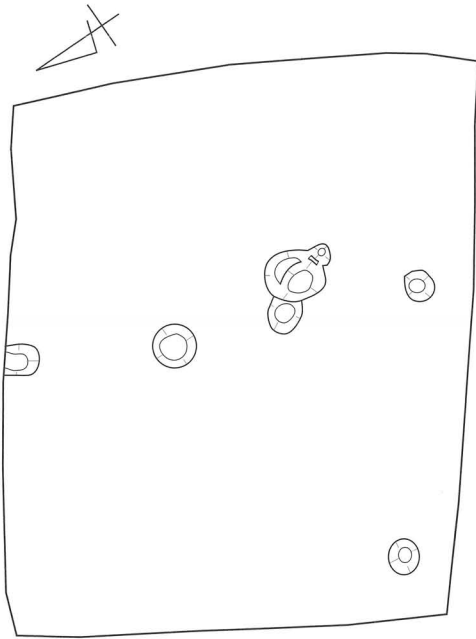


B7 調査区

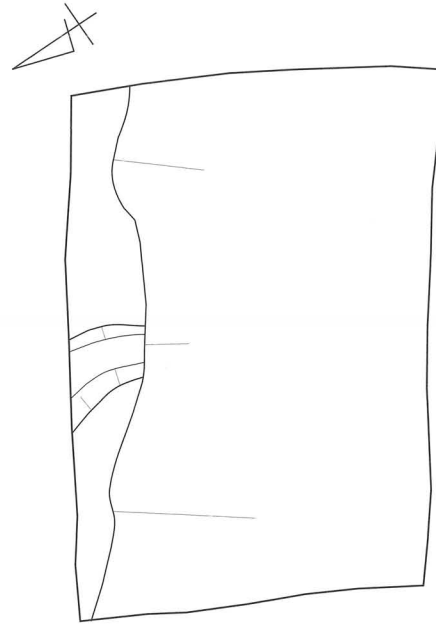


第8図 調査区遺構図3 (S=1/50)

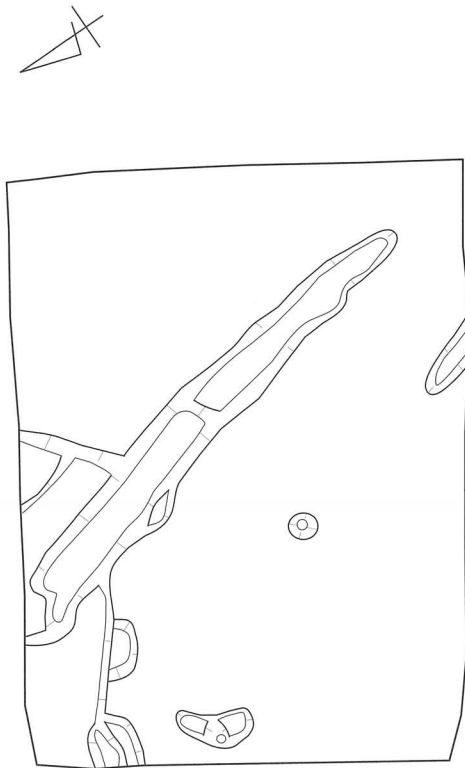
B8 調査区



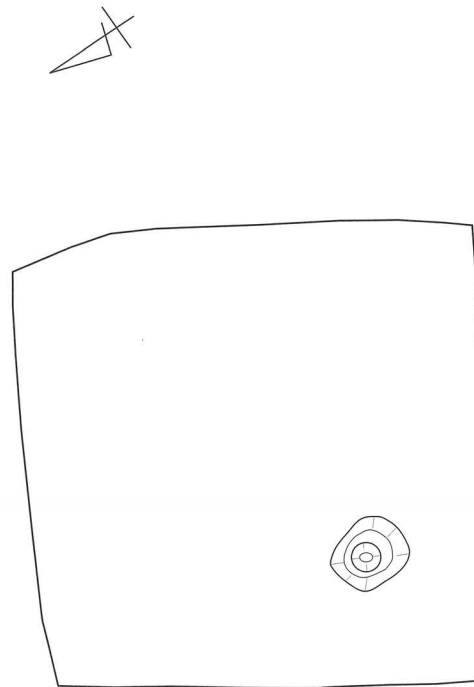
C1 調査区



C2 調査区

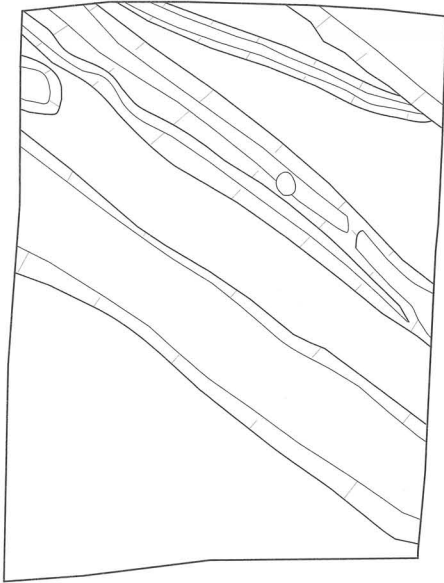


C3 調査区

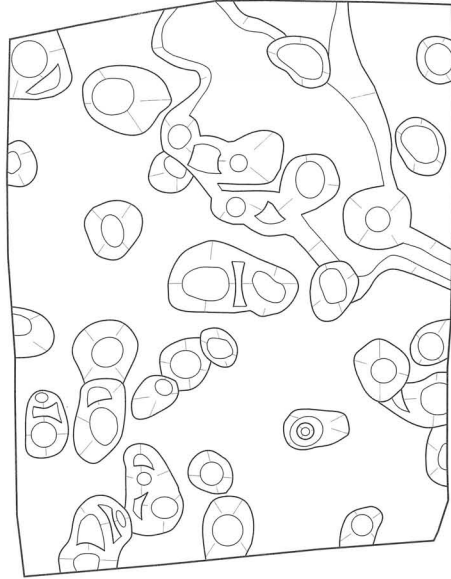


第9図 調査区遺構図4 (S=1/50)

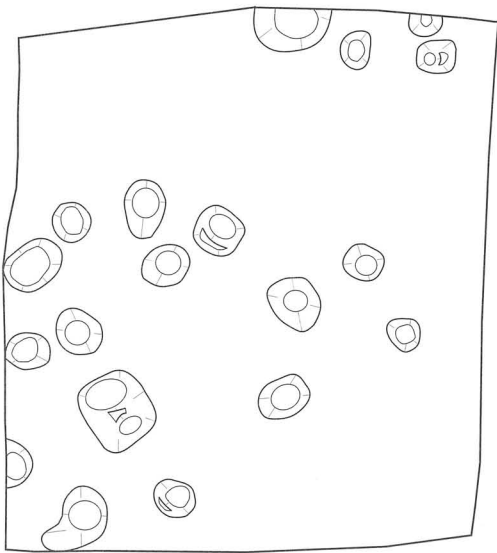
C4 調査区



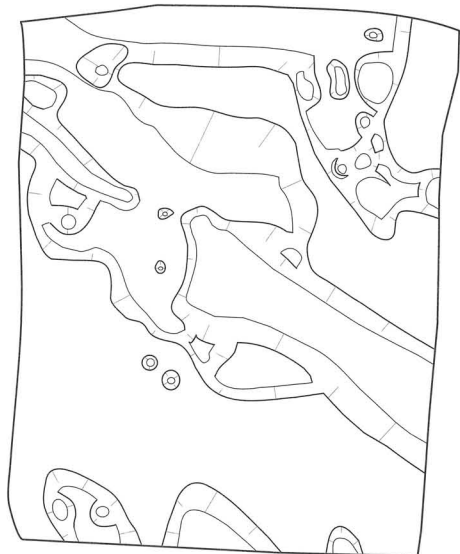
C5 調査区



C6 調査区



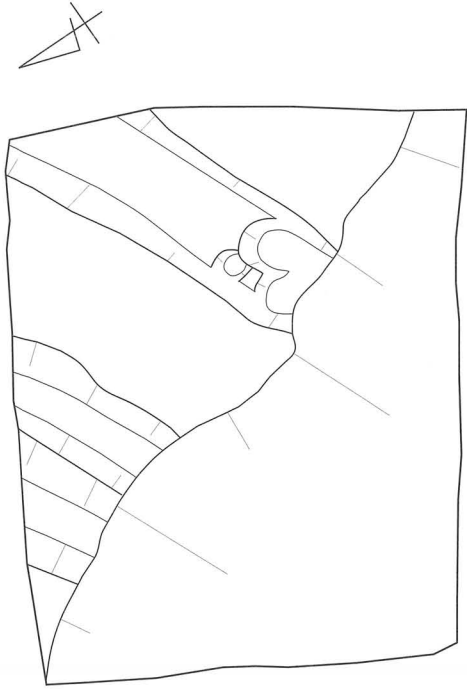
D1 調査区



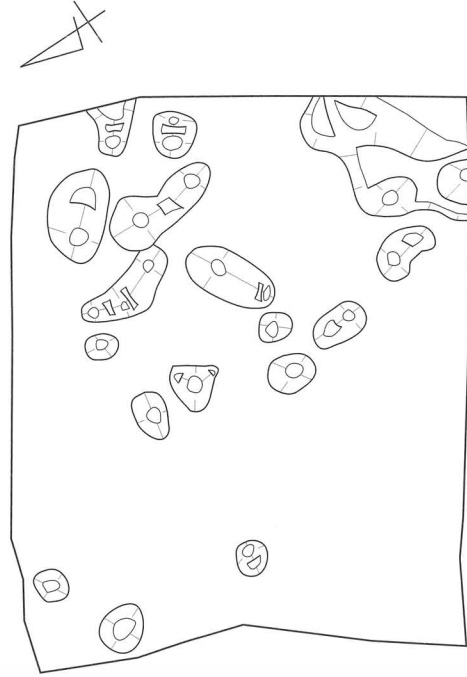
第10図 調査区遺構図5 (S=1/50)



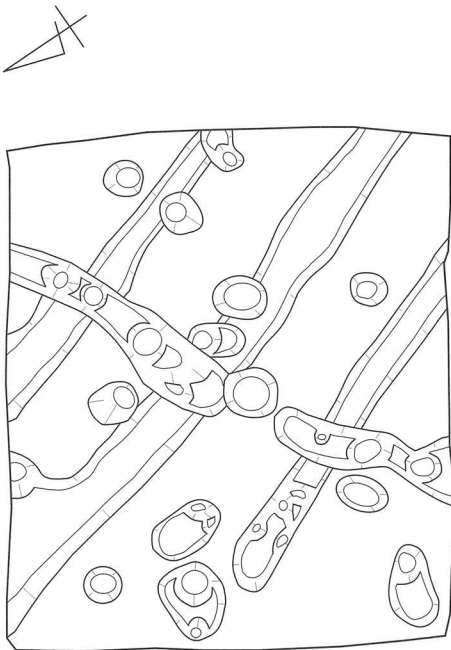
D2 調査区



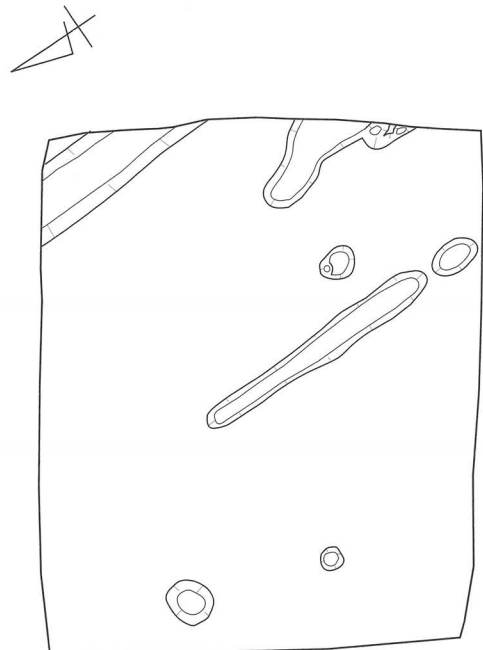
D3 調査区



D4 調査区

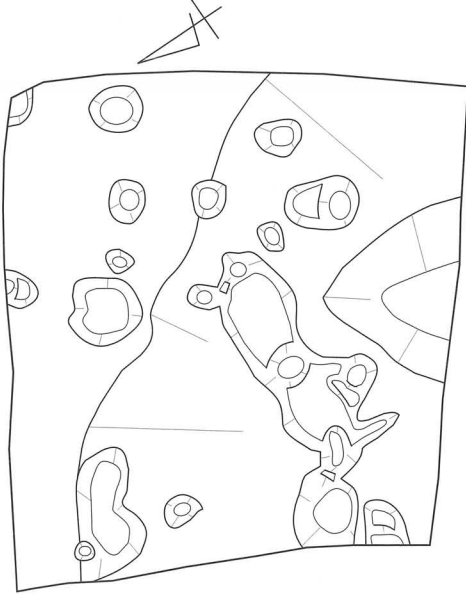


D5 調査区

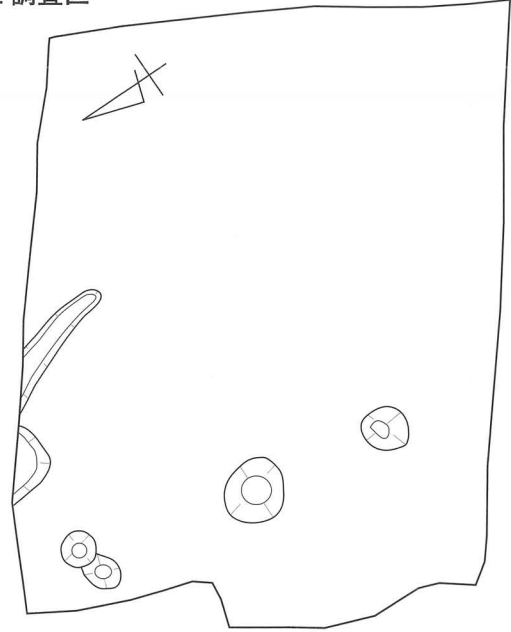


第11図 調査区遺構図6 (S=1/50)

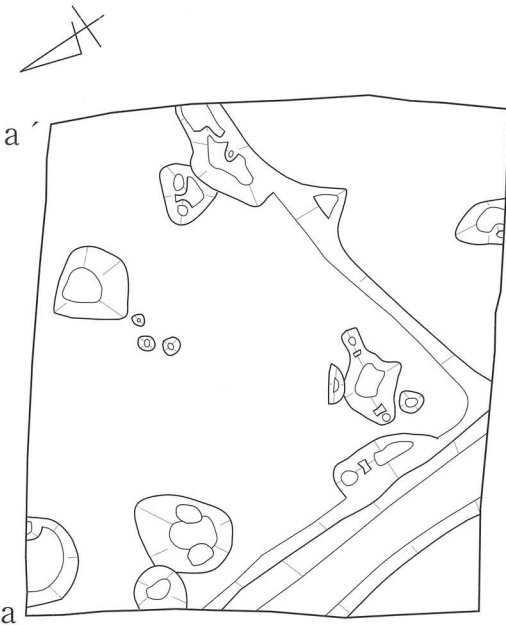
E1 調査区



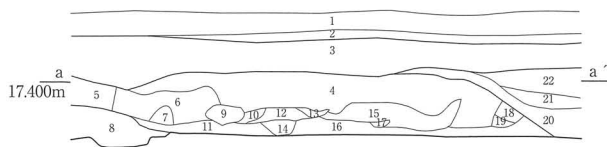
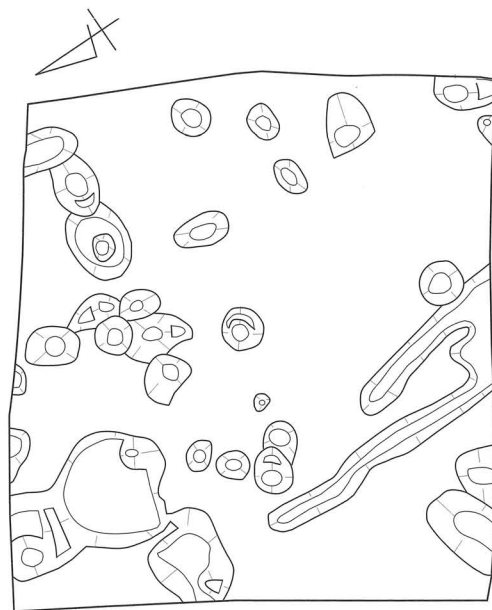
E2 調査区



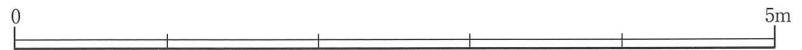
E3 調査区



E4 調査区



- |                    |                     |
|--------------------|---------------------|
| 1 耕土               | 11 明褐色粘質土に地山ブロック混合  |
| 2 床土               | 12 淡明灰色粘質土          |
| 3 暗褐色粘質土           | 13 黒褐色粘質土           |
| 4 暗灰色粘質土           | 14 淡暗灰色粘質土          |
| 5 濁明褐色粘質土          | 15 淡明灰色粘質土に地山ブロック混合 |
| 6 黄褐色粘質土と黒褐色粘質土の混合 | 16 明褐色粘質土に地山ブロック混合  |
| 7 黒褐色粘質土           | 17 黒褐色粘質土           |
| 8 暗褐色粘質土           | 18 明灰色粘質土に地山ブロック混じる |
| 9 黒褐色粘質土           | 19 黄褐色粘質土           |
| 10 淡暗褐色粘質土         | 20 明灰色粘質土 (鉄分強)     |
|                    | 21 濁灰褐色粘質土          |
|                    | 22 灰褐色粘質土           |



第 12 図 調査区遺構図 7 (S=1/50)

## 第4章 第9次（平成15年度）調査

### 第1節 調査の経過

#### 第1項 調査に至る経緯

本調査区は、野々市市北西部土地区画整理地区44街区における車用品量販店建設工事に伴う発掘調査である。平成14年10月、北西部土地区画整理組合から野々市町（当時）教育委員会（以下、町教委という。）に対し、当該地において車用品量販店建設の計画の打診があった。建設予定地は全域が埋蔵文化財包蔵地であったため、双方及び建設事業者を加えてその取扱いについて協議を行った。その結果、建設によって地下に影響を受ける店舗部分を調査対象とし、他は盛土造成工事として遺跡を保護することで合意した。また、盛土造成工事についても、慎重に実施するよう指導している。調査面積は2,770㎡である。

町教委は、平成15年4月1日付教文第6号で石川県教育委員会文化財課に発掘調査報告を提出し、当該地における埋蔵文化財発掘調査の具体的作業に着手した。

#### 第2項 発掘作業の経過

現地における発掘調査は、平成15年4月18日に着手した。計画図をもとに調査区を設定し、重機を用いて遺構上面までの表土を除去し、その後人力による掘削を開始した。調査にあたっては、包含層掘り下げを行った後に遺構検出を行い、並行して1/100スケールの遺構略測図を作成した。その後遺構掘削を進め、写真撮影と記録作成を行い、同年7月7日に現地での作業を終了した。

出土した遺物の整理については、平成20年度に行った。内容は遺物の洗浄と記名、選別及び接合と実測図作成、トレースである。並行して遺構図の編集や遺物写真の撮影を行い、原稿執筆を含めたすべての作業を平成24年3月30日に完了した。

#### 第2節 遺構（第13～26図）

確認された主な遺構は、古代北陸道と思われる道路状遺構と、掘立柱建物11棟である。この内、道路状遺構は路面幅8mを測る堂々としたものであり、北東方向より南西へ直線的に伸びている。道路上にはほかの時代の遺構はほとんど干渉しておらず、長く古代の官道として意識されていたことがうかがわれる。遺物は図化していないが、側溝覆土上層より須恵器の杯小片が1点出土している。時期的には9世紀後半代のものであり、北側に遅れて展開する集落からの混入品と考えられる。

掘立柱建物はこの道路状遺構から若干遅れて建てられたものである。中央に南北に走る幅7.5mほどの鞍部を挟み、東西に分けられている。詳細については遺構観察表（第2表）を参照していただきたい。

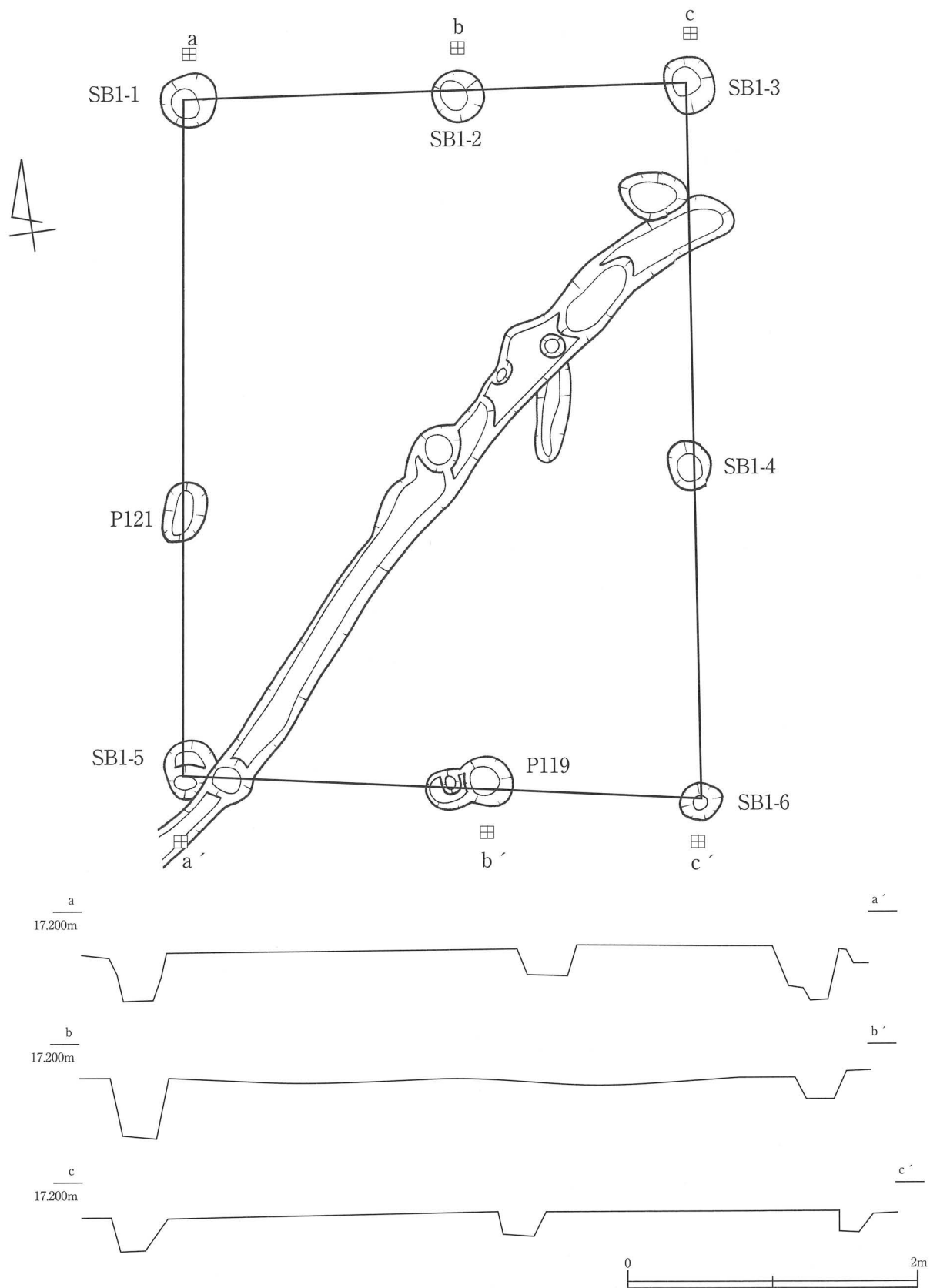
#### 第3節 遺物（第27～30図）

遺物は61点図示した。概ね9世紀中頃から後半のものでしめられており、道路状遺構に後続するとと思われるものである。詳細については遺物観察表（第3表）を参照いただきたい。

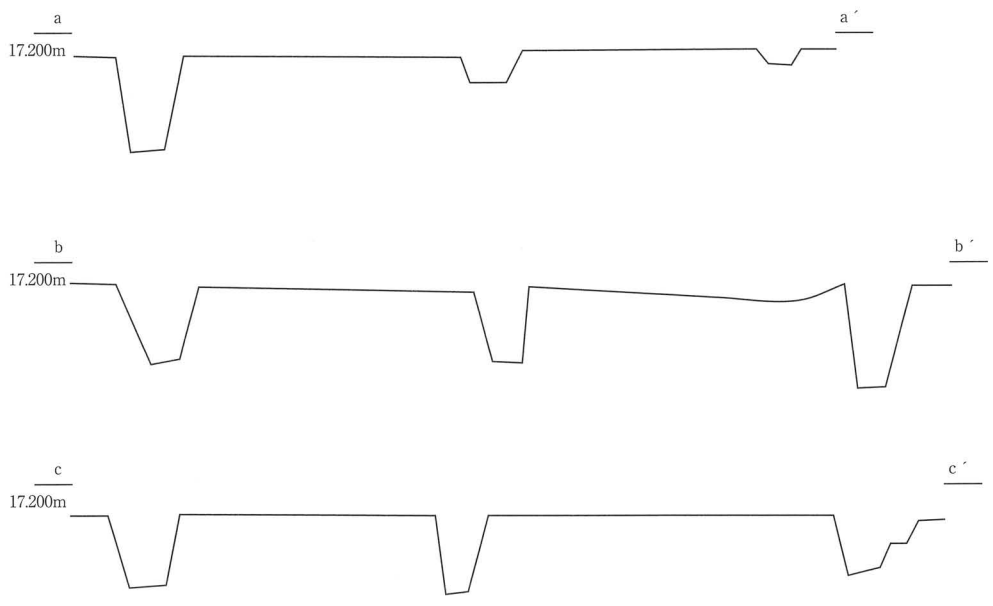
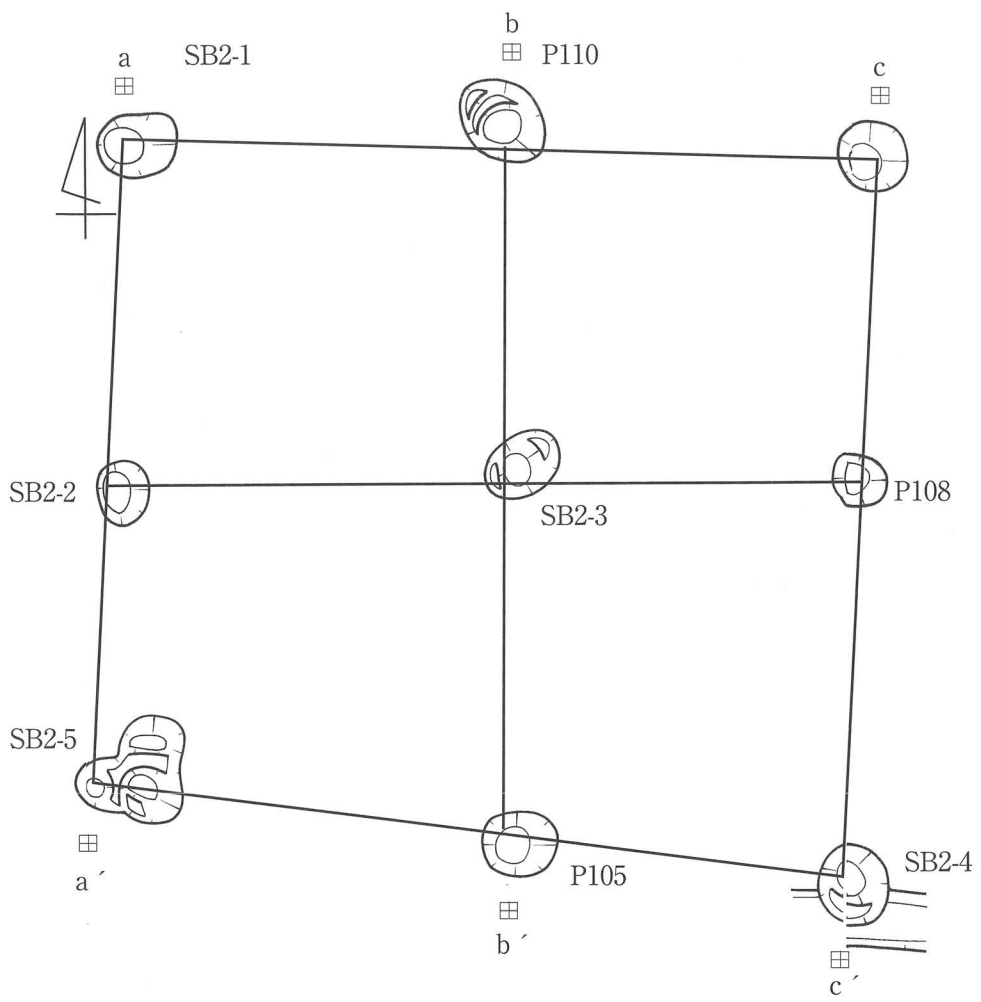
#### 第4節 小結

今次の調査で特筆すべきは、これまで加賀平野においてそのルートが不明であった古代北陸道の存在が確認されたことであり、周辺の調査成果も含めると現在までに約530mの区間で直線的に伸びていることが確認されている。古代の官道はその機能を維持するために頻繁に側溝を掃除するため、明確に機能した時期を特定できる遺物は確認されていないが、その目的に鑑みて律令体制が成立した時代からそう遠くないものと考えられる。そうした場合、北側に展開する掘立柱建物群とは一時代画しているものと思われるが、路面より9世紀代以降の遺構が確認されていないことからしばらくは官道

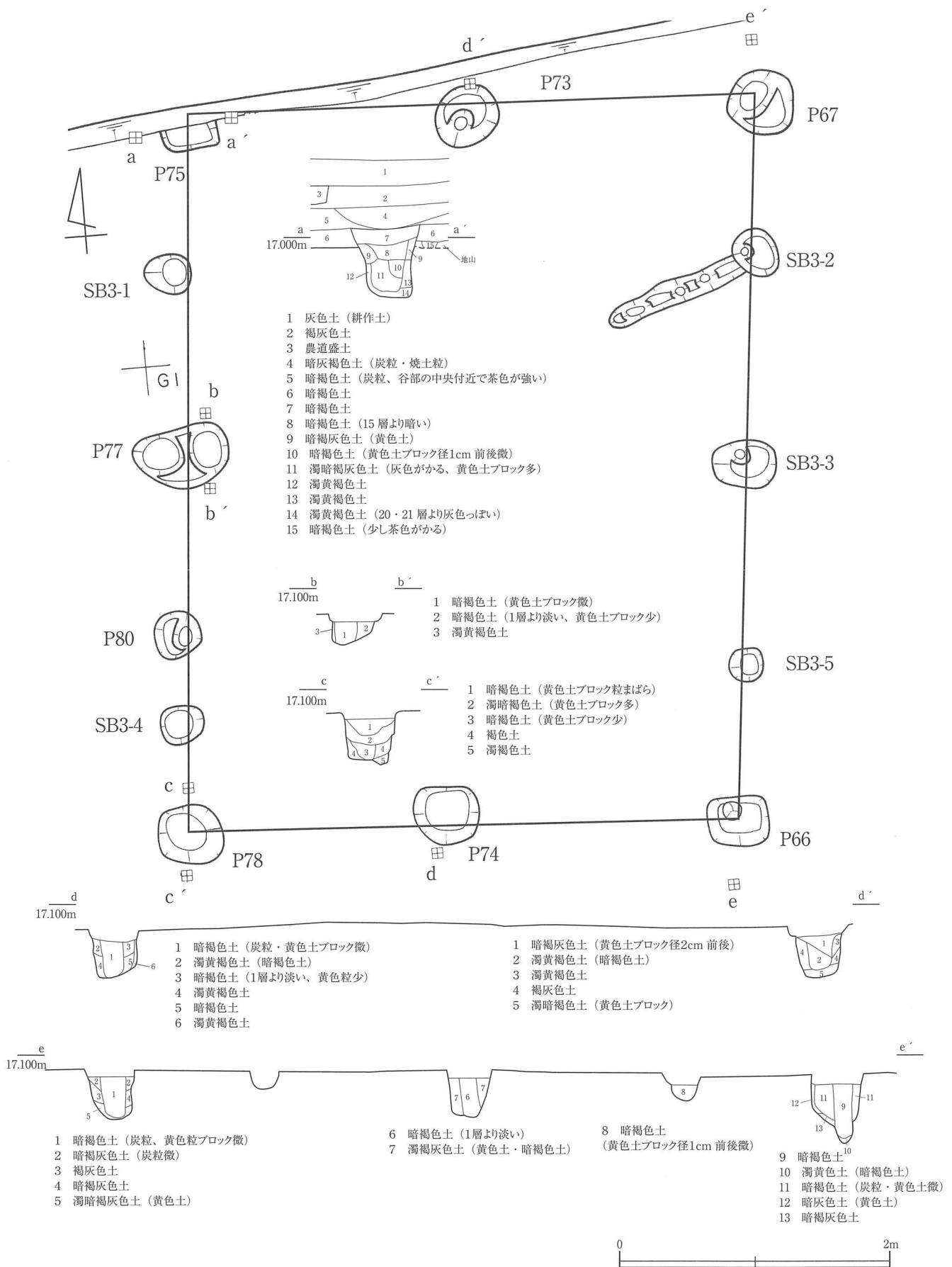
として意識されていたものと考えられる。周辺では現状で三日市 A 遺跡以外に同様の遺構が確認されていないため明言をさけるが、東は金沢市広阪廃寺方面へ、西は白山市石の木塚方面へ伸びているようにも思える。ただ、大きな縮尺の地図を用いての推測では、鉛筆の芯 1 本分のずれでも大きな誤差が生じることから、今後は本遺跡より西側（白山市地内）で確認されることを期待したい。



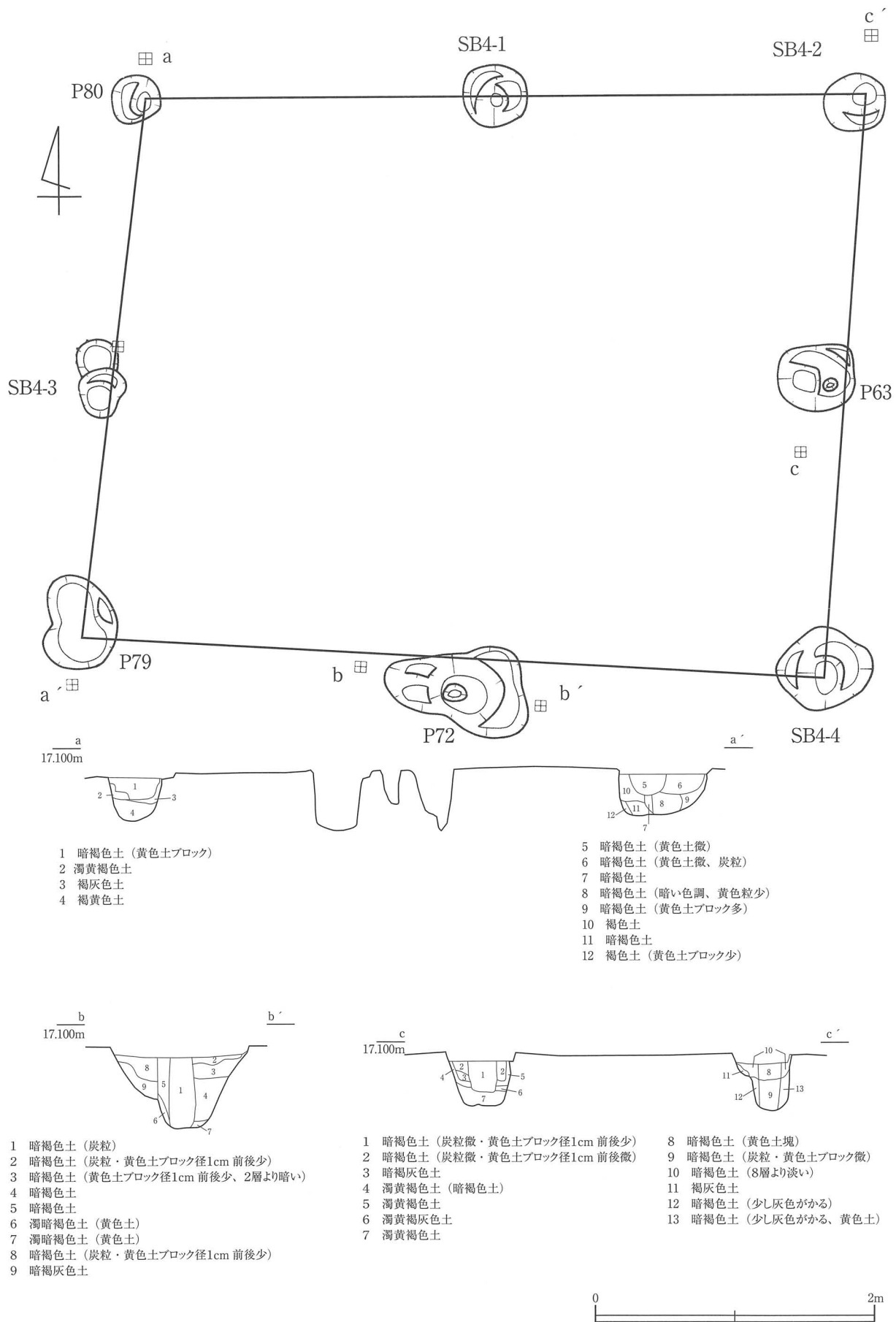
第 13 図 SB1 遺構図・断面図 (S=1/40)



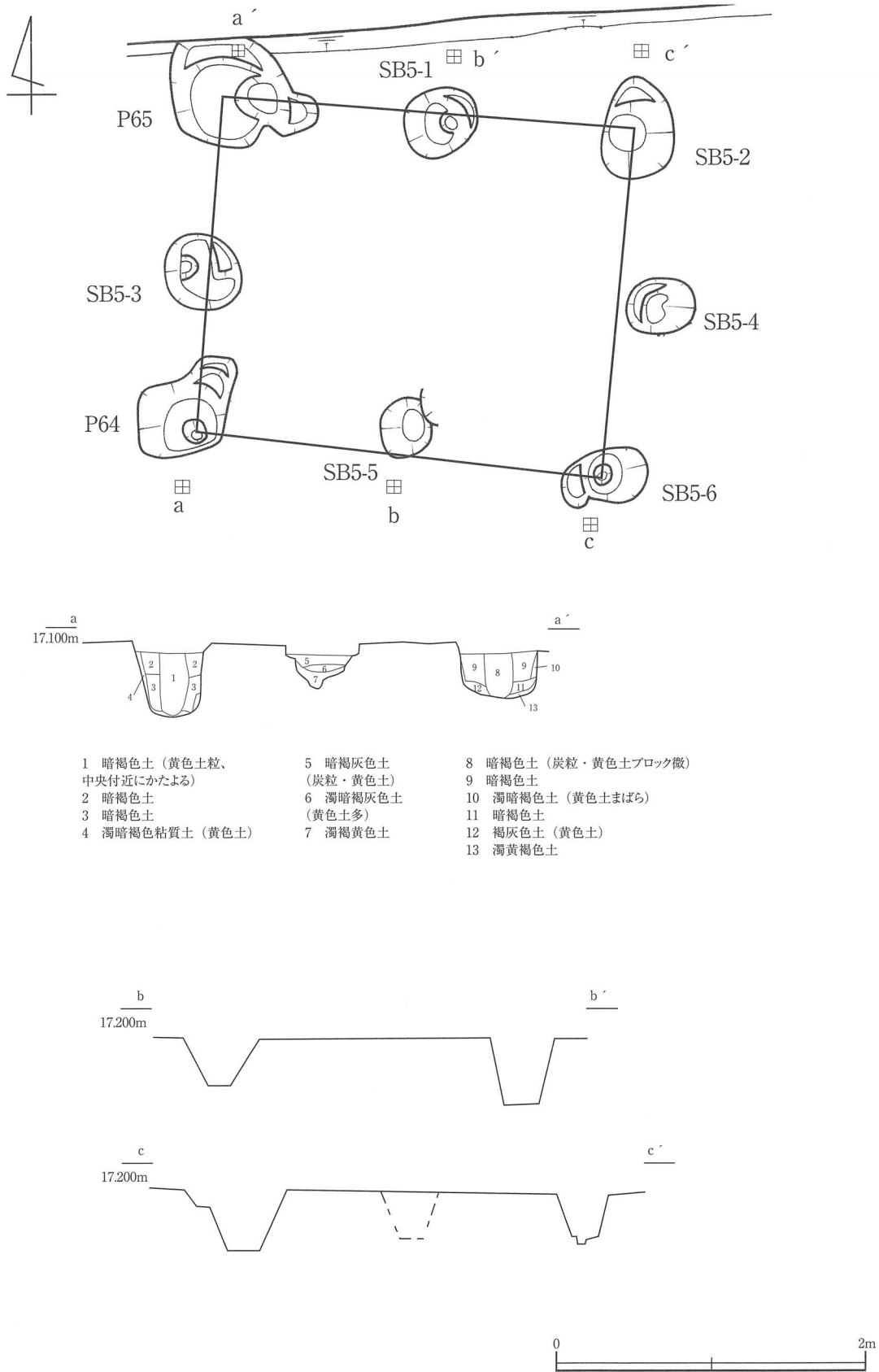
第 14 图 SB2 遺構図・断面図 (S=1/40)



第 15 図 SB3 遺構図・土層断面図 (S=1/40)

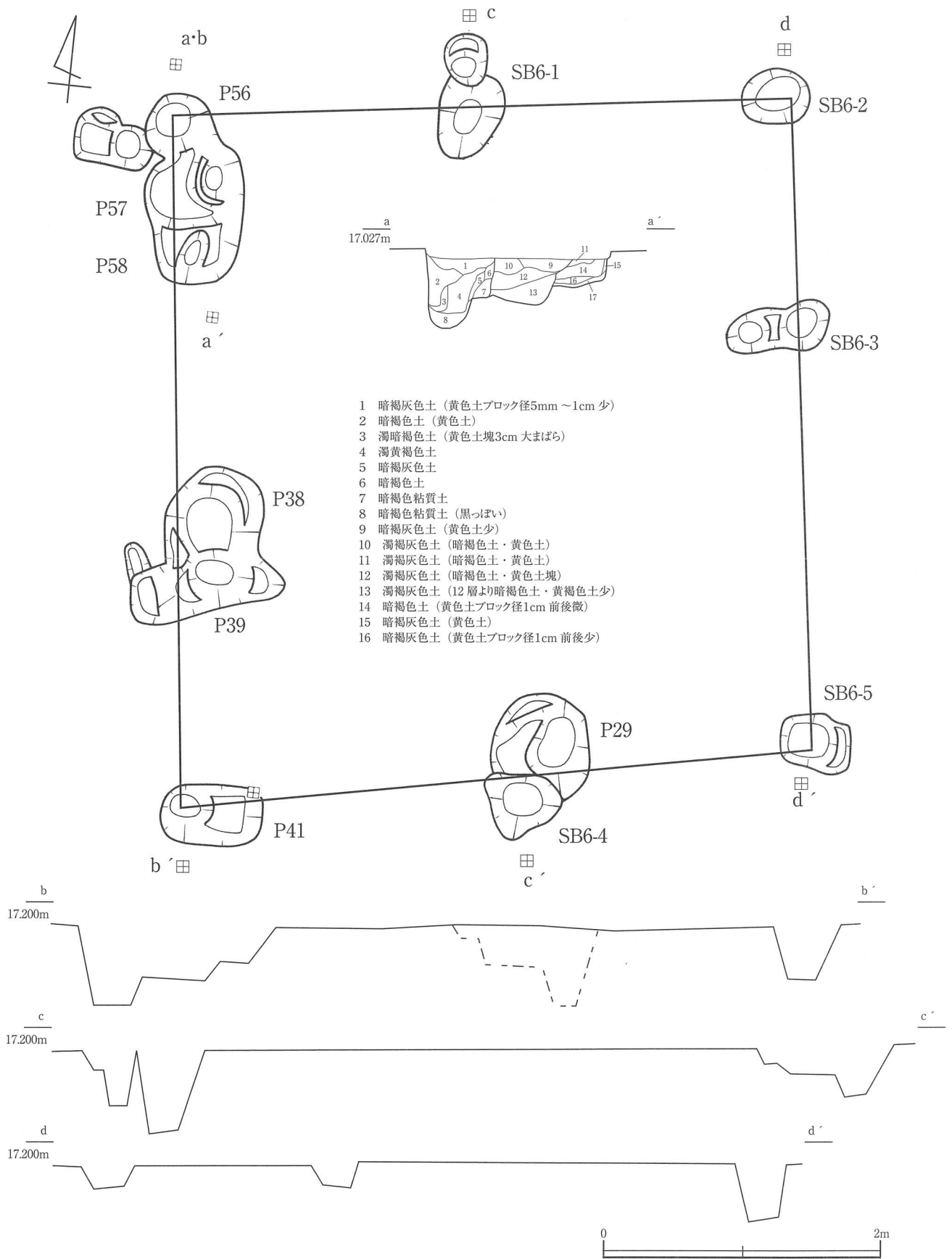


第 16 図 SB4 遺構図・土層断面図 (S=1/40)

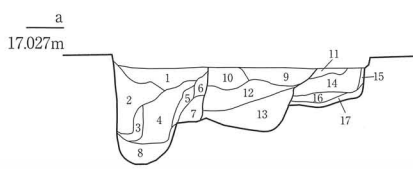
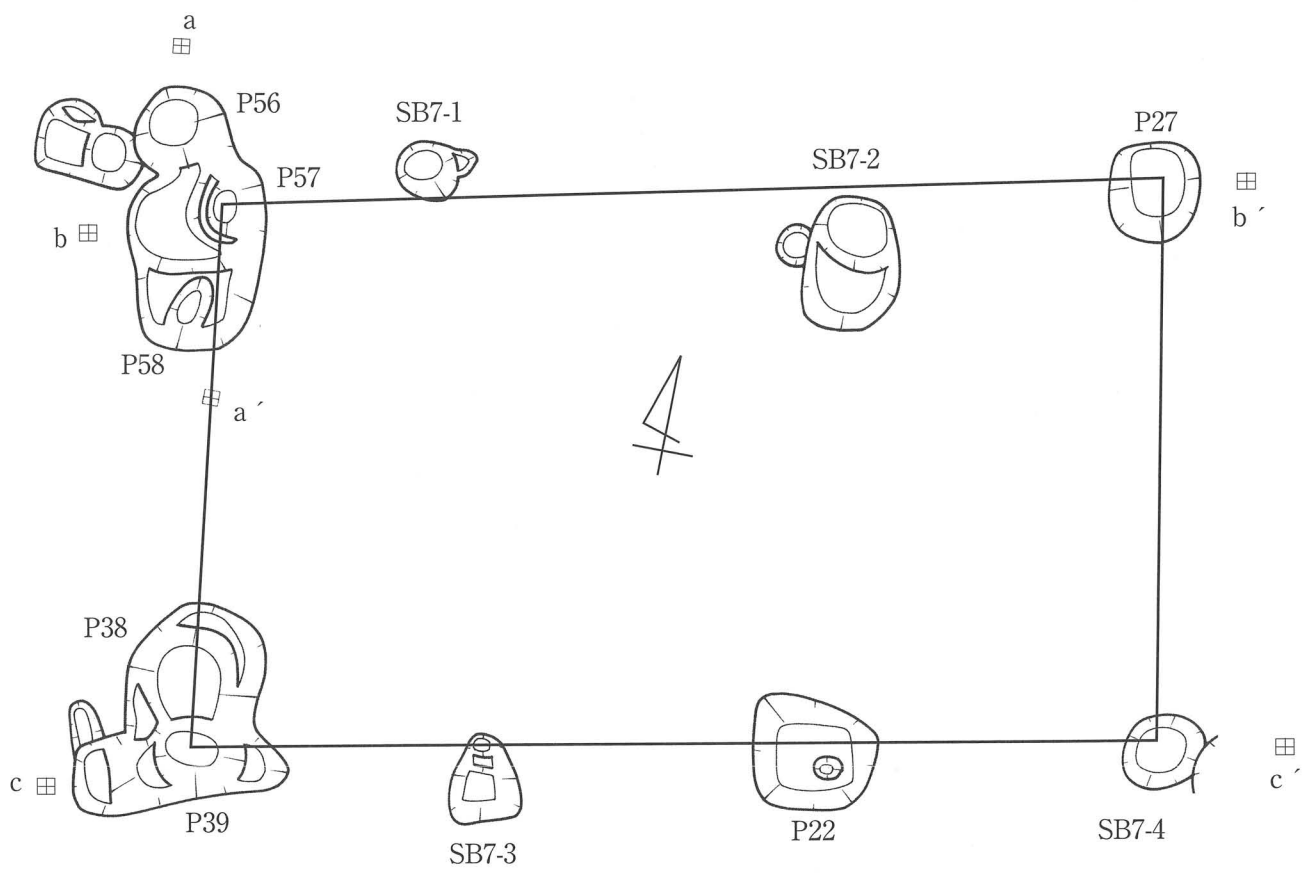


第 17 図 SB5 遺構図・土層断面図 (S=1/40)

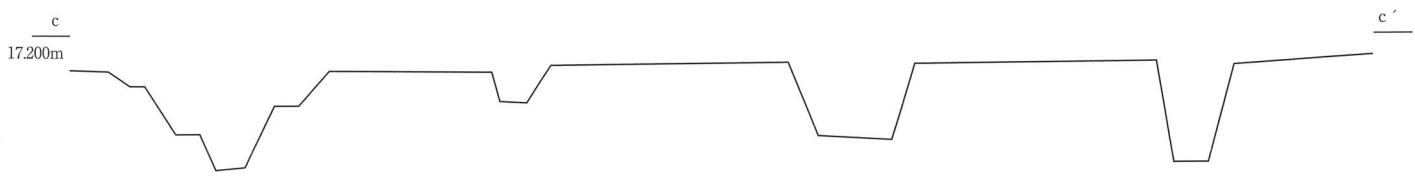
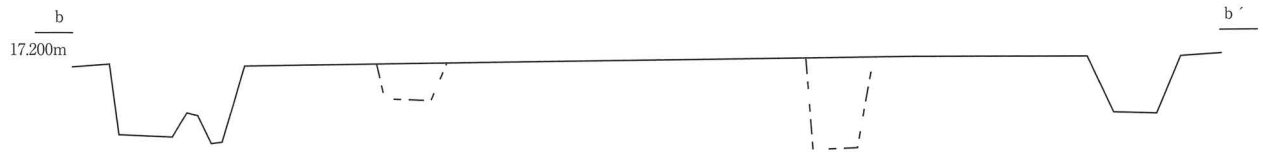




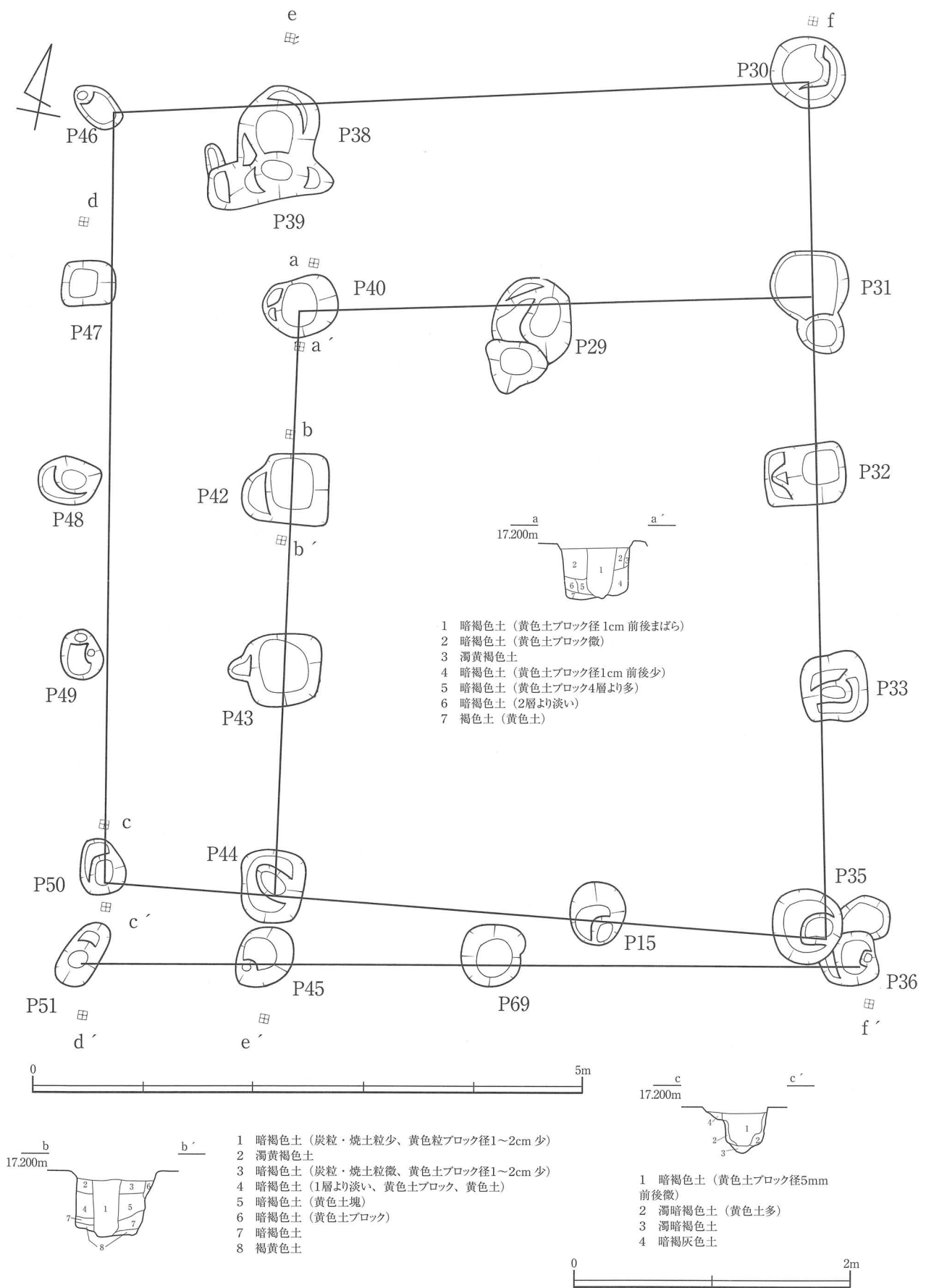
第 18 図 SB6 遺構図・土層断面図 (S=1/40)



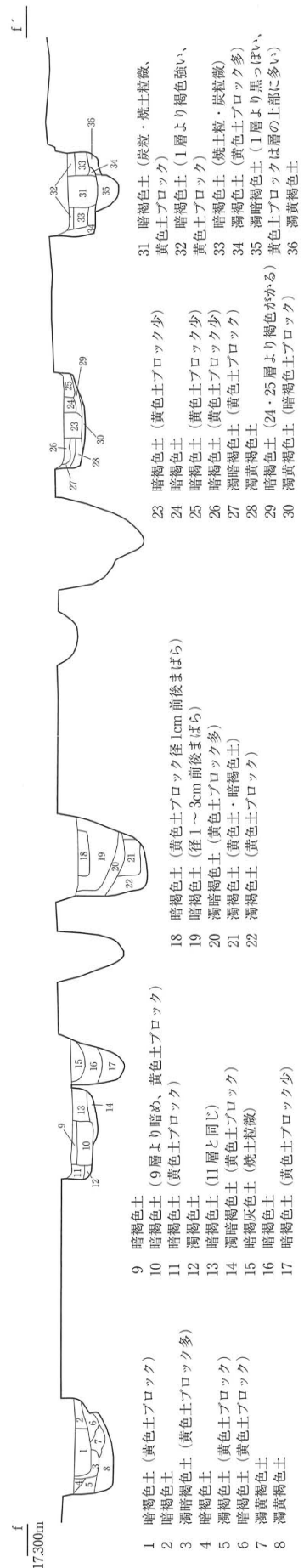
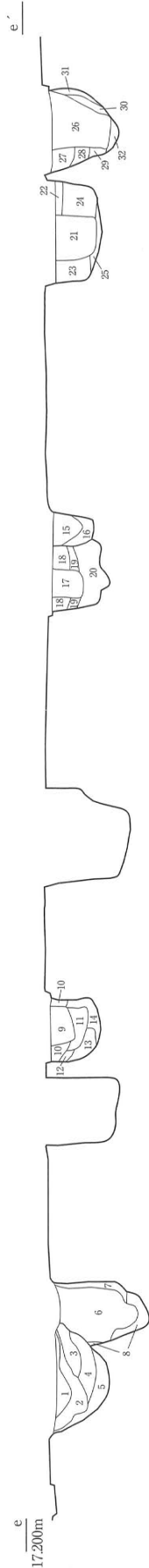
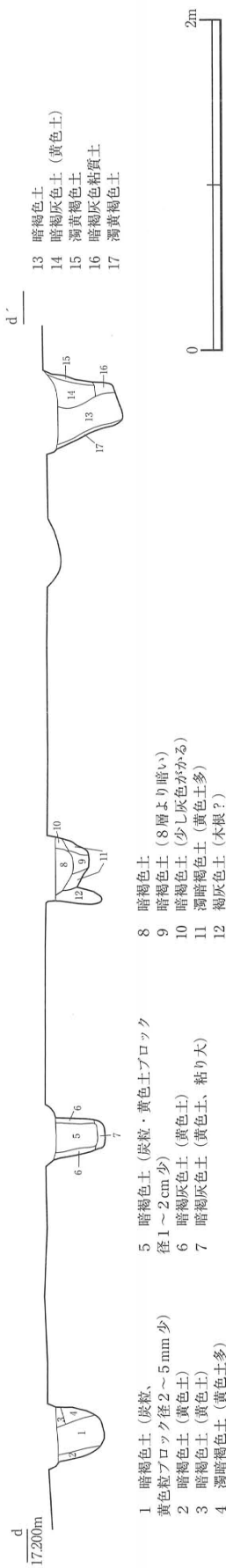
- |    |                             |                           |
|----|-----------------------------|---------------------------|
| a' | 1 暗褐色土 (黄色土ブロック径5mm ~1cm 少) | 11 濁褐色土 (暗褐色土・黄色土)        |
|    | 2 暗褐色土 (黄色土)                | 12 濁褐色土 (暗褐色土・黄色土塊)       |
|    | 3 濁暗褐色土 (黄色土塊3cm 大まばら)      | 13 濁褐色土 (12層より暗褐色土・黄褐色土少) |
|    | 4 濁黄褐色土                     | 14 暗褐色土 (黄色土ブロック径1cm 前後微) |
|    | 5 暗褐色土                      | 15 暗褐色土 (黄色土)             |
|    | 6 暗褐色土                      | 16 暗褐色土 (黄色土ブロック径1cm 前後少) |
|    | 7 暗褐色粘質土                    | 17 濁黄褐色土                  |
|    | 8 暗褐色粘質土 (黒っぽい)             |                           |
|    | 9 暗褐色土 (黄色土少)               |                           |
|    | 10 濁褐色土 (暗褐色土・黄色土)          |                           |



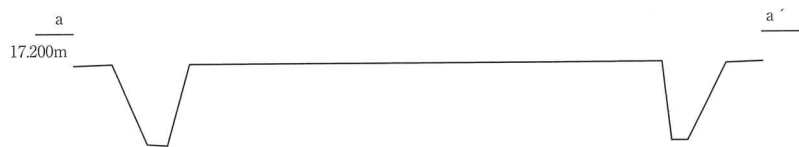
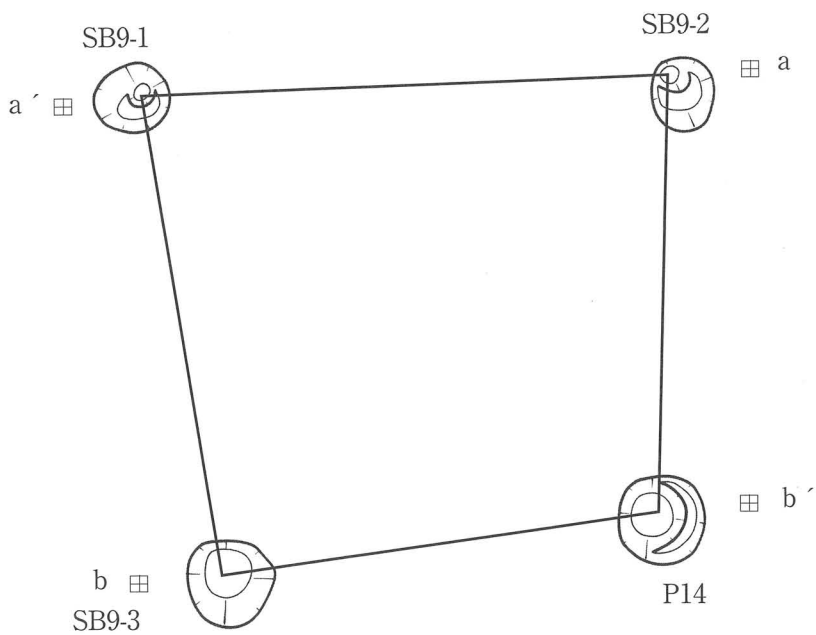
第19図 SB7 遺構図・土層断面図 (S=1/40)



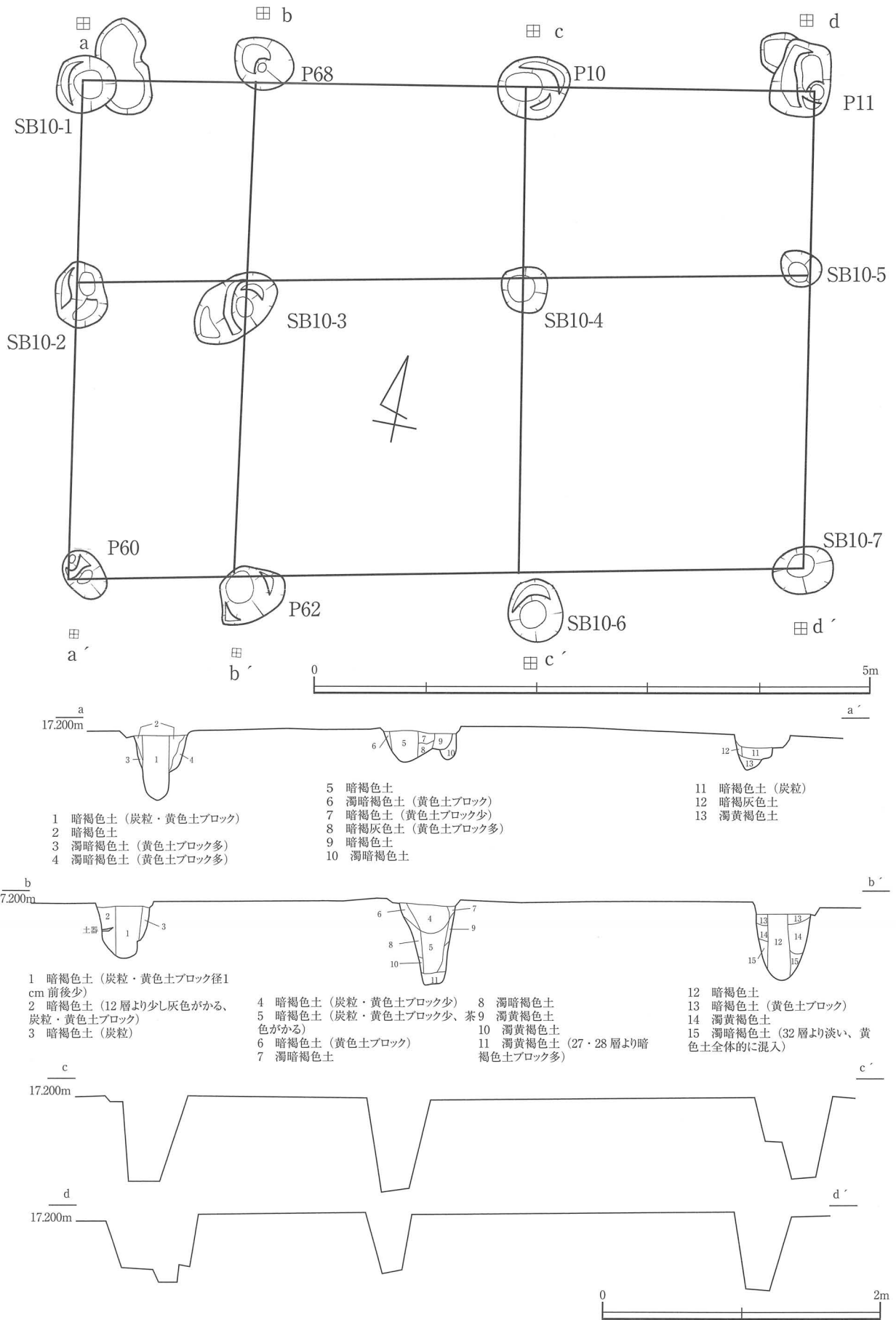
第20図 SB8 遺構図・土層断面図 (遺構図 S=1/50、断面図 S=1/40)



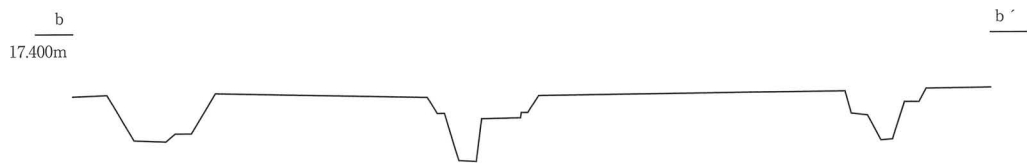
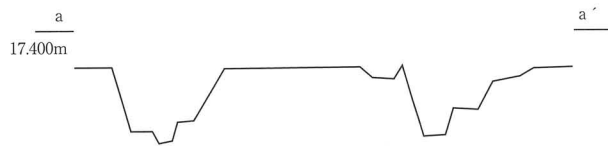
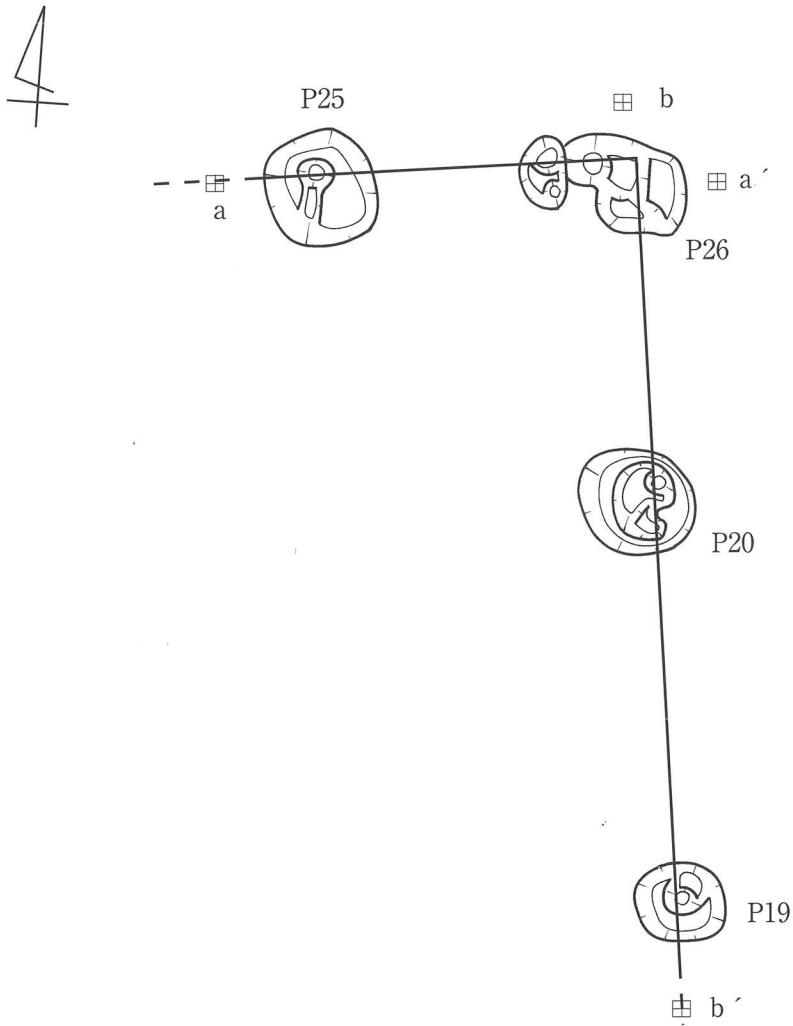
第21図 SB8土層断面図 (S=1/40)



第 22 図 SB9 遺構図・断面図 (S=1/40)



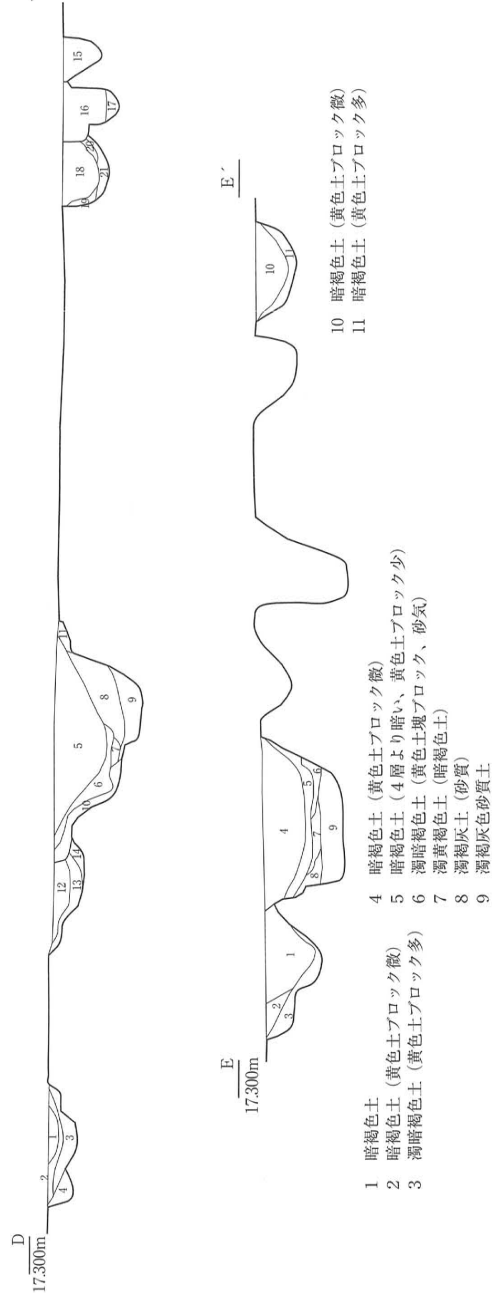
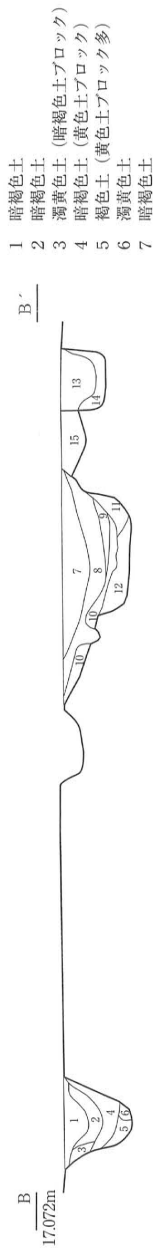
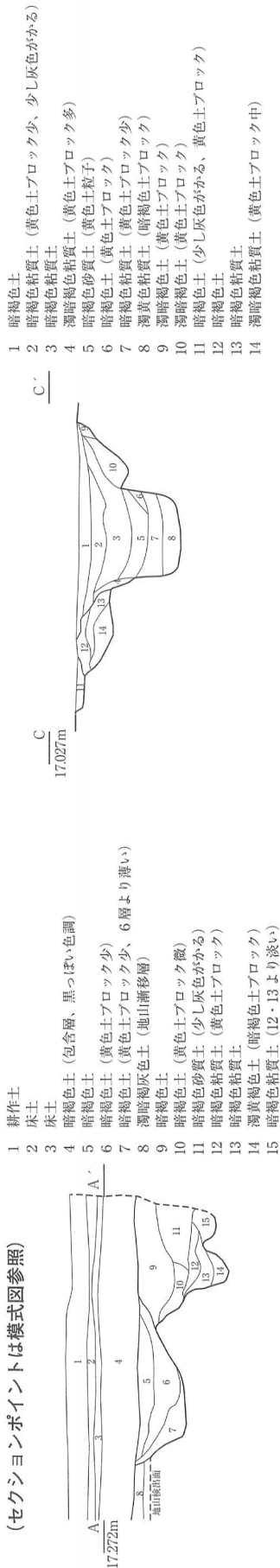
第23図 SB10 遺構図・土層断面図 (遺構図 S=1/50、断面図 S=1/40)



第 24 図 SB11 遺構図・断面図 (S=1/40)

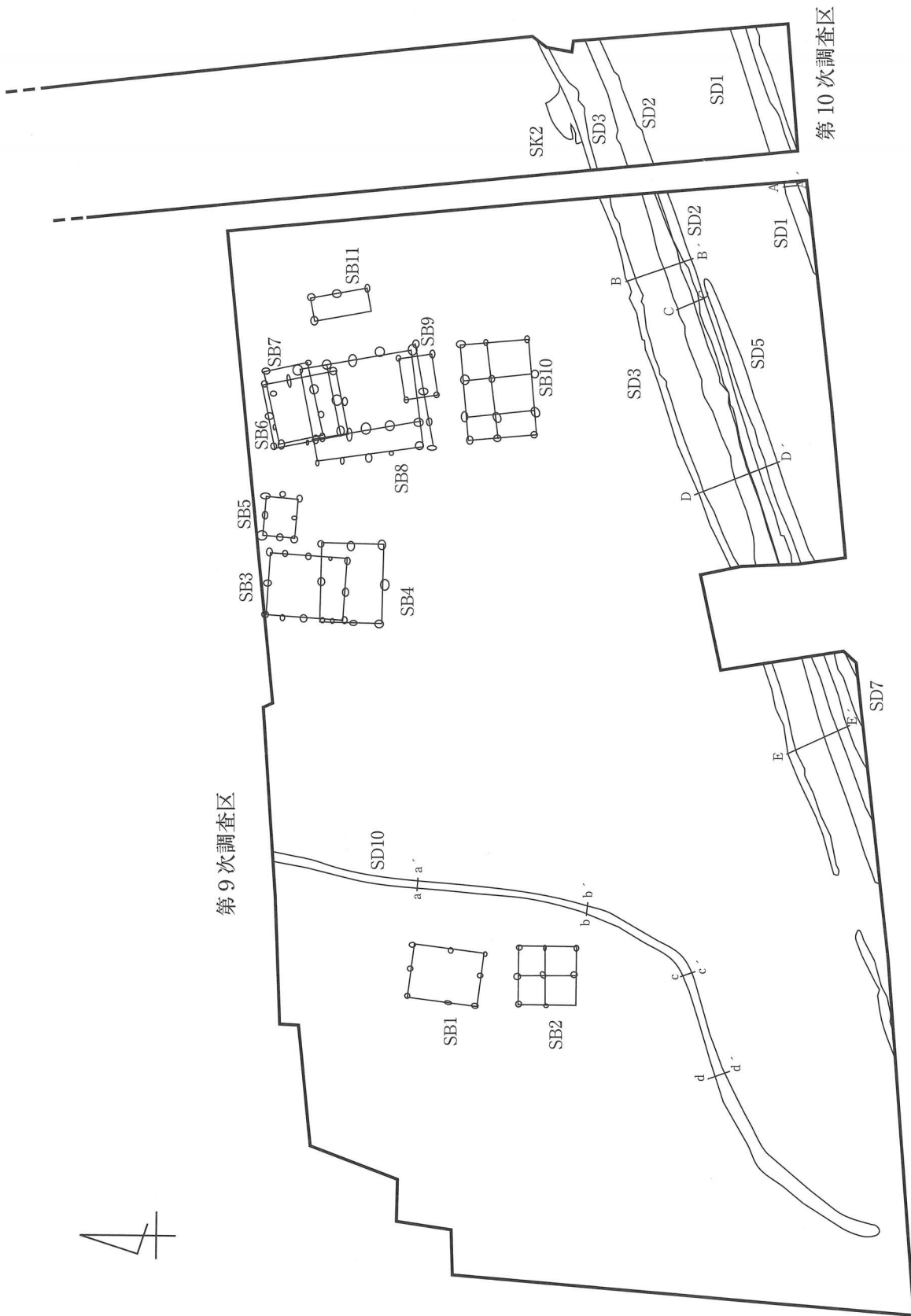
SD2・3・5・7

(セクションポイントは模式図参照)



第25図 SD2～7土層断面図 (S=1/40)

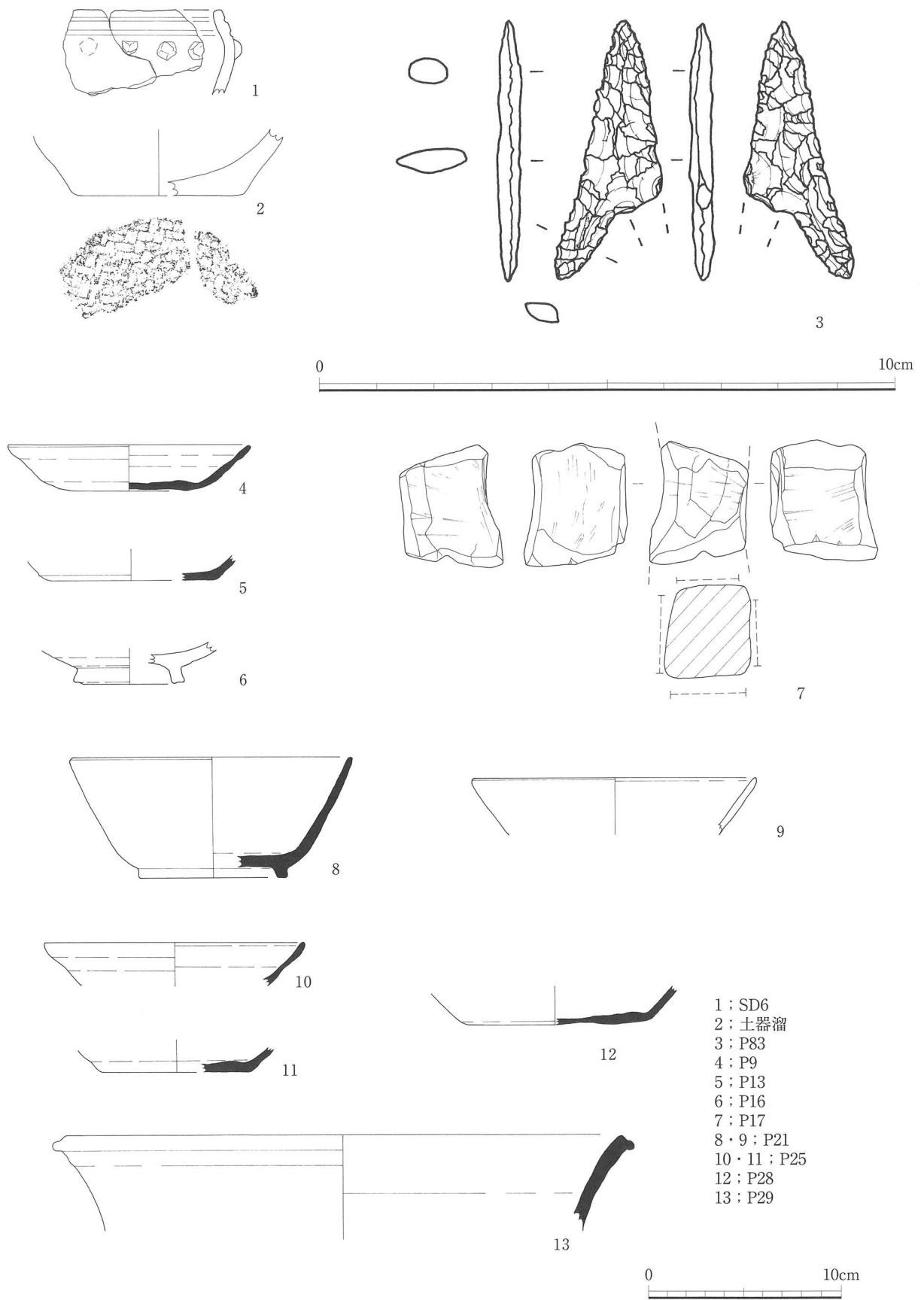




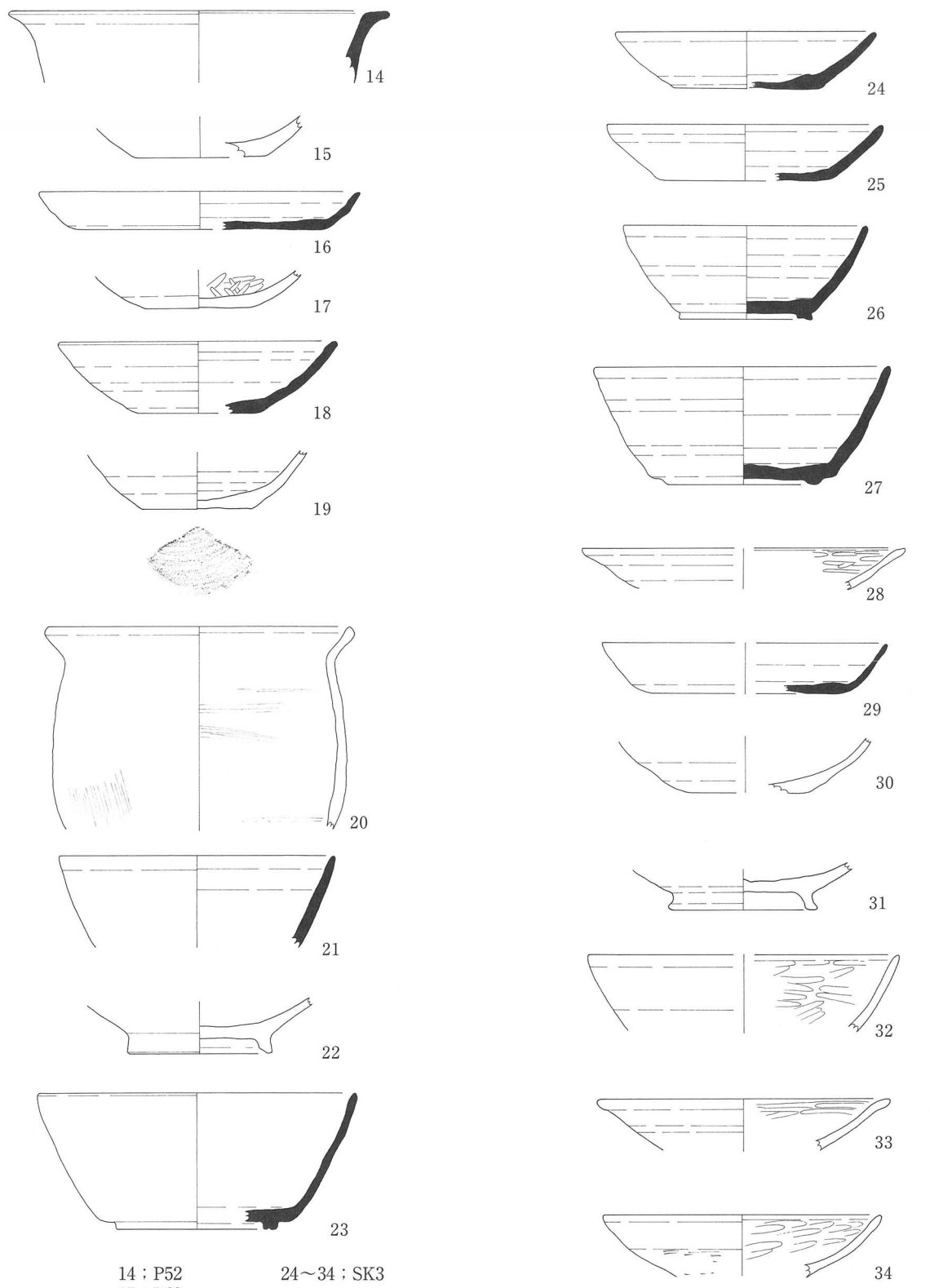
第26図 主要遺構模式図

第2表 遺構観察表

遺構	軸	長軸 cm	短軸 cm	梁	桁	構成SP	長径 cm	短径 cm	深度 cm	その他						
SB1	N-7-W	467	345	2	2	SB1-1	40	37	33							
						SB1-2	35	35	41							
						SB1-3	40	34	19							
						SB1-4	36	33	16							
						SB1-5	41	36	27	切り合い						
						SB1-6	28	25	16							
						SP121	43	29	16							
						SP119	35	34	19							
SB2	N-2-E	385	374	2	2	SB2-1	43	33	51							
						SB2-2	34	28	16							
						SB2-3	43	31	40							
						SB2-4	43	41	31							
						P110	51	39	39							
						P112	40	37	38							
						P108	29	29	44							
						P105	40	33	55							
SB3	N-5-E	535	415	4	2	SB3-1	34	30	36							
						SB3-2	38	31	20							
						SB3-3	47	34	49							
						SB3-4	36	34	34							
						SB3-5	24	24	12							
						P75	42	18	47	調査区外						
						P73	51	46	48							
						P67	52	50	55							
						P77	41	28	23							
						P78	50	44	45							
						P74	50	44	37							
SB4	N-5-E	512	425	2	2	P80	37	30	33							
						P63	54	48	47							
						P79	70	54	30							
						P72	56	53	55							
						SB4-1	48	46	34							
						SB4-2	45	42	52							
						SB4-3	35	34	34							
						SB4-4	70	64	54							
SB5	N-6-E	264	220	2	2	SB5-1	50	40	32							
						SB5-2	65	45	41							
						SB5-3	50	48	32							
						SB5-4	44	36	28							
						SB5-5	38	32	42	切り合い						
						SB5-6	44	36	42							
						P64	58	48	59							
						P65	74	58	34							
SB6	N-7-W	465	434	2	2	SB6-1	65+	46	56	切り合い						
						SB6-2	50	41	17							
						SB6-3	74	36	25							
						SB6-4	55	47	56	切り合い						
						SB6-5	40	40	47							
						P56	50	42	57	切り合い						
						P38	72	60	33	切り合い						
P41	74	45	46													
SB7	E-10-N	301	500	1	3	SB7-1	33	32	23							
						SB7-2	40	40	50							
						SB7-3	50	35	25							
						SB7-4	44	38	58	切り合い						
						P57	74	56	42	切り合い						
						P27	54	48	31							
						P39	48	42	64	切り合い						
						P22	64	62	44							
						SB8	N-8-W	708	642	4	1	P46	49	31	16	庇か
												P47	48	32	36	
												P48	54	46	39	
												P49	46	37	33	
												P50	52	41	34	
												P30	71	65	36	
530	468	3	2	P40	67							51	49	主屋か		
				P42	64							57	56			
700				P43	65							63	40			
				P44	67							56	44			
				P15	59							50	76			
				P35	67							64	46			
				P33	60							60	53			
				P32	74							55	63			
				P31	71	65	23	切り合い								
				P29	71	63	56	切り合い								
				P38	72	60	33	利用か？								
				P51	65	35	46	柵列か								
P45	54	51	50													
P69	58	57	54													
P36	50	48	36													
SB9	N-7-W	274	210	1	1	SB9-1	39	34	44							
						SB9-2	41	32	44							
						SB9-3	35	29	27							
						P14	48	35	43							
SB10	N-3-W	440	157	2	1	SB10-1	55	51	61	庇か						
						SB10-2	62	47	46							
						P60	48	33	37							
						498	451	2	2	P68	57	46	50	主屋(総柱)か		
										P10	64	55	66			
												P11	70	53	50	
												SB10-3	87	51	65	
SB10-4	40	40	70													
SB10-5	40	33	44													
P62	53	50	59													
SB10-6	56	49	56													
SB10-7	56	40	52													
SB11	N-11-W	372	163	2	1+	P25	60	57	42							
						P26	53	47	24							
						P20	64	57	35							
						P19	48	44	28							



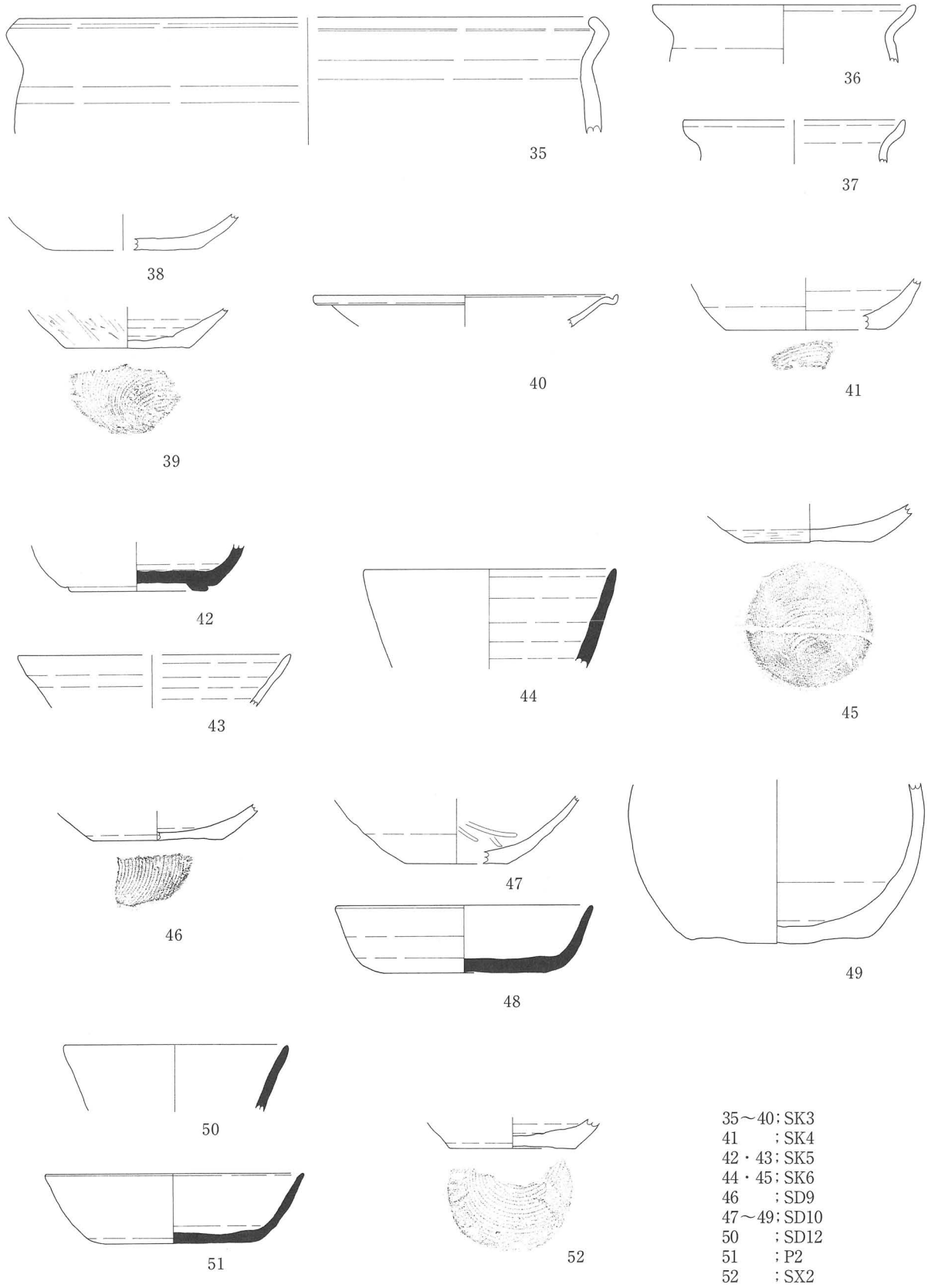
第27図 土器、石製品実測図1 (S=1/3、3はS=1/1)



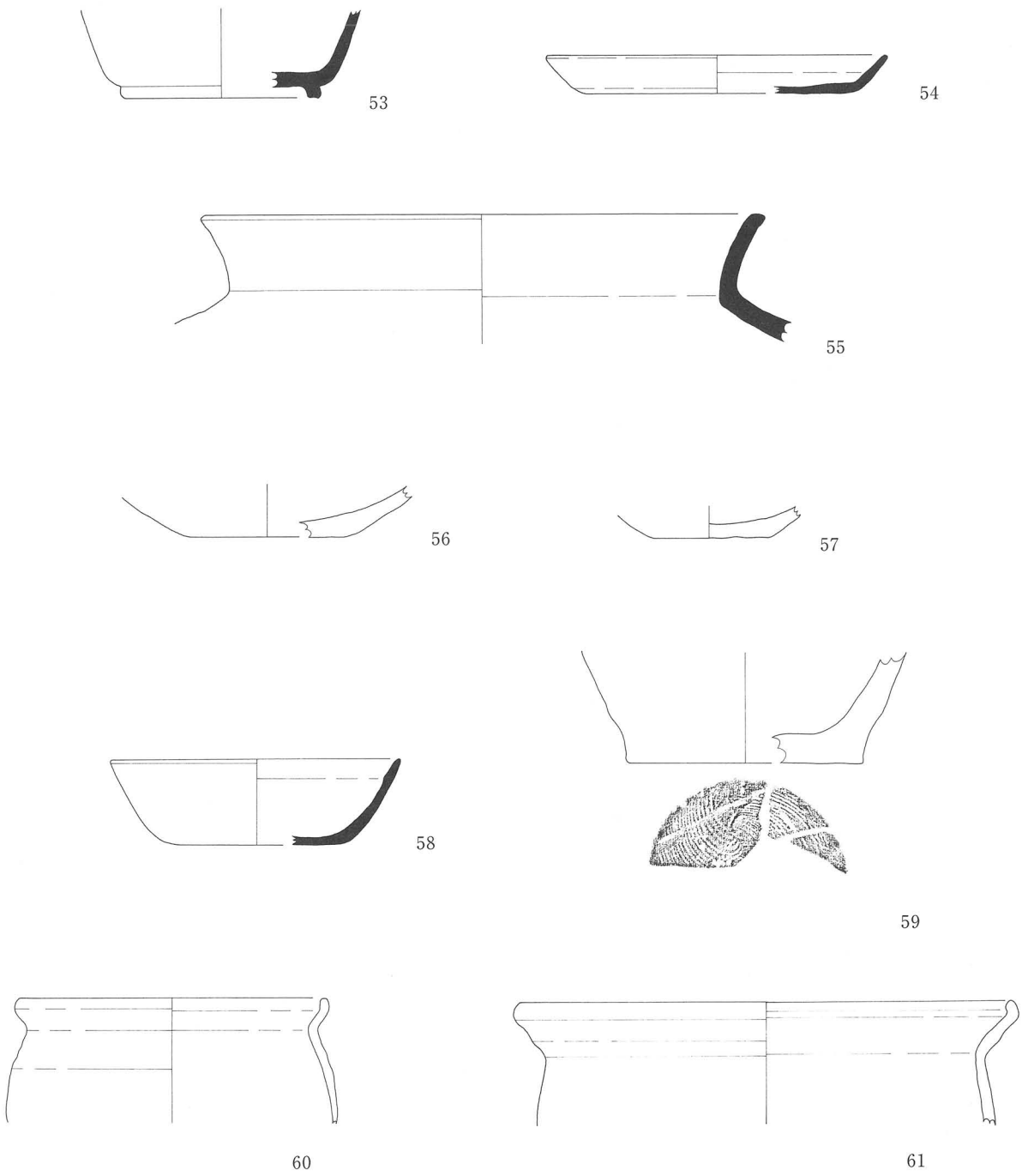
- 14 : P52
  - 15 : P69
  - 16 · 17 : P74
  - 18 : P80
  - 19 : P95
  - 20 : P96
  - 21 : P102
  - 23 : P107
  - 24 : P116
- 24~34 : SK3

0 10cm

第 28 図 土器実測図 1 (S=1/3)



第 29 图 土器实测图 2 (S=1/3)



53~55: 排土  
 56~58: 包含層農道以西微高地部  
 59~61: 包含層

0 10cm

第 30 図 土器実測図 3 (S=1/3)

第3表 遺物観察表1

図版 番号	掲載番号	種別	器種	出土地点	口径 mm	底径 mm	器高 mm	遺存 値	外面調整	内面調整	外面 色調	内面 色調	胎土	実測 番号	備考	
1	1	縄文土器	深鉢	SD6				小片	横位沈線2条→粘土粒貼付	ナデ	2.5Y6/6	2.5Y4/2	L1, S2	T488	波状口縁、酒見式	
	2	縄文土器	深鉢	C5杭 土器溜	11			小片	ナデ、無文、底部網代痕	ナデ	2.5Y7/4	10YR7/3	L1, M1, S1	T451 .452	後期	
	3	石製品	石鏃	P83				最大厚0.4、重量2.2g							N511	欠損
	4	須恵器	坏A	P9		128	60	25	ロクロナデ、底部へラ切り	ロクロナデ	5Y6/1	5Y6/1	L1, M1, S1	T496		
	5	須恵器	坏A	P13		88		小片	ロクロナデ、底部へラ切り	ロクロナデ	5Y7/1	5Y6/1	M1, S2	T502		
	6	土師器	碗B	P16		58		1/5	ロクロナデ、底部糸切り	ミガキ	7.5YR5/3	10YR4/3	S1	N510		
	7	石製品	砥石	P17				最大長65、最大幅56、重量225g							N516	欠損
	8	須恵器	坏B	P21		150	83	1/3	ロクロナデ、底部へラ切り	ロクロナデ	7.5Y6/1	7.5Y6/1	M1, S1	T505		
	9	土師器	碗	P21		152		1/4	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5YR6/4	2.5Y6/1	L1, S1	T506		
	10	須恵器	坏	P25		137		小片	ロクロナデ	ロクロナデ	N5/0	5Y6/1	S2	N514		
	11	須恵器	坏A	P25		78		1/4	ロクロナデ、底部へラ切り	ロクロナデ	7.5Y5/1	7.5Y6/1	M1, S1	N513		
	12	須恵器	坏A	P28		96		1/6	ロクロナデ、底部へラ切り	ロクロナデ	10YR7/2	10YR7/2	M1, S2	T503		
	13	須恵器	壺	P29		306		1/9	ロクロナデ	ロクロナデ	N6/0	5Y6/1	M1, S1	T497		
	14	須恵器	瓶	P52		184		小片	ロクロナデ	ロクロナデ	5Y5/1	N8/0	S2	T500		
	15	土師器	碗A	P69		63		1/4	ロクロナデ、底部へラ切り	ミガキ、黒色処理	10YR6/4	10YR3/1	S1	T501		
	16	須恵器	盤A	P74		154	120	1/6	ロクロナデ、底部糸切り	ロクロナデ	5Y6/1	5Y7/1	S2	T507		
	17	須恵器	碗A	P74		50		5/6	ロクロナデ、ナデ	ミガキ、黒色処理	7.5YR6/4	10YR3/1	S1	N515		
18	須恵器	坏A	P80		136	60	35	ロクロナデ、底部へラ切り	ロクロナデ	2.5Y8/2	2.5Y4/1	M1, S1	T499			
19	土師器	短胴釜	P95		150		1/3	ロクロナデ、底部糸切り	ロクロナデ	10YR8/4	10YR8/4	S2	N509			
20	土師器	短胴釜	P96		150		1/4	ナデ、ケズリ	ナデ	10YR7/3	10YR7/2	S2	N508			
21	須恵器	坏	P102		133		小片	ロクロナデ	ロクロナデ	5Y6/1	5Y7/1	M1, S1	N512			
22	土師器	碗B	P107		70		完	ロクロナデ、底部へラ切り	ロクロナデ	10YR5/6	10YR5/6	S1	T498			
23	須恵器	坏B	P116		154	76	1/3	ロクロナデ、底部へラ切り	ロクロナデ	2.5Y7/1	2.5Y7/2	M1, S1	T504			
24	須恵器	坏A	SK3		126	72	28	5/7	ロクロナデ、底部へラ切り	ロクロナデ	N7/1	7.5Y6/1	L1, M1, S1	N455		
25	須恵器	坏A	SK3		133	86	28	1/7	ロクロナデ、底部へラ切り	ロクロナデ	2.5Y8/2	2.5Y7/1	L1, M1, S1	N463		
26	須恵器	坏B	SK3		118	65	46	1/2	ロクロナデ、底部へラ切り	ロクロナデ	7.5YR4/1	5Y6/1	L1, M1, S1	N453		
27	須恵器	坏B	SK3		143	74	58	1/2	ロクロナデ、底部へラ切り	ロクロナデ	5Y6/1	5Y7/1	M1, S1	N454		
28	土師器	坏	SK3		156		小片	ロクロナデ	ミガキ、黒色処理	10YR6/3	10YR6/3	S1	N473			
29	土師器	坏A	SK3		138	102	25	1/6	ロクロナデ、底部へラ切り	ロクロナデ	2.5Y7/2	2.5Y8/3	S2	N465		
30	土師器	碗A	SK3		57		1/2	ロクロナデ、底部糸切り	ミガキ、黒色処理	7.5YR6/4	10YR4/1	S1	N457			
31	土師器	碗B	SK3		72		完	ロクロナデ、底部糸切り	ミガキ、黒色処理	10YR4/1	10YR3/1	L1, S1	N456			
32	土師器	碗	SK3		150		1/9	ロクロナデ	ミガキ、赤色処理	7.5YR6/4	7.5YR7/4	S1	N458			
33	土師器	碗	SK3		142		1/7	ロクロナデ	ミガキ、黒色処理	10YR6/3	10YR3/1	S1	N466			
34	土師器	碗	SK3		135		1/4	ロクロナデ、ケズリ	ミガキ、黒色処理	10YR7/4	10YR3/1	S1	N467			
35	土師器	長胴釜	SK3		294		小片	カキ目(摩耗)	ロクロナデ(摩耗)			L1, M1, S1	N460			
36	土師器	短胴釜	SK3		135		小片	摩耗	ロクロナデ	10YR8/4	10YR7/3	S1	N461			
37	土師器	短胴釜	SK3		114		小片	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR5/2	10YR5/2	S1	N472			
38	土師器	釜	SK3		80		1/4	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR7/3	10YR4/1	S1	N459			
39	土師器	釜	SK3		63		1/3	ケズリ、底部糸切り	ロクロナデ	10YR6/2	10YR7/3	L1, M1, S1	N462			
40	土師器	鍋	SK3		156		小片	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/2	10YR7/2	S1	N464			

第3表 遺物観察表2

図版 番号	掲載番号	種別	器種	出土地点	口径 mm	底径 mm	器高 mm	遺存 値	外面調整	内面調整	外面 色調	内面 色調	胎土	実測 番号	備考
3	41	土師器	短胴釜	SK4		82		1/7	ロクロナデ、底部糸切り	ロクロナデ	2.5YR7/3	10YR5/2	M1, S1	N471	
	42	須恵器	坏A	SK5		71		1/2	ロクロナデ、底部へら切り	ロクロナデ	2.5Y5/1	2.5Y5/1	L1, M1, S1	N470	
	43	土師器	坏	SK5		140		1/9	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/2	10YR7/2	M1, S2	N469	
	44	須恵器	坏	SK6		130		1/7	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5YR5/1	7.5YR5/1	S2	N475	
	45	土師器	碗B	SK6		65		小片	ロクロナデ、底部糸切り	ミガキ、黒色処理	10YR5/4	10YR3/1	S1	N474	
	46	土師器	碗A	SD9		68		1/3	ロクロナデ、底部糸切り	ミガキ	10YR6/3	10YR5/3	M1, S1	T487	
	47	土師器	碗A	SD10		54		1/2	ロクロナデ、底部へら切り	ミガキ、黒色処理	10YR6/4	N3/	S1	T486	
	48	須恵器	坏A	SD10南西		132	35	完	ロクロナデ、底部へら切り	ロクロナデ	2.5Y7/2	2.5Y7/2	L1, M1, S1	T491	
	49	土師器	短胴釜	SD10南西		100		完	ロクロナデ、底部へら切り→ナデ	ロクロナデ	10YR6/4	10YR7/3	L1, M1, S1	T492	
	50	須恵器	坏	SD12		116		1/3	ロクロナデ	ロクロナデ	N4/0	N7/0	S2	T490	
4	51	須恵器	坏A	SP02		74	36	2/3	ロクロナデ、底部へら切り	ロクロナデ	5Y7/1	5Y7/1	L1, M1, S2	T485	
	52	土師器	短胴釜	SX02		64		2/3	ロクロナデ、底部糸切り	ロクロナデ	10YR8/2	10YR5/1	S2	N468	
	53	須恵器	坏B	排土		92		1/3	ロクロナデ、底部へら切り	ロクロナデ	N4/0	N4/0	S2	T484	
	54	須恵器	甗A	排土		158	18	1/9	ロクロナデ、底部へら切り	ロクロナデ	7.5Y6/1	7.5Y6/1	S2	T483	
	55	須恵器	甗	排土		260		1/9	ロクロナデ	ロクロナデ	5Y7/1	5Y7/1	S2	T482	
	56	土師器	碗A	包含層 農道以西微 高地部		74		1/2	ロクロナデ、底部糸切り	ミガキ、黒色処理	10YR8/4	10YR3/1	S1	T478	
	57	土師器	碗A	包含層 農道以西微 高地部		56		1/2	ロクロナデ、底部へら切り	ミガキ	2.5YR6/6	2.5YR7/6	S1	T480	
	58	土師器	碗A	包含層 農道以东		134	40	1/9	ロクロナデ、底部へら切り	ロクロナデ	10YR8/3	10YR8/2	M1, S1	T481	
	59	土師器	短胴釜	包含層		90		1/2	ロクロナデ、底部糸切り	ロクロナデ	10YR7/6	10YR8/3	L1, M1, S1	T476	
	60	土師器	短胴釜	包含層		144		1/9	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR5/1	10YR8/2	S1	T479	
	61	土師器	長胴釜	包含層		226		小片	ロクロナデ	ロクロナデ	10YR8/3	10YR8/3	S1	T477	

注記

遺構番号はそれぞれの区で付加され、通しではない

法量の数値は遺存値の項目に「完」とない場合はすべて復元径である

遺存値に示した数値は、実測図に表された範囲内での遺存値であり、器形全体に対するものではない「ヨコナデ→ケズリ」であれば、ヨコナデを行ったのちケズリを行っていることを示す

調整 併記の場合は同一器面にて調整が異なる場所があることを示す

色調 「新装 標準土色帳」に準拠

胎土 アルファベットは鉱物粒子の大きさ。S (径1mm以下) M (径1~3mm) L (径3mm以上)

胎土 数値は鉱物粒子の量。0 (ほとんど含まない) 1 (少量含む) 2 (やや多い) 3 (多い)

須恵器・土師器の器種名は小松市教育委員会2006~2010『額見町遺跡I~V』を参考にした



## 第5章 第16次（平成16年度）調査

### 第1節 調査の経過

#### 第1項 発掘作業の経過

本発掘調査業務は、野々市市北西部土地区画整理地区内の野々市町道二日市徳用線工事に伴う事業を調査原因とする。

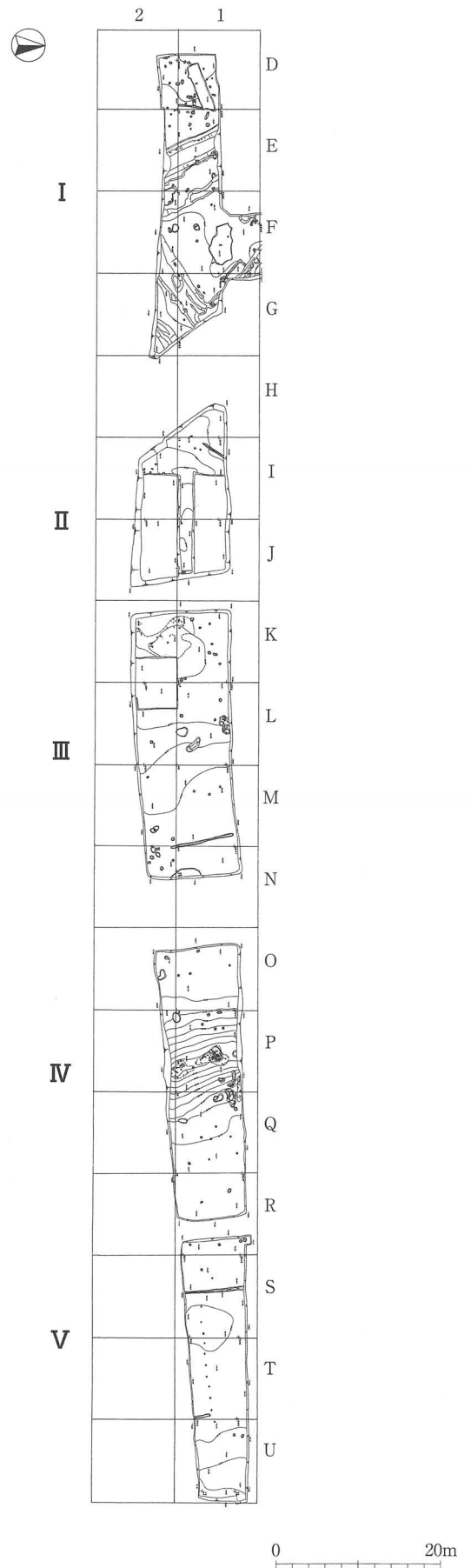
平成16年4月1日、野々市町（当時）は本開発予定地における埋蔵文化財発掘調査の実施計画書を野々市町北西部土地区画整理組合（以下、北西部組合と呼称する。）に提出し、その計画書に基づいて、野々市町と北西部組合との間で委託契約を締結した。

現地調査は、4月12日調査区の設定により開始した。4月21日からは大型掘削機を使って遺構面までの土砂を掘削し、5月6日には完了した。同日からは、発掘作業員による人力作業が始まった。人力の作業内容は、遺構精査や遺構掘削などで、これらの作業中に調査員は図面の記録を行った。7月2日には全ての遺構掘削が完了し、7月5日からは調査区の清掃作業を開始した。清掃作業は7月7日まで行われ、同日にラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。その後調査区全体や個別遺構の写真撮影を行って、現地調査作業を完了した。7月14日から7月16日にかけては、大型掘削機による調査区内の埋戻し作業が行われた。

出土品の整理は平成17年6月1日から開始した。整理作業の内容は出土品の洗浄、記名・分類・接合、実測で、7月29日に完了した。平成24年1月5日からは、現地で行われた記録図や出土品実測図の製図、出土品の写真撮影、併行して原稿執筆や編集を実施して、3月30日までにこれらの作業を完了した。

#### 第2項 調査区の設定

本調査区は東西約175m南北約10mを対象とし、東西に長い調査区を設定している。本調査区域内には既設道路や小河川、耕作地及び排水用の用水施設が縦断している。これらの対象箇所については、調査区域から割愛した。このことから、調査地は大きく5か所の区画に分かれることとなり、西方から東方へI～V区の小区を設定した。また、調査区内の公表座標を基として、算用数字とアルファベットを使ってグリッドを設定した。



第31図 調査区グリッド図 (S=1/800)

## 第2節 遺構

### S B 1 (第35図)

V区西端で2基のピットを検出した。ピットは直径50cmの円形、深さ55cm、65cmと深いため、掘立柱建物の柱穴と想定した。V区内ではこのほかにピットを確認されなかったため、建物はIV区とV区の間調査区外に延びていったと思われる。

### S D 1 (第37図)

I区中央に位置する北西—南東に方位をとる溝である。上幅約4m、底幅約1.5m、深さ約1.3mを測り、箱堀を思わせる大溝である。層12～17までは砂土が堆積していたことから、水流があったようである。ただし、検出範囲での溝底の高低差は見られなかった。堆積覆土からは4の青磁碗をはじめ、土師器皿片、越前焼・珠洲焼・瀬戸焼の陶片が出土している。東隣にはS X 1が接しており、土層の観察からS D 1の方が古いことが判明している。

### S D 2 (第38図)

I区東端で確認した近世溝である。北東—南西に方位をとり、後述するS D 4とは同方向となる。調査区で確認できた長さは約9.8m、上幅2.8～3.2m、深さ60cm前後で、堆積土は砂や石礫土が錯綜するようにして埋まっていることから、水が流れていたと想定される。中からは近世を中心とした陶磁器片が多く埋まっていた。北側で確認したS D 3とは方位が違うが、同一遺構になると考えられる。

### S D 3 (第38図)

I区東端で確認した近世溝である。北西—南東方向で、S D 2とは交差する。溝のほとんどは調査区外となるため全容は不明である。検出できた範囲では幅1.4m以上、深さ約80cmであるが、平成16年度第15次調査ではこの溝の延長と思われる遺構を確認することができた。第15次調査で検出した溝の幅は約5m、深さは最深部で約1mであった。

### S D 4 (第38図)

I区東端で確認した近世溝である。北東—南西に方位をとり、S D 2とはほぼ同方向である。検出できた長さは約3.4m、溝の幅は約2m、深さ約80cmである。本溝とS D 2の間の幅約2mの地山面は約30cm削りとられていることから、両者の溝は同一遺構で、幅の広い大溝であったと考えられる。

### S K 1 (第36図、第39図)

IV区自然河道の西際で確認した。北東—南西を長軸とする楕円形の形状をしている。長辺120cm、短辺100cm、深さ45cmを測る。覆土は褐色粘質土1層で、中から縄文土器片が出土した。

### S A 1 (第34図)

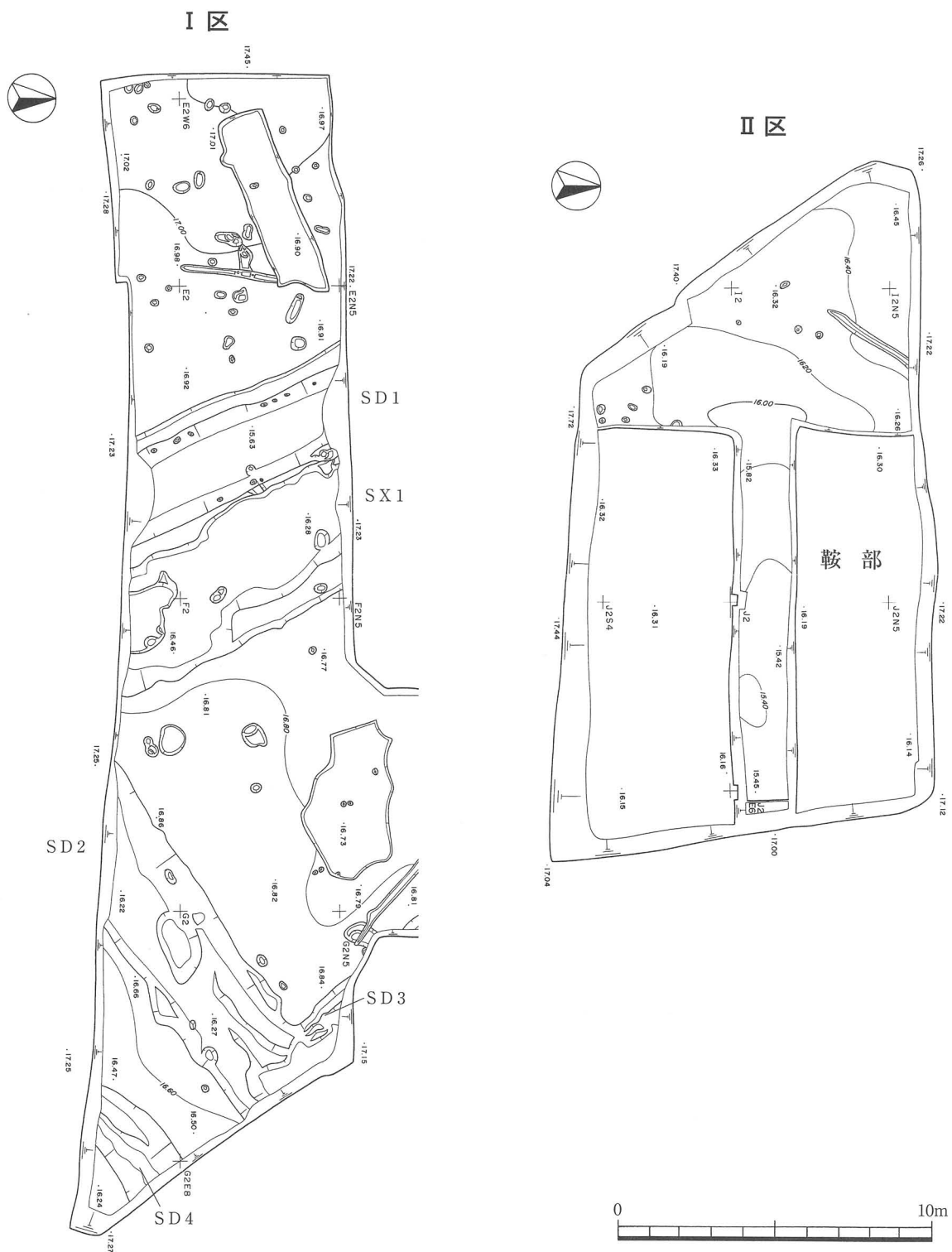
V区の中央を東西方向に並ぶ柵列である。ピットの数は11基、ピットとピットの間は100～170cmで、一部の穴には位置がずれる箇所があり、一直線のラインにはならない。穴は円形で、直径16～20cm、深さは5cm前後と浅い。遺物は出土していないが、覆土は灰色粘質土であることから、近世以降と考えられる。

### S X 1 (第37図)

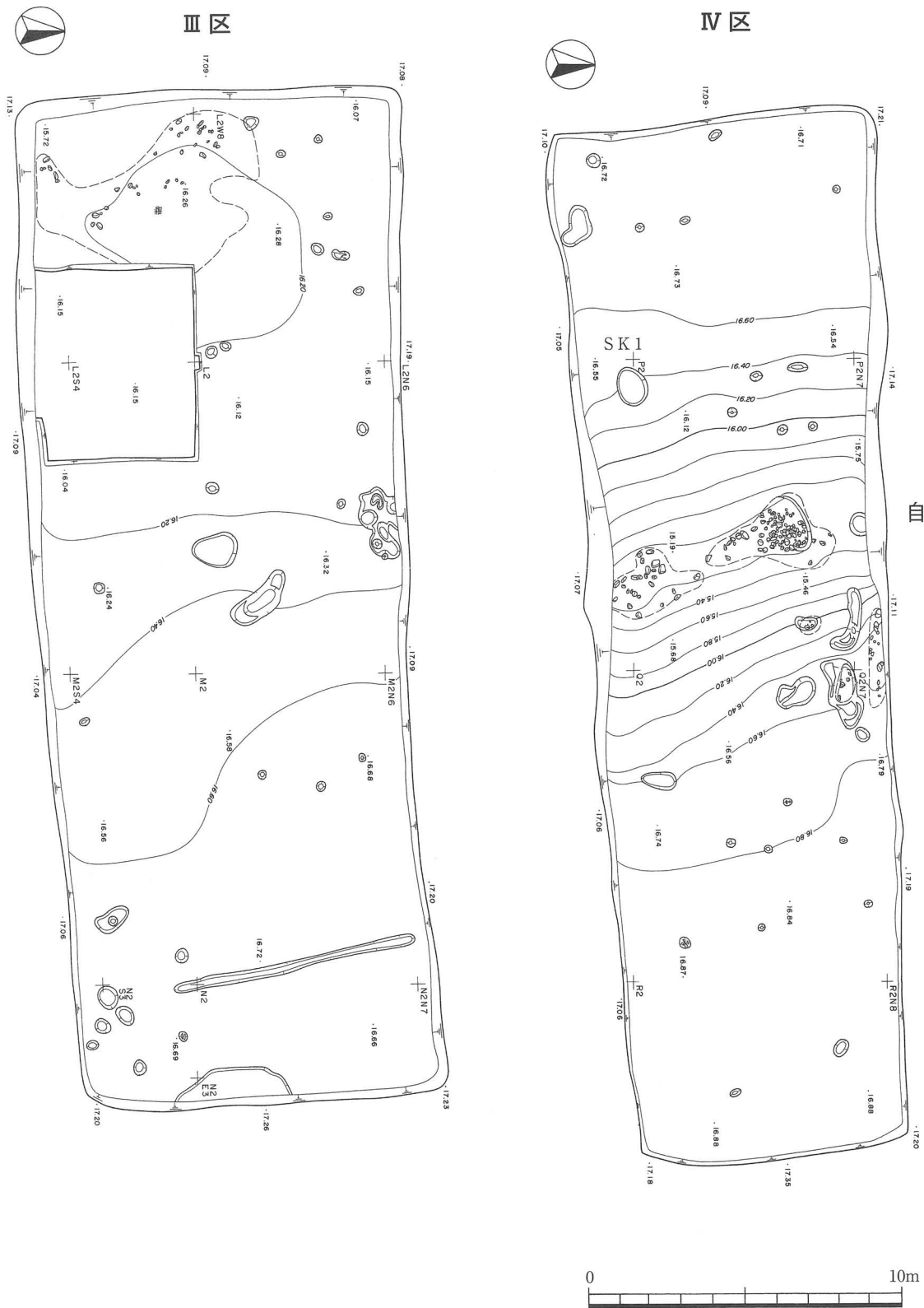
I区S D 1の東隣で確認した。不定形な土坑が重なり合うような形状をしている。東西長4m前後、深さ約60cm、北東側には幅約60cm、深さ15cmのテラスがある。土層断面からS D 1が埋った後に掘削されていることが判明した。堆積覆土の中には石礫土の含むものがあることから、流水していた溝の可能性もある。遺物は、3の青磁碗、5の土師器皿、越前焼等の陶片などが出土している。

### 自然河道 (第39図)

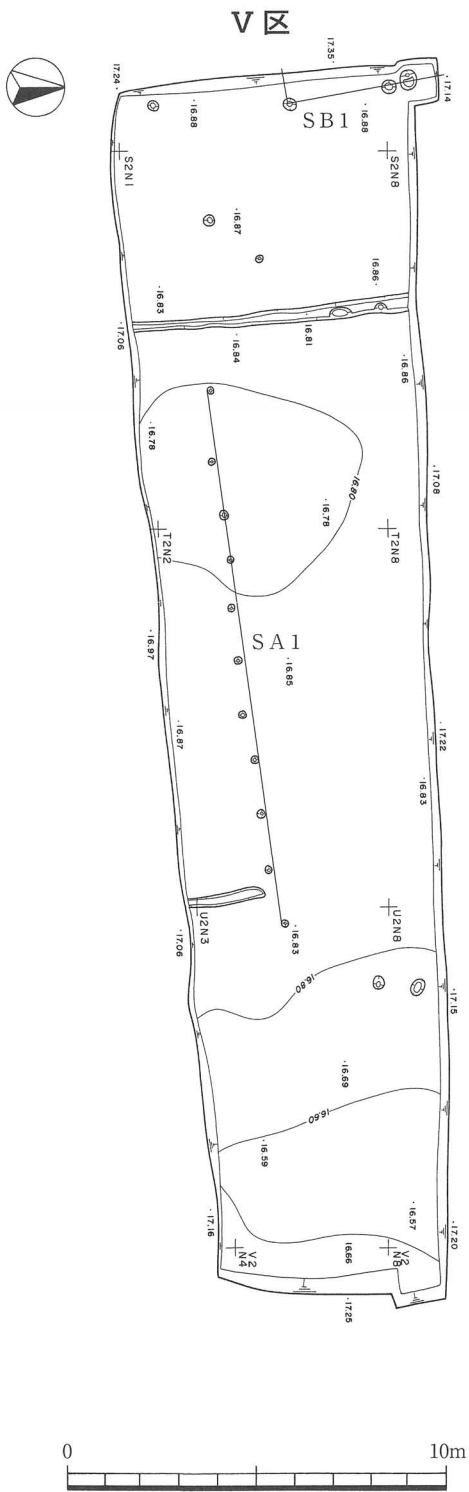
IV区で確認した南北に走る河の跡である。幅約11m、深さ約140cmを測り、中から縄文土器や打製石斧が出土しており、この時期より河として機能していたようである。ただし、土の堆積状況から常水はしておらず、雨など降水の時のみ水が流れ、普段は湿地のような状況であったと思われる。なお、土層断面から中世段階には埋っていたようである。



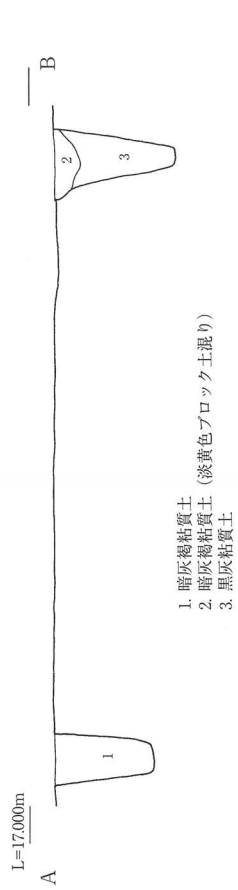
第 32 图 I、II 区遺構平面図 (S=1/200)



第 33 图 III、IV 区遺構平面図 (S=1/200)

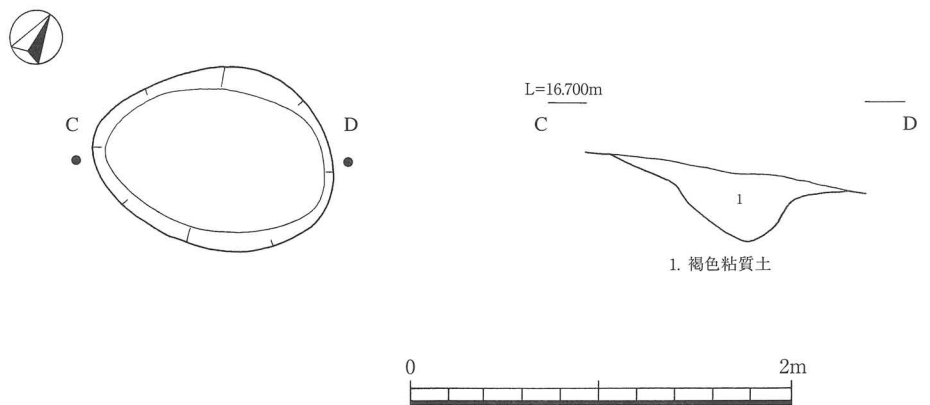


第34図 V区遺構平面図 (S=1/200)



1. 暗灰褐粘質土
2. 暗灰褐粘質土 (淡黄色ブロック土混り)
3. 黒灰粘質土

第35図 SB1遺構図・土層断面図 (S=1/40)

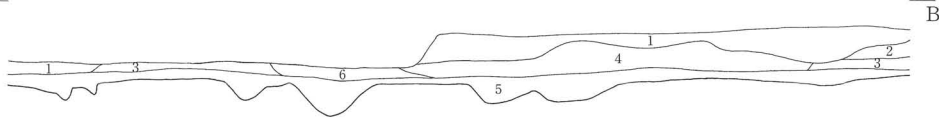


1. 褐色粘質土

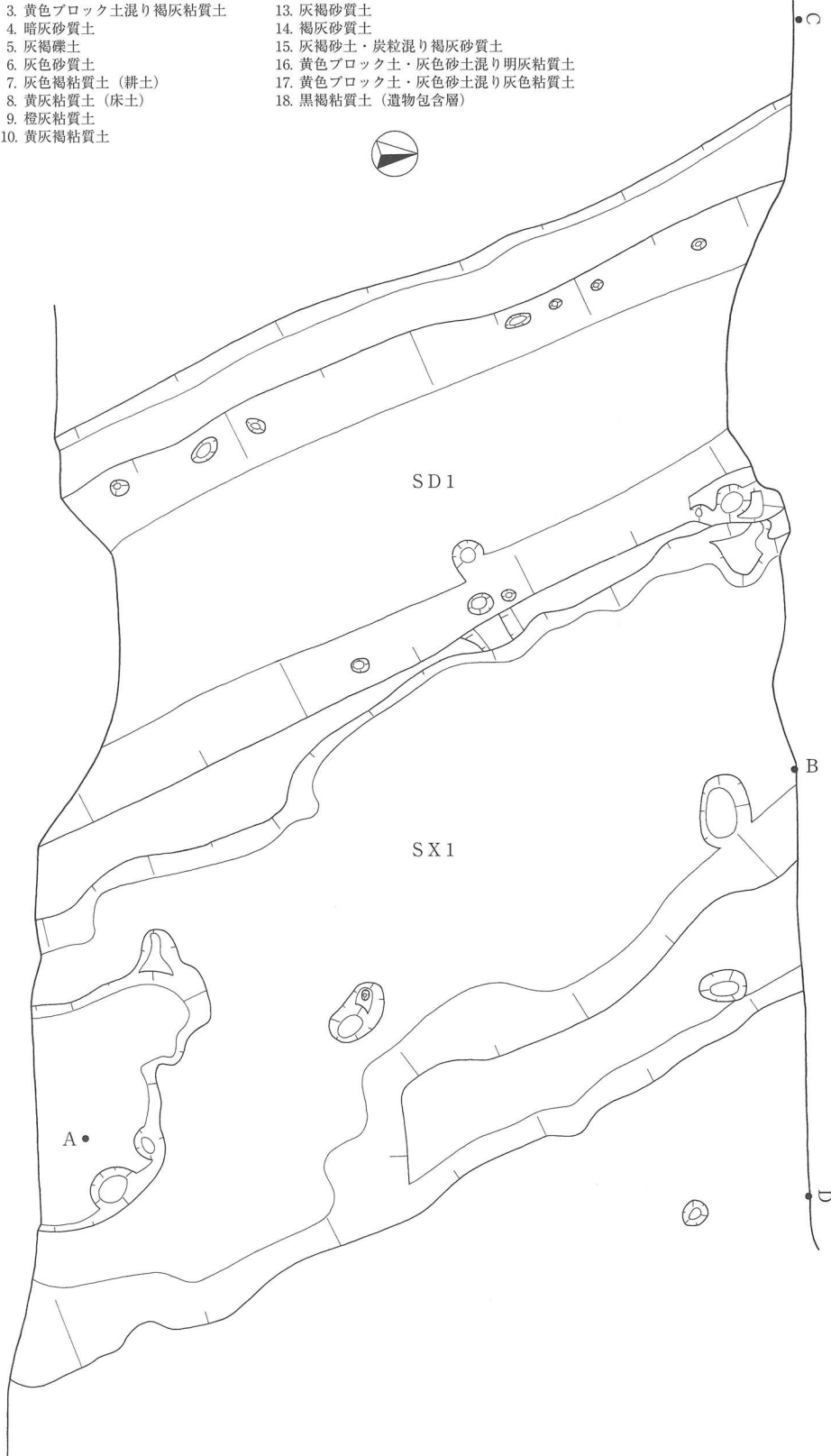
第36図 SK1遺構図・土層断面図 (S=1/40)

L=16.900m

A

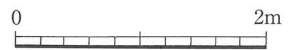
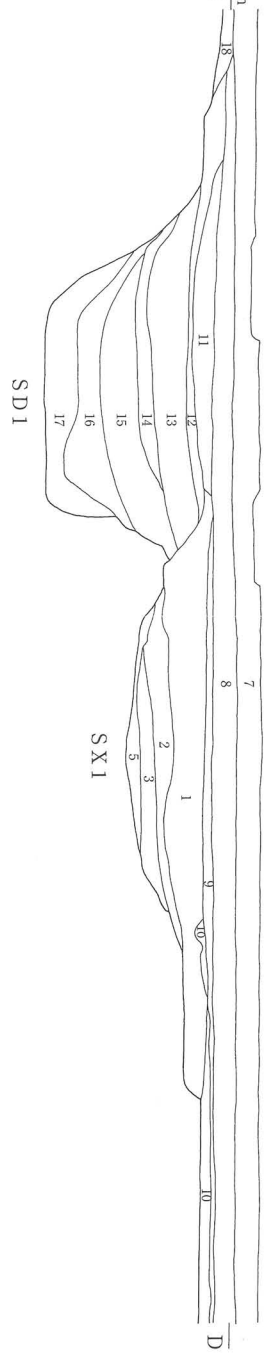


- |                   |                            |
|-------------------|----------------------------|
| 1. 黄色ブロック土混り灰褐粘質土 | 11. 黒褐ブロック土混り灰色粘質土 (遺物包含層) |
| 2. 褐灰粘質土          | 12. 灰色砂質土                  |
| 3. 黄色ブロック土混り褐灰粘質土 | 13. 灰褐砂質土                  |
| 4. 暗灰砂質土          | 14. 褐灰砂質土                  |
| 5. 灰褐礫土           | 15. 灰褐砂土・炭粒混り褐灰砂質土         |
| 6. 灰色砂質土          | 16. 黄色ブロック土・灰色砂土混り明灰粘質土    |
| 7. 灰色褐粘質土 (耕土)    | 17. 黄色ブロック土・灰色砂土混り灰色粘質土    |
| 8. 黄灰粘質土 (床土)     | 18. 黒褐粘質土 (遺物包含層)          |
| 9. 橙灰粘質土          |                            |
| 10. 黄灰褐粘質土        |                            |

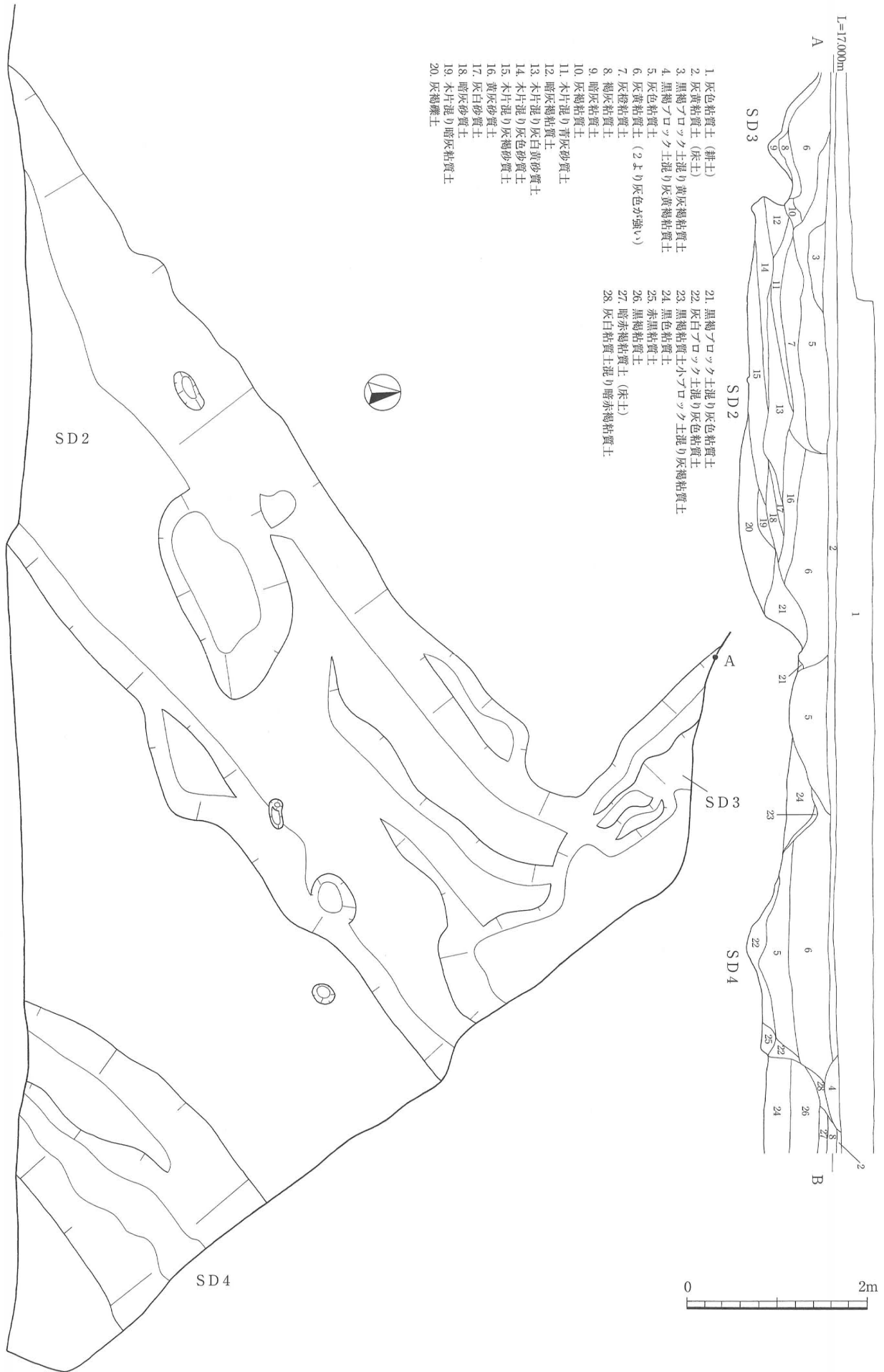


L=17.000m

C



第 37 図 SD1、SX1 遺構図・土層断面図 (S=1/60)



1. 灰色粘質土 (耕土)  
 2. 灰黄粘質土 (灰土)  
 3. 黒縄テロツク土混り黄灰粘質土  
 4. 黒縄テロツク土混り灰黄粘質土  
 5. 灰色粘質土  
 6. 灰黄粘質土 (2.L) 灰色が強い  
 7. 灰粘質土  
 8. 褐灰粘質土  
 9. 暗灰粘質土  
 10. 灰粘質土  
 11. 木片混り青灰砂質土  
 12. 暗灰粘質土  
 13. 木片混り灰白黄砂質土  
 14. 木片混り灰色砂質土  
 15. 木片混り灰粘質土  
 16. 黄灰砂質土  
 17. 灰白砂質土  
 18. 暗灰砂質土  
 19. 木片混り暗灰粘質土  
 20. 灰縄土
21. 黒縄テロツク土混り灰色粘質土  
 22. 灰白テロツク土混り灰色粘質土  
 23. 黒縄粘質土小テロツク土混り灰粘質土  
 24. 黒色粘質土  
 25. 赤黒粘質土  
 26. 黒粘質土  
 27. 暗赤粘質土 (赤土)  
 28. 灰白粘質土混り暗赤粘質土

第38図 SD2、SD3、SD4 遺構図・土層断面図 (S=1/60)

L=17200m



- 1 灰色粘質土 (粘土)
- 2 青灰粘質土 (粘土)
- 3 褐灰粘質土 (粘土)
- 4 明灰粘質土 (粘土)
- 5 明赤褐灰粘質土 (粘土)
- 6 明赤褐灰粘質土 (粘土)
- 7 灰褐粘質土 (泥世粘土か)
- 8 灰白砂質土
- 9 暗灰砂質土
- 10 淡黄灰砂質土
- 11 黄褐色粘質土
- 12 灰黄砂質土
- 13 浅黄褐色砂質土
- 14 褐色粘質土
- 15 灰色粘質土 (泥世粘土か)
- 16 灰褐色砂土
- 17 灰褐色砂土 (15と層序は同じ)
- 18 灰褐色粘質土
- 19 褐灰砂土
- 20 黑砂土
- 21 黑粘質土
- 22 黑粘質土 (遺物包含層)
- 23 褐灰粘質土
- 24 褐灰粘質土

第 39 図 自然河道平面図・土層断面図 (S=1/60)



### 第3節 遺物（第40、41図）

遺物については、縄文時代、中世、近世のものが出土しているが、総体的には少ない。以下、実測した遺物の概要を述べる。

2は、縄文時代晩期前葉～中葉にあたる中屋式の深鉢で、口頸部のみ残る。3と4は青磁碗片である。3は直縁篋描蓮弁紋碗、4は厚釉端反無紋碗である。5は土師器皿で、口縁部に灯芯油痕が残る。6～9は近世陶磁器である。10～16は打製石斧である。10は基部・刃部両者とも欠損している。復元すると大型品になると思われる。11と12は括れを有するCタイプである。流水があったSD2から出土していることから、全体的に摩耗している。13もCタイプである。一部で刃こぼれが認められるが、刃先は大凡残っている。括れ部で真二つに割れており、使用途中に折れた可能性がある。14～16は基部である。14と16は縁が直線的な直基、15は欠損しているが、本来は丸みを帯びた円基であったと思われる。17～22は磨石、23は中世の石臼残欠である。

### 第4節 小結

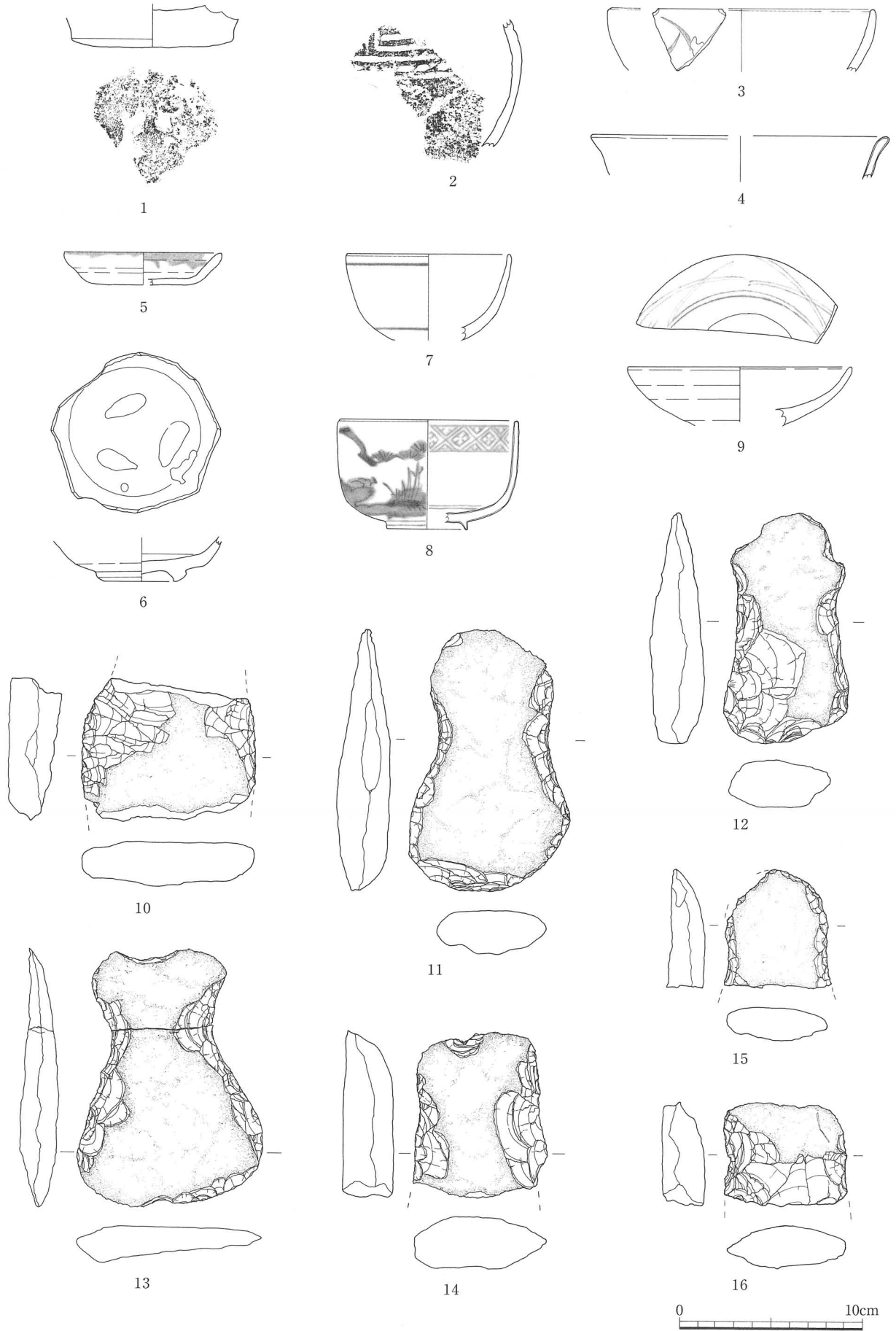
本調査区では縄文時代晩期及び中世、近世の時代を確認した。縄文時代は、IV区自然河道の袂で土器や石製品が集中して見つかった。しかし、遺構はSK1のみで、遺物の数量は極めて少ないことから、本地は食料採取などを目的とした一時的な生活拠点の場であったと推察する。

中世はI区でSD1とSX1を検出した。SD1は上幅約4m、底幅約1.5m、深さ約1.3mと極めて大きく、堆積土層から水流を有していたと思われ、耕作地の用水や土地間の境界溝として使用されていたと考えられる。時期は出土遺物から15世紀中頃と思われる。本調査区より北方には当該時期の集落跡を確認しており、SD1とは密接な関係にあったと推測する。

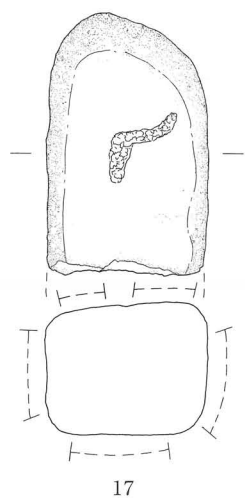
近世はI区で用水と思われるSD2～SD4、V区でSA1を確認した。I区で検出したSD2～SD4は、調査区外へと延びるため断定はできないが、すべて同一になる可能性をもつ。同一の溝と仮定するなら、SD2とSD4は本調査区際で90度北西方に進路を変えてSD3となって流水することになる。

### 参考文献

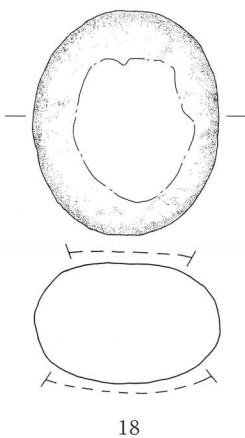
- |         |   |
|---------|---|
| 河合忍 安英樹 | 1999「石鍬雑考」『石川考古資料調査・集成事業報告書 農工具』 石川考古学研究会   |
| 水澤幸一    | 2009「中世後期の貿易陶磁器」『日本海流通の考古学 中世武士団の消費生活』 高志書院 |
| 藤田邦夫    | 1997「中世加賀国の土師器様相」『中近世の北陸－考古学が語る社会史－』 桂書房    |



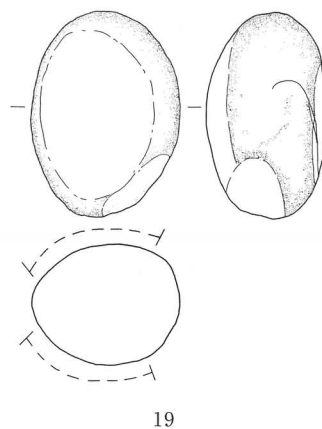
第40图 土器、陶磁器、石製品実測図 (S=1/3)



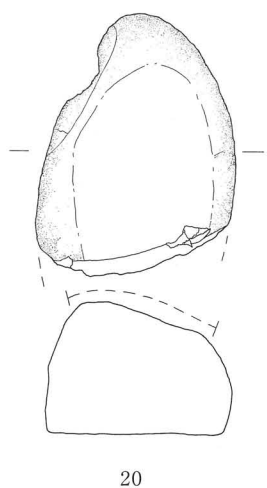
17



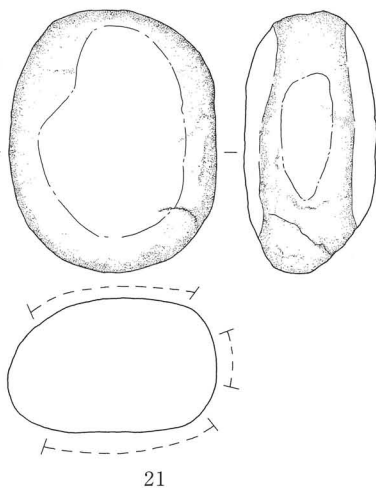
18



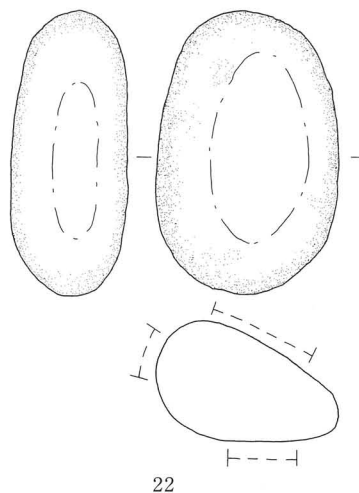
19



20



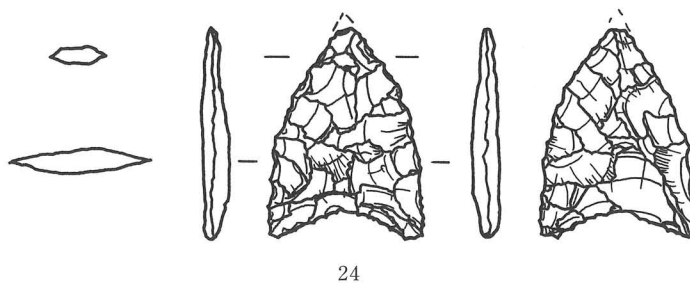
21



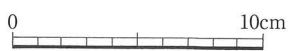
22



23



24



第41図 石製品実測図 (S=1/3、24のみ S=1/1)

第4表 土器・陶磁器観察表

番号	調査区・gr	種類	口径	器高	底径	色調(内)	調整(内)	残存率	備考	実測番号
	遺構	器種	(cm)	(cm)	(cm)	色調(外)	調整(外)			
1	Ⅳ区O-1	縄文土器			8.8	灰黄		底部1/3	黒色粒、赤色酸化粒、石英粒	5
	自然河道	底部				橙、にぶい黄橙				
2	Ⅲ区K-2	縄文土器				黒褐、黄褐、にぶい黄橙		体部小片		13
	包含層	深鉢				黒褐、黄褐、にぶい黄橙	沈線、列点文			
3	Ⅰ区E・F-2	青磁	14.6			灰オリーブ	施釉(青磁)	口縁部1/12		23
	SX1	碗				灰オリーブ	施釉(青磁)			
4	Ⅰ区E-1・2	青磁	(16.4)			灰オリーブ	施釉(青磁)	口縁部1/18	茶色粒	14
	SD1	碗				灰オリーブ	施釉(青磁)			
5	Ⅰ区E-1	土師器	8.6	17.5	5.8	にぶい黄橙、浅黄橙、灰白	ヨコナデ	1/7	赤色酸化粒、口縁部内外面灯芯油煤	12
	SX1	皿				にぶい黄橙、浅黄橙、灰白	ヨコナデ			
6	Ⅰ区F・G-1	唐津陶器			3.8	にぶい黄橙	施釉	底部完形	底部内面に砂目	1
	SD2	碗				褐				
7	Ⅰ区G-2	肥前磁器	9.0			灰白	施釉(透明釉)	口縁部1/4		4
	SD2	染付碗				灰白	施釉(透明釉)			
8	Ⅰ区G-1	肥前磁器	9.1	5.95	4.4	灰白	施釉(透明釉)	口縁部1/6		19
	包含層	染付碗				灰白	施釉(透明釉)			
9	Ⅰ区G-1	肥前磁器	12.2			灰白、暗オリーブ灰、オリーブ灰	施釉(透明釉)	1.3	黒色粒微量、内面に釉剥ぎ	20
	包含層	染付皿				灰白、暗オリーブ灰、オリーブ灰	施釉(透明釉)			

第5表 石製品観察表

番号	gr	器種	最大長	最大幅	最大厚	質量	石材	備考	実測番号
	遺構		(cm)	(cm)	(cm)	(g)			
10	Ⅰ区E-1・2	打製石斧	(7.8)	(9.5)	(2.9)	(256)	流紋岩		26
	SD1								
11	Ⅰ区F・G-1	打製石斧	14.2	8.75	2.9	350	火山礫凝灰岩		3
	SD2								
12	Ⅰ区F・G-1	打製石斧	12.65	6.8	3.0	270	緑色凝灰岩		2
	SD2								
13	Ⅱ区I-2	打製石斧	14.0	10.1	2.2	220	火山礫凝灰岩		6
	包含層								
14	Ⅱ区I-2	打製石斧	(9.0)	(7.3)	(2.8)	(260)	火山礫凝灰岩		7
	包含層								
15	Ⅱ区I-2	打製石斧	(6.5)	(5.8)	(2.1)	(100)	火山礫凝灰岩		25
	包含層								
16	Ⅳ区O-2	打製石斧	(5.7)	(6.7)	(2.3)	(120)	火山礫凝灰岩		24
	包含層								
17	Ⅰ区E-1・2	磨石	(10.3)	(6.5)	(5.4)	(595)	流紋岩		8
	SD1								
18	Ⅳ区O-2	磨石	8.9	7.4	4.8	440	粗流凝灰岩		9
	自然河道								
19	Ⅳ区O-2	磨石	8.2	5.9	4.8	285	安山岩		11
	自然河道								
20	Ⅰ区G-2	磨石	(10.4)	(7.9)	(5.7)	(580)	凝灰岩		18
	包含層								
21	Ⅲ区K-1	磨石	10.4	8.3	5.3	670	凝灰岩		21
	包含層								
22	Ⅳ区O-2	磨石	11.3	7.2	4.7	530	砂岩		16
	包含層								
23	Ⅰ区G-2	石臼	(12.2)	(7.1)	(5.1)	(470)	凝灰岩		15
	SD1								
24	Ⅳ区O-2	石鏃	2.3	2.1	0.3	1.8	輝石安山岩		22
	自然河道								

## 第6章 第21次（平成17年度）調査

### 第1節 調査の経過

#### 第1項 調査に至る経緯

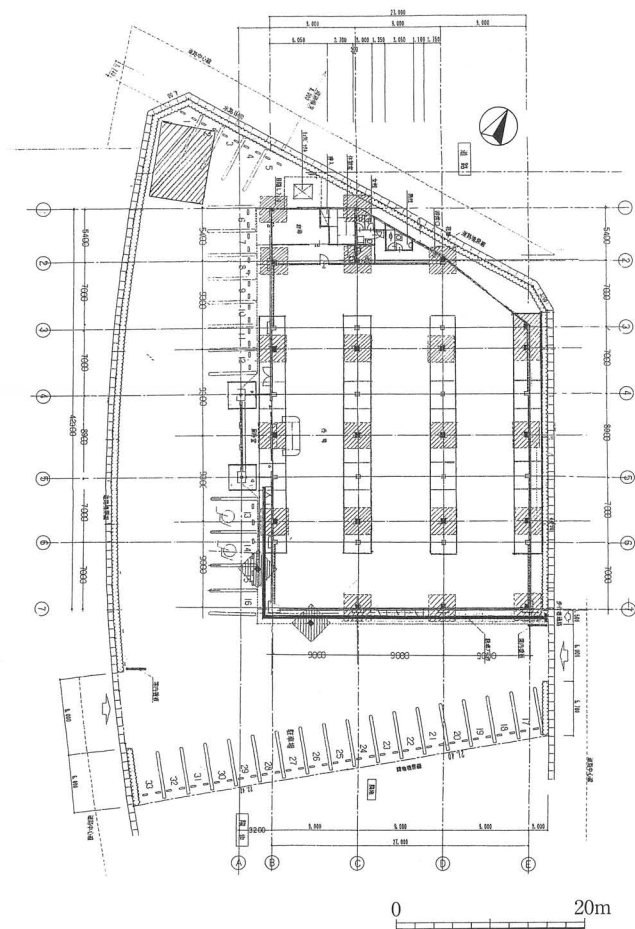
本発掘調査業務は、野々市市北西部土地区画整理地区73街区における開発事業を調査原因とする。平成17年7月、北西部土地区画整理組合（以下、北西部組合と呼称する。）から野々市町（当時）教育委員会（以下、町教委と呼称する。）に、本地区内において靴専門販売店施設建設の計画の打診があった。建設予定地は、全域が埋蔵文化財包蔵地であったため、組合と町教委との間で協議を行った。協議をした結果、本開発地工事で埋蔵文化財に影響を及ぼす約570㎡分は発掘調査を実施し、それ以外の盛土造成など地下遺構に影響を及ぼさない箇所は、慎重な工事施工を実施してもらうこととした。施設建設予定地の埋蔵文化財発掘調査については、翌年の平成18年3月までに現地調査を完了することと合意した。

町教委は、平成17年8月3日付で、石川県教育委員会（以下、県教委と呼称する。）に埋蔵文化財包蔵地における土木工事取り扱いの届出を行い、同月同日に県教委から町教委にその通知が届いた。これを受けて、町教委は本開発予定地の埋蔵文化財発掘調査の作業に着手していった。

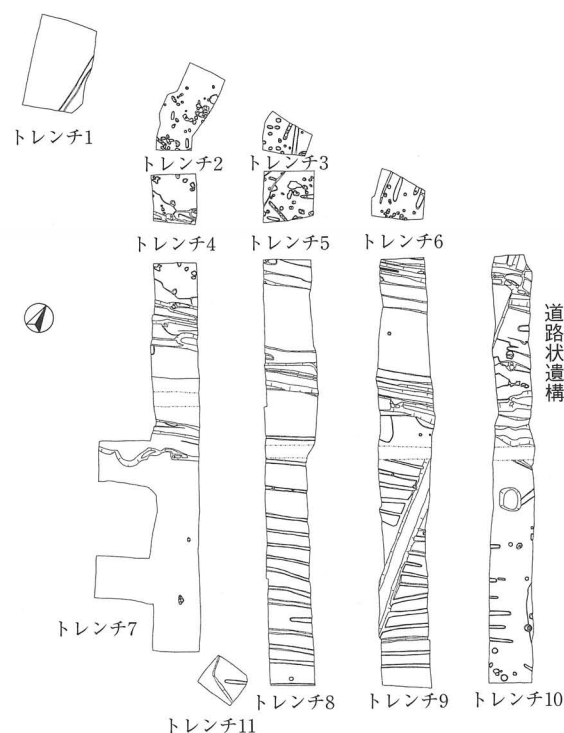
#### 第2項 発掘作業の経過

現地調査は、10月18日より開始した。調査区の設定をした後、大型掘削機により遺構面までの土砂を掘削し、10月20日に完了した。10月21日からは、発掘作業員による人力作業が始まった。作業は10月31日まで行われたが、他所で緊急の埋蔵文化財発掘調査を実施しなくてはならないことが生じたため、北西部組合と協議し、本調査を一時中断することと合意した。本調査は翌年の平成18年3月6日より再開した。内容は、作業員による遺構掘削や調査員による記録作業及び、調査区内の遺構写真撮影などである。3月28日で現地調査の記録をすべて終え、3月29日に出土遺物の取上げ、発掘調査器材等の搬出作業を経て、現地調査を終えた。

出土品の整理は平成21年3月10日から開始した。整理作業の内容は出土品の洗浄、記名・分類・接合、実測で、同年4月10日に完了した。平成24年1月5日より、現地で行われた記録図や出土品実測図の製図、出土品の写真撮影、併行して原稿執筆や編集を実施して、3月30日までにこれらの作業を完了した。



第42図 工事計画図 (S=1/800)



第43図 調査区全体図 (S=1/600)

## 第2節 遺構

本調査区は幅約3m、長さ3～34mの計11箇所の調査区（トレンチ）を設定している。うち、調査区の西方にあたるトレンチ1とトレンチ7の南側、トレンチ11は遺構が希薄となる。また、トレンチ11より南方は、地山面が低くなる傾向となり谷地となって落ち込んでいくようである。トレンチ2～6については溝やピットを検出したが、特徴的な遺構は抽出できず、遺物の出土もほとんどなかった。主要な遺構が確認できたのはトレンチ7～10で、以下その概要を述べる。

### 道路状遺構（第45～49図）

トレンチ7～10で確認した。本調査区から北東約400m離れた平成15年度第9次調査で発見された古代北陸道跡と直線上に結ぶとほぼ合致することから、本遺構も古代北陸道跡と推定する。後述するSD1とSD2は道路状遺構の側溝と考えられる。側溝と側溝の間の道路幅の長さはトレンチ7で3m以上、トレンチ8で約8.5m、トレンチ9で約8m、トレンチ10で約9.3mを測る。ただし、側溝SD1とSD2は掘り直しされたようで、その際は道路面の幅も変わっていたようである。各トレンチでは、粘土と砂が混合した厚さ5～7cmの叩き締めが見られ、道路には硬化面が施されていたようである。ただし、トレンチ10においては遺存状態があまりよくなく、硬化面が認められない箇所がある。硬化面の認められない箇所は凹み状になっており、これが自然によるものか、轍の跡になるかはわからない。トレンチ10の道路面直上から3の土師器有台埴底部が出土している。

### SD1（第46、48図）

トレンチ8～10で検出した。北東－南西ラインをとり、前述した古代北陸道跡の北側側溝にあたる。掘り直しの痕跡が認められることから、道路の改修があったと思われる。トレンチ8では、調査区北端で検出された。溝の大部分は調査区外へと延びているため全体の詳細はわからない。確認できたのは南面掘り方の一部で、幅55cm、深さ15cmである。トレンチ9では、幅約150cm、深さは最深部で約65cmを測る。トレンチ10ではSD3と交差しており、全容を明らかにすることはできなかった。幅は約180cm、深さは最深部で約70cmである。

### SD2（第45、46、48図）

トレンチ7～10で検出した古代北陸道跡の南側側溝にあたる。SD1と同様、掘り直しの痕跡が認められる。トレンチ7では、幅130～155cm、深さ50～90cmである。トレンチ8は140～170cm、深さ50～70cmを測る。溝内からは内黒の土師器埴片が出土した。トレンチ9では幅100～120cm、深さ70～80cm、トレンチ10では幅140～180cm、深さ100cm前後を測る。なお、溝全体の幅は320～400cmとなる。

### SD3（第46、48図）

トレンチ9と10で確認した。ほぼ真北に近い方位をとる南北溝である。幅130～150cm、深さ45～60cmを測る。溝底の堆積層が砂層であったことから流水していたようである。遺物は少量ながら8世紀後半～9世紀前半にかけての須恵器甕と坏の破片を確認している。この溝は切り合いによる前後関係などから、古代北陸道よりも古い時期に掘削され、古代北陸道築造の時には埋められたようである。

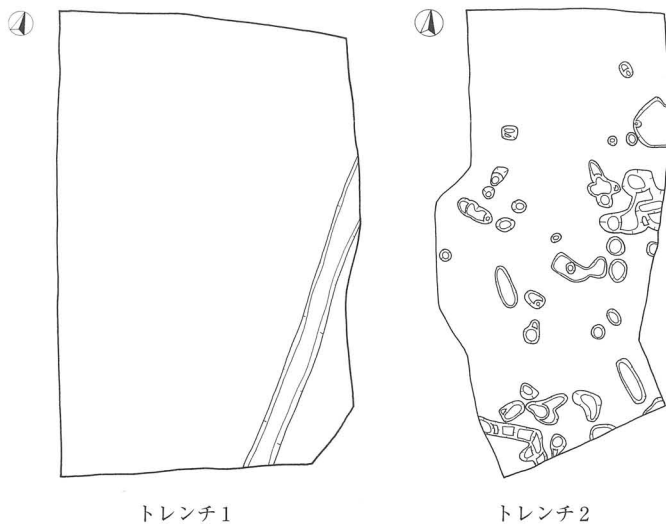
### SK1（第44、48図）

トレンチ10の中央付近で検出した土坑である。一辺約180cmの隅丸方形をしており、深さは25cmを測る。暗灰褐粘質土を基本とした土がレンズ状に堆積し、中からは6の青磁碗片1点と大量の焼土と炭片が見つかった。

### 畝溝（第46、48図）

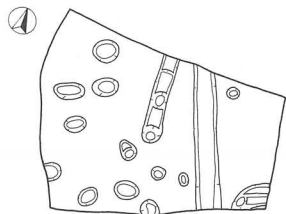
トレンチ8～10の南側で確認された。トレンチ8では14条、トレンチ9では16条、トレンチ10では6条見つかった。遺物の出土はなかったが、古代北陸道跡の方位とほぼ同じなので、両遺構は同時期のものと考えられる。また、トレンチ7では畝溝が全く確認されず、トレンチ10では東方の終焉部となるため、溝の長さは20～25mになると考えられる。溝幅は25～40cm、深さは5～20cm、溝と溝の間は50～200cmを測るが、幅60cmが平均となる。

また、トレンチ3、6では南北に方位をもつ溝が数条確認されており、これらも畝溝になるかもしれない。

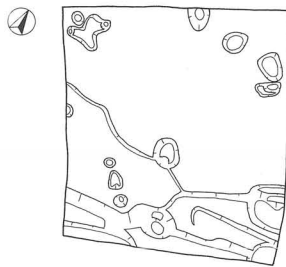


トレンチ1

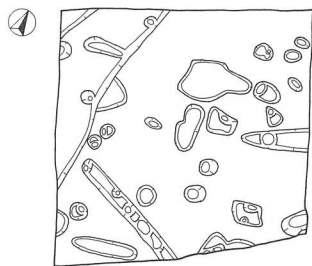
トレンチ2



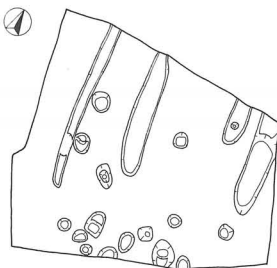
トレンチ3



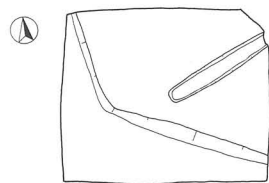
トレンチ4



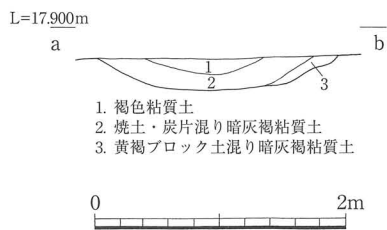
トレンチ5



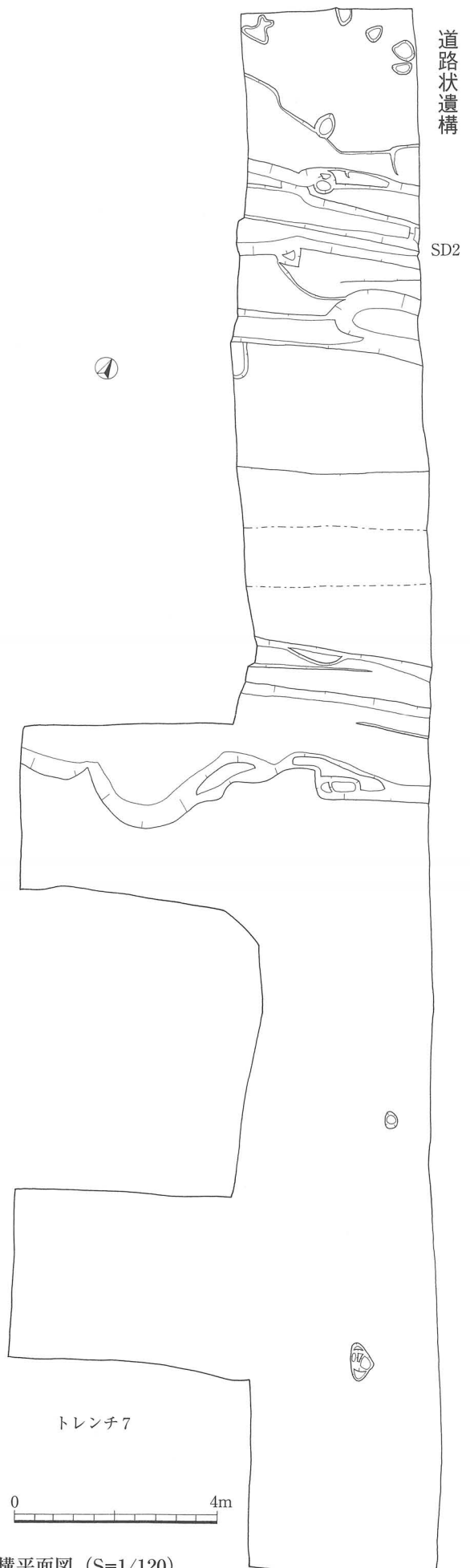
トレンチ6



トレンチ11



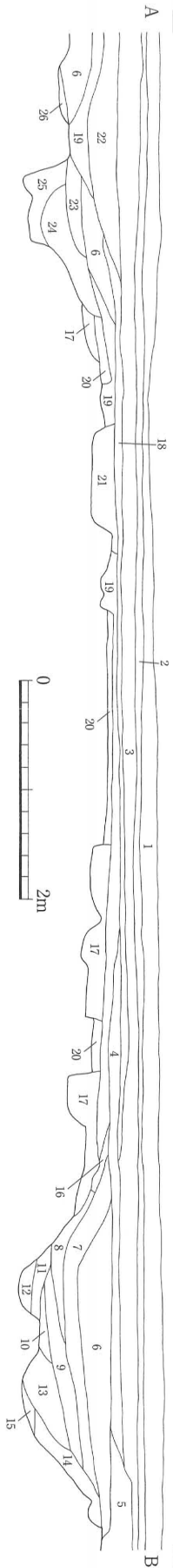
第44図 SK1 土層断面図 (S=1/60)



トレンチ7

第45図 トレンチ1~7、11 遺構平面図 (S=1/120)

L=18,300m



- 1. 灰色粘質土 (耕土)
- 2. 灰褐粘質土 (床土)
- 3. 明灰粘質土 (旧耕土)
- 4. 褐色砂分混り黒褐粘質土 (旧床土)
- 5. 灰褐粘質土 (旧耕土)

- 6. 黒色粘質土
- 7. 灰褐粘質土 (粘性強い)
- 8. 淡灰褐粘質土 (粘性強い)
- 9. 黄褐粘質土 (粘性強い)
- 10. 淡灰褐粘質土 (粘性強い)

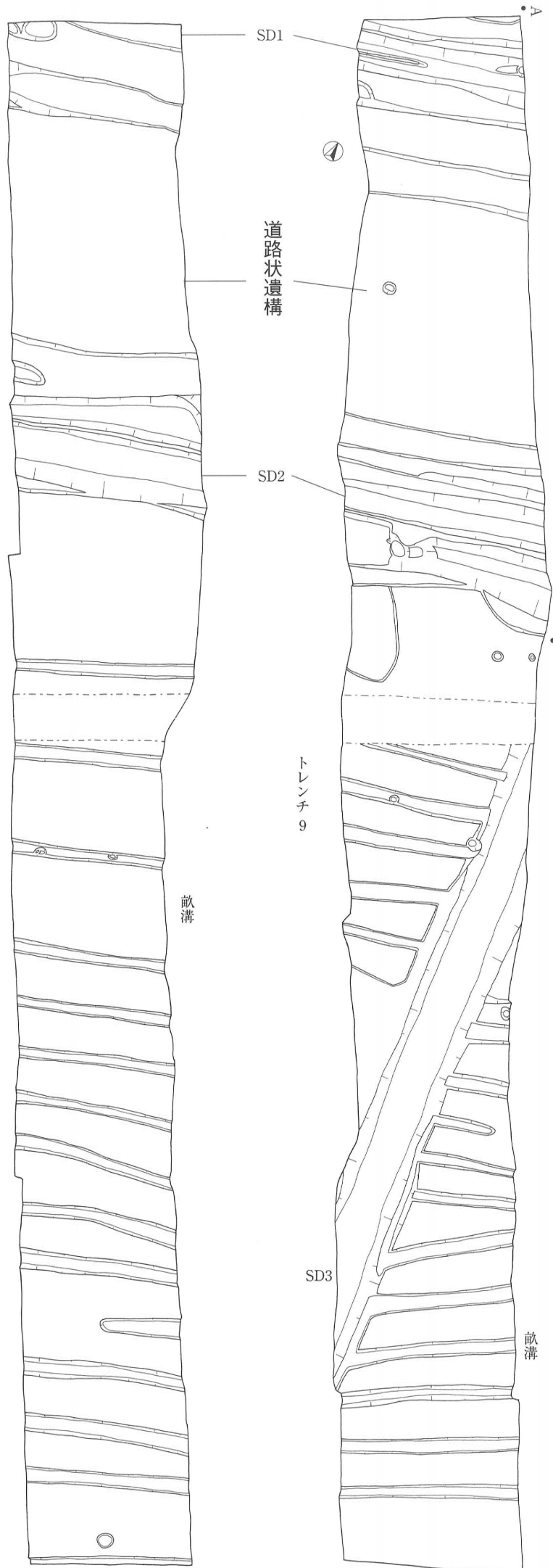
- 11. 黒色アロックス土混り灰褐シルト (道路硬化面)
- 12. 黄褐アロックス土混り灰褐砂質土
- 13. 灰褐シルト
- 14. 黄褐・黒色アロックス土混り灰褐粘質土
- 15. 灰褐砂質土

- 16. 黄褐アロックス土混り灰褐砂質土 (道路硬化面)
- 17. 淡灰褐シルト (道路陸地層)
- 18. 粘灰粘質土
- 19. 灰褐粘質土
- 20. 砂利層・粘土状アロックス土混り明黄褐砂質土 (道路硬化面)

- 21. 黒褐粘質土
- 22. 灰白粘質土 (粘性強い)
- 23. 暗灰褐粘質土
- 24. 灰褐粘質土
- 25. 暗灰褐シルト
- 26. 灰黄褐粘質土

0 4m

第46図 トレンチ8、9遺構平面図 (S=1/120)



道路状遺構

畝溝

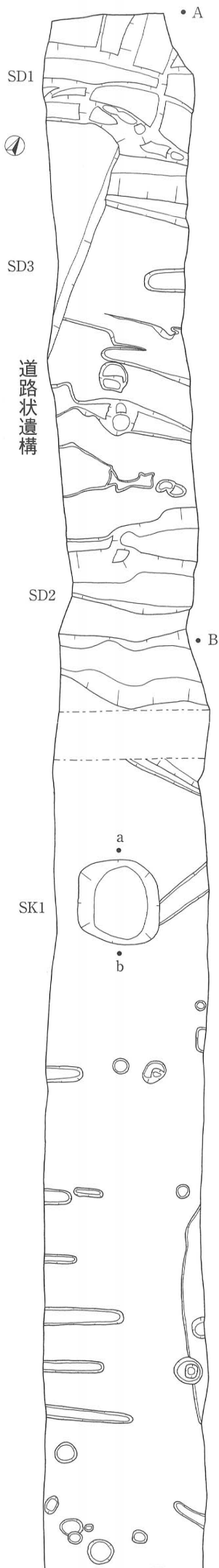
畝溝

トレンチ8

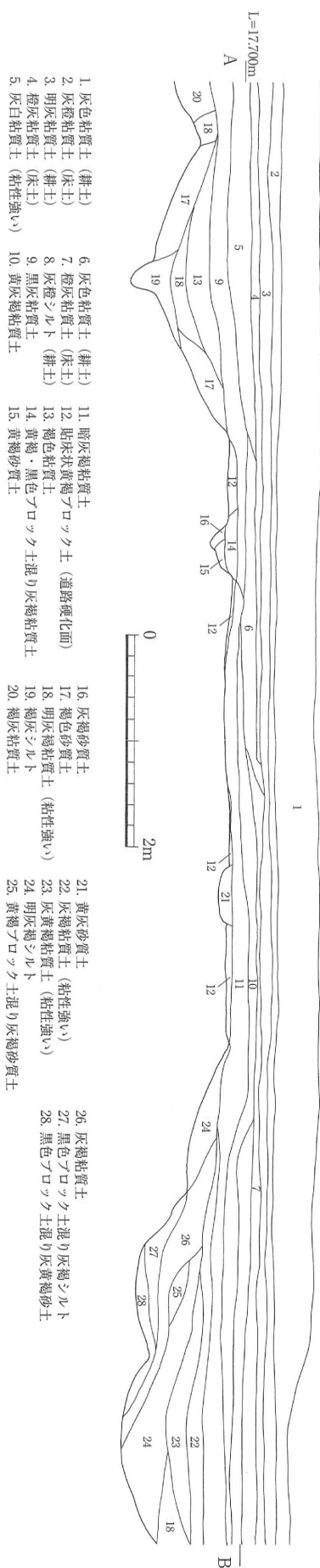
トレンチ9







第 48 図 トレンチ 10 遺構平面図 (S=1/120)



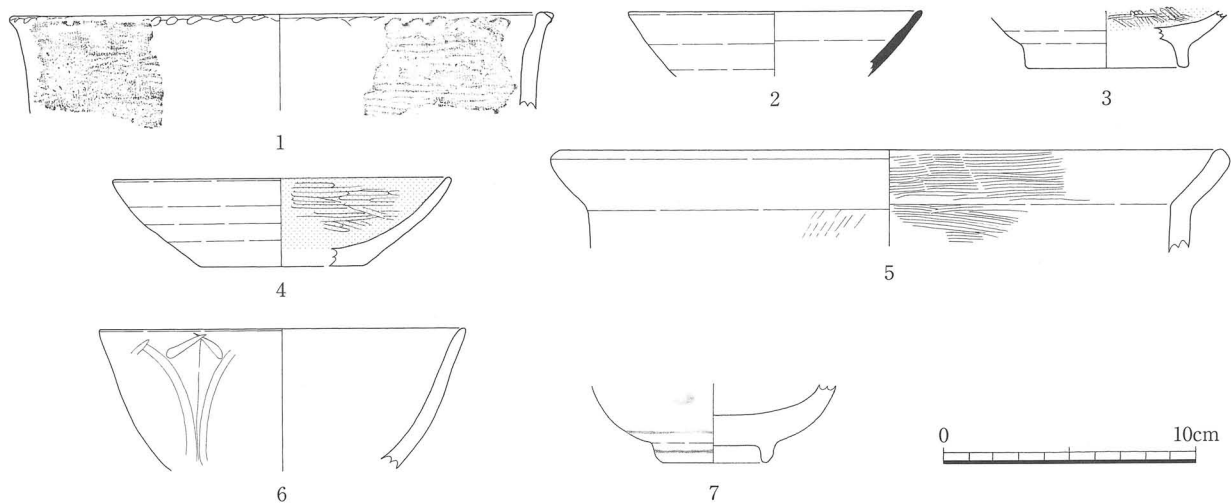
- 1. 灰色粘質土 (耕土)
- 2. 灰澄粘質土 (床土)
- 3. 明灰粘質土 (耕土)
- 4. 褐灰粘質土 (床土)
- 5. 灰白粘質土 (粘性強い)
- 6. 灰色粘質土 (耕土)
- 7. 褐灰粘質土 (床土)
- 8. 灰澄シルト (耕土)
- 9. 黒灰粘質土
- 10. 黄灰粘質土
- 11. 暗灰褐粘質土
- 12. 貼床状黄褐色フロック土 (道路硬化面)
- 13. 褐色粘質土
- 14. 黄褐色・黒色フロック土混り灰褐粘質土
- 15. 黄褐色砂質土
- 16. 灰褐砂質土
- 17. 褐色砂質土
- 18. 明灰褐粘質土 (粘性強い)
- 19. 褐灰シルト
- 20. 褐灰粘質土
- 21. 黄灰砂質土
- 22. 灰褐粘質土 (粘性強い)
- 23. 灰黄褐粘質土 (粘性強い)
- 24. 明灰褐シルト
- 25. 黄褐色フロック土混り灰褐砂質土
- 26. 灰褐粘質土
- 27. 黒色フロック土混り灰褐シルト
- 28. 黒色フロック土混り灰黄褐砂質土

第 49 図 トレンチ 10 道路状遺構土層断面図 (S=1/60)

### 第3節 遺物（第50図）

遺物については、縄文時代、古代、中世、近世の土器・陶磁器が出土しているが、数量は約150点程度と総体的に少ない。実測できた点数も7点程度であった。以下、実測した遺物の概要を述べる。

1は、縄文時代晩期中葉後半～後葉にあたる下野式の深鉢で、口縁部のみ残る。2はSD1で出土した須恵器坏端部である、8世紀後半～9世紀前半のものと思われる。3と4は内面黒色の土師器碗で、3は古代北陸道跡の道路面直上から、4は道路側溝にあたるSD2から出土した。3は9世紀後半、4は9世紀半ばと考えられる。5はSD3から見つかった8世紀後半の土師器甕の口縁部である。6はトレンチ10内SK1から見つかった青磁碗である。鏝蓮弁を施し、14世紀中頃と思われる。7は排土から見つかった近世後半の陶器碗である。



第50図 土器・陶磁器実測図 (S=1/3)

第6表 土器・陶磁器観察表

番号	遺構	種類 器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調		調整(内) 調整(外)	残存率	備考	実測 番号
						(内)	(外)				
1	包含層	縄文土器	21.3			にぶい黄橙	ナデ	ナデ	口縁部 1/12	赤色粒 外面に煤付着	5
		深鉢				暗褐	条痕				
2	SD 1	須恵器	11.6					ナデ	口縁部 1/8	黒色粒、白色粒 内外面に重ね焼き痕	4
		坏						褐灰、灰白			
3	北陸道 路面直上	土師器			6.4	褐灰、内黒	ミガキ	ナデ	底部 1/6	内面黒色	6
		碗				橙					
4	SD 2	土師器	13.3	3.5	6.6	内黒	ミガキ	ナデ	1.6	内面黒色	2
		碗				橙、にぶい褐					
5	SD 3	土師器	26.8			にぶい橙	ハケ	ハケ、ナデ	口縁部 1/12	赤色粒、石英質粒	3
		甕				にぶい橙					
6	SK 1	青磁	14.4			明緑灰			口縁部 1/10	黒色粒 蓮弁文	7
		碗				明緑灰					
7	排土	陶胎染付			4.3	灰白	施釉		底部完形	陶胎染付	1
		碗				灰白	施釉				

#### 第4節 小結

本調査区では古代北陸道跡を確認した。道路は約8～9mの幅があり、厚さ5～7cmの硬化面も検出することができた。南北両側には側溝を有しており、全国で展開されている古代官道とほぼ同様の様相を呈している。トレンチ9の土層断面図を観察すると、道路跡は大きく2時期存在することがわかった。当初は、層17や20の整地及び硬化面で構築した路面と、層23～25の北側側溝及び層10～15の南側側溝で構成されたようである。この時期の路面幅は約8mである。この後、層16や19による約10cmの硬化面のかさ上げがあり、その際両側側溝も掘り直されたようである。北側側溝は層6と19、南側側溝は層8と9で、深さは築造当初が65～90cmであったのに対して、改修後の側溝の深さは40cm前後と浅くなっている。路面幅は約8mと改修前とは大きな変化はない。いつ頃築造し、改修されたかは明確に判断できないが、道路側溝及び路面直上からの出土遺物から8世紀後半には築造され、一度大きな改修を経て、9世紀後半までは存続したと推定される。

#### 参考文献

- 田嶋明人 1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』  
石川考古学研究会 北陸古代土器研究会
- 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究 No.2』 日本貿易陶磁研究会

## 第7章 第22・33次（平成17・19年度）調査

### 第1節 調査の経過

#### 第1項 調査に至る経緯

第22次調査区は、野々市市北西部土地区画整理地区45街区における家電量販店建設工事に伴う発掘調査である。平成17年6月、北西部土地区画整理組合（以下、組合という。）から野々市町（当時）教育委員会（以下、町教委という。）に対し、当該地において家電量販店建設の計画の打診があった。建設予定地は全域が埋蔵文化財包蔵地であったため、双方でその取扱いについて協議を行った。加えて、この建物が第4次調査と同様に包蔵地に面で接しない、限られた基礎で立ち上がるフローティングともいべき構造で、建物の下を駐車場として利用する建築物であったため、並行して石川県教育委員会文化財課（以下、県教委という。）とも協議を進めた結果、14か所の基礎部分と地面から立ち上がる入口及び倉庫部分を調査対象とし、他は盛土造成工事として遺跡を保護することで合意した。調査面積は822㎡である。

町教委は、平成17年9月20日付教文第307号で県教委に埋蔵文化財包蔵地における土木工事取り扱いの届出を行い、同年9月20日に県教委から町教委にその通知が届いた。これを受けて、町教委は当該地における埋蔵文化財発掘調査の具体的作業に着手した。しかし、調査が終了した後に経緯は不明であるが当初の計画が中止となり、当該地は埋め戻して現状保存することとなった。

ところが、2年後の平成19年7月に、同じ街区で今度は温泉施設建設の計画が持ち上がった、第33次調査である。今回計画された建物は温泉施設を備えたものであり、全体に深く掘削することが確実であったため、建設予定地全体を調査対象とすることで合意した。調査に当たっては、効率を考慮して既に調査が終了している部分も再度表土を除去し、全体として遺構の状況を把握することとした。

町教委は、平成19年10月10日付教文第245号にて県教委に発掘調査報告を提出し、現地における調査の準備に入った。調査面積は調査済の部分も含め1,642㎡である。しかし、調査終了後にこの温泉施設の建設計画も白紙となり、現在は調査が終了した部分には大型衣料品販売店が建設され、すでに営業を開始している。

#### 第2項 発掘作業の経過

第22次調査は、平成18年1月20日に着手した。計画図をもとに調査区を設定し、重機を用いて遺構上面までの表土を除去し、その後人力による掘削を開始した。調査にあたっては、1か所につき4名1組で担当してもらい、包含層掘り下げから遺構掘削までを一貫して行った。その後調査員が写真撮影を行い、記録を取った。その後、調査区全体で空中写真測量を行い、同年2月23日に現地での作業を終了した。

第33次調査は、平成19年10月23日に着手した。第22次調査終了後、盛土造成済であったため重機を用いて掘削した遺構面までの土量は相当なものであった。人力での作業は11月1日より着手しており、包含層掘り下げから遺構検出を行い、並行して遺構略測図を作成した。その後遺構の掘削及び記録作成、空中写真測量等を経て11月27日に現地における調査を終了した。

出土した遺物の整理作業は平成22年度に実施した。内容は、洗浄及び記名、選別・接合と実測図作成・トレースである。その後図版の編集や写真撮影、原稿執筆などを行い、すべての作業を平成24年3月30日までに完了した。

#### 第2節 遺構

本調査区は三日市A遺跡推定値の中央西端にあたり、遺構密度はそれほど高くなかった。確認された主なものは、竪穴建物4棟とその他土坑と畝間溝状遺構、性格不明遺構などである。全体の概要については遺構全体図（第51図）を確認していただきたい。

#### S I 1 (第 52 図)

4.08 m × 2.88 m を測る略長方形の竪穴建物である。深さ 22cm を測り、かなり上面を削られているものと思われる。明確な柱穴やカマドの痕跡などは確認されていない。遺物は 4 点図示している。

#### S I 2 (第 53 図)

3.24 m × 2.92 m を測る略方形の竪穴建物である。深さ 12cm 程度であり、同じく上面を削られているものと思われる。やはり明確な柱穴やカマドの痕跡は確認されていない。遺物は 3 点図示している。

#### S I 3 (第 53 図)

南北 2.44 m、東西推定で 2.2 m ほどの略方形の竪穴建物である。深さは床面まで約 16cm を測り、東側を従前の建物基礎で破壊されている。柱穴やカマドの痕跡は確認されていない。遺物は 1 点図示している。

#### S I 4 (第 54 図)

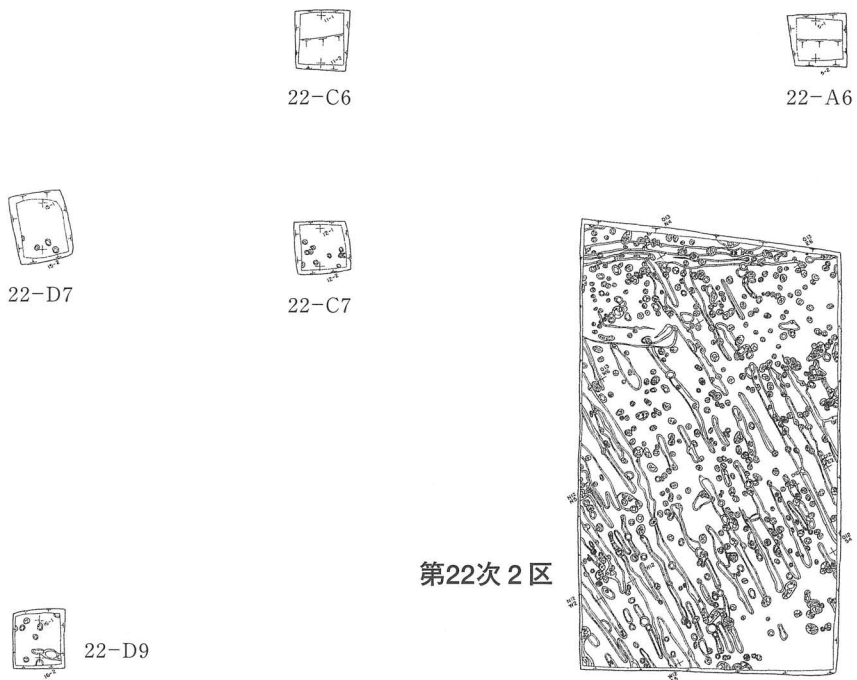
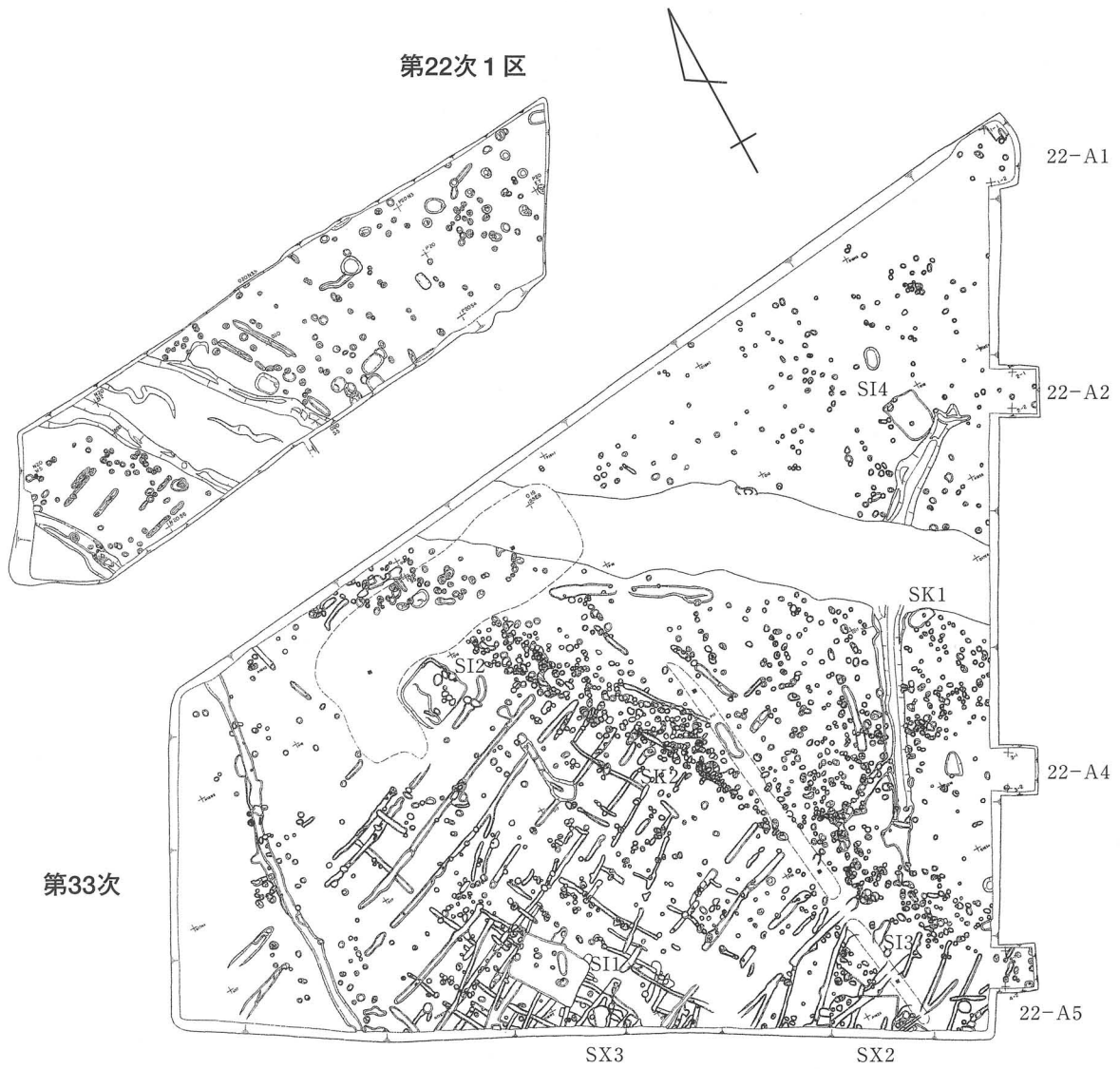
4.3 m × 2 m を測る略長方形の竪穴建物である。床面までの深さは約 11 であり、やはり柱穴やカマドの痕跡は確認されていない。図示可能な遺物は出土していない。

### 第 3 節 遺物 (第 57 ~ 59 図)

37 点を図示した。縄文土器を除けばほぼ 9 世紀後半代のもので占められており、周辺の土地利用の時期を示している。詳細は遺物観察表 (第 6 表) を参照いただきたい。

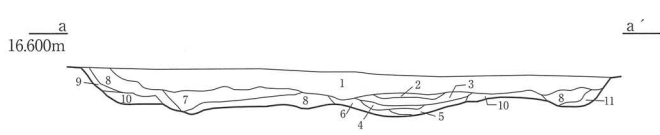
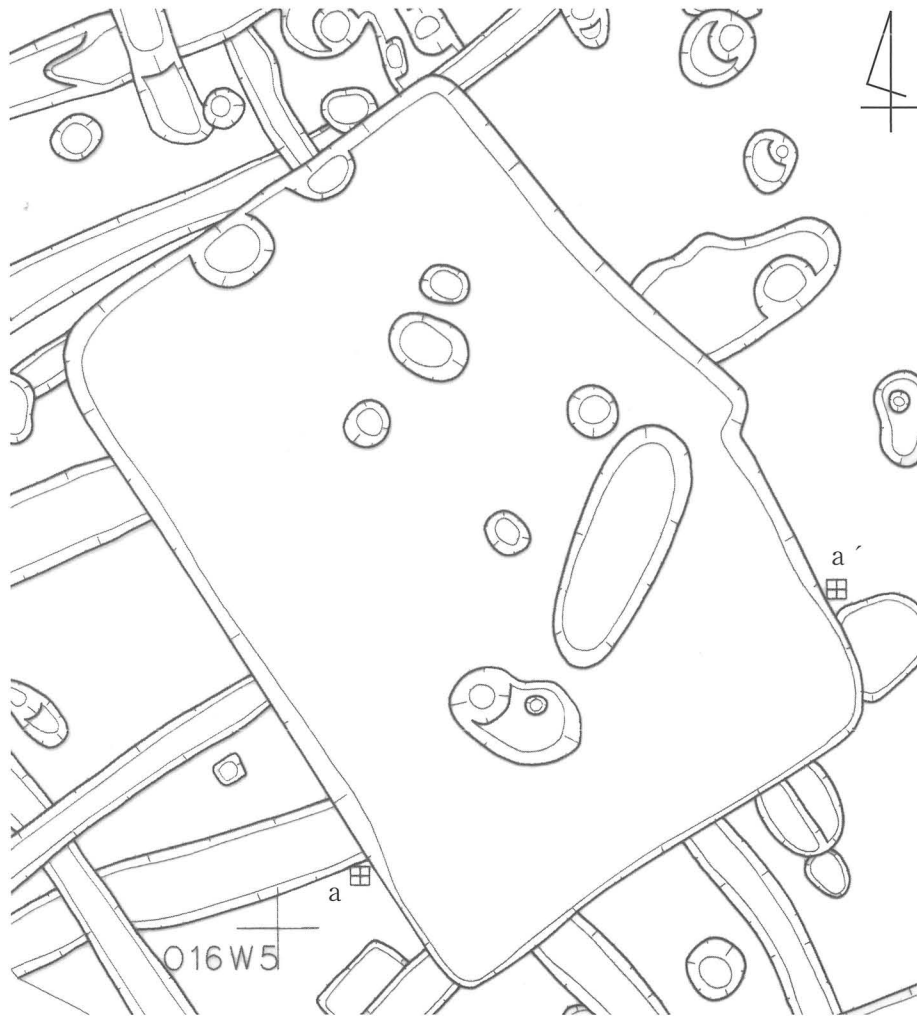
### 第 4 節 小結

本調査区は、多くの掘立柱建物を検出した第 18 次調査区や、大型の掘立柱建物を検出した第 19 次調査区に近い部分であったが、確認された主要な遺構には掘立柱建物は含まれていない。中央を南北に走る小穴は垣の跡と思われ、その西側に多くみられる畝間溝状の遺構は、後代にこの地が農地として利用されたことを示している。



第51图 遺構全体図 (S=1/400)

S11

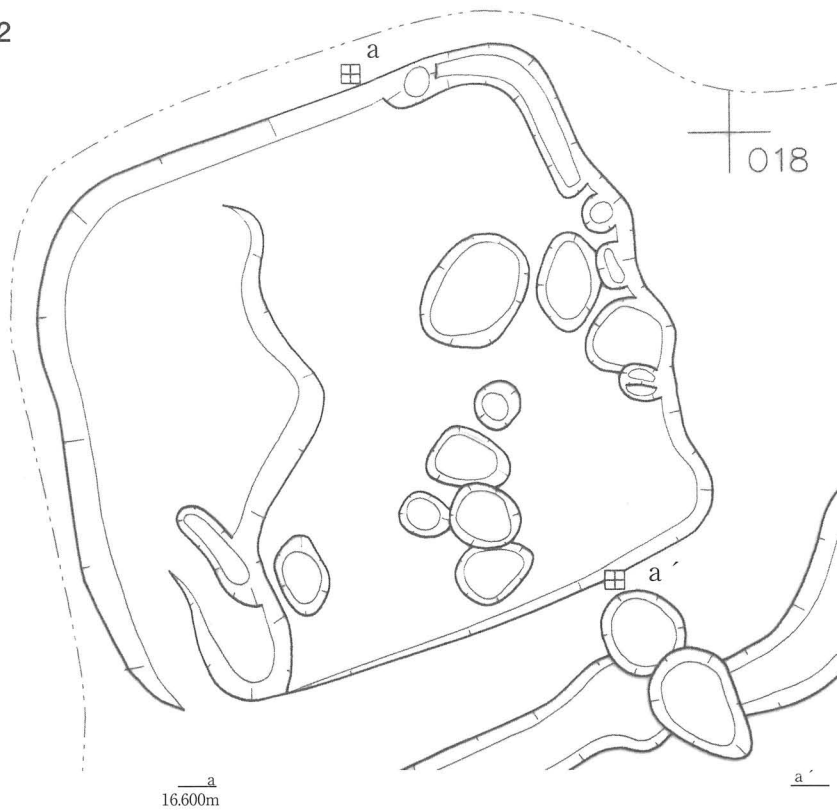


- 1 暗灰色粘質土
- 2 淡橙褐色粘質土
- 3 暗褐色粘質土
- 4 淡黄色粘質土
- 5 淡黄色粘質土
- 6 淡灰褐色粘質土
- 7 褐色粘質土
- 8 淡暗灰褐色粘質土
- 9 灰褐色粘質土
- 10 淡黄色粘質土
- 11 灰褐色粘質土 (やや淡い)



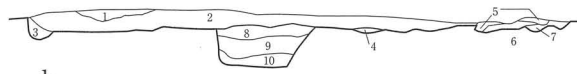
第 52 図 S11 遺構図・土層断面図 (S=1/40)

SI2

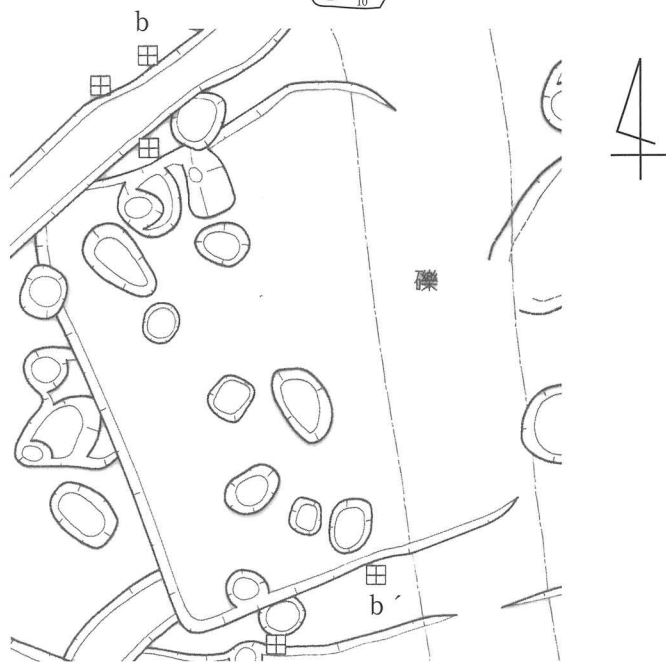


- 1 暗灰色粘質土
- 2 暗灰褐色粘質土
- 3 褐灰色粘質土 (やや暗い)
- 4 褐灰色粘質土
- 5 赤褐色粘質土 (焼土)
- 6 黄褐色粘質土
- 7 暗褐色粘質土
- 8 褐灰色粘質土
- 9 灰褐色粘質土
- 10 黄褐色粘質土

16.600m

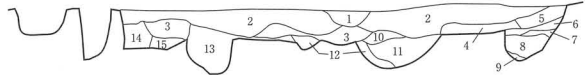


SI3



- 1 褐色粘質土 (やや暗い)
- 2 暗褐色粘質土
- 3 褐色粘質土
- 4 暗褐灰色粘質土
- 5 褐色粘質土 (やや暗い)
- 6 褐灰色粘質土 (やや暗い)
- 7 黄褐色粘質土
- 8 暗灰色粘質土
- 9 淡黄褐色粘質土
- 10 褐色粘質土 (やや淡い)
- 11 褐灰色粘質土
- 12 黄褐色粘質土
- 13 暗灰褐色粘質土
- 14 黄褐色粘質土
- 15 淡黄褐色粘質土

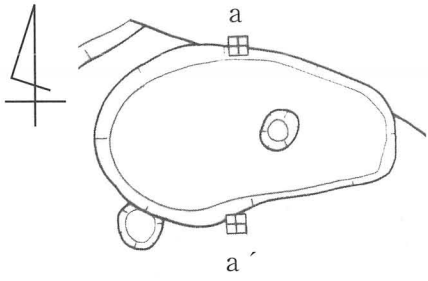
16.700m



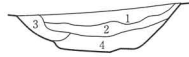
第 53 図 SI2、SI3 遺構図・土層断面図 (S=1/40)



SK1

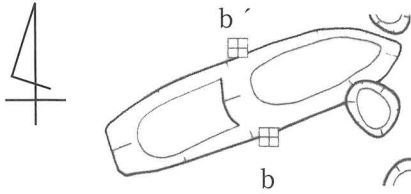


16.600m

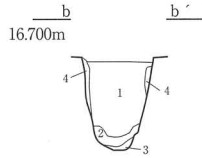


- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土
- 3 暗灰褐色粘質土
- 4 暗灰褐色粘質土 (黄色ブロック多)

SK2

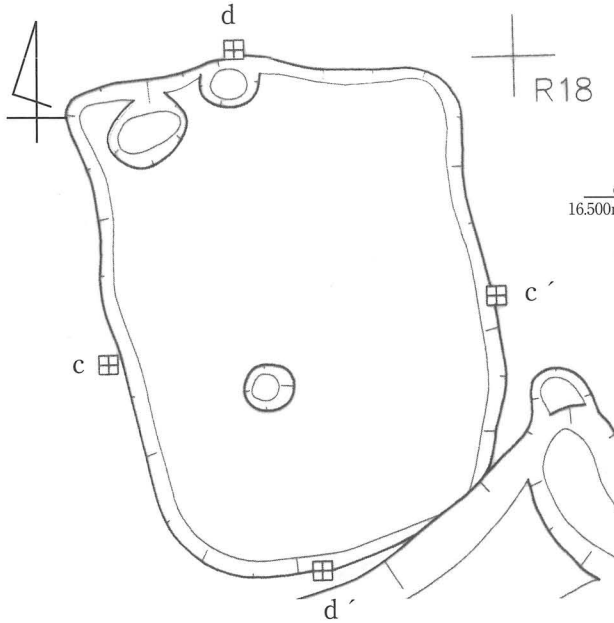


16.700m



- 1 暗灰色粘質土
- 2 黒色粘質土
- 3 暗灰色粘質土 (黄色粒多)
- 4 暗灰褐色粘質土 (やや暗い)

SI4



16.500m

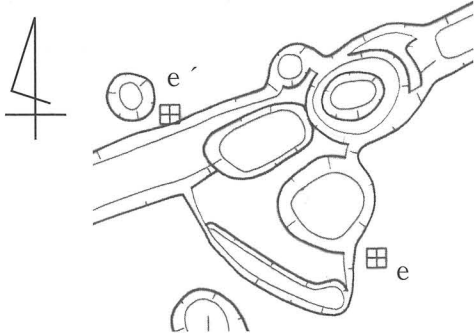


16.500m

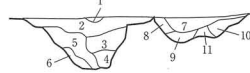


- 1 暗灰色粘質土
- 2 淡黄色粘質土 (暗灰色土シミ状)
- 3 淡褐色粘質土
- 4 淡褐色粘質土

P39



16.600m

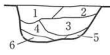


- 1 淡暗褐色粘質土
- 2 暗灰色粘質土
- 3 淡黄色粘質土 (黒色土シミ状)
- 4 褐色粘質土
- 5 淡褐色粘質土
- 6 淡黄色粘質土
- 7 褐色粘質土 (やや暗い)
- 8 淡暗褐色粘質土 (黄色土まだら)
- 9 灰褐色粘質土
- 10 暗灰色粘質土 (やや淡い)
- 11 淡黄色粘質土



第54図 SK、SI、P遺構図・土層断面図 (S=1/40)

SD1  $\frac{a}{16.700m}$   $a'$



- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土
- 3 暗灰色粘質土
- 4 暗灰色粘質土 (黄色ブロック)
- 5 淡暗灰色粘質土 (黄色土織状)
- 6 淡黄色粘質土 (地山質)

SD2  $\frac{b}{16.600m}$   $b'$



- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土
- 3 暗灰色粘質土 (黄色粒中)

$\frac{c}{16.700m}$   $c'$



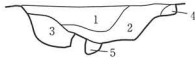
- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土

SD3  $\frac{d}{16.600m}$   $d'$



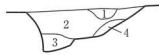
- 1 暗褐色粘質土
- 2 褐色粘質土 (黄色粒中)

SD13  $\frac{e}{16.300m}$   $e'$



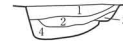
- 1 褐色粘砂質土
- 2 灰褐色粘砂質土 (やや暗い)
- 3 灰褐色粘砂質土
- 4 暗灰色粘砂質土 (やや淡い)
- 5 灰色粘砂質土 (やや淡い)

$\frac{f}{16.300m}$   $f'$



- 1 灰色粘砂質土 (やや暗い)
- 2 褐色粘砂質土
- 3 暗灰色粘砂質土 (やや淡い)
- 4 灰黄色粘砂質土 (やや暗い)

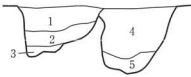
SD14  $\frac{g}{16.600m}$   $g'$



- 1 暗灰色粘質土 (やや淡い)
- 2 暗褐色粘質土
- 3 暗褐色粘質土
- 4 淡暗褐色粘質土

### 近代河道

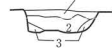
$\frac{h}{16.700m}$   $h'$



- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土
- 3 淡褐色粘質土
- 4 褐色粘質土 (やや暗い)
- 5 淡黄褐色シルト

### 畝溝群

$\frac{i}{16.700m}$   $i'$



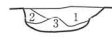
- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土
- 3 褐色粘質土

$\frac{j}{16.700m}$   $j'$



- 1 暗褐色粘質土
- 2 褐色粘質土

$\frac{k}{16.700m}$   $k'$



- 1 暗褐色粘質土
- 2 褐色粘質土
- 3 淡暗褐色粘質土

$\frac{l}{16.700m}$   $l'$



- 1 暗褐色粘質土
- 2 褐色粘質土 (やや淡い)
- 3 淡黄褐色粘質土
- 4 褐色粘質土

$\frac{m}{16.700m}$   $m'$



- 1 暗褐色粘質土
- 2 灰褐色粘質土

$\frac{n}{16.600m}$   $n'$



- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土
- 3 暗灰色粘質土
- 4 暗褐色粘質土
- 5 暗褐色粘質土 (黄色粒中)

$\frac{o}{16.600m}$   $o'$



- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土

$\frac{p}{16.600m}$   $p'$



- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土 (黄色粒)
- 3 淡黄褐色粘質土

$\frac{q}{16.700m}$   $q'$



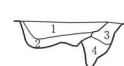
- 1 暗褐色粘質土
- 2 褐色粘質土 (やや淡い)

$\frac{r}{16.700m}$   $r'$



- 1 暗褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土
- 3 淡暗褐色粘質土
- 4 灰褐色粘質土
- 5 褐色粘質土
- 6 暗褐色粘質土
- 7 淡暗褐色粘質土
- 8 淡暗褐色粘質土

$\frac{s}{16.800m}$   $s'$

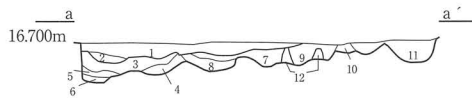
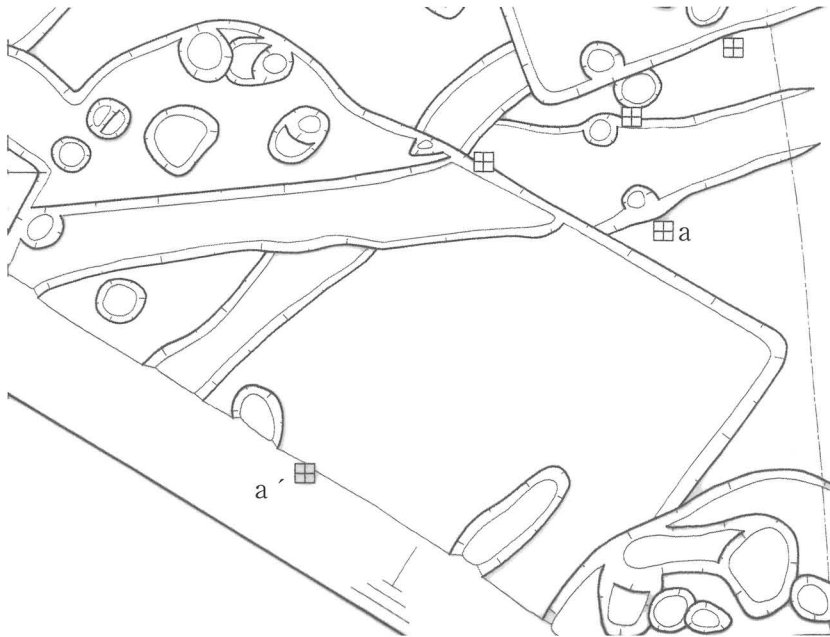


- 1 暗褐色粘質土
- 2 褐色粘質土 (やや淡い)
- 3 灰褐色粘質土 (やや淡い)
- 4 暗褐色粘質土



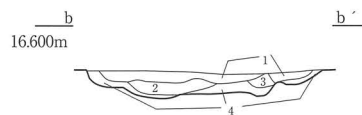
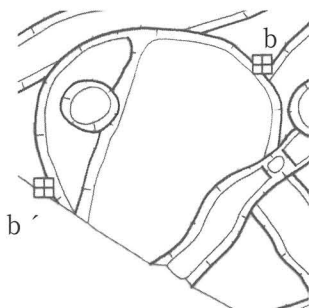
第 55 図 SD、近代河道、畝溝群土層断面図 (S=1/40)

SX2



- 1 灰色粘質土
- 2 暗灰褐色粘質土
- 3 暗褐色粘質土
- 4 暗灰褐色粘質土 (黄色粒多)
- 5 暗褐灰色粘質土
- 6 褐灰色粘質土
- 7 褐灰色粘質土 (やや暗い)
- 8 暗褐灰色粘質土
- 9 褐灰色粘質土
- 10 黄褐色粘質土
- 11 暗褐色粘質土
- 12 淡黄色粘質土 (地山質)

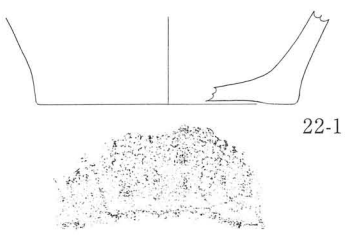
SX3



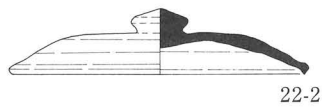
- 1 暗灰褐色粘質土
- 2 暗褐灰色粘質土
- 3 褐灰色粘質土
- 4 淡黄色粘質土



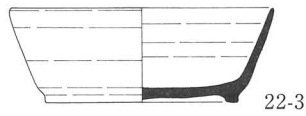
第56図 SX遺構図・土層断面図 (S=1/40)



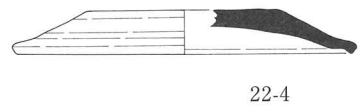
22-1



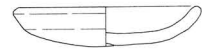
22-2



22-3

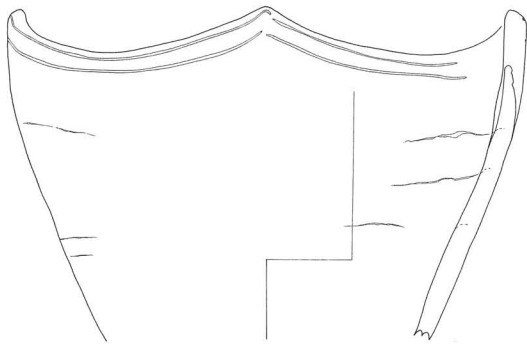


22-4

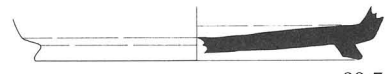


22-5

1:2区SD11  
 2:1区P6  
 3:1区a SD3  
 4:2区P11  
 5:1区a 東側包含層



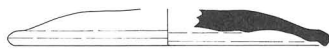
33-1



33-7



33-2



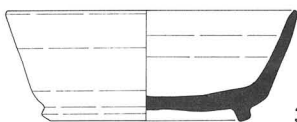
33-3



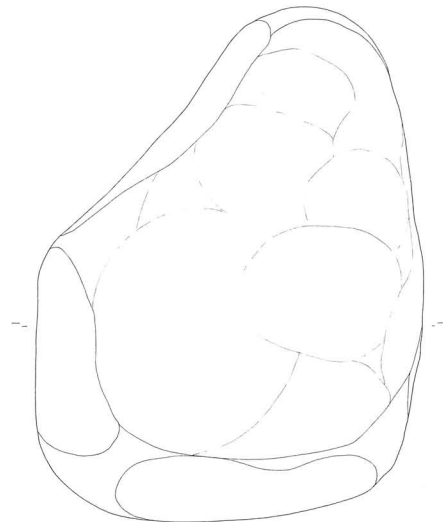
33-4



33-5



33-6



33-8

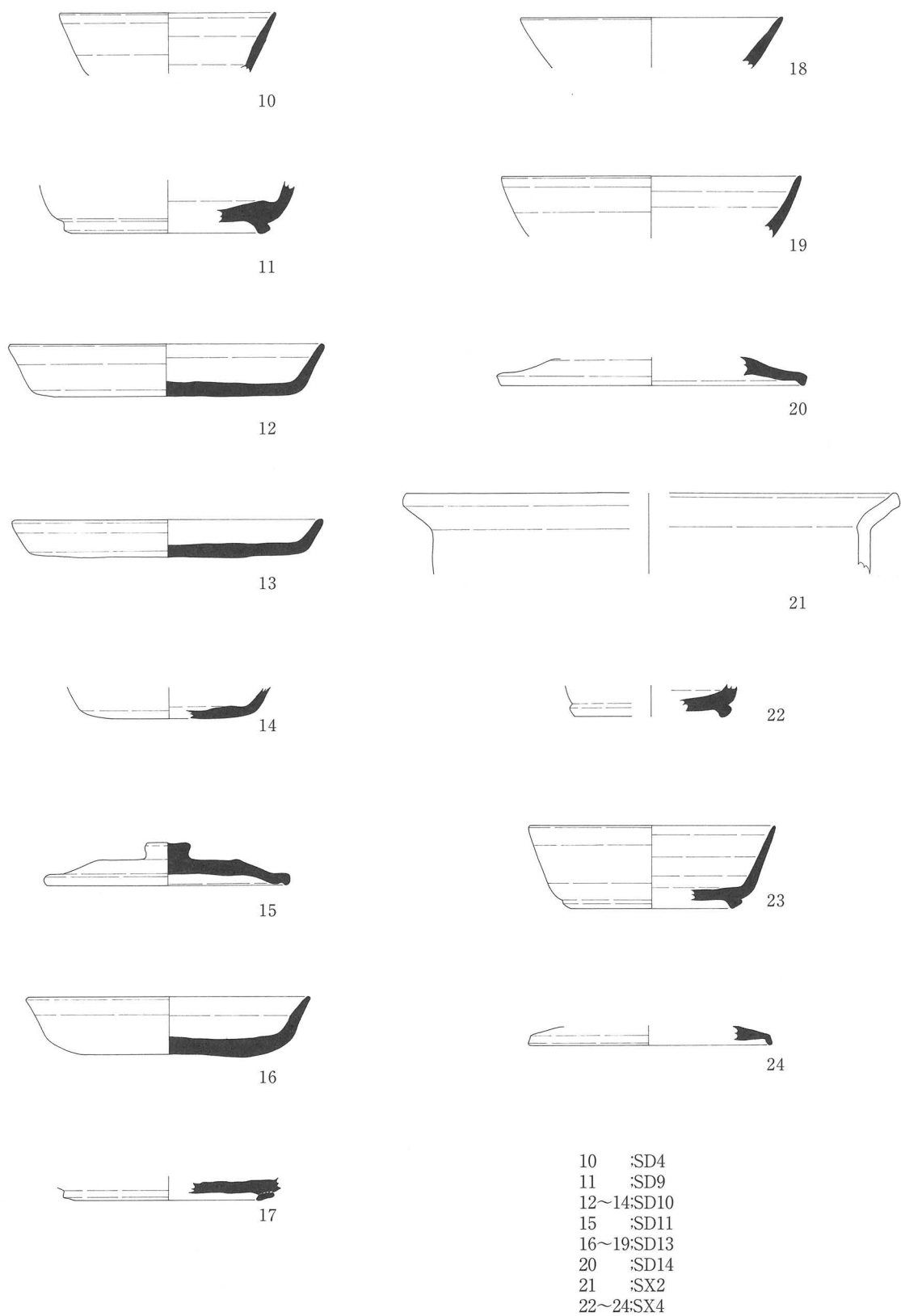


33-9

1 :P3  
 2~5:SI1  
 6 :SI2床面  
 7-8 :SI2内P54  
 9 :SI3

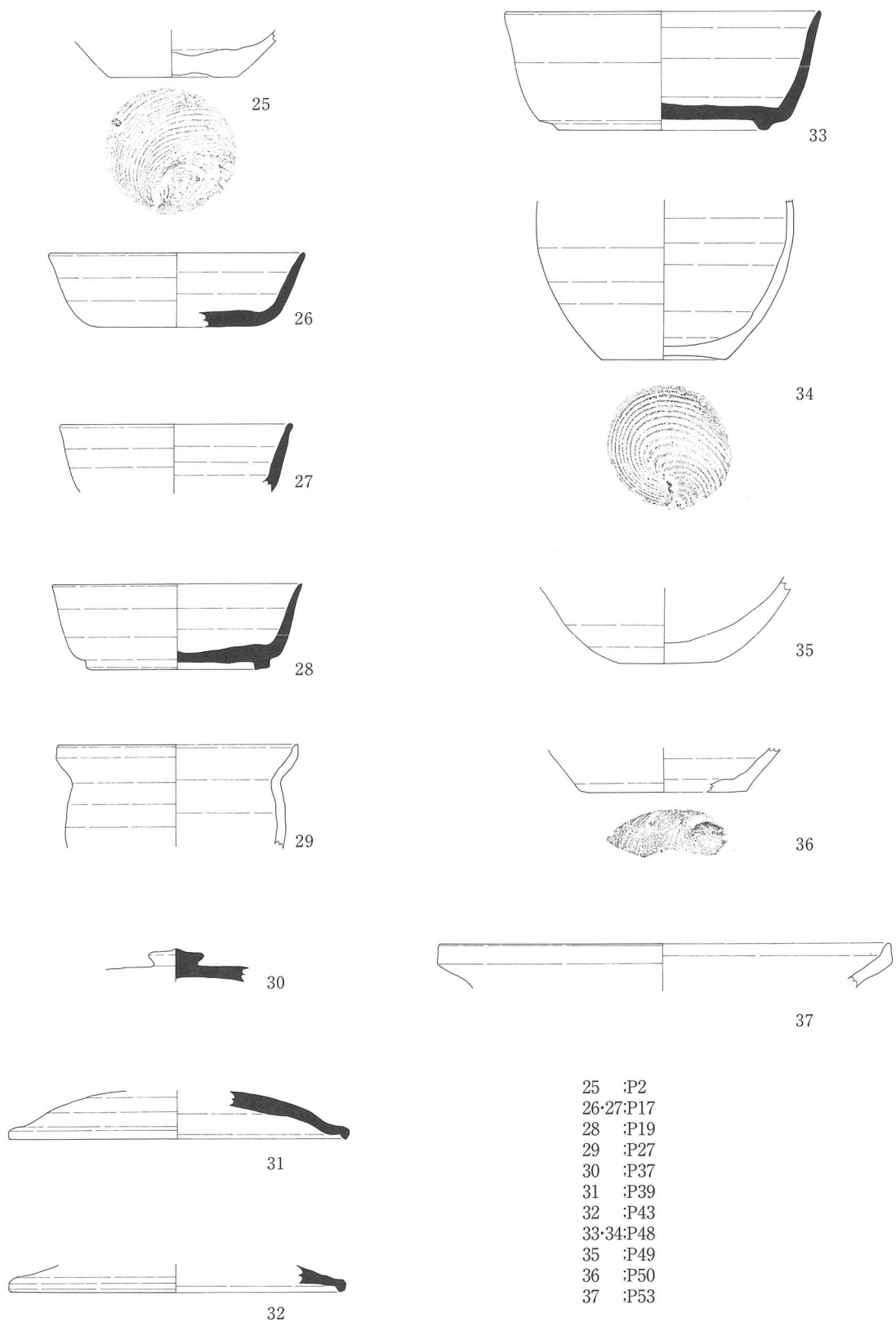


第57図 22次、33次土器・石製品実測図 (S=1/3、33-8はS=1/4)



0 10cm

第 58 图 33 次土器实测图 1 (S=1/3)



- 25 :P2
- 26-27:P17
- 28 :P19
- 29 :P27
- 30 :P37
- 31 :P39
- 32 :P43
- 33-34:P48
- 35 :P49
- 36 :P50
- 37 :P53



第 59 图 33 次土器実測图 2 (S=1/3)

第7表 土器観察表

図版番号	掲載番号	種別	器種	出土地点	口径 mm	底径 mm	器高 mm	遺存値	外面調整	内面調整	外面色調	内面色調	胎土	実測番号	備考	
1	22-1	縄文土器	深鉢	F 2 区SD11	104	104	1/3	斜位LR			10YR5/1	10YR6/4	M2, S3	M40		
	22-2	須恵器	杯蓋	F 1 区P6	118	118	27	1/2	ロクロナデ	ロクロナデ	5Y6/1	5Y6/1	M1, S3	M36		
	22-3	須恵器	杯B	F 1 区a SD3	103	76	33	1/2	ロクロナデ、底部ヘラ切り	ロクロナデ	2.5Y7/1	2.5Y7/1	M1, S2	M38		
	22-4	須恵器	杯蓋	F 2 区P11	135		1/4		ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y5/1	2.5Y5/1	M1, S3	M37		
	22-5	中世土師器	皿	F 1 区a 東側包含層	74		16	1/6	ナデ	ナデ、積痕	7.5YR7/3	7.5YR7/3	S2	M39		
	33-1	縄文土器	深鉢	SP3	206		1/5	縄文、積痕			10YR6/3	7.5YR7/4	M1, S3	M25		
	33-2	須恵器	杯A	SI1	168	134	21	小片	ロクロナデ、底面ヘラ切り	ロクロナデ	2.5Y7/2	2.5Y7/2	M1, S2	M1		
	33-3	須恵器	杯蓋	SI1	128		1/6		ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y5/1	2.5Y6/1	M1, S2	M2		
	33-4	土師器	釜	SI1	204		小片		ロクロナデ	ロクロナデ	7.5YR8/3	5YR7/6	M1, S3	M3		
	33-5	土師器	釜	SI1	211		小片		ロクロナデ	ロクロナデ	7.5Y5/4	7.5Y5/4	M2, S1	M4		
	33-6	須恵器	杯B	SI2	115	83	44	4/5	ロクロナデ、底面ヘラ切り	ロクロナデ	2.5Y6/1	2.5Y6/1	L1, M2, S3	M5		
	33-7	須恵器	杯B	SI2 P54	128		1/6		ロクロナデ、底面ヘラ切り	ロクロナデ	2.5Y6/1	2.5Y6/1	M1, S3	M6		
	33-8	石製品	砥石	SI2 P54	最大長268、幅200、厚65、重量5.3kg										M7	
	33-9	須恵器	杯B	SI3	68		1/5		ロクロナデ、底面ヘラ切り	ロクロナデ	5Y5/1	N5/0	L2, M2, S3	M8		
	33-10	須恵器	杯	SD4	105		1/8		ロクロナデ	ロクロナデ	10YR5/1	2.5Y6/1	S3	M9		
	33-11	須恵器	杯B	SD9	100		1/3		ロクロナデ、底面ヘラ切り	ロクロナデ	2.5Y6/1	5Y5/1	S3	M10		
	33-12	須恵器	杯A	SD10	155	133	26	1/6	ロクロナデ、底面ヘラ切り	ロクロナデ	10YR6/1	10YR6/1	M1, S3	M11		
	33-13	須恵器	盤	SD10	158	138	18	1/5	ロクロナデ、底面ヘラ切り	ロクロナデ	10YR7/2	10YR7/2	M1, S1	M12		
	33-14	須恵器	盤	SD10	83		1/3		ロクロナデ、底面ヘラ切り	ロクロナデ	10YR8/2	10YR8/3	M1, S3	M13		
	33-15	須恵器	杯蓋	SD11	121		21	1/4	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y6/1	2.5Y6/1	M1, S2	M14		
	33-16	須恵器	杯A	SD13	138	80	31	3/4	ロクロナデ、底面ヘラ切り	ロクロナデ	10YR7/1	5Y6/1	M2, S3	M15		
	33-17	須恵器	杯B	SD13	103		1/5		ロクロナデ、底面ヘラ切り	ロクロナデ	10YR6/1	10YR6/1	M2, S3	M16		
	33-18	須恵器	杯	SD13	127		1/8		ロクロナデ	ロクロナデ	5Y6/1	5Y6/1	M1, S3	M17		
	33-19	須恵器	杯	SD13	164		1/8		ロクロナデ	ロクロナデ	N5/0	7.5Y6/1	M1, S3	M18		
	33-20	須恵器	杯蓋	SD14	143		小片		ロクロナデ	ロクロナデ	5Y6/1	5Y6/1	M2, S3	M19		
	33-21	土師器	釜	SX2	242		小片		ロクロナデ	ロクロナデ	10YR5/3	10YR3/2	M1, S2	M20		
	33-22	須恵器	杯B	SX14	80		1/8		ロクロナデ、底面ヘラ切り	ロクロナデ	2.5Y6/2	2.5Y6/2	M1, S3	M21		
	33-23	須恵器	杯B	SX14	122	88	41	1/5	ロクロナデ、底面ヘラ切り	ロクロナデ	10YR6/3	10YR8/2	M1, S3	M22		
	33-24	須恵器	杯蓋	SX14	121		小片		ロクロナデ	ロクロナデ	5Y6/1	5Y6/1	S3	M23		
	33-25	土師器	小釜	P2	62		完		ロクロナデ	ロクロナデ	7.5YR6/3	7.5YR6/3	L1, M2, S2	M24		
	33-26	須恵器	杯A	P17	124	79	36	1/4	ロクロナデ、底面糸切り	ロクロナデ	5Y6/1	5Y6/1	M1, S2	M26		
	33-27	須恵器	杯	P17	112		1/8		ロクロナデ、底面ヘラ切り	ロクロナデ	5Y6/1	5Y6/1	L1, M1, S2	M27		
	33-28	須恵器	杯B	P19	120	88	42	1/4	ロクロナデ、底面ヘラ切り	ロクロナデ	2.5Y6/1	2.5Y6/1	M1, S3	M28		
	33-29	土師器	小釜	P27	116		小片		ロクロナデ	ロクロナデ	5YR7/6	10YR7/3	M1, S2	M29		
	33-30	須恵器	杯蓋	P37			完		ロクロナデ	ロクロナデ	5Y7/1	2.5Y6/1	M1, S3	M30		
	33-31	須恵器	杯蓋	P39	166		小片		ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y7/1	10YR6/1	L1, M2, S2	M31		
	33-32	須恵器	杯蓋	P43	164		小片		ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y6/1	2.5Y6/1	S3	M32		
33-33	須恵器	杯B	P48	153	102	58	1/2	ロクロナデ、底面ヘラ切り	ロクロナデ	2.5Y7/1	2.5Y7/1	L1, M1, S2	M33			
33-34	土師器	小釜	P48	60		完		ロクロナデ、底面糸切り	ロクロナデ	7.5YR6/4	7.5YR6/4	M2, S2	M34			
33-35	土師器	釜	P49	49		完		ロクロナデ	ロクロナデ	10YR6/4	10YR7/2	L1, M2, S2	M35			
33-36	土師器	釜	P50	80		1/5		ロクロナデ、底面糸切り	ロクロナデ	7.5YR6/4	7.5YR8/3	M2, S2	M36			
33-37	土師器	釜	P53	220		小片		ロクロナデ	ロクロナデ	7.5YR7/3	7.5YR7/3	M1, S2	M37			

注記 22-00は第22次調査を、33-00は第33次調査を表わす

法量の数は遺存値の項目に「完」とない場合はすべて復元径である

遺存値に示した数は、実測図に表された範囲内での遺存値であり、器形全体に対するものではない

調整 「ヨコナデケスリ」であれば、ヨコナデを行ったのちケスリを行っていることを示す

併記の場合は同一器面で調整が異なる場所があることを示す

色調 「新装 標準土色帳」に準拠

胎土 アルファベットは鉱物粒子の大きさ。S (径1 mm以下) M (径1 ~ 3 mm) L (径3 mm以上)

須恵器 数は鉱物粒子の量。0 (ほとんど含まない) 1 (少量含む) 2 (やや多い) 3 (多い)

須恵器・土師器の器種名は小松市教育委員会2006~2010『顔見町遺跡I~V』を参考にした

## 第8章 第30次（平成19年度）調査

### 第1節 調査の経過

#### 第1項 調査に至る経緯

本遺跡発掘調査業務は、北西部土地地区画整理地区72街区における開発行為を調査原因とする。平成19年3月、野々市町北西部土地地区画整理組合（以下、北西部組合と呼称する。）から野々市町教育委員会（以下、町教委と呼称する。）に、上記地区内における家電量販店の店舗増築の計画打診があった。北西部土地地区画整理地区72街区は、全域が埋蔵文化財包蔵地であったため、直ちに、組合と町教委との間で協議を行った。協議をした結果、本開発地の予定地である家電量販店の店舗増築、約1,150㎡分は、埋蔵文化財に影響を及ぼすと予測されることから、発掘調査を実施することで合意した。当該地における増築工事の着手については、平成19年6月から開始したいという計画であった。そのため、平成19年4月から調査を開始し、工事の実施に影響を及ぼさないように配慮することとした。

町教委は、同年3月20日付で、石川県教育委員会（以下、県教委と呼称する。）に埋蔵文化財包蔵地における土木工事取り扱いを提出し、同月同日に県教委から町教委に発掘調査実施の旨の通知が届いた。これを受けて、町教委は本開発予定地の埋蔵文化財発掘調査の作業に着手していった。

#### 第2項 発掘作業の経過

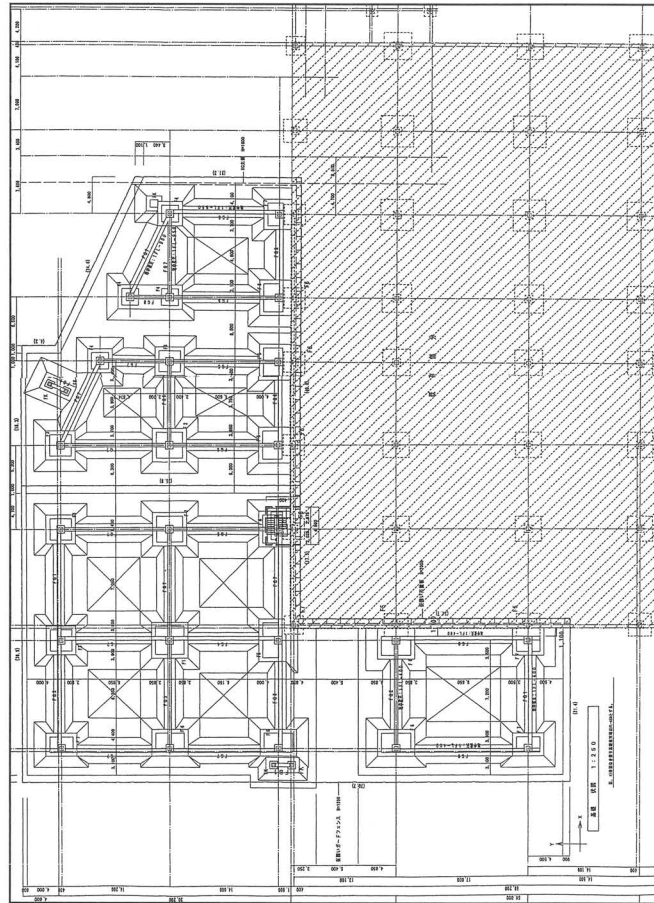
平成19年4月2日、北西部組合は、本開発予定地における埋蔵文化財発掘調査を野々市町に依頼した。同月同日、野々市町は埋蔵文化財発掘調査実施計画書を北西部組合に提出し、その計画書に基づいて、野々市町と北西部組合との間で委託契約を締結した。

発掘調査は家電量販店舗の隣接地で行われるため、残土置場など諸々の制限があった。そのため、調査箇所を大きく2回に分けて実施することとし、Ⅱ及びⅢ区を前半に、Ⅰ区を後半に行った。前半のⅡ、Ⅲ区の調査は、5月7日より大型掘削機による表土の除去作業からはじめた。重機による掘削は遺構面手前までとしたが、家電販売店舗に取りつく水道管や電気ケーブルの配線が埋設しており、それらを回避しながらの作業であったため困難を極めた。また、当初の店舗造成工事などによる攪乱箇所も所々見られた。重機掘削は5月21日に完了した。人力による遺構確認作業は重機掘削作業と併行するように5月10日より開始した。作業は南東のⅢ区から始めた。遺構面の検出を実施した後、遺構の地点を明確にするため遺構略図を作成し、それと同時に遺構の掘削作業を行った。主要遺構や遺物が出土したものについては、記録をしてから完掘した。Ⅲ区作業完了後はすぐに隣地のⅡ区の作業にとりかかった。Ⅱ・Ⅲ区の遺構完掘後は、清掃作業を実施し、5月24日に空中写真測量及び個別遺構写真を撮影して調査を終えた。Ⅱ・Ⅲ区調査終了後は直ちにⅠ区の発掘作業にとりかかった。6月4日より、Ⅰ区での重機による遺構面までの掘削作業を始めた。6月11日から人力による遺構の確認及び掘削を行い、同時併行で主要遺構の記録の作図を実施した。これらの作業が終わった後、清掃作業を行ってから、6月28日空中写真測量及び個別遺構写真を撮影して、翌29日に調査をすべて終えた。

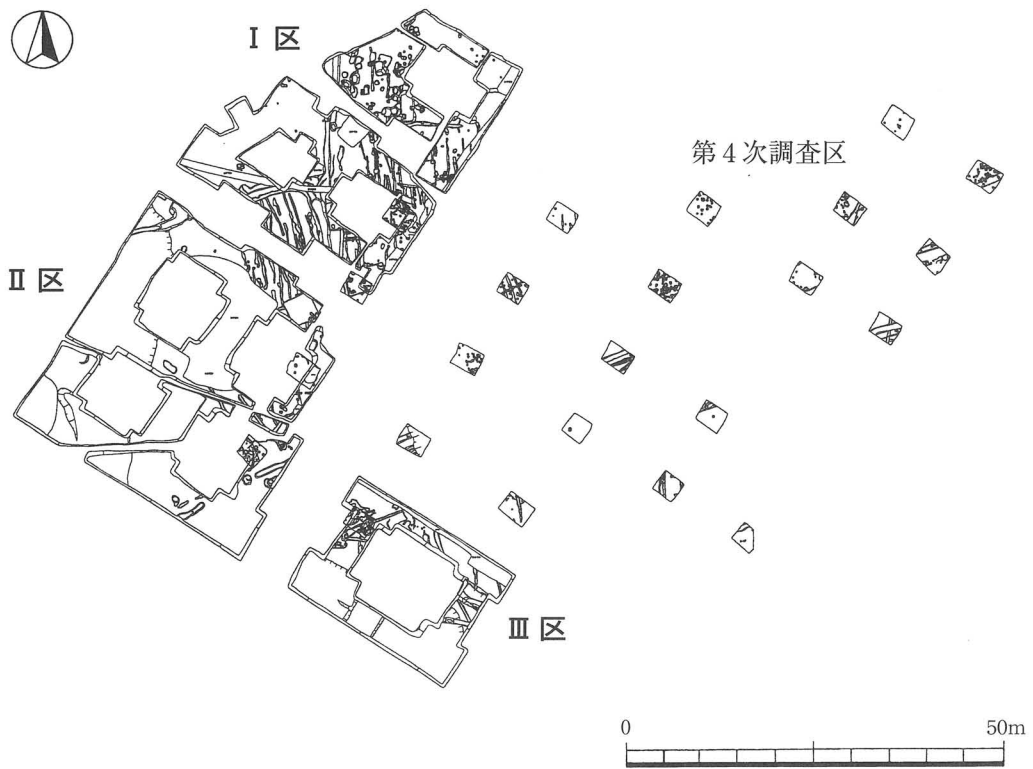
整理作業については、野々市市ふるさと歴史館内にある調査整理室で実施した。作業手順は、まず出土した遺物を水で洗浄し乾燥させ、乾燥した遺物に遺跡名や出土した地点などを注記した。注記後一部の遺物を実測し、この遺物実測図や現地で表記した遺構実測図を製図トレースした。これらの作業は、平成21年10月1日から平成22年1月29日まで行われた。

これらの作業完了後、平成24年2月8日から同年2月10日にかけて遺物の写真を撮影し、その後は、調査担当者が原稿執筆、図面・写真の編集を行い、報告書を刊行した。

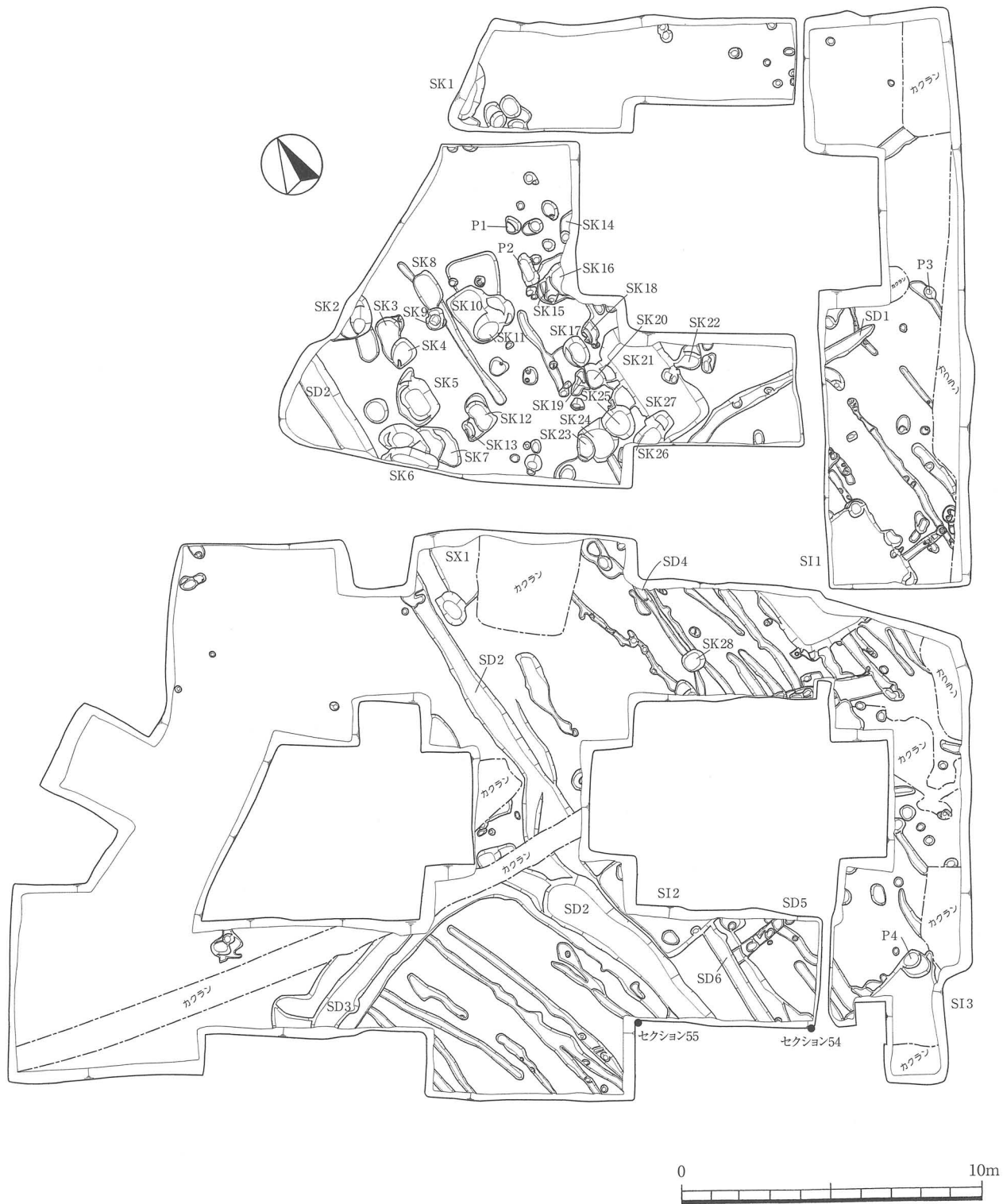




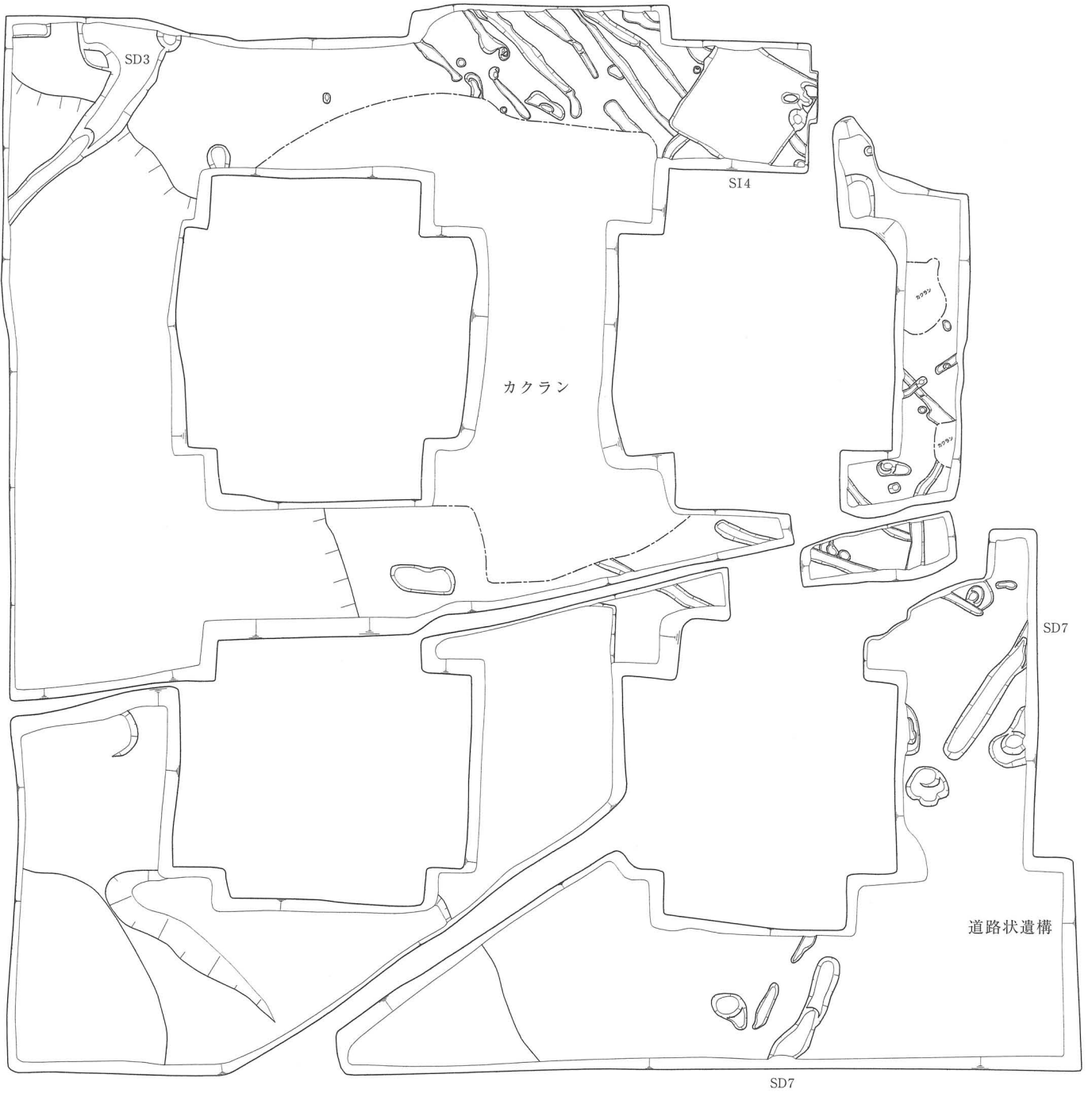
第 60 図 工事計画図 (S=1/1000)



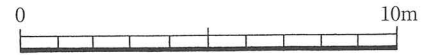
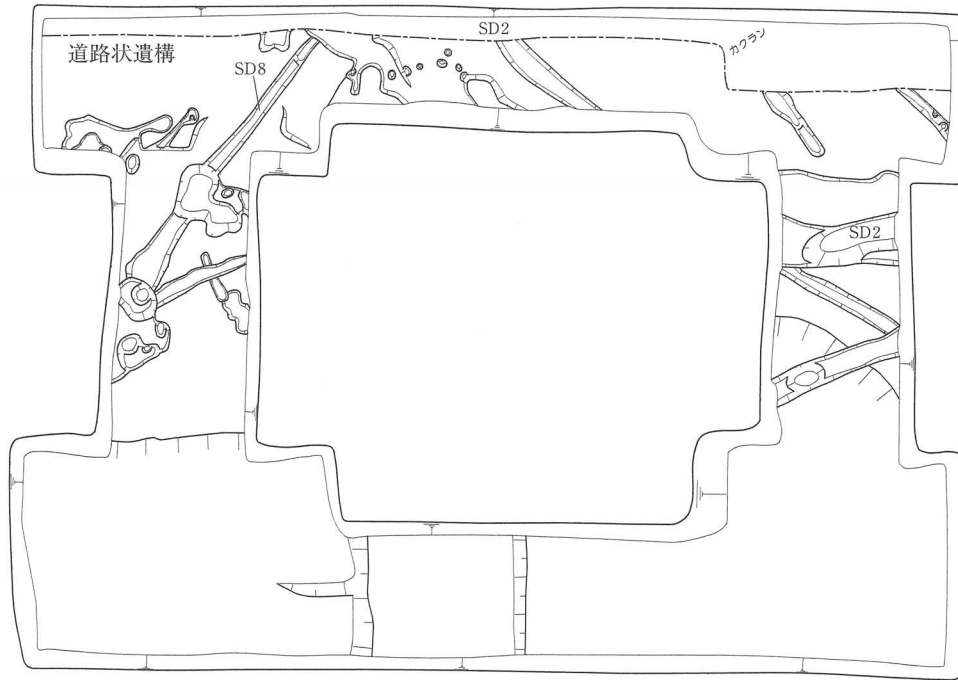
第 61 図 調査区全体図 (S=1/1000)



第 62 図 I 区遺構全体図 (S=1/200)



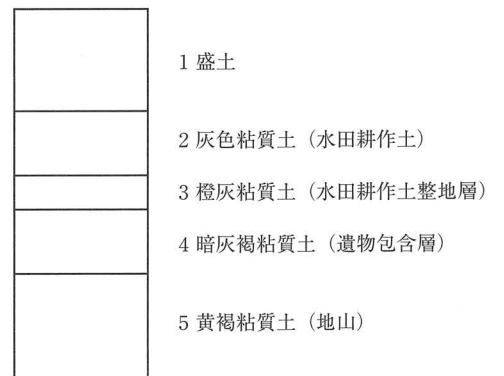
第 63 図 II 区遺構全体図 (S=1/200)



第 64 図 III区遺構全体図 (S=1/200)

## 第 2 節 層序

層序については、第 65 図の基本土層図を基に説明していく。1 は家電販売店舗造成に伴う盛土である。2 は店舗造成前まで行われていた灰色粘質土をベースとした水田耕作土である。3 の橙灰粘質土は上記耕作土の整地層にあたる。4 の暗灰褐粘質土は遺物包含層で、中世の遺構面にもあたる。その下の 5 黄褐粘質土は地山面である。



第 65 図 基本土層図

### 第3節 遺構

#### S I 1 (第66図)

I区西方に位置する。方位はN7°Wで、パイプ管理設などから全体の3分の1は確認できていない。東西460cm、南北360cm、深さ50cm前後を測る。床には硬化面となる貼床を施す。カマドは検出できなかったが、一部焼土塊が散在していた。竪穴内部では柱穴を確認することができなかったが、北東角や東西面の壁溝際には柱穴に想定できそうな穴を確認することができた。これらの穴の大きさは長径30～60cm、深さは30～50cmを測る。

#### S I 2 (第67図)

I区南部で確認した。方位はN9°Wで、東半分以上は調査区外となる。東西210cm以上、南北370cm、深さ25～30cmを測る。床には硬化面となる貼床が施されていた。カマドは確認できなかった。竪穴内部には不定形な穴を検出したが、柱穴とは言い難い。

#### S I 3 (第67図)

I区南東隅で見つかった竪穴建物である。方位はN20°Wで、調査区の隅での発見のため北東部の一角でしか確認できていない。東西330cm、南北140cm以上、深さ40cm以上を測る。床には貼床が敷かれていた。カマドは確認していない。北東角には長辺64cm、短辺46cm、深さ54cmのP4を検出しており、柱穴の可能性をもつ。また、このP4からは、第33図12～14、16、17の土師器甕が出土している。

#### S I 4 (第68、69図)

II区北東隅で確認した。方位はN24°Wで、北と南の一部は調査区外となる。規模は一辺約380cmの方形プランで、深さは20cm前後である。床は全域に貼床を施している。柱穴は確認していない。東コーナーではカマドを確認した。カマドは袖部にあたる盛土の一部と焼土塊、土師器甕が散在しており、明瞭な構造を確認することはできなかった。人為的に破壊した可能性もある。カマド中央から竪穴外へ向けて細い溝状遺構が見られる。この溝の幅は約30cm、深さは約15cmで、煙道と考えられる。また、竪穴内のカマド脇には60×70cm、深さ35cmの小穴が存在する。

#### S K 1 (第69図)

I区北端で確認した楕円形の土坑である。北側半分以上は調査区外となり、全容は明らかでない。長辺196cm、短辺230cm以上、深さ125cmを測る。近世後半の陶磁器や近代初頭の瓦などが見つかり、廃棄土坑と考えられる。

#### S K 2 (第69図)

I区中央部北端で確認した。隅丸長方形プランをしていると思われるが、北側半分は調査区外となるため全容はわからない。北西—南東を長辺とし145cm、短辺は125cmを測る。穴内には、3カ所のテラスが認められ、それぞれ地山面から15cm、22cm、47cmの深さをもつ。東端に最深部の穴が設けられており57cmを測る。覆土からは複数の人歯や人骨片が見つかった。

#### S K 3 (第70図)

I区S K 2の南東隣に位置する。南北に長い隅丸長方形のプランをしている。南側はS K 4が存在し、全体の様相はわからない。南北長135cm以上、東西長約70cm、深さ約30cmである。覆土からは炭塊や炭粒が多く見つかった。

#### S K 4 (第70図)

I区S K 3の南に接する土坑である。やや歪ながら東西に長い隅丸長方形のプランをしている。東西長90cm、南北長75cm、深さ18cmを測る。

#### S K 5 (第70図)

I区S K 4の真南に位置する。南北に長い隅丸長方形プランの土坑である。南北長195cm、東西長100cm、深さ約70cmである。穴内の中央部、灰褐粘質土中から鉄鍋が見つかった。鉄鍋は完形品で伏せた状態で出土しており、鍋の中からは人頭部にあたる骨を検出した。

#### S K 6 (第70図)

I区S K 5の南西で見つかった土坑である。北西-南東に長い楕円形プランであるが、土坑全体の半分は調査区外となるため全容は不明である。長辺172cm、短辺54cm以上、深さ56cmを測る。

#### S K 7 (第70図)

I区S K 6に近接する土坑である。南北に長い不定形な形状をしており、S K 6とその間に別の楕円形土坑と重複している。土坑の大きさは南北長183cm、東西長100cm以上、内部には1段のテラスが認められる。深さは最深部で約30cm、テラスが14cmである。覆土から炭化粒と人骨片が多く見つかった。

#### S K 8 (第70図)

I区S K 3、4の東隣にある土坑である。若干歪ながら南北に長い隅丸長方形をしている。南端にはS K 9が接している。南北長124cm、東西長78cm、深さ15cmを測る。覆土からは炭化物や焼土片、人骨片が多く発見されている。

#### S K 9 (第70図)

I区S K 8の南隣にある土坑である。北東-南西が長い歪な方形プランをしている。長辺74cm、短辺50cm、深さ20cmである。穴のほぼ中央、5cm程掘り下がったところから人頭大の石1個と人骨が見つかった。

#### S K 10 (第71図)

I区S K 8、9の南東方に隣接する。南北に長い隅丸長方形のプランをしているが、南端はS K 11が掘られており全貌は明らかでない。南北長195cm、東西長130cm、深さ約25cmを測る。覆土から人骨が出土している。

#### S K 11 (第71図)

I区S K 10の南に接する土坑である。東西が長い楕円形プランをしている。東西長120cm、南北長84cm、深さ87cmを測る。覆土には炭化粒が多く含んでいる。

#### S K 12 (第71図)

I区S K 5の南東側に位置する。南北に長い隅丸長方形プランの土坑である。南北長104cm、東西長62cm、深さ20cmを測る。覆土から炭化粒と人骨片を確認した。

#### S K 13 (第71図)

I区S K 12の西隣に接する。隅丸方形と思われるが、S K 12と切りあっていることから全体プランの様相はわからない。南北長68cm、東西長42cm以上、深さ13cmである。

#### S K 14 (第71図)

I区S K 15、16の北東隣に位置する。東側半分は調査区外となるため全体プランはわからない。長辺225cm、短辺62cm以上、深さ5cmである。南端には直径約80cm、深さ54cmの小穴があり、中から複数の人頭大の石が人為的に入れたような状態で見つかった。石については加工痕跡こそなかったが、一部に意図的に焼かれた跡が認められた。

#### S K 15 (第71図)

I区S K 11の東隣に位置する。後述するS K 16と接しているため、明確なプランを抽出することはできない。南北長98cm、東西長62cm以上、深さ23cmである。覆土内からは炭化粒を確認した。

#### S K 16 (第71図)

I区S K 15の東に接する状態で見つかった土坑である。東側ほとんどが調査区外となるため、全容はわからない。形状は隅丸方形と思われる。東西50cm以上、南北124cm、深さ49cmを測る。中からは炭化物のほかに、人骨片や人歯が見つかった。

#### S K 17 (第71図)

I区S K 15の南隣に位置する。南北に長い楕円形プランをしている。南北長102cm、東西長88cm、穴内には5cmほどの深さをもったテラスが認められる。最深部は25cm、覆土内には炭化粒と人骨片

が見つかっている。

S K 18 (第 71 図)

I 区 S K 17 の東隣で確認した南北に長い不定形な土坑である。東西長 50cm、南北長 92cm、深さ 15cm を測り、中から炭化物と人骨片を検出した。

S K 19 (第 71 図)

I 区 S K 17 の南西隅で認められた東西に長い不定形な土坑である。東西長 94cm、南北長 38cm、穴内には深さ 15cm のテラスが認められる。最深部は 30cm を測る。

S K 20 (第 71 図)

I 区 S K 19 の東に隣接する。南北が長い楕円形プラン土坑である。東西長 60cm、南北長 88cm、深さ 65cm を測る。

S K 21 (第 72 図)

I 区 S K 20、25、26、27 の東隣に位置する南北に長い大型隅丸長方形の土坑である。東西長 184cm、南北長 420cm、深さ 40～50cm を測る。覆土には大量の炭化材、炭化粒、人骨片が散在するように入っていた。また、土層断面から最低 2 回の掘り直しがあったと考えられる。なお、南西隅には S K 26、27 と切り合っているが、前後関係はわからなかった。

S K 22 (第 72 図)

I 区 S K 21 の東隣にある。北西－南東が長い楕円形の形状をしている。長辺 76cm、短辺 60cm、深さ 20cm 前後を測る。覆土から炭化粒と人骨片を確認している。

S K 23 (第 72 図)

I 区南端で確認した土坑である。南北に長い楕円形プランと思われるが、形状は若干歪である。東西長 53cm、南北長 90cm、深さ 32cm を測る。

S K 24 (第 72、73 図)

I 区 S K 23 の東隣に接する。本土坑の東方には S K 25 が接しているため、全体のプランはわからないが、隅丸方形と想定したい。東西長推定 104cm、南北長 125cm、深さ 62cm を測る。土層断面から S K 23 及び S K 25 よりも古いことがわかった。覆土からは炭化粒及び人骨片を検出している。また、穴内の北東コーナー付近で第 35 図 39 の瀬戸焼天目茶碗の完形品が出土した。天目茶碗は底から 7cm 上の箇所裏返し状態で見つかった。

S K 25 (第 72、73 図)

I 区 S K 24 の東隣に位置する。隅丸の方形プランと考えられるが、上場のプランが丸いため円形にも見える。東西長 100cm、南北長 110cm、深さ 60cm 前後を測る。中からは炭化粒と人骨片のほかに、人頭大の自然石数個と第 39 図 77 の鉄鍋 1 点を検出した。鉄鍋は伏せられた状態で、底から 20cm ほど上から見つかった。石は鉄鍋の横を巡るような状態で出土した。また、土坑南端からは、第 40 図 87～92 の寛永通宝 6 点が重なって見つかっている。出土地点は穴底から 4cm ほど上がったところである。

S K 26 (第 72、73 図)

I 区 S K 25 の南隣にある土坑である。東西に長い隅丸長方形のプランと思われるが、南西側が調査区外となるため全容はわからない。東西長 88cm 以上、南北長推定 80cm、深さ 83cm を測る。覆土には炭化粒と人骨片、複数の人頭大の自然石が見つかったほかに、第 35 図 38 の瀬戸焼丸碗と第 37 図 67 の石製行火の完形品を確認することができた。両遺物は穴底近くから出土しており、行火は開口部を上の方に瀬戸焼丸碗は伏せた状態で見つかった。

S K 27 (第 72 図)

I 区 S K 21、26 と接するようにして見つかった土坑である。隅丸方形のプランと考えられるが、上記土坑と切り合っているため詳細はわからない。なお、両遺構との前後関係も不明である。東西長 80cm、南北長 73cm、深さ 76cm を測る。覆土から炭化粒と人骨片を確認している。

#### S K 28 (第 73 図)

Ⅱ区北端、S I 1の西側で確認した土坑である。東西に長い隅丸長方形プランであるが、楕円形にも見える。東西長 75cm、南北長 65cm、深さ 48cm を測る。

#### S D 1 (第 62 図)

I区中央部からやや北西寄りで確認した東西方向の溝である。前述した土坑群の南端に位置する。長さ 740cm、最大幅 60cm、深さ 5～10cm である。

#### S D 2 (第 62、64、73 図)

I区のはほぼ真ん中を南北に縦断し、Ⅲ区の東側でも確認できた溝である。長さは約 76 m、溝幅はI区が 65～100cm、Ⅲ区が 45～65cm であるが、I区のS D 3と交差する箇所では幅 180cm と大きくなる。深さはI区が 20～30cm、Ⅲ区が 10～20cm で、S D 3と交差する付近では 50～70cm と深くなる。近世以降の陶磁器が大量に出土した。

#### S D 3 (第 62、63 図)

I区中央のS D 2から西方に枝分かれし、Ⅱ区北西端でも確認できた東西溝である。全長 24 m、幅は 60～90cm、深さ 15～35cm、S D 2よりは少量であるが、近世陶磁器が出土している。

#### S D 4 (第 62 図)

I区東側とⅡ区北東側で検出した畝溝の中のひとつである。畝溝はほぼ真北に近い方位をとり、時期は古代と考えられ、土層断面から前述した竪穴建物跡よりも古いことがわかった。S D 4はI区のはほぼ中央に位置する。長さは 440cm、幅は 20cm 前後、深さは 6～11cm である。

#### S D 5 (第 62 図)

I区東南部で確認した東西溝である。長さは 110cm、幅は 40cm 前後、深さ 5～7cm で、直径 30cm、深さ 10cm 前後の小ピット 3 基が溝底で検出した。

#### S D 6 (第 62 図)

I区東南部で確認した南北溝である。前述したS D 5とは切り合っており、S D 6の方が新しい。長さは 380cm、幅約 50cm、深さ 7～13cm を測る。

#### S D 7 (第 63 図)

Ⅱ区南東隅で確認した。北東-南西に方位をとり、南西端部は後世に大きく削平を受けていたことから、一部途切れた状態となっている。長さ約 500cm、幅約 78cm、深さ 27～44cm を測る。

#### S D 8 (第 64 図)

Ⅲ区北西隅で見つかった溝である。後世に掘られた複数の穴に切られており全容は明らかでない。長さ約 800cm、幅 24～64cm、深さ 25～35cm である。前述したS D 7とS D 8は古代北陸道跡の測溝にあたる。

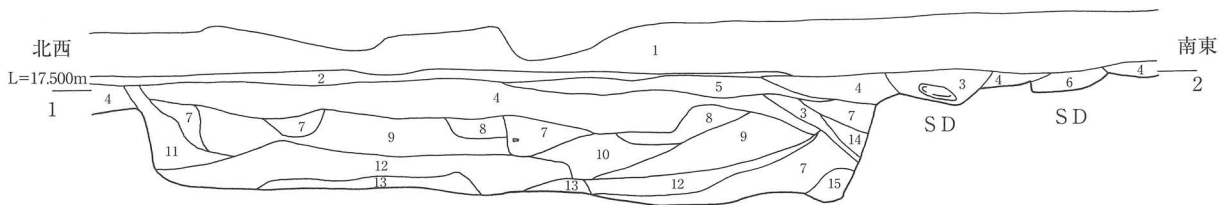
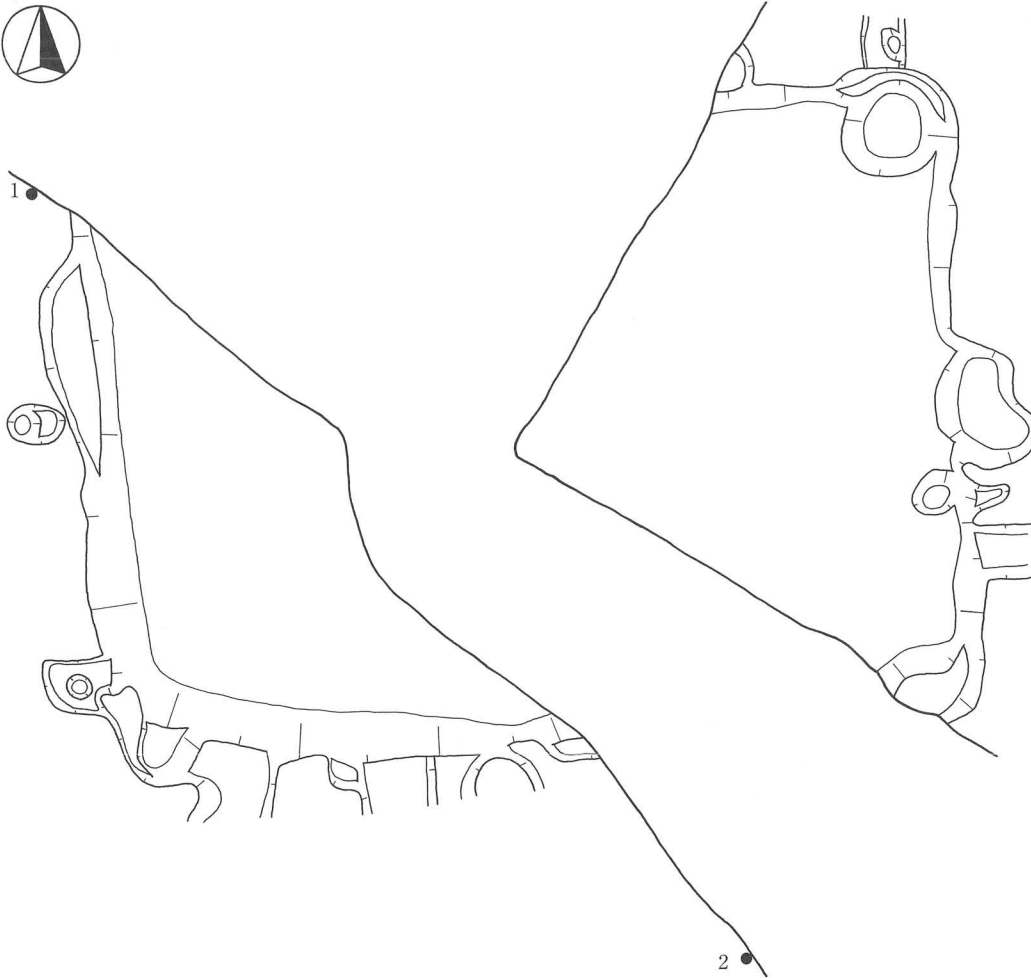
#### 道路状遺構 (第 63、64 図)

Ⅱ区南東隅とⅢ区北西隅にまたがる状態で確認された。本調査区の北東方で行われた第 9 次調査、南西方で実施された第 5 次、第 21 次調査で見つかった古代北陸道跡と規模、方位などが一致することから、本遺構も古代北陸道跡と推定した。前述のS D 7は路面北側、S D 8は路面南側の側溝にあたる。路面の幅は約 10.5 m、Ⅲ区の一部から貼床状の硬化面を検出することができたが、Ⅱ区は後世の削平を受けており、道路硬化面は確認できなかった。

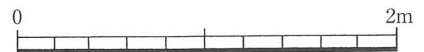
#### S X 1 (第 62 図)

I区中央部やや北寄りに位置し、S D 2に隣接する。本遺構の南西端には土坑が存在し、東側は後世の攪乱、北側は調査区外となり、全体のプランは方形の竪穴状遺構のようになるかもしれないが判然としない。南北長 223cm 以上、東西長 90cm 以上、深さ 15cm 前後である。中から第 38 図 74 の黒基石が見つかった。



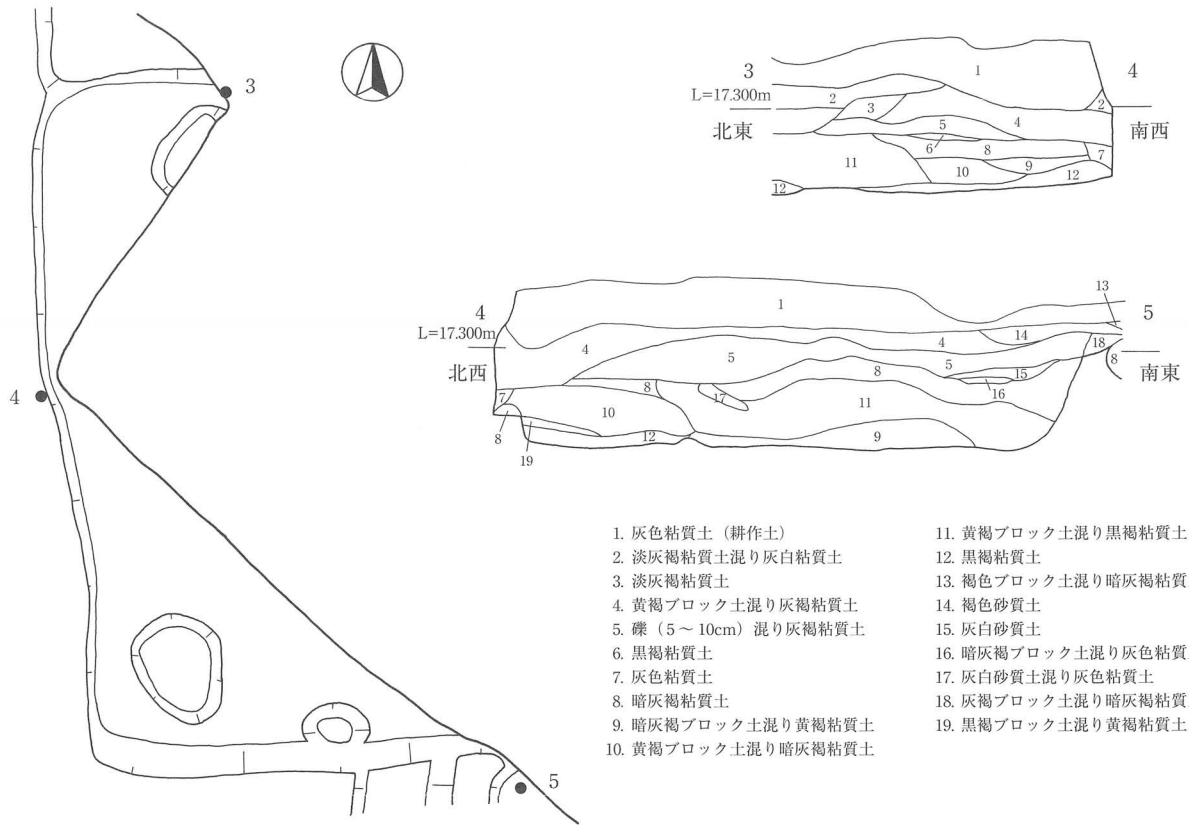


- |                  |                                    |                      |
|------------------|------------------------------------|----------------------|
| 1. 灰色粘質土         | 6. 暗黄褐ブロック土混り暗灰褐粘質土                | 11. 黒褐粘質土            |
| 2. 褐灰粘質土         | 7. 濃暗灰褐粘質土                         | 12. 灰色及び黄褐粘質土混り黒褐粘質土 |
| 3. 黄褐粘質土混り暗灰褐粘質土 | 8. 黄褐及び黒褐粘質土混り暗灰褐粘質土               | 13. 灰褐粘質土            |
| 4. 暗灰褐粘質土        | 9. 黄褐粘質土混り灰褐粘質土                    | 14. 黄褐ブロック土混り灰褐粘質土   |
| 5. 暗褐粘質土 (包含層)   | 10. 黄褐粘質土混り灰褐粘質土<br>(9層よりも灰褐粘質土暗め) | 15. 暗灰褐ブロック土混り黄褐粘質土  |



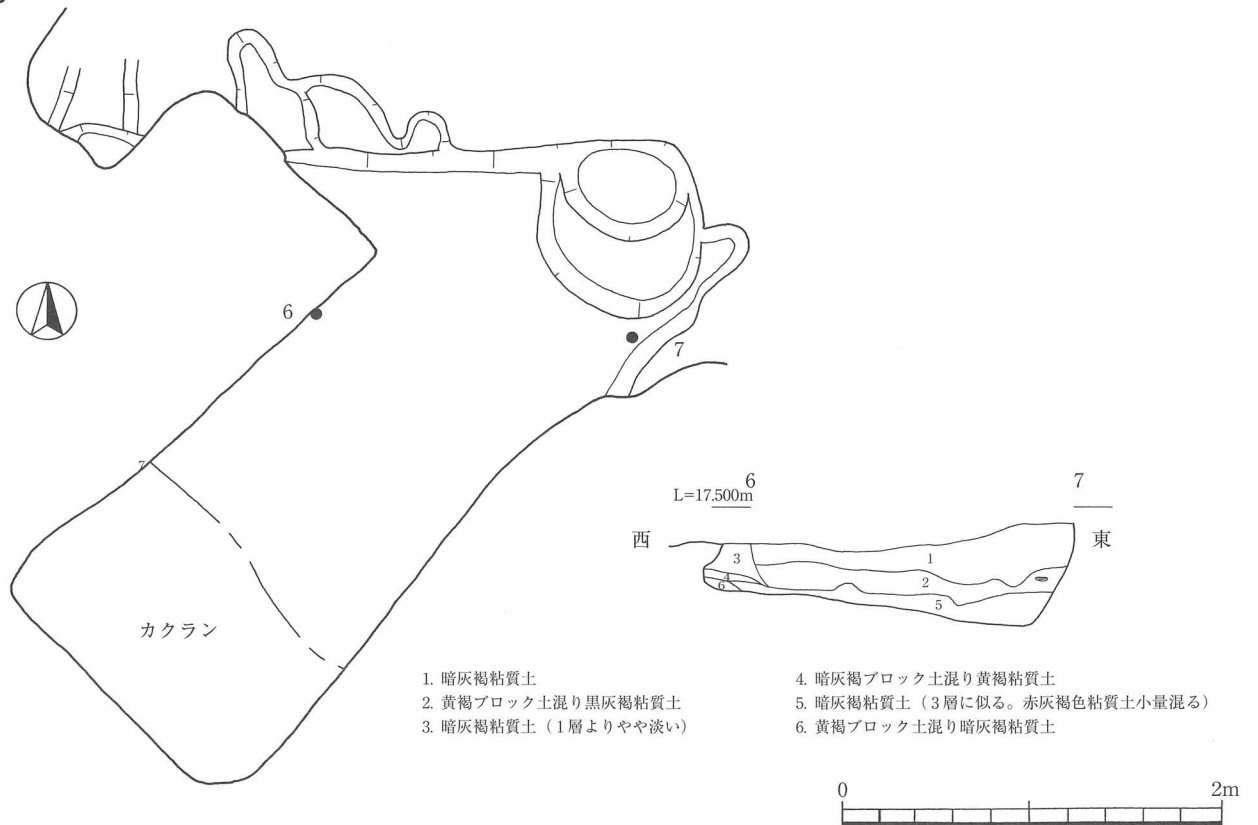
第 66 図 SI1 遺構図・土層断面図 (S=1/40)

SI2



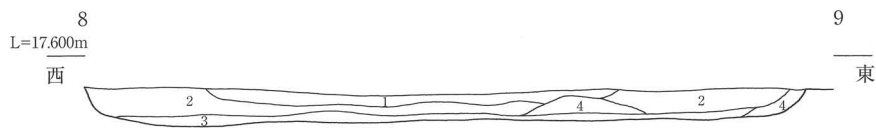
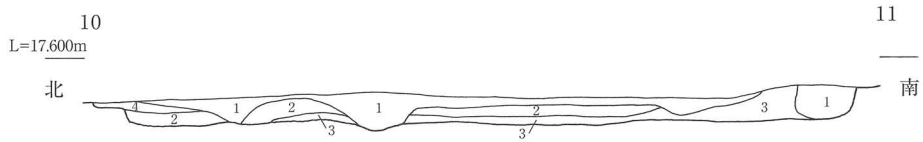
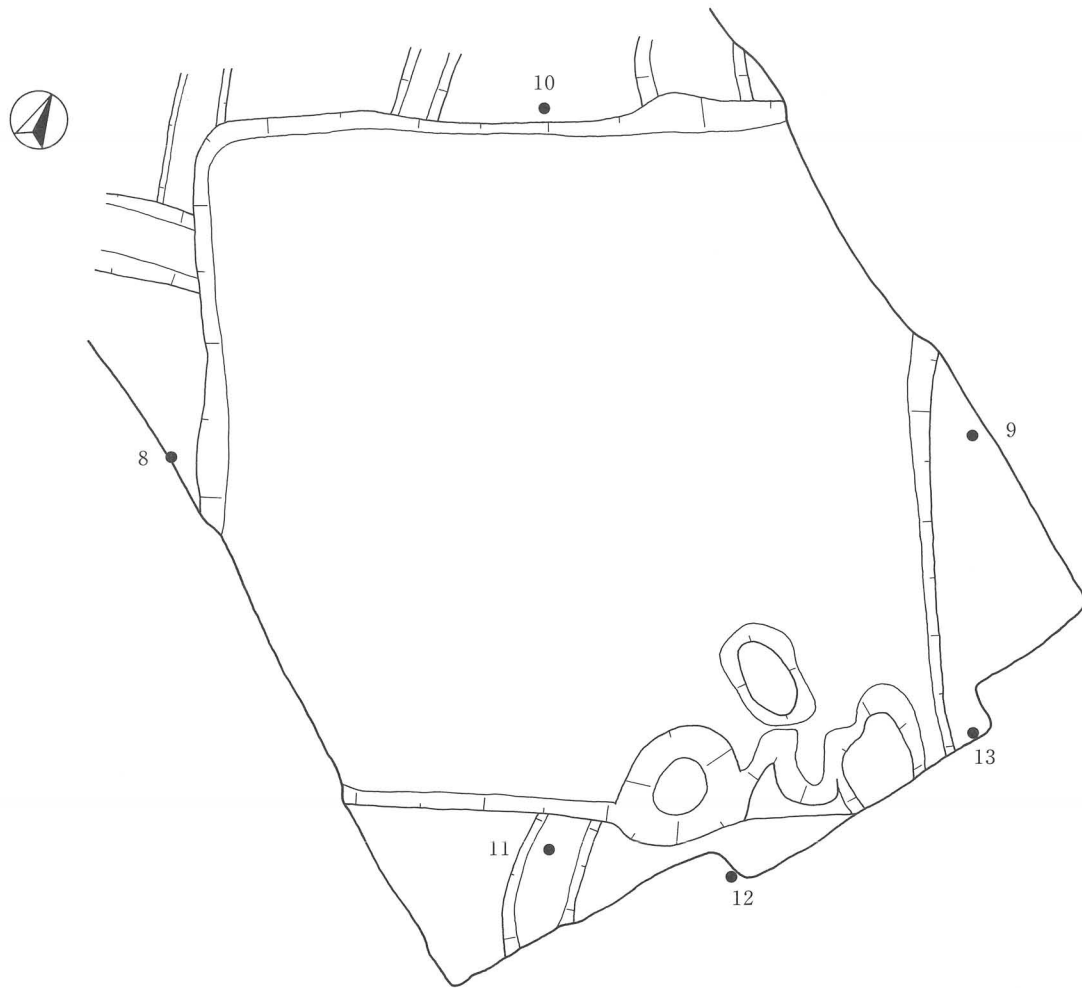
- |                       |                     |
|-----------------------|---------------------|
| 1. 灰色粘質土 (耕作土)        | 11. 黄褐ブロック土混り黒褐粘質土  |
| 2. 淡灰褐粘質土混り灰白粘質土      | 12. 黒褐粘質土           |
| 3. 淡灰褐粘質土             | 13. 褐色ブロック土混り暗灰褐粘質土 |
| 4. 黄褐ブロック土混り灰褐粘質土     | 14. 褐色砂質土           |
| 5. 礫 (5~10cm) 混り灰褐粘質土 | 15. 灰白砂質土           |
| 6. 黒褐粘質土              | 16. 暗灰褐ブロック土混り灰色粘質土 |
| 7. 灰色粘質土              | 17. 灰白砂質土混り灰色粘質土    |
| 8. 暗灰褐粘質土             | 18. 灰褐ブロック土混り暗灰褐粘質土 |
| 9. 暗灰褐ブロック土混り黄褐粘質土    | 19. 黒褐ブロック土混り黄褐粘質土  |
| 10. 黄褐ブロック土混り暗灰褐粘質土   |                     |

SI3



- |                      |                               |
|----------------------|-------------------------------|
| 1. 暗灰褐粘質土            | 4. 暗灰褐ブロック土混り黄褐粘質土            |
| 2. 黄褐ブロック土混り黒灰褐粘質土   | 5. 暗灰褐粘質土 (3層に似る。赤灰褐色粘質土少量混る) |
| 3. 暗灰褐粘質土 (1層よりやや淡い) | 6. 黄褐ブロック土混り暗灰褐粘質土            |

第 67 図 SI2、SI3 遺構図・土層断面図 (S=1/40)

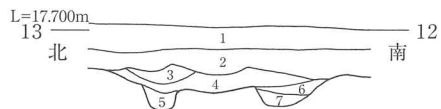
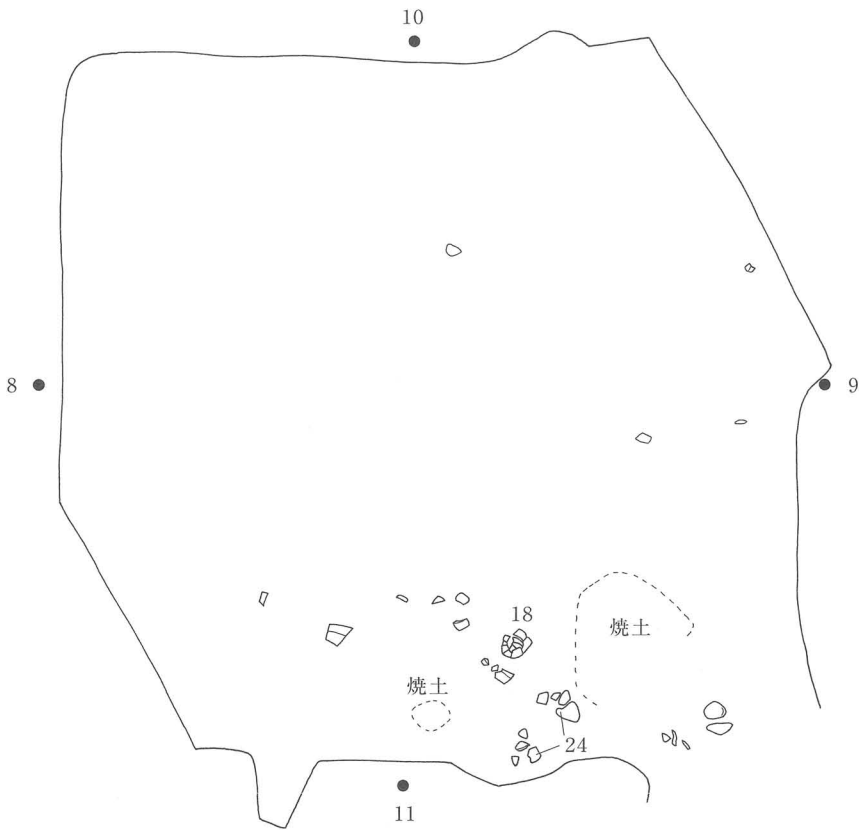


- 1. 暗灰褐粘質土
- 2. 黄褐ブロック土混り灰褐粘質土
- 3. 灰褐粘質土
- 4. 黒褐粘質土



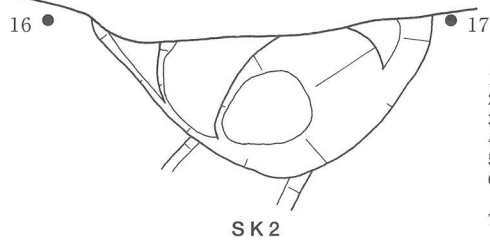
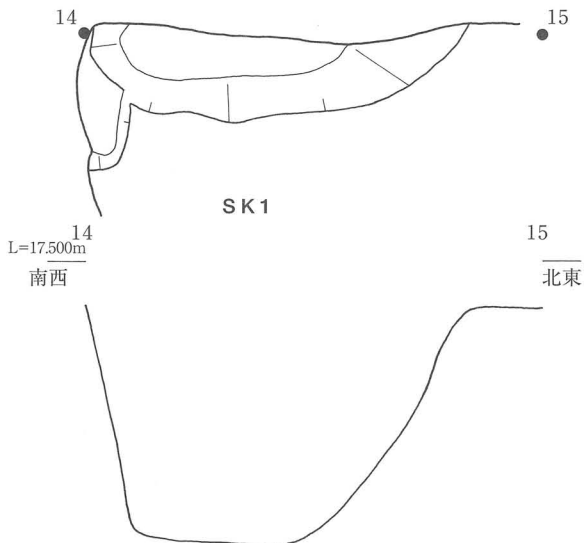
第 68 図 SI4 遺構図・土層断面図 (S=1/40)

SI4



- 1. 耕土、灰色粘質土
- 2. 包含層、暗灰褐粘質土
- 3. 暗灰褐粘質土 (2層よりも少し淡い)
- 4. 黄褐ブロック土混り暗灰褐粘質土 (カマド覆土)
- 5. 黄褐ブロック土混り灰褐粘質土 (カマド覆土)
- 6. 炭化物混り赤黒粘質土 (カマド煙道部)
- 7. 暗赤褐色粘質土 (カマド煙道部)

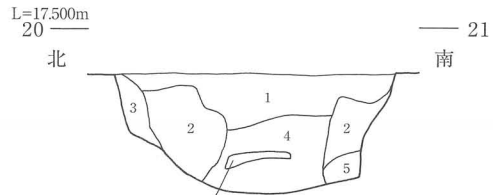
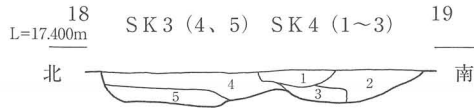
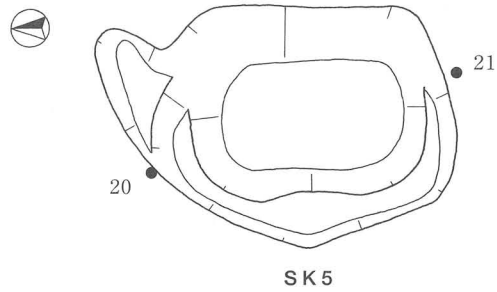
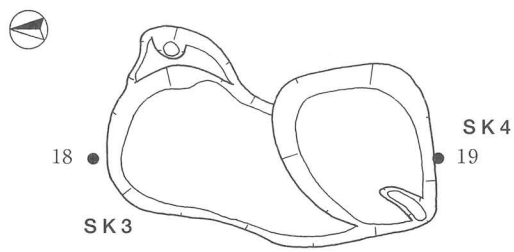
SI4 カマド



- 1. 灰色粘質土
- 2. 灰色粘質土混り褐粘質土
- 3. 褐粘質土
- 4. 炭、黄褐土混り黒粘質土
- 5. 黒粘質土
- 6. 褐灰・黄褐ブロック土混り灰褐粘質土
- 7. 褐灰・黄褐ブロック土混り暗灰褐粘質土
- 8. 褐灰粘質土混り暗黄褐粘質土
- 9. 暗黄褐ブロック土混り黒粘質土 (5層に似る)

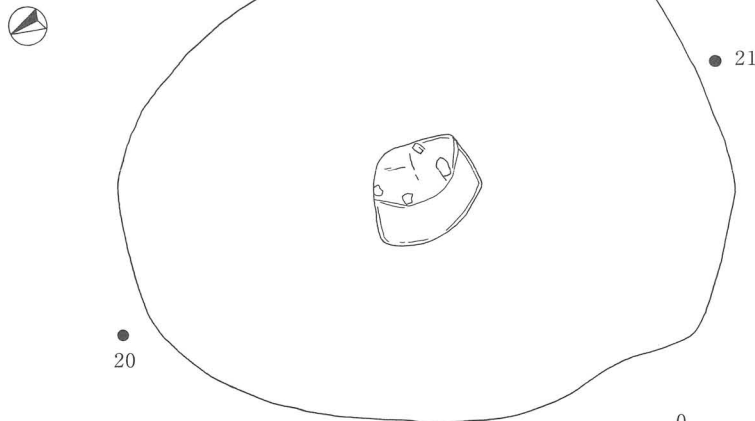


第 69 図 SI4、SK 遺構図・土層断面図 (S=1/40)

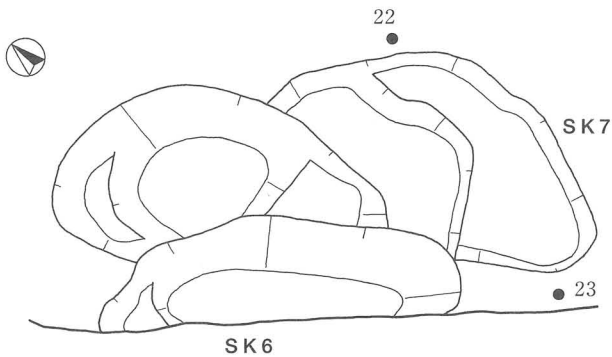


- 1. 黄褐ブロック土混り灰褐粘質土
- 2. 炭・黄褐ブロック土混り灰褐粘質土
- 3. 黄褐土混り淡灰褐粘質土
- 4. 炭・黄褐ブロック土混り黒褐粘質土
- 5. 炭塊・黄褐ブロック土混り黒褐粘質土  
(4層よりも黄褐ブロック土が多い)

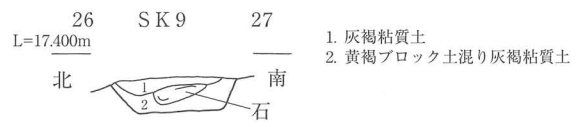
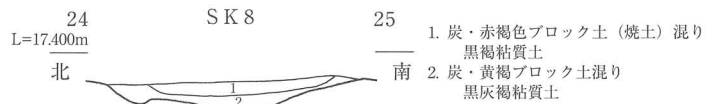
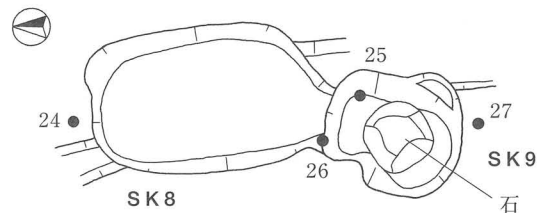
- 1. 炭混り灰褐粘質土
- 2. 黄褐ブロック土混り灰褐粘質土
- 3. 淡灰褐粘質土
- 4. 灰褐粘質土
- 5. 黄褐粘質土混り灰褐粘質土



SK5 鉄鍋出土状況図



- 1. 炭混り灰褐粘質土
- 2. 灰褐ブロック土混り暗黄褐粘質土
- 3. 炭・暗黄褐ブロック土混り灰褐粘質土

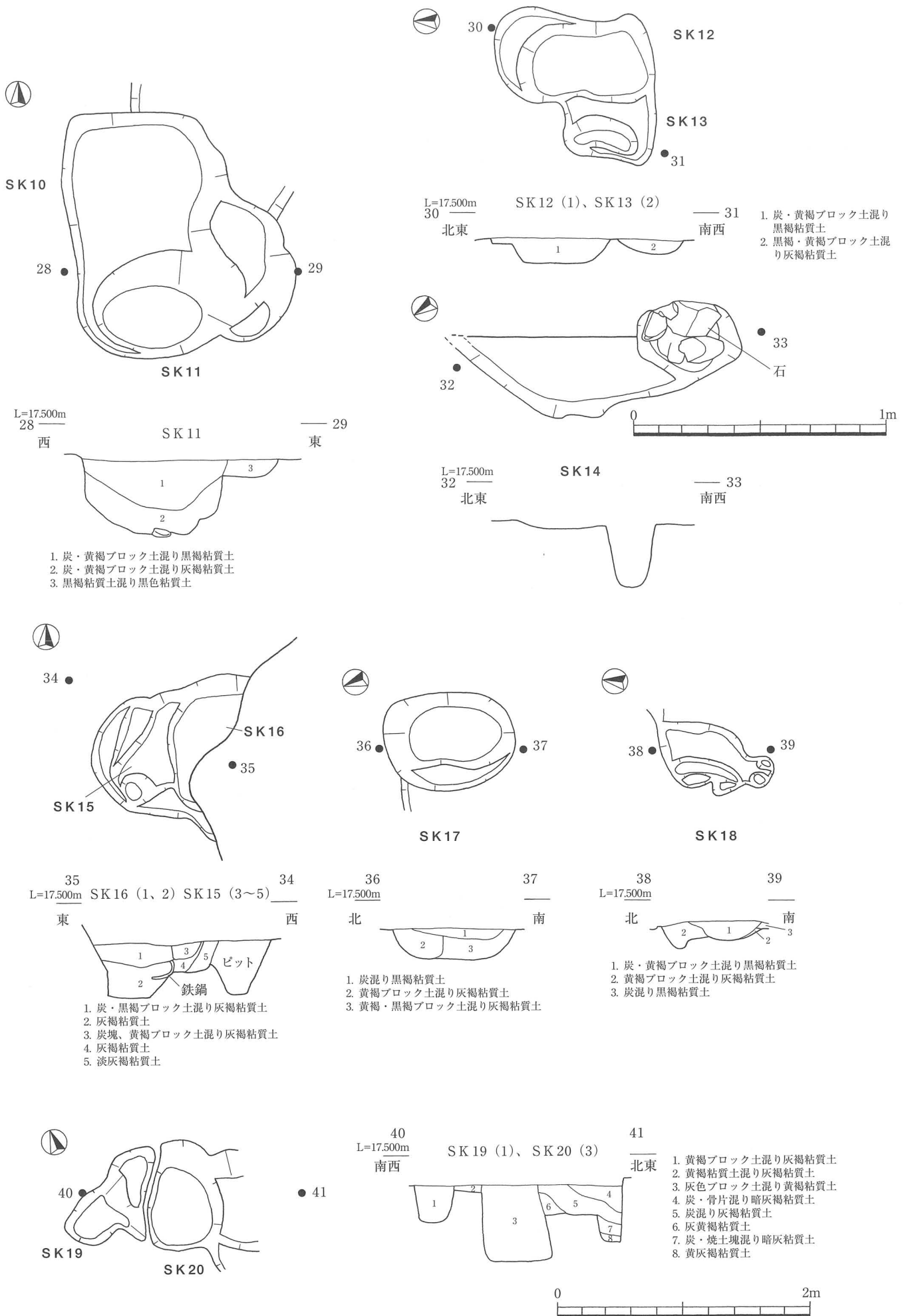


- 1. 炭・赤褐色ブロック土(焼土)混り黒褐粘質土
- 2. 炭・黄褐ブロック土混り黒灰褐粘質土

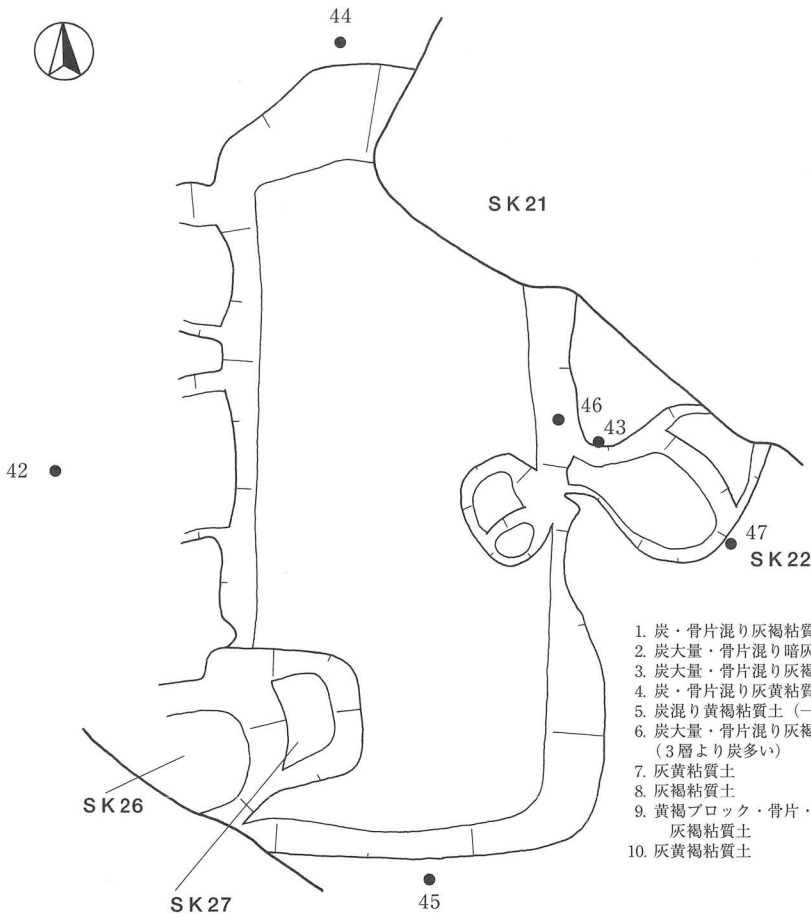
- 1. 灰褐粘質土
- 2. 黄褐ブロック土混り灰褐粘質土



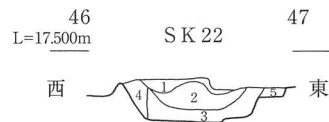
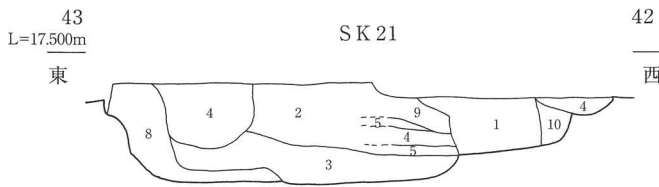
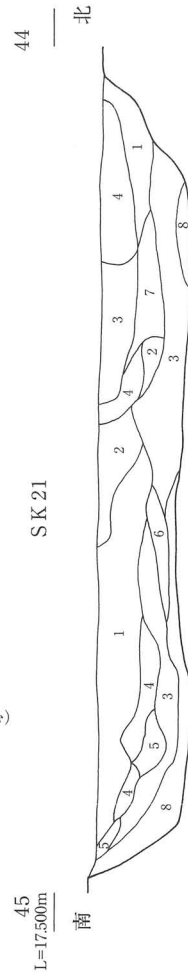
第70図 SK 遺構図・土層断面図1 (S=1/20、SK5 鉄鍋出土状況図のみ S=1/40)



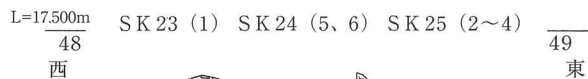
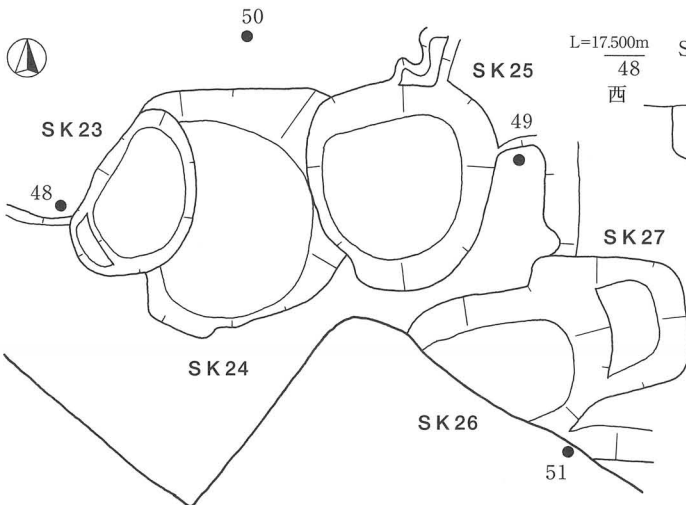
第71図 SK 遺構図・土層断面図2 (S=1/20、SK14 平面図のみ S=1/40)



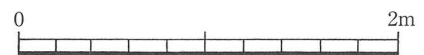
1. 炭・骨片混り灰褐粘質土
2. 炭大量・骨片混り暗灰褐粘質土
3. 炭大量・骨片混り灰褐粘質土
4. 炭・骨片混り灰黄粘質土
5. 炭混り黄褐粘質土 (一部焼土塊含む)
6. 炭大量・骨片混り灰褐粘質土 (3層より炭多い)
7. 灰黄粘質土
8. 灰褐粘質土
9. 黄褐ブロック・骨片・炭粒混り  
灰褐粘質土
10. 灰黄褐粘質土



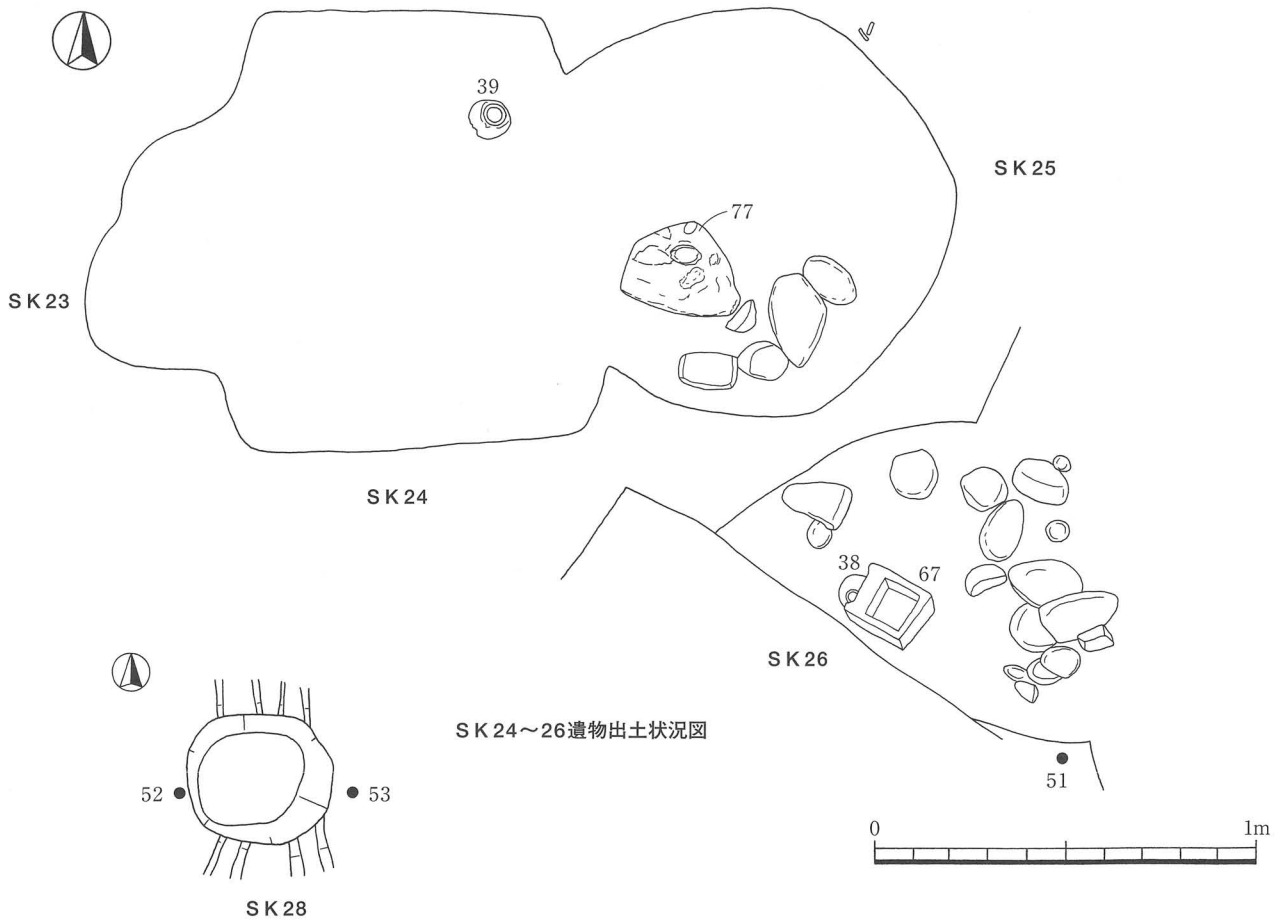
1. 炭混り灰褐粘質土
2. 炭層 (炭が一部土壌化して黒色粘質土になる)
3. 黄褐粘質土混り灰褐粘質土
4. 炭混り黒褐粘質土
5. 炭混り黒褐粘質土 (4層よりも明るい)



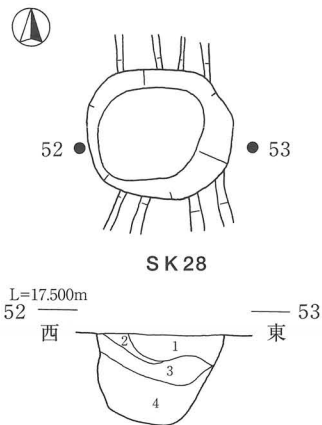
1. 灰褐粘質土
2. 炭・黄褐粘質土混り灰褐粘質土 (骨片含む)
3. 灰褐粘質土混り黄褐粘質土
4. 炭・黄褐粘質土混り灰褐シルト
5. 炭混り灰褐粘質土
6. 炭・黄褐ブロック土混り灰褐粘質土



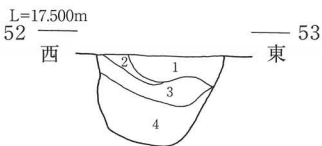
第72図 SK遺構図・土層断面図3 (S=1/40)



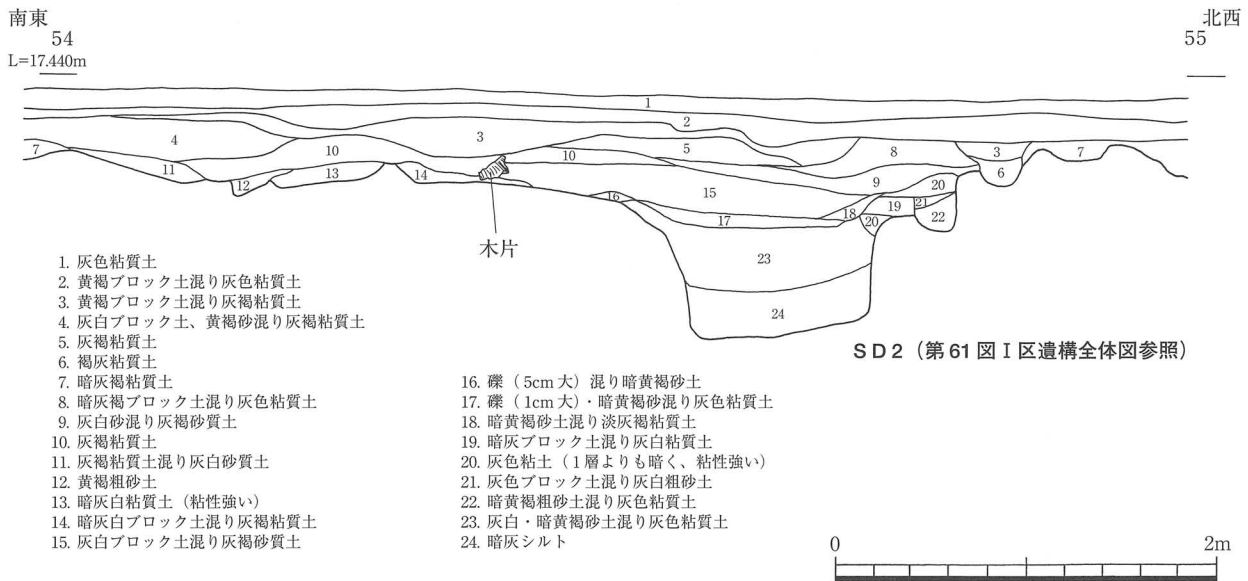
SK 24~26遺物出土状況図



SK 28



- 1. 黄褐ブロック土混り暗灰褐粘質土
- 2. 黄褐ブロック土混り灰褐粘質土
- 3. 灰黄褐粘質土
- 4. 暗灰褐粘質土



SD 2 (第 61 図 I 区遺構全体図参照)

- 1. 灰色粘質土
- 2. 黄褐ブロック土混り灰色粘質土
- 3. 黄褐ブロック土混り灰褐粘質土
- 4. 灰白ブロック土、黄褐砂混り灰褐粘質土
- 5. 灰褐粘質土
- 6. 褐粘質土
- 7. 暗灰褐粘質土
- 8. 暗灰褐ブロック土混り灰色粘質土
- 9. 灰白砂混り灰褐砂質土
- 10. 灰褐粘質土
- 11. 灰褐粘質土混り灰白砂質土
- 12. 黄褐粗砂土
- 13. 暗灰白粘質土 (粘性強い)
- 14. 暗灰白ブロック土混り灰褐粘質土
- 15. 灰白ブロック土混り灰褐砂質土

- 16. 碟 (5cm 大) 混り暗黄褐砂土
- 17. 碟 (1cm 大)・暗黄褐砂混り灰色粘質土
- 18. 暗黄褐砂土混り淡灰褐粘質土
- 19. 暗灰ブロック土混り灰白粘質土
- 20. 灰色粘土 (1層よりも暗く、粘性強い)
- 21. 灰色ブロック土混り灰白粗砂土
- 22. 暗黄褐粗砂土混り灰色粘質土
- 23. 灰白・暗黄褐砂土混り灰色粘質土
- 24. 暗灰シルト

第 73 図 SK、SD 遺構図・土層断面図 (S=1/20、SK 遺物出土状況図のみ S=1/40)



#### 第4節 遺物（第74～81図）

1～35は古代土器である。1～5はS I 1、6～17はS I 3、18～24はS I 4、25はS D 3、26はS D 6、27～29は古代北陸道の側溝S D 8、30～32はP 1、33～35は包含層からの出土である。

1は高台を有する小型の坏である。2は須恵器甕の口縁部で、上下2段の波状紋を施している。3～5は土師器甕である。4は図面上より若干外側へ傾く。3と5は焼成や胎土から同一個体になるかもしれない。6は土師器碗である。外面赤彩・内面黒色である。7と8は無台坏で、両者とも焼成が甘い。9は高台を呈する大型の坏である。12は外底部に回転糸切痕を有する甕の底部である。内面の底の一部には煤が付着している。13～17は土師器甕の口縁部である。13の内面には煤が付着している。12と17は焼成や胎土から同一個体になるかもしれない。なお、12～14、16、17は豎穴内に掘られたP 4からの出土である。18～20は坏で、18は高台を有する。21と22は短頸壺で同一個体になる。21の体部上方には窯焼成のときに生じた降灰による自然釉がみられる。23と24は土師器甕である。長胴甕24の外面体部下半には煤が多く付着している。古代北陸道の側溝から見つかった28は土師器碗の底部である。外面に赤彩痕跡の可能性はあるが明瞭ではない。29の須恵器甕は図面上より若干寝た状態になると思われる。

36と38～40は中世の遺物である。36は京都系の土師器皿である。38は瀬戸灰釉丸碗である。釉薬は高台付近以外全面に施釉している。体部には、印花原体Aを連続して押印し、蓮弁文風にしている。39は瀬戸天目茶碗である。体部の形状は、下方が丸味を帯び上方にかけて立ち上がりが強くなる。口縁端部は短く折り返され玉縁状になる。高台周辺には濃い紫色したサビ釉が施され、高台内の削り込みは浅い輪高台である。38と39は瀬戸大窯I期と考えられる。40は内湾する白磁皿である。41～62は近世陶磁器である。ほとんどはS D 2・3からの出土で、江戸後期を主体とする。

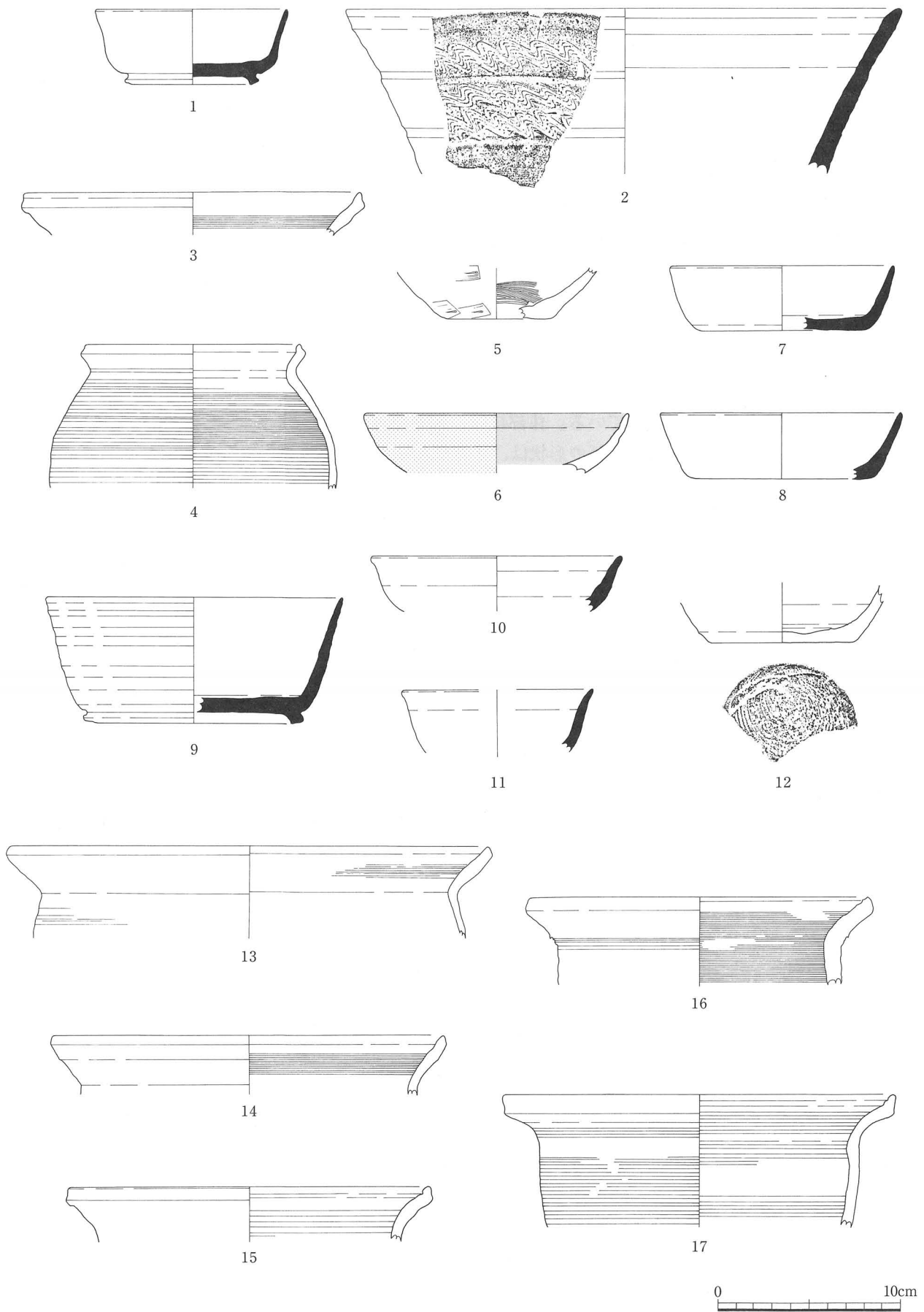
63と64は縄文土器である。63は浅鉢の破片で、縄文晩期前葉の御経塚式にあたる。64は縄文後期後葉にあたる八日市新保式の浅鉢口縁部である。

65～74は石製品である。65と66は打製石斧である。65は長軸中ほどで括れるタイプで、基部が凹基、刃部は円刃である。あまり使用していなかったようで、刃先はよく残っている。66は基部から刃部に向かって幅が広がるタイプで、基部は円基である。刃部は途中で欠損しており分類はできない。67は行火の完形品である。前側面にやや上向きの口を四角状に大きく開いた構造をしている。石材は軽石凝灰岩で、加賀の産地と考えられる。68はS I 4のカマド内に備え付けられていた石である。四角柱のような形状をし、火受けしたため全体に煤が付き、脆くなっている。69～73は自然石であるが、全体に煤が付着している。69～72はS K 14内のビットから大量に見つかった自然石の中の一部である。73はP 2から単独に出土した。74は黒基石である。両面とも細かく磨いている。

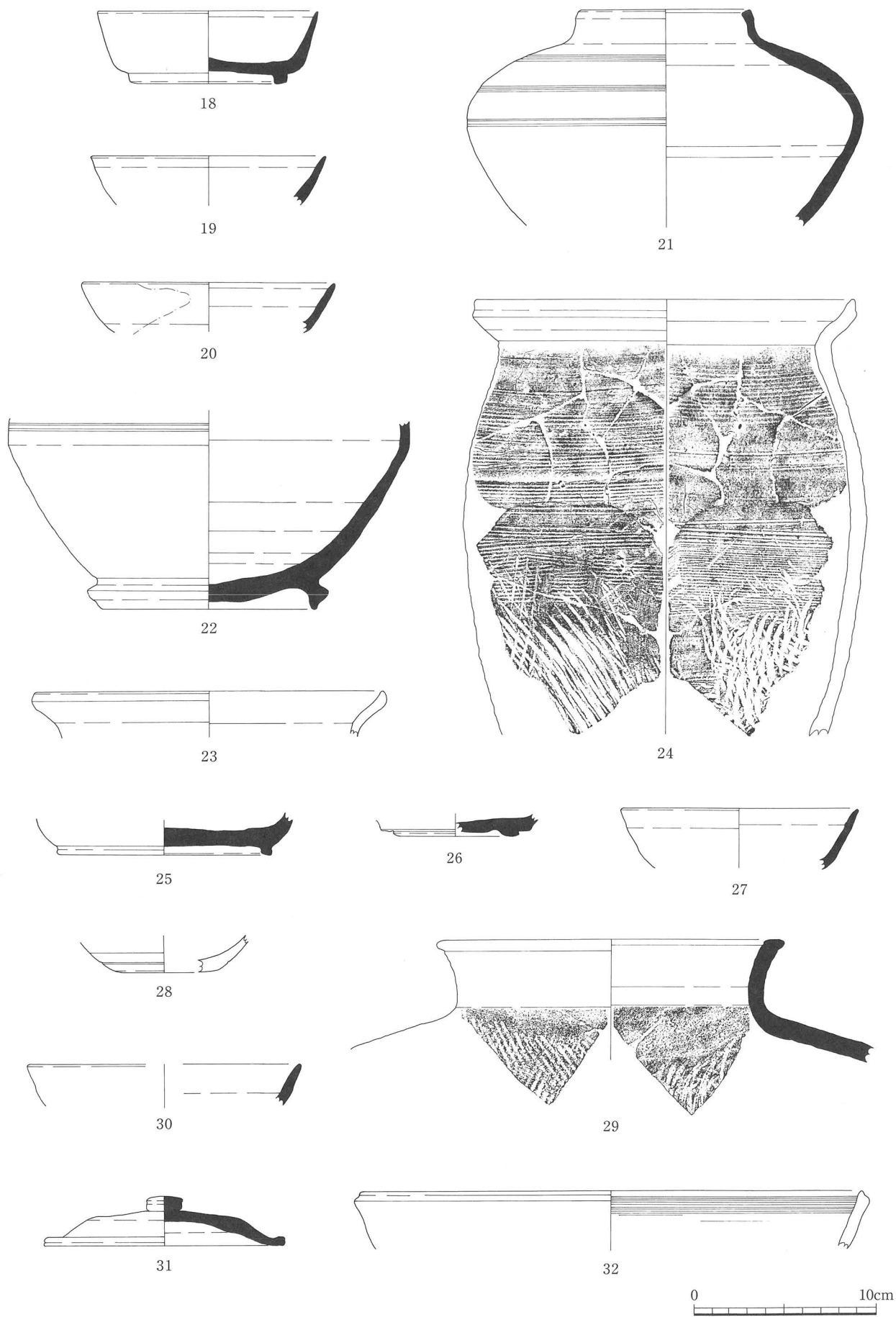
75～86は鉄製品である。75～77は鍋である。いずれもサビの付着が著しく、当時の製品の状態まで復元することはできなかった。76は12世紀から見るができる湯釜の系譜を引くAタイプである。底部から体部にかけて湾曲しながら立ち上がり、口縁部で外側に屈曲する。ただし、屈曲の度合いはそれほど強くはない。口縁部の長さは胴部よりも長い特徴をもち、中世末～近世初めの時期と考えられる。75と77は、口縁部に対向する吊耳をもち、底部に短い三足が付くBタイプにあたる。75は、図上では足がない状態で書かれているが、散在したパーツの中に足の一部を確認している。77の口縁部の一部には、曲がってしまった片口が付いている。図面では、両者とも断面を厚く表記しているが、付着したサビの分を含んでおり、本来はもっと薄く铸造したと思われる。78は小刀の刃先になると考えられる。79～86は釘である。79と86はU字型に折曲がっている。

87～93は銅製銭貨である。87～92はS K 25からまとまって出土した。いずれも寛永通宝で、92のみ背面に「文」が見られる。93はS D 2から出土した。S D 2は水流があったと思われ、そのためか激しく磨耗し、文字の判読はできない。

図示はしていないが、I区北半で確認した土坑群一帯で骨を大量に確認した。骨は人骨と考えられ、そのほとんどが焼骨である。しかし、S K 2やS K 16からは人歯が見つかっており、一部は焼かれぬものもあったようである。人歯は大きさなどから、成人のものと思われる。また、P 2からは大量の炭化材片が見つかった。



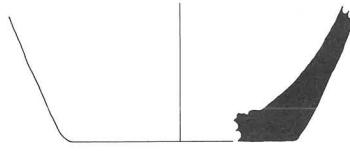
第 74 图 土器实测图 1 (S=1/3)



第75图 土器实测图2(S=1/3)



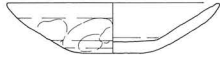
33



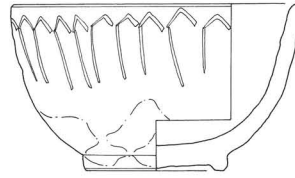
34



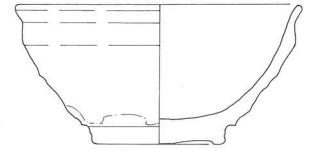
35



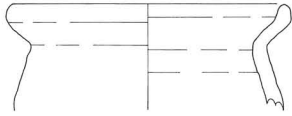
36



38



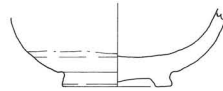
39



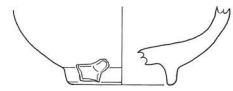
37



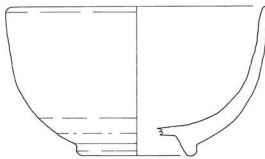
40



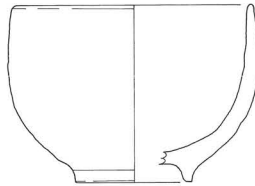
41



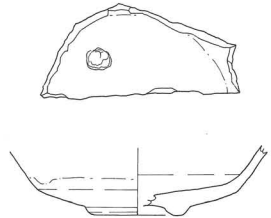
42



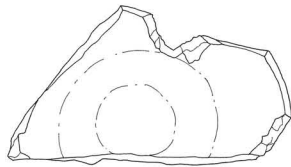
43



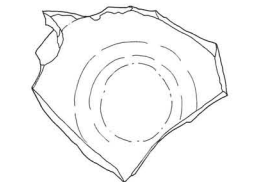
44



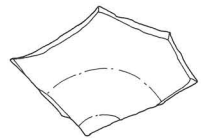
45



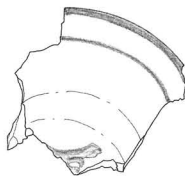
46



47



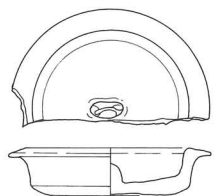
48



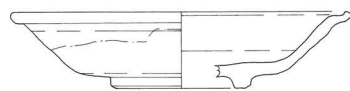
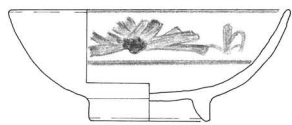
49



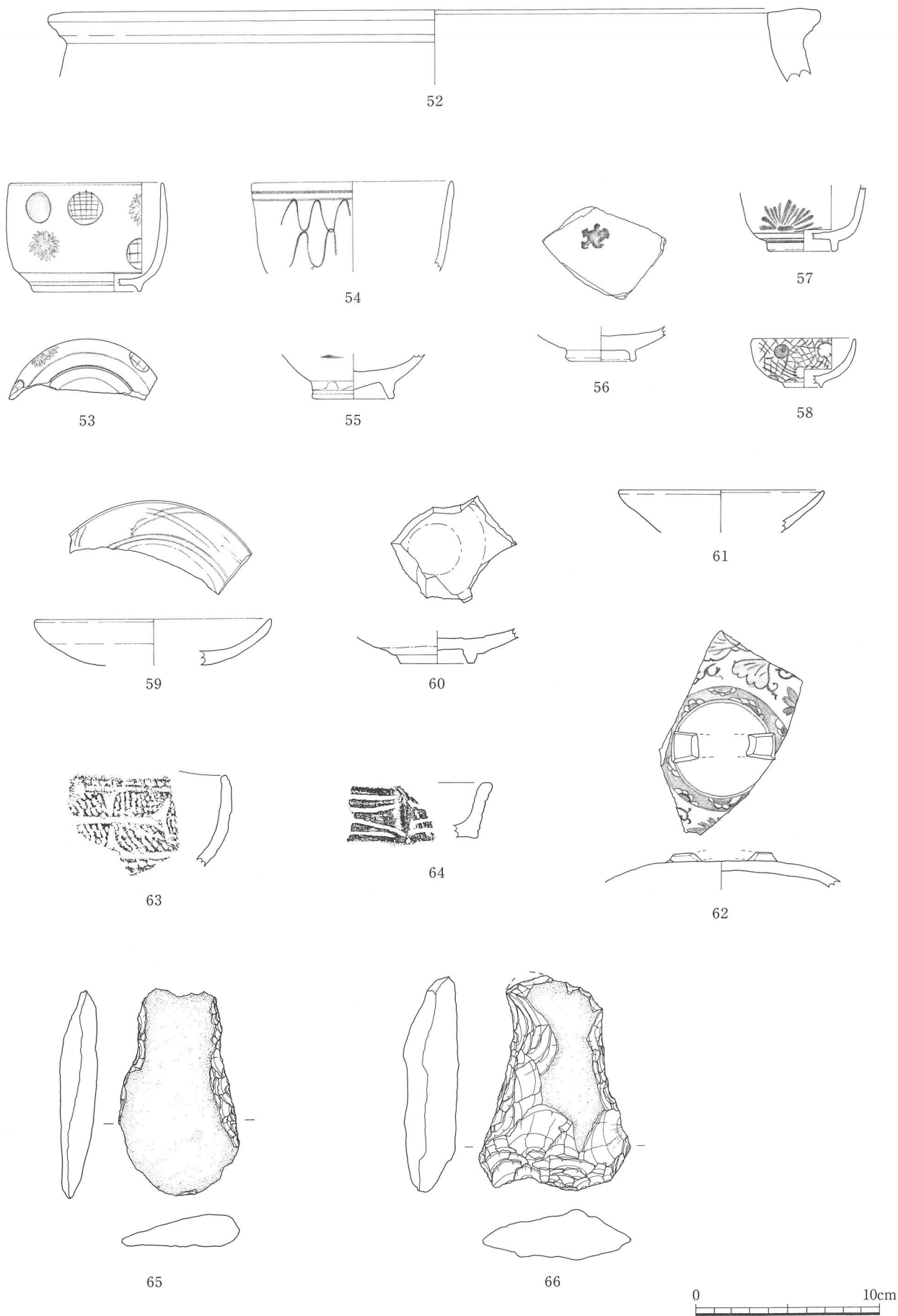
50



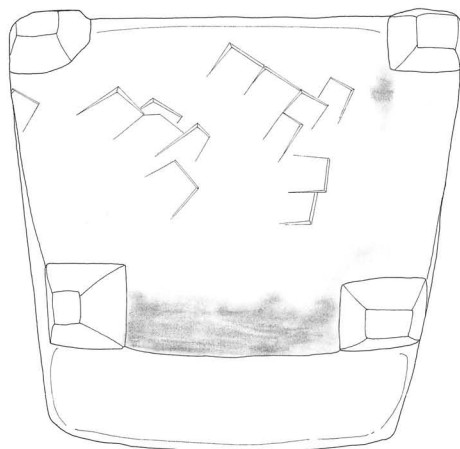
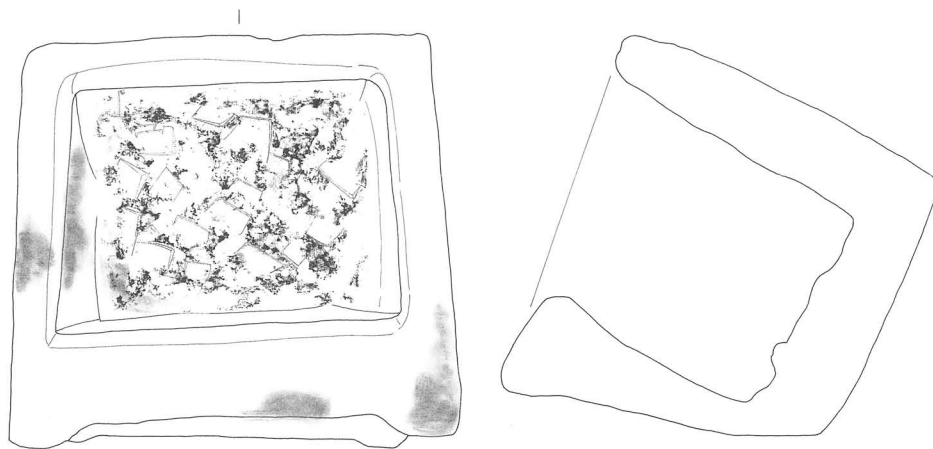
51



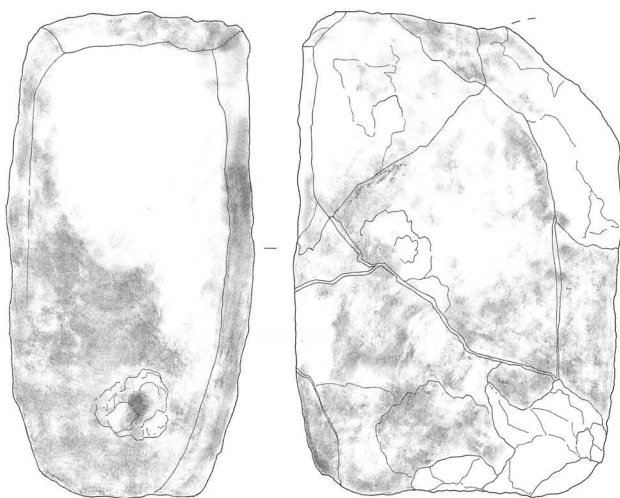
第 76 图 土器、陶磁器实测图 (S=1/3)



第77图 土器、陶磁器、石製品実測図 (S=1/3)



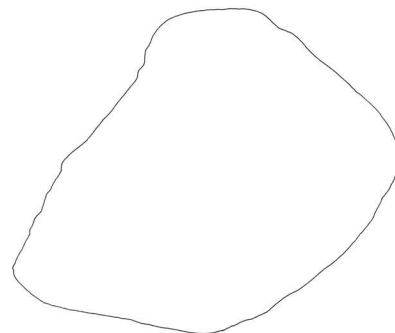
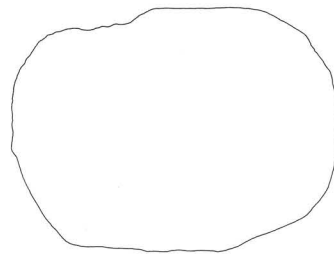
67



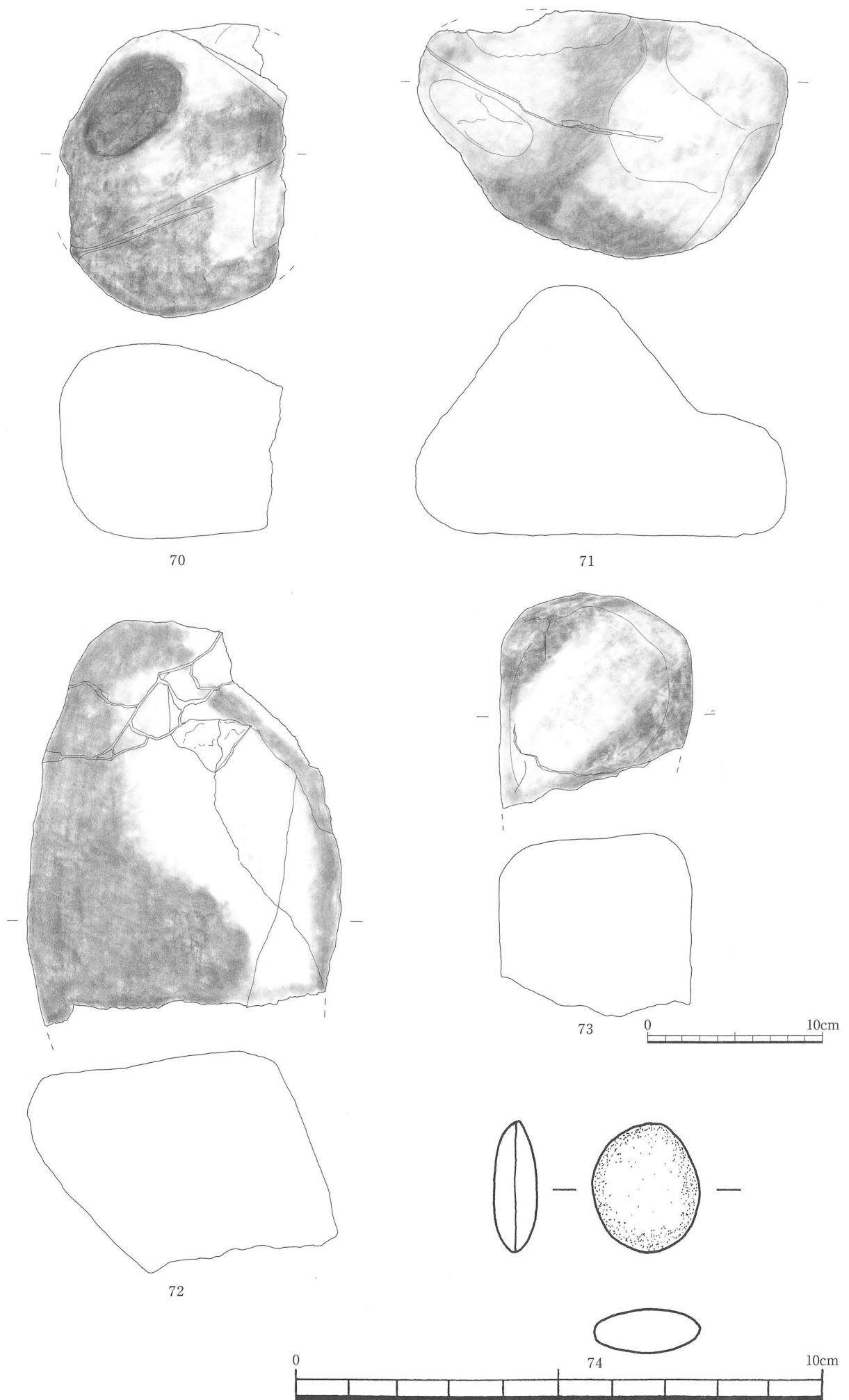
68



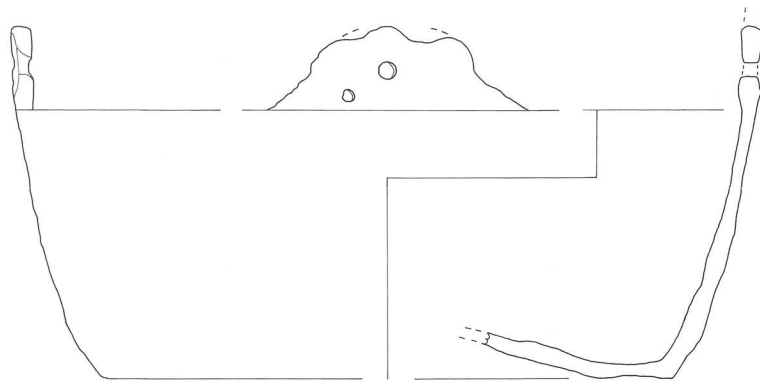
69



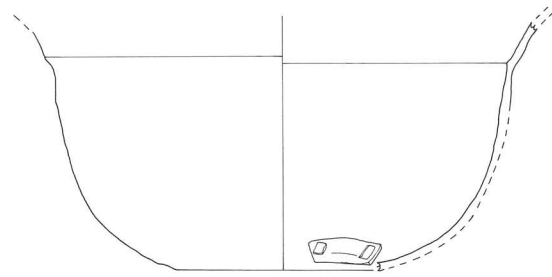
第 78 図 石製品実測図 1 (S=1/3)



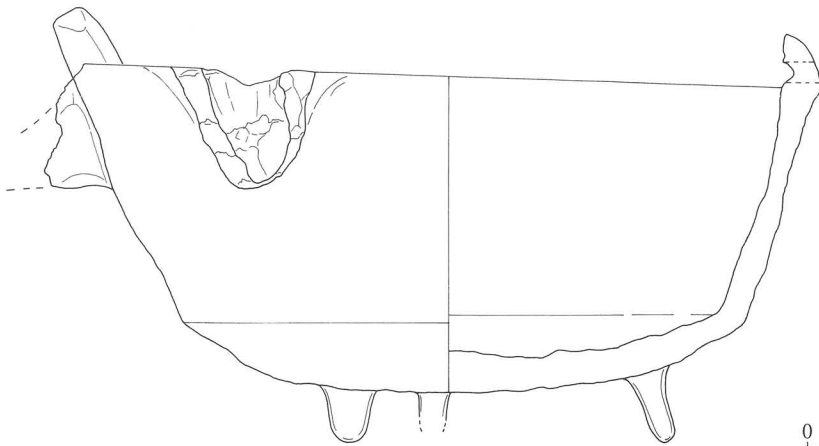
第79図 石製品実測図2 (S=1/3、74のみ S=1/1)



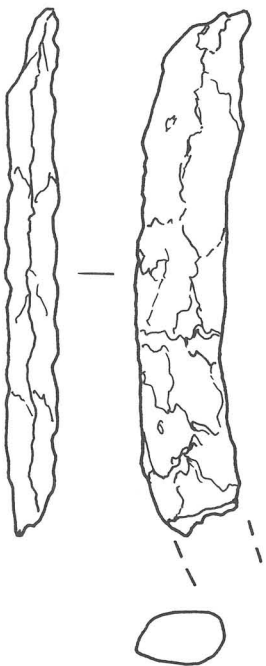
75



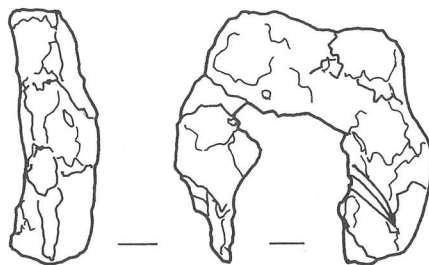
76



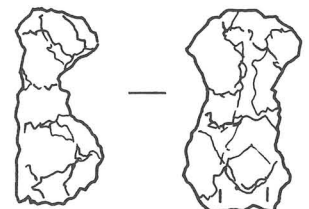
77



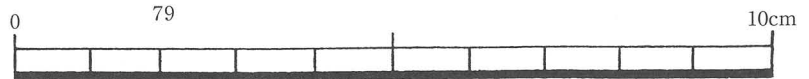
78



79

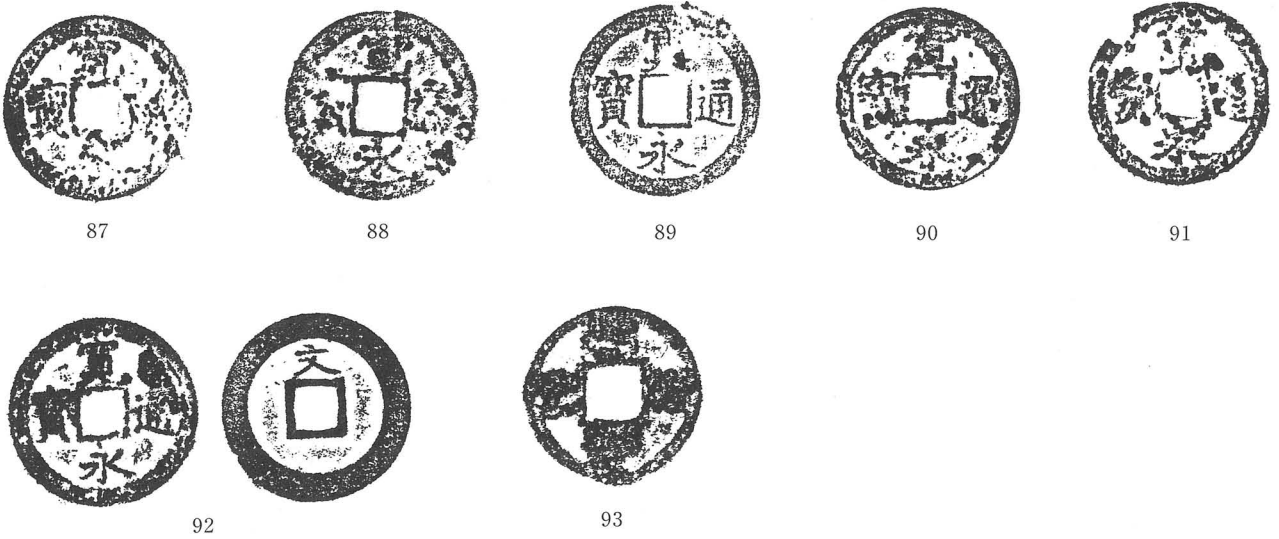
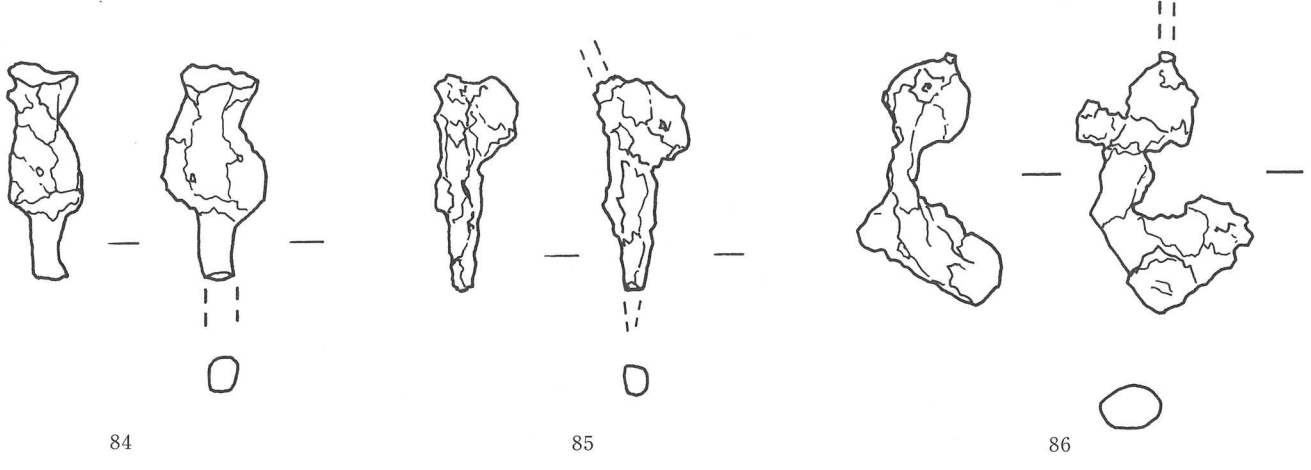
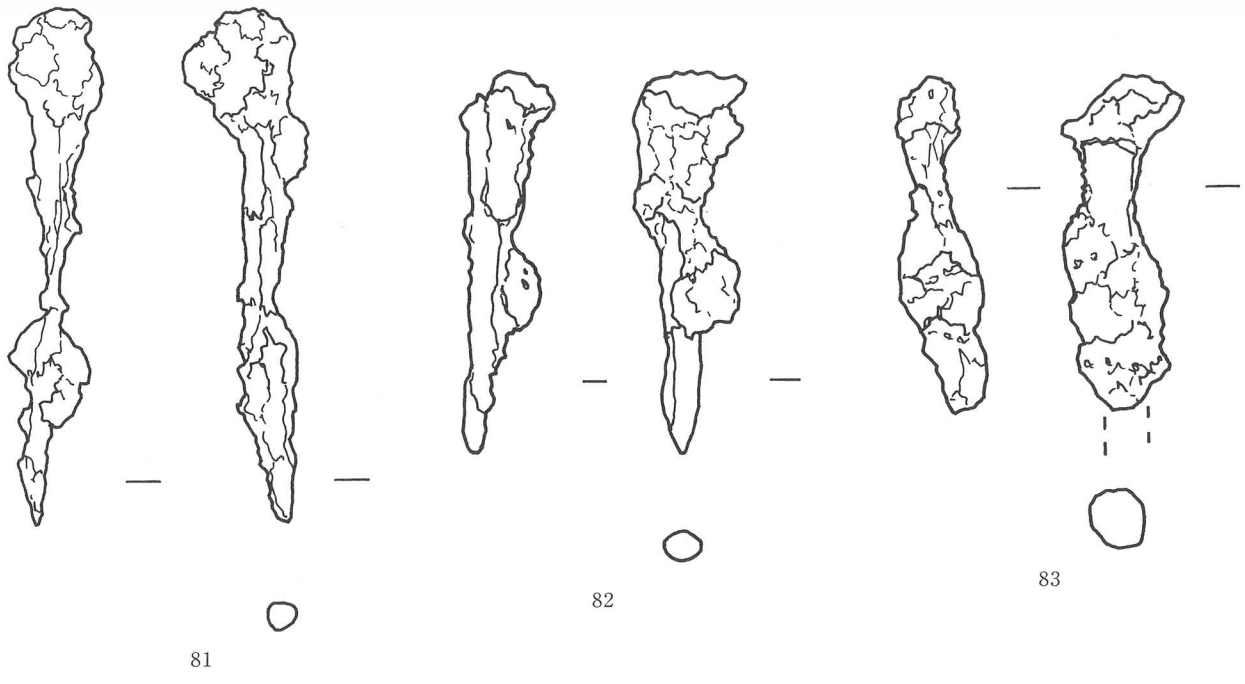


80



第80図 鉄製品実測図 (75～77 S=1/3、78～80 S=1/1)





第 81 図 鉄製品、銅錢実測図 (S=1/1)

## 第5節 小結

本調査区では、古代と中近世の大きく2時期の遺構と遺物を確認した。以下、両時期の様相を述べたい。

### 古代

調査区の北側Ⅰ区で竪穴建物跡SⅠ1～SⅠ4を検出した。SⅠ1～SⅠ3の3棟は、調査区外へと延びるものばかりであったため、竪穴の構造が明らかにできたのはSⅠ4だけであった。ただし、検出した4棟の竪穴はいずれも同規模と考えたい。時期は8世紀中頃から9世紀前半と推測される。

SⅠ4の南東隅にはカマドが設置されていた。カマドは大きく崩壊しており、袖部の一部が残っているだけで、周囲には土師器甕が散在していた。このように、カマドの崩土の中や周囲から土器が散らばった状態で出土するのは、野々市市内南部地域で発見された同時期の竪穴建物内でも複数確認している。ここで見つかったカマドはいずれも袖部ばかりで、上部装置まで確認できた事例は一度もない。このことから、カマドの崩壊は自然状ではなくて、人為的に行われたものと考えたい。民俗例では、家主が家屋を手放すとき台所の火処を壊してから家を出る事項がある。SⅠ4も建物廃棄の際、カマドを意図的に破壊したものと考えられる。

確認した竪穴建物の同エリアには、畝溝群も検出した。溝の長さは10～15m、幅は平均30cm前後、深さは5～10cmである。これらは耕作溝と思われる。竪穴建物とは切り合いから、溝の方が新しいことがわかっており、竪穴建物がいくつも建ち並んだ集落が廃絶した後、畑作などの耕作地に変わったようである。

竪穴建物と畝溝群のさらに南方の第Ⅱ区には、北東－南西に方位をとる古代北陸道跡が存在する。路面の幅は約10.5m、両側にはSD7とSD8の側溝を有しており、本調査区以外で確認した道路跡とは、規模や形態などほとんど変わっていない。路面の一部には硬化面も見られる。しかし、後世の攪乱などにより、全体の遺存状態はよくない。遺構全体図を概観すると、この道路跡より南側は遺構・遺物が皆無で、古代北陸道跡より北方に集落や耕作地などが展開することがわかった。

### 中近世

Ⅰ区の北端で大小様々な規模の土坑群を確認した。土坑は隅丸方形と楕円形の大きく2タイプあり、隅丸方形は南北に長い長方形が多数を占める。この土坑群の中で、SK2、5、7～13、16、17、21～26からは、骨と大量の炭化物を検出した。人骨のほとんどは焼骨であったが、SK2とSK16からは人歯が見つかっており、焼かれなかった骨も存在すると思われる。

これらの土坑群は墓域にあたる考え、各穴は土坑墓と推測される。骨は焼かれたものがほとんどであることから、火葬墓が主体である。陶器を使用した蔵骨器は発見されていないので、木製などによる容器に入れたものと思われる。遺物はほとんど見つからないが、副葬品と思われる瀬戸天目茶碗と丸碗がSK24とSK26から出土しており、両遺物とも大窯1期に比定されていることから、これらの墓は15世紀末頃と考えられる。

また、SK5、16、25からは鉄鍋の完形品が出土している。3点の鍋は全て伏せた状態で見つかり、鍋底には頭骨と思われる骨片を確認した。また、SK16からは人歯も見つかっている。これらの出土状況などから、上記の土坑は土葬墓で、東日本で見られる鍋被りによる葬法と考えられる。時期は、SK25から寛永通宝が見つかり、近世前半と思われる。なお、発見された寛永通宝は計6枚で、副葬品として取り扱った六道銭と思われる。当刻時期の墓坑はSK2、5、16、25である。

今回、15世紀末期に火葬された骨を埋めた土坑墓がいくつも確認できた。間を置いて、近世前半になると鍋被りによる特殊な葬法で埋葬された墓坑が設置される。鍋被り葬は国内でも北海道、東北と関東の一部でしか確認されておらず、本調査区が日本最西端にあたるようである。なお、近年は、金沢市直江遺跡でも鍋被り葬の跡が見つかっている。

## 参考文献

- 五十川伸矢 1992 「古代・中世の鑄鉄鑄物」『国立歴史民俗博物館研究報告第46集』  
国立歴史民俗博物館
- 垣内光次郎 1999 「石の文化誌」『中世北陸の石文化Ⅰ』北陸中世考古学研究会
- 河合忍 安英樹 1999 「石鍬雑考」『石川県考古資料調査・集成事業報告書 農工具』 石川考古学研究会
- 柿田祐司 2006 「加賀・能登の様相」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』  
北陸中世考古学研究会
- 田嶋明人 1988 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』  
石川考古学研究会 北陸古代土器研究会
- 藤澤良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤田邦夫 1997 「中世加賀国の土師器様相」『中近世の北陸－考古学が語る社会史－』 桂書房

第8表 土器観察表1

番号	遺構	種類	口径	器高	底径	色調(内)	調整(内)	残存率	備考	実測番号
		器種	(cm)	(cm)	(cm)	色調(外)	調整(外)			
1	SI1	須恵器	10.4	4.1	7.2	灰	ロクロナデ	底部4/9		43
		有台坏				灰	ロクロナデ			
2	SI1	須恵器	30.2			黄灰	ロクロナデ	口縁約1/9	黒色粒 波状紋	42
		甕				灰	ロクロナデ			
3	SI1	土師器	16.2			橙	ヨコナデ、カキ目	口縁約1/6	赤色粒	39
		甕				橙、黄橙	ヨコナデ			
4	SI1	土師器	11.6			明黄褐	ヨコナデ、カキ目	口縁2/9		41
		甕				明黄褐	ヨコナデ、カキ目			
5	SI1	土師器			6.0	橙	ハケ	底部5/9		40
		甕				にぶい黄橙	ケズリ、ナデ			
6	SI3	土師器	14.4			黒	ヨコナデ、内黒	口縁1/3	赤色粒 外面一部に煤付着	2
		埴				赤彩(赤褐)	ヨコナデ、赤彩			
7	SI3	須恵器	12.4	3.5	9.0	灰白	ロクロナデ	口縁1/6	黒色粒	7
		坏				灰白	ロクロナデ、回転ヘラ切			
8	SI3	須恵器	13.2	3.6	(9.0)	浅黄	ロクロナデ	口縁1/6	口縁部内外面に煤付着	9
		坏				浅黄	ロクロナデ			
9	SI3	須恵器	16.2	6.8	12.0	灰	ロクロナデ	口縁1/12、 底部1/9		1
		有台坏				灰	ロクロナデ			
10	SI3	須恵器	13.6			灰白	ロクロナデ	口縁1/18		10
		坏				灰白	ロクロナデ			
11	SI3	須恵器	(10.2)	(3.4)		灰黄	ロクロナデ	口縁1/12		11
		坏				灰黄	ロクロナデ			
12	SI3 (P4)	土師器			7.8	にぶい黄橙	ヨコナデ	底部5/12	赤色粒 黒色粒 内面底部に煤付着	6
		甕				にぶい黄橙	ヨコナデ、回転糸切			
13	SI3 (P4)	土師器	26.4			浅黄橙、にぶい黄橙	ヨコナデ、カキ目	口縁1/12	赤色粒 黒色粒 内面に煤付着	12
		甕				浅黄橙、にぶい橙、にぶい褐	ヨコナデ、カキ目			
14	SI3 (P4)	土師器	21.4			にぶい黄橙	ヨコナデ、カキ目	口縁1/9	赤色粒 黒色粒	4
		甕				にぶい黄橙	ヨコナデ			
15	SI3	土師器	20.0			にぶい黄橙	ヨコナデ、カキ目	口縁1/12	赤色粒 黒色粒	8
		甕				にぶい黄橙	ヨコナデ			
16	SI3 (P4)	土師器	18.4			にぶい黄橙	ヨコナデ、カキ目	口縁5/36	金色粒微量 赤色粒	5
		甕				にぶい黄橙	ヨコナデ、カキ目			
17	SI3 (P4)	土師器	21.4			にぶい黄橙	ヨコナデ、カキ目	口縁1/9	赤色粒 黒色粒	3
		甕				にぶい黄橙	ヨコナデ、カキ目			
18	SI4	須恵器	12.0	4.0	8.6	灰	ロクロナデ	2/3	口縁部内面に煤付着	31
		有台坏				灰	ロクロナデ			
19	SI4	須恵器	12.8			灰白	ロクロナデ	口縁1/6		33
		坏				灰黄	ロクロナデ			
20	SI4	須恵器	13.8			灰白	ロクロナデ	口縁1/12	自然釉	34
		坏				灰	ロクロナデ			
21	SI4	須恵器	11.4			灰黄	ロクロナデ	口縁1/12	黒色粒、自然釉 22と同一個体	36
		短頸壺				灰	ロクロナデ			
22	SI4	須恵器			11.8	灰白	ロクロナデ	底部7/18	21と同一個体	32
		短頸壺				灰	ロクロナデ			
23	SI4	土師器	19.0			にぶい黄橙	ヨコナデ	口縁約1/9	赤色粒 黒色粒	35
		甕				にぶい黄橙	ヨコナデ			
24	SI4	土師器	21.0		18.2	明黄褐、にぶい黄橙	ヨコナデ、カキ目、タキ	口縁1/3	赤色粒 黒色粒 部分的に煤付着	38
		長胴甕				淡黄橙、にぶい黄橙	ヨコナデ、カキ目、タキ			
25	SD3	須恵器			13.8	灰白	ロクロナデ	底部1/9		51
		有台坏				灰白	ロクロナデ			
26	SD6	須恵器			6.8	灰白	ロクロナデ	底部1/2		53
		有台坏				灰白	ロクロナデ			
27	SD8	須恵器	13.0			灰黄	ロクロナデ	口縁1/12		55
		坏				灰白	ロクロナデ			
28	SD8	土師器			6.0	浅黄橙	ナデ	底部1/6		54
		埴				橙	ヨコナデ			
29	SD8	須恵器	19.0			灰	ヨコナデ、タタキ	口縁約1/18		56
		甕				灰	ヨコナデ、タタキ			
30	P1	須恵器				黄灰	ロクロナデ	口縁小片		78
		坏				黄灰	ロクロナデ			
31	P1	須恵器	13.2	2.8		灰	ロクロナデ	口縁7/12		77
		蓋				灰	ロクロナデ、回転ヘラ切			
32	P1	土師器	24.2			にぶい黄橙	ヨコナデ、カキ目	口縁1/12	黒色粒	79
		甕				浅黄橙	ヨコナデ			

第8表 土器観察表2

番号	遺構	種類	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調(内)	調整(内)	残存率	備考	実測 番号
		器種				色調(外)	調整(外)			
33	包含層	須恵器			12.0	灰白	ロクロナデ	底部 1/6	黒色粒	81
		盤				灰白	ロクロナデ			
34	包含層	須恵器			9.0	黄灰	ロクロナデ	底部 1/3	黒色粒	83
		壺				黄灰	ロクロナデ			
35	包含層	須恵器				灰白		小片	黒色粒 自然釉	82
		双耳瓶				灰白				
36	SK6	土師器	8.4	2.0	3.0	にぶい黄橙	ヨコナデ	口縁 1/3	赤色粒 京都系	15
		皿				にぶい黄橙	ヨコナデ、指頭圧痕			
37	SK21	土師器	11.2			にぶい黄橙	ヨコナデ	口縁 1/9	赤色粒	16
		甕				にぶい黄橙	ヨコナデ			
38	SK25	瀬戸焼	11.4	6.6	5.6	浅黄		ほぼ完形	露胎部煤付着 口縁端部一部欠損	13
		丸碗				浅黄	直線寛線描蓮弁文			
39	SK24	瀬戸焼	11.4	5.5	5.0	暗赤褐	施釉(鉄釉)	口縁 7/9、 底部完形	口縁端部2ヶ所欠損	14
		天目茶碗				暗赤褐	施釉(鉄釉)			
40	包含層	白磁	(10.2)			灰白	施釉(透明)	小片		80
		皿				灰白	施釉(透明)			
41	SD2	陶器			4.4	褐	施釉(鉄釉)	底部ほぼ完形		74
		碗				褐	施釉(鉄釉)			
42	SD2	陶器			4.4	灰オリーブ	施釉(灰釉)	底部 2/9		65
		碗				灰オリーブ	施釉(灰釉)			
43	SD2	陶器	10.2	5.9	4.8	浅黄、にぶい黄	施釉(灰釉)	口縁 2/9		70
		碗				浅黄、にぶい黄	施釉(灰釉)			
44	SD2	陶器	9.6	7.0	4.6	灰白	施釉(白泥釉)	底部 1/3		69
		碗				灰白	施釉(白泥釉)			
45	SD2	陶器			3.8	オリーブ黄	施釉(灰釉)	底部約 1/3	胎土目 1箇所	67
		碗				にぶい黄橙	施釉(灰釉)			
46	SD2	陶器			5.0	明オリーブ灰	施釉(青白釉)	底部 2/3	黒色粒 蛇の目釉剥ぎ	72
		碗				明オリーブ灰	施釉(青白釉)			
47	SD2	陶器			5.8	灰白	施釉(白泥釉)	底部 1/4	黒色粒 蛇の目釉剥ぎ	71
		碗				灰白	施釉(白泥釉)			
48	SD2	陶器			5.2	緑灰	施釉(銅緑釉)	底部 2/9	蛇の目釉剥ぎ	73
		碗				灰白	施釉(灰釉)			
49	SD2	陶器	11.2	4.4	5.0	灰白	施釉(透明)	口縁 1/6	蛇の目釉剥ぎ	66
		染付碗				灰白	施釉(透明)			
50	SD3	唐津	13.6	3.0	5.6	灰白	施釉(灰釉)	口縁 1/6	黒色粒 胎土目 1箇所	52
		折縁皿				灰白	施釉(灰釉)			
51	SD2	陶器	8.0	1.9		灰黄褐	施釉(鉄釉)	1/2		68
		蓋				浅黄橙				
52	SD3	越前焼	42.0			灰黄褐		口縁小片	黒色粒	58
		甕				灰黄褐、浅黄				
53	SD2	磁器	8.4	6.0	5.8	灰白		口縁 1/3、 底部 5/18		62
		染付碗				灰白				
54	SD2	磁器	11.0			灰白		口縁 1/9		75
		染付碗				灰白				
55	SD2	磁器			4.4	灰白		底部 1/3		63
		染付碗				灰白				
56	SD2	磁器			3.8	灰白		底部 2/9	赤色粒 高台端部釉剥ぎ	61
		染付碗				明オリーブ灰				
57	SD3	磁器			3.8	灰白		底部 1/6	高台端部釉剥ぎ	57
		染付小坏				灰白				
58	SD2	磁器	5.6	2.7	2.0	灰白		口縁 2/9		59
		染付猪口				灰白				
59	SD2	磁器	13.0			灰白		口縁 5/18		64
		染付皿				灰白				
60	SD3	磁器			4.2	明緑灰		底部完形	蛇の目釉剥ぎ	49
		有台皿				明緑灰、灰白				
61	SD2	白磁	11.2			灰白		口縁 1/9		60
		皿				灰白				
62	SD3	磁器				灰白		小片		50
		染付蓋				灰白				
63	SD4	縄文				明黄褐		口縁小片	黒色粒	45
		浅鉢				橙	刺突文、沈線、LR縄文			
64	SD5	縄文				黒褐	ナデ	口縁小片	黒色粒	46
		浅鉢				黒褐	ナデ、沈線			

第9表 石製品観察表

番号	遺構	器種	最大長	最大幅	最大厚	質量	石材	備考	実測番号
			(cm)	(cm)	(cm)	(g)			
65	SD2	打製石斧	11.4	6.7	2.1	155	火山礫凝灰岩		47
66	包含層	打製石斧	(11.8)	(8.3)	(3.0)	(280)	花崗斑岩		76
67	SK26	行火	16.6	17.8	13.5	1,700	軽石凝灰岩	完形 煤付着	17
68	SI4	カマド石	(19.9)	(13.1)	(9.8)	(2,600)	砂岩	煤付着	37
69	SK14	自然石	20.1	15.4	14.0	5,100	安山岩	煤付着	21
70	SK14	自然石	(16.9)	(12.8)	(11.8)	(3,300)	安山岩	煤付着	18
71	SK14	自然石	(14.3)	(14.4)	(14.4)	(4,820)	玢岩	煤付着	19
72	SK14	自然石	(23.2)	(17.8)	(12.8)	(7,350)	流紋岩	煤付着	20
73	P3	自然石	(12.4)	(11.0)	(10.5)	(2,080)	花崗斑岩	煤付着	84
74	SX1	基石	2.5	2.0	0.8	7	頁岩	完形	86

第10表 鉄製品・銅銭観察表

番号	遺構	器種	最大長	最大幅	最大厚	質量	備考	実測番号
			(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
75	SK5	鍋	口径 (29.8)	器高 (14.0)	(0.9)	(1,670)	内面に骨付着 三足	88
76	SK16	鍋	口径 -	器高 (9.8)	(0.3)	(1,470)	内面に骨付着	87
77	SK25	鍋	口径 26.5	器高 16.6	1.7	2,250	内面に骨付着 三足	89
78	SK1	刀子	(7.0)	(1.5)	(0.7)	(11.3)		28
79	SK1	釘	(3.4)	(3.4)	(1.2)	(8.9)		29-1
80	SK1	釘	(2.7)	(1.5)	(1.2)	(3.3)		29-2
81	SK25	釘	6.9	1.7	1.3	6.1		30-1
82	SK25	釘	(5.1)	(1.5)	(1.3)	(4.5)		26
83	SK25	釘	(4.5)	(1.6)	(1.2)	(4.9)		27
84	SK25	釘	(2.9)	(1.4)	(1.0)	(2.5)		30-2
85	SK25	釘	(2.9)	(1.3)	(1.1)	(1.9)		30-3
86	SK25	釘	(3.4)	(2.3)	(1.9)	(5.3)		30-4
87	SK25	銭貨	直径：2.5cm			3.4	寛永通寶(六道銭)	22-1
88	SK25	銭貨	直径：2.5cm			1.6	寛永通寶(六道銭)	23-2
89	SK25	銭貨	直径：2.5cm			2.9	寛永通寶(六道銭)	24-3
90	SK25	銭貨	直径：2.4cm			3.7	寛永通寶(六道銭)	25-4-2
91	SK25	銭貨	直径：2.4cm			3.7	寛永通寶(六道銭)	25-4-3
92	SK25	銭貨	直径：2.5cm			3.3	寛永通寶(六道銭、裏面に「文」)	25-4-1
93	SD2	銭貨	直径：2.3cm			3.4	不明 全体磨耗	48



北側調査区 (南西から)



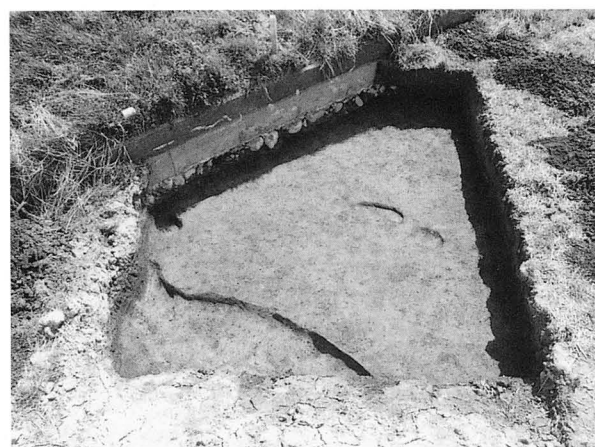
北側調査区中央小穴群 (南から)



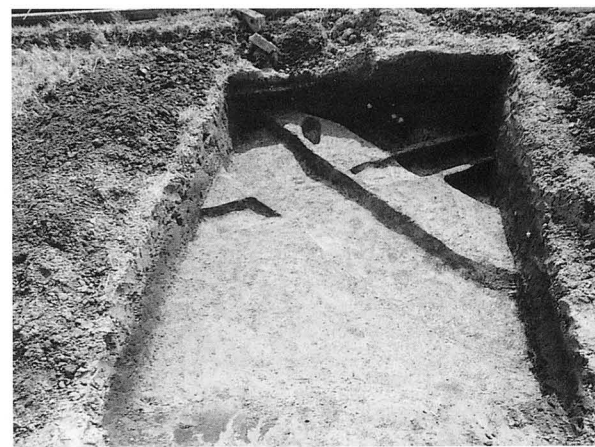
南側調査区 (南東から)



南側調査区 (南から)



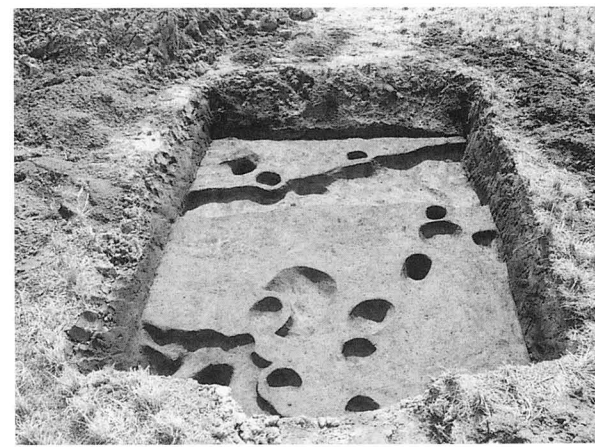
A-3 トレンチ (北西から)



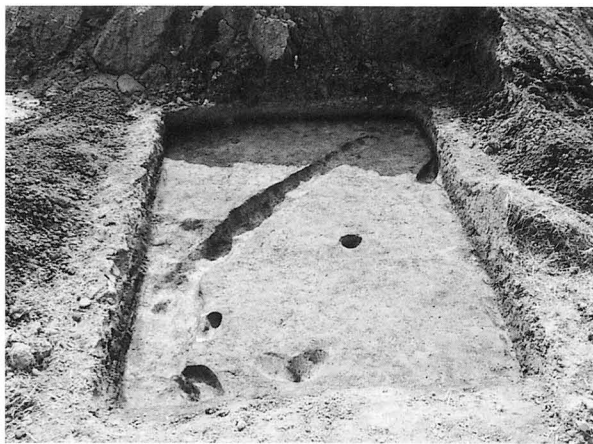
A-6 トレンチ (北西から)



B-4 トレンチ (北西から)



B-7 トレンチ (北西から)



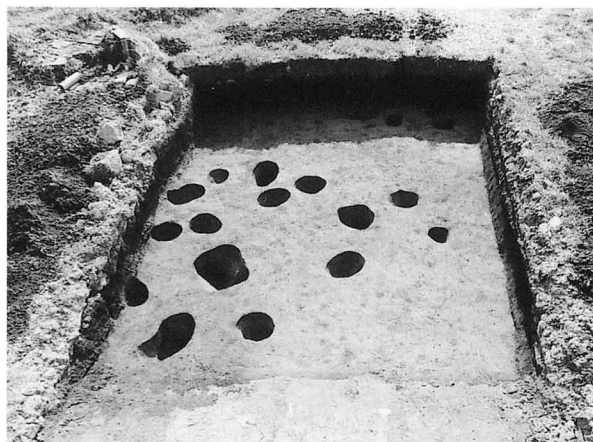
C-2 トレンチ (北西から)



C-4 トレンチ (北西から)



C-5 トレンチ (北西から)



C-6 トレンチ (北西から)



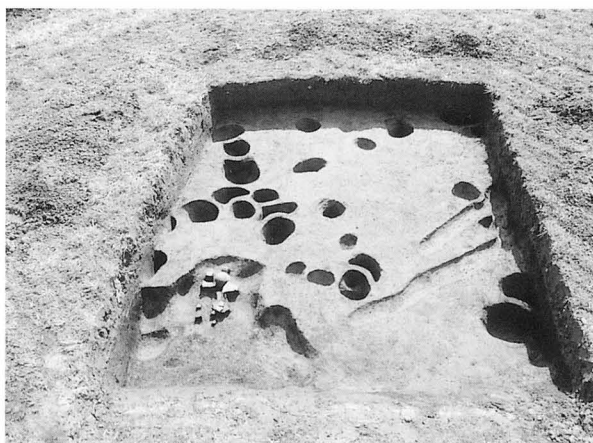
D-1 トレンチ (北西から)



D-2 トレンチ (北西から)



D-4 トレンチ (北西から)

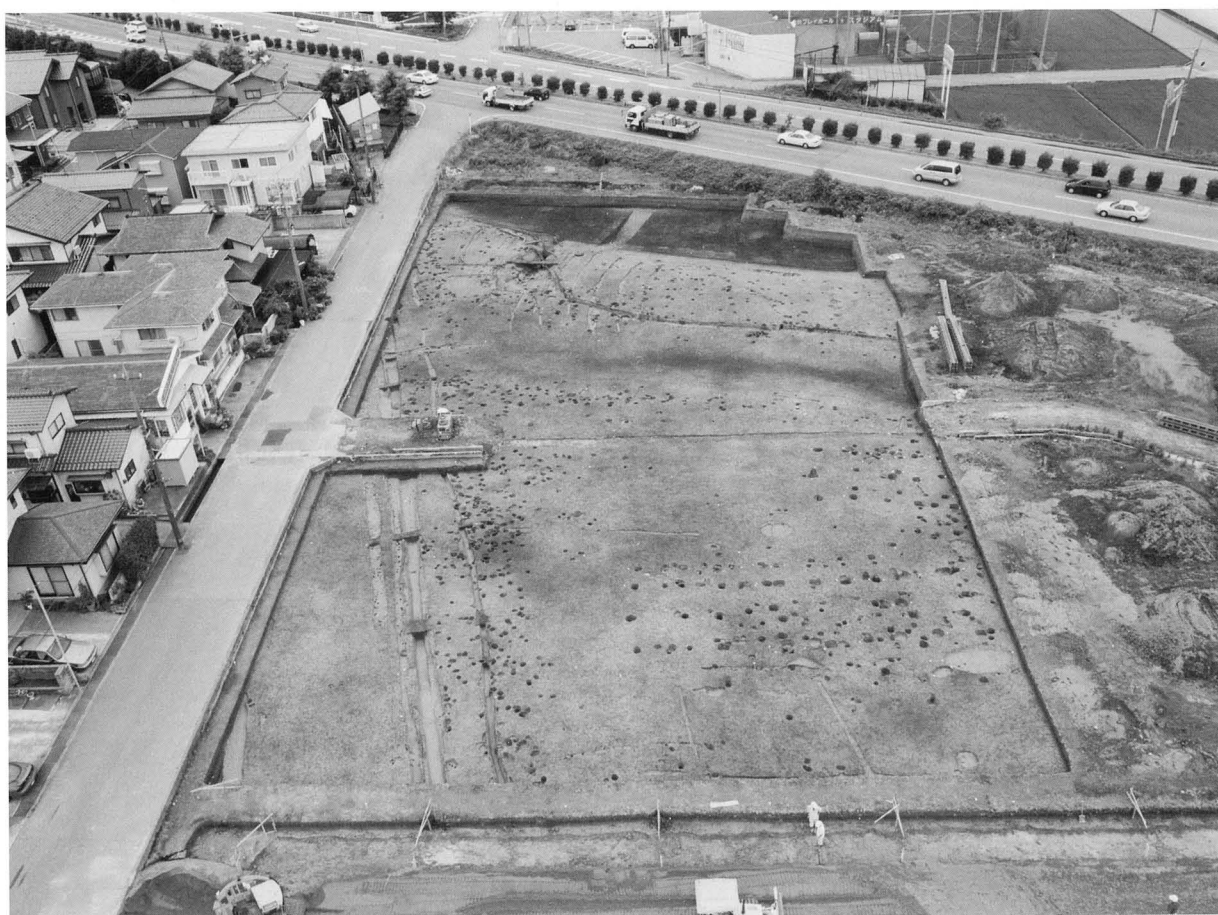


E-4 トレンチ (北西から)

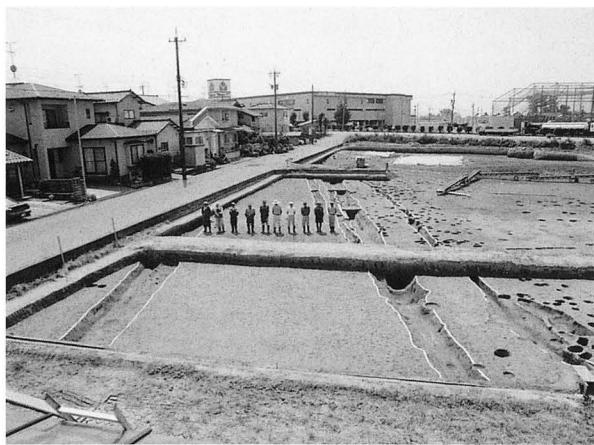




調査区全景 (上空から)



調査区全景 (上空東から)



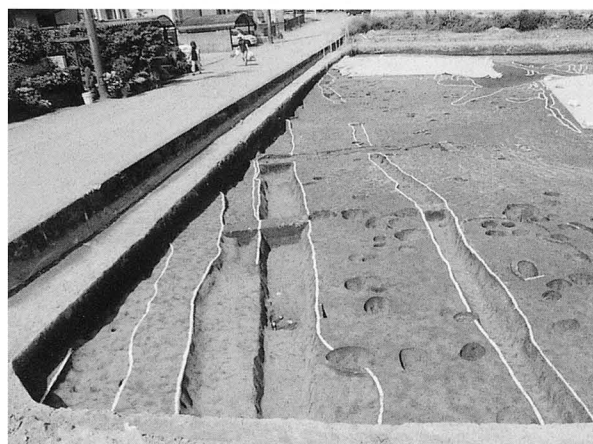
古代北陸道全景 (東から)



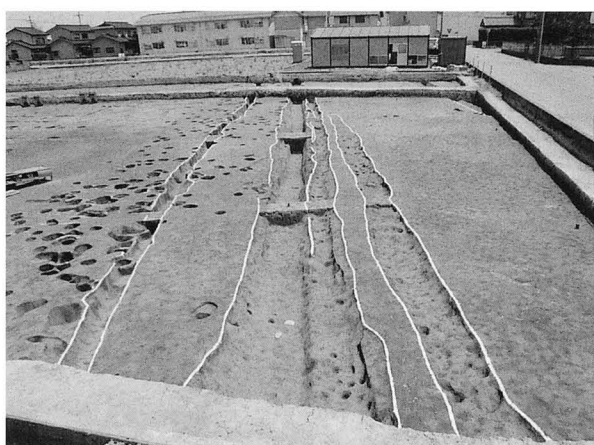
古代北陸道全景 (東から)



古代北陸道 (南から)



古代北陸道側溝 (中央東から)



古代北陸道 (中央西から)



古代北陸道側溝断面 (西から)



S B 1 (南から)



S B 2 (北から)



SB 3・4 (東から)



SB 4 (東から)



SB 6・7 (南から)



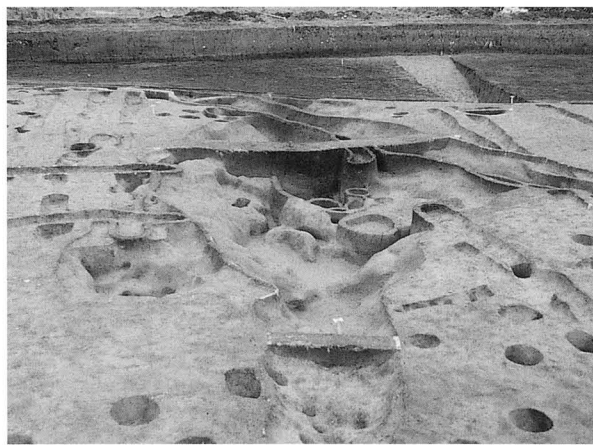
SB 6～9 (西から)



SB 6～10 (南から)



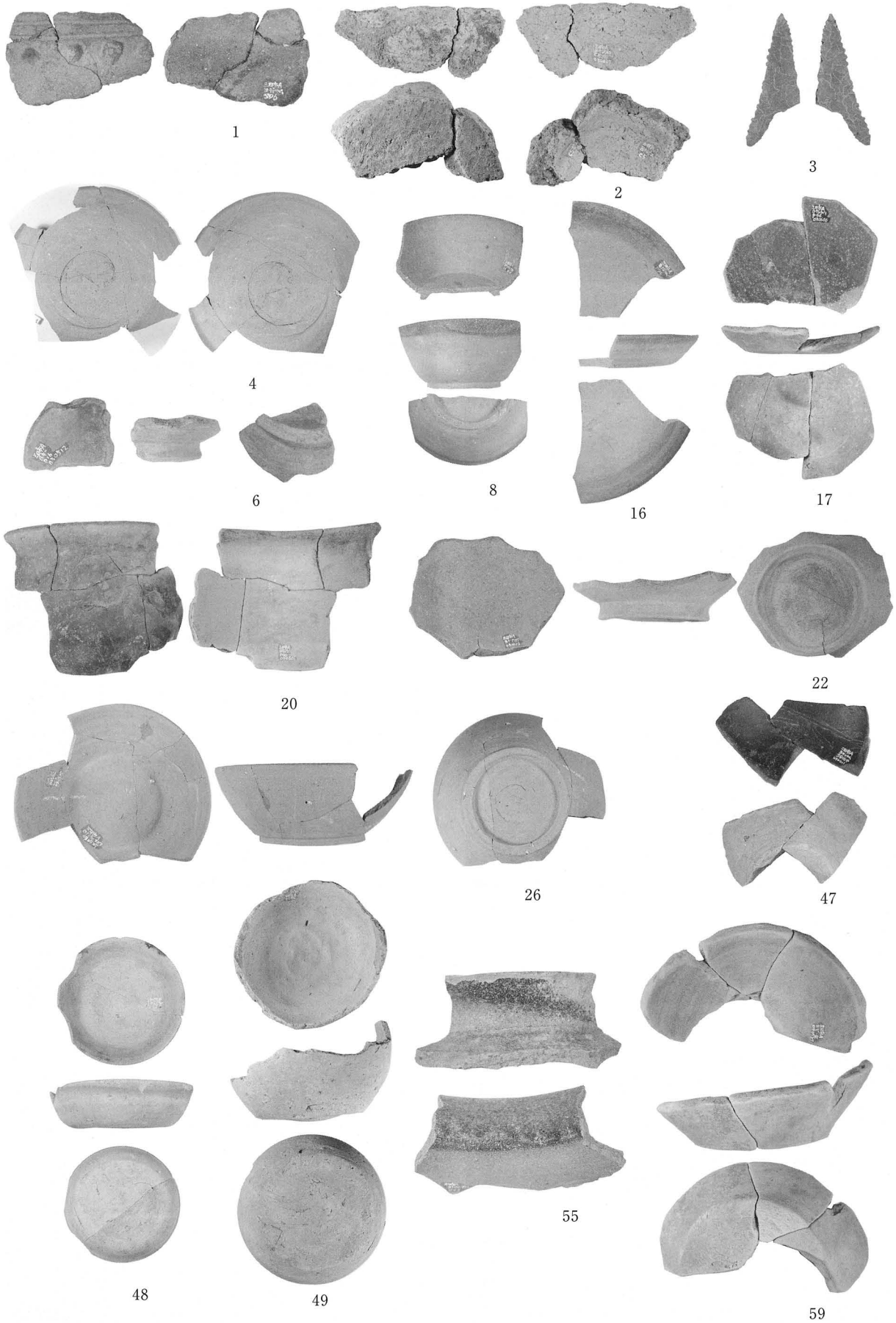
SB 8・9 (南から)



調査区西側土取穴 (北から)



鞍部全景 (南から)

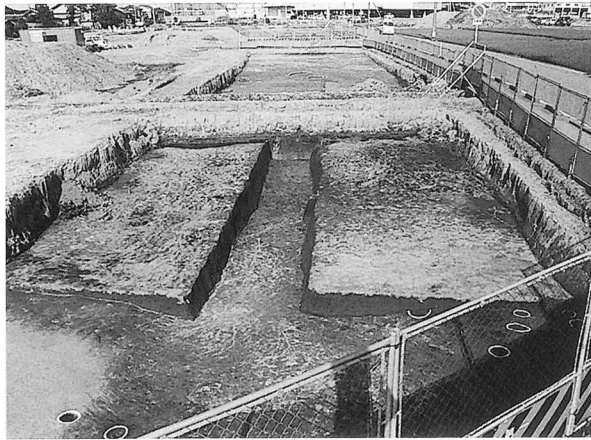




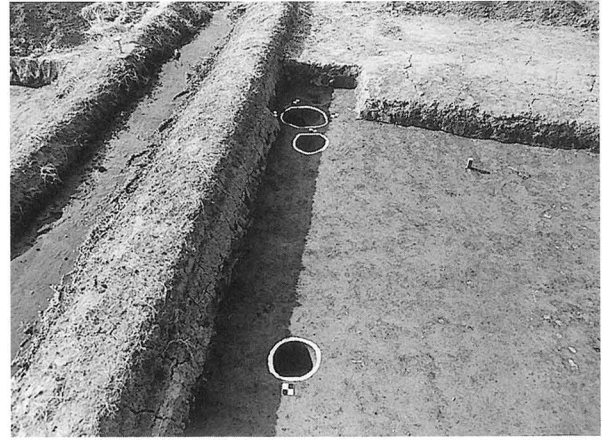
I区全景 手前SD2 (東から)



V区全景 (西から)



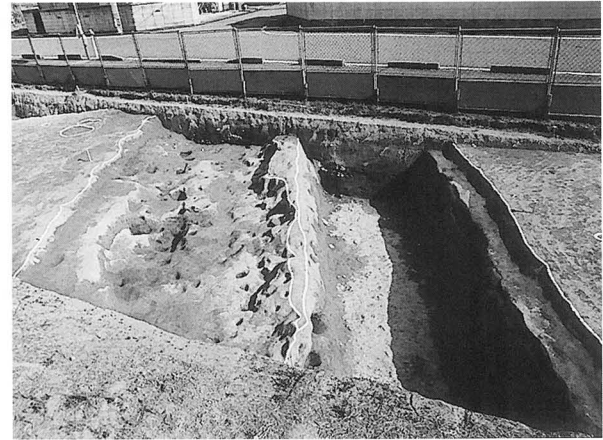
II区全景 (西から)



V区SB1 (南から)



III区全景 (東から)



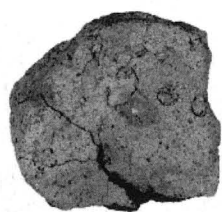
I区SD1、SX1 (北西から)



IV区全景 (西から)



IV区自然河道 (北から)



1



2



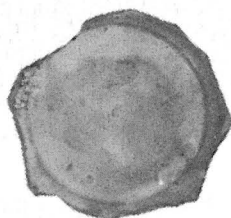
3



4



5



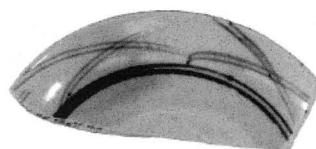
6



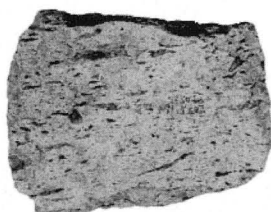
7



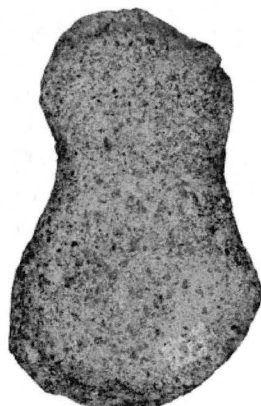
8



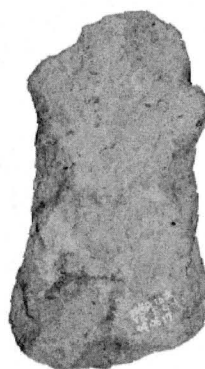
9



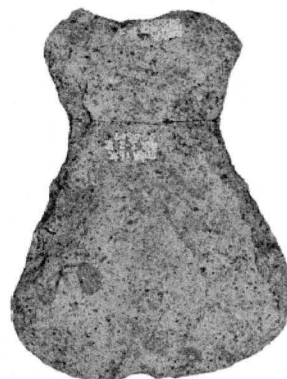
10



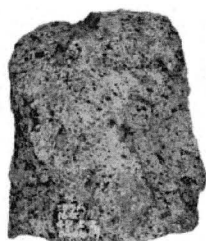
11



12



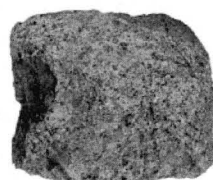
13



14



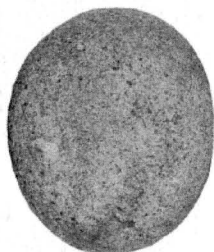
15



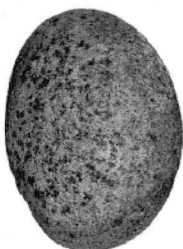
16



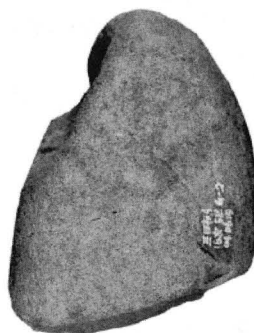
17



18



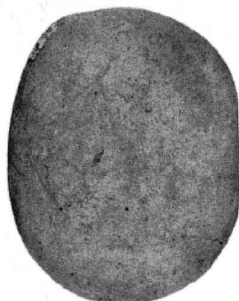
19



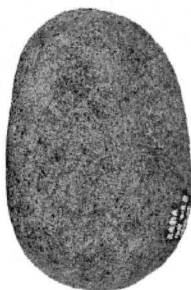
20



23



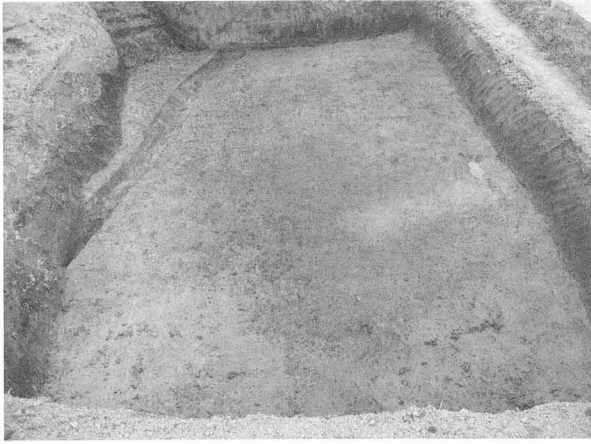
21



22



24



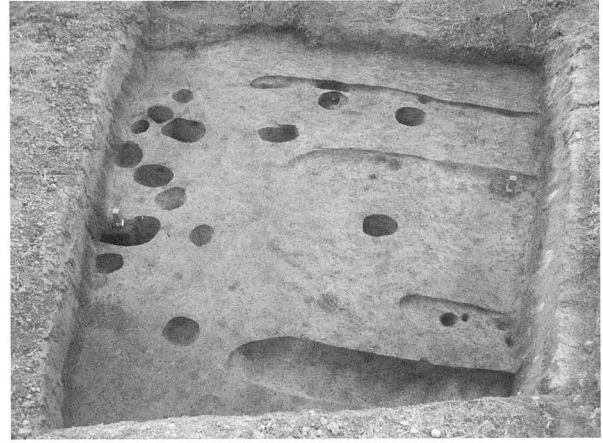
トレンチ1 (北西から)



トレンチ5 (南東から)



トレンチ2 (北から)



トレンチ6 (北東から)



トレンチ3 (北東から)



トレンチ7 (南東から)



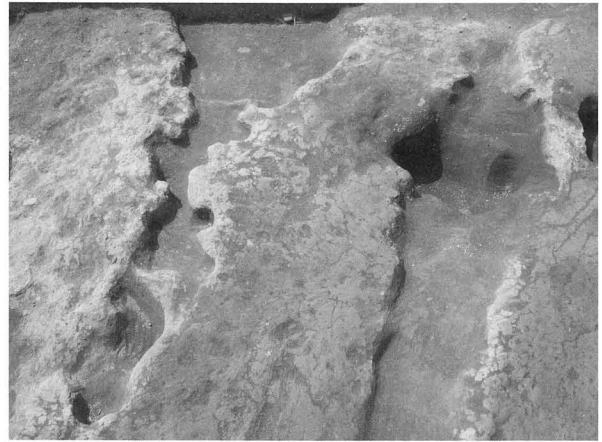
トレンチ4 (北東から)



トレンチ8 (南東から)



トレンチ9 (北西から)



道路跡硬化面 (トレンチ10)



トレンチ10 (北西から)



SD 3 (南から)



古代北陸道跡 (南西から)



畝溝 (南西から)



古代北陸道跡 (北東から)



SK 1 (南西から)





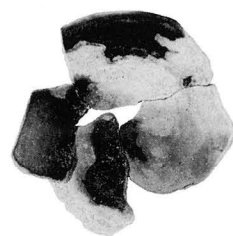
1



2



3



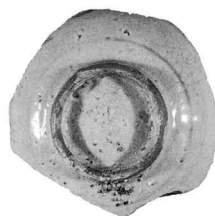
4



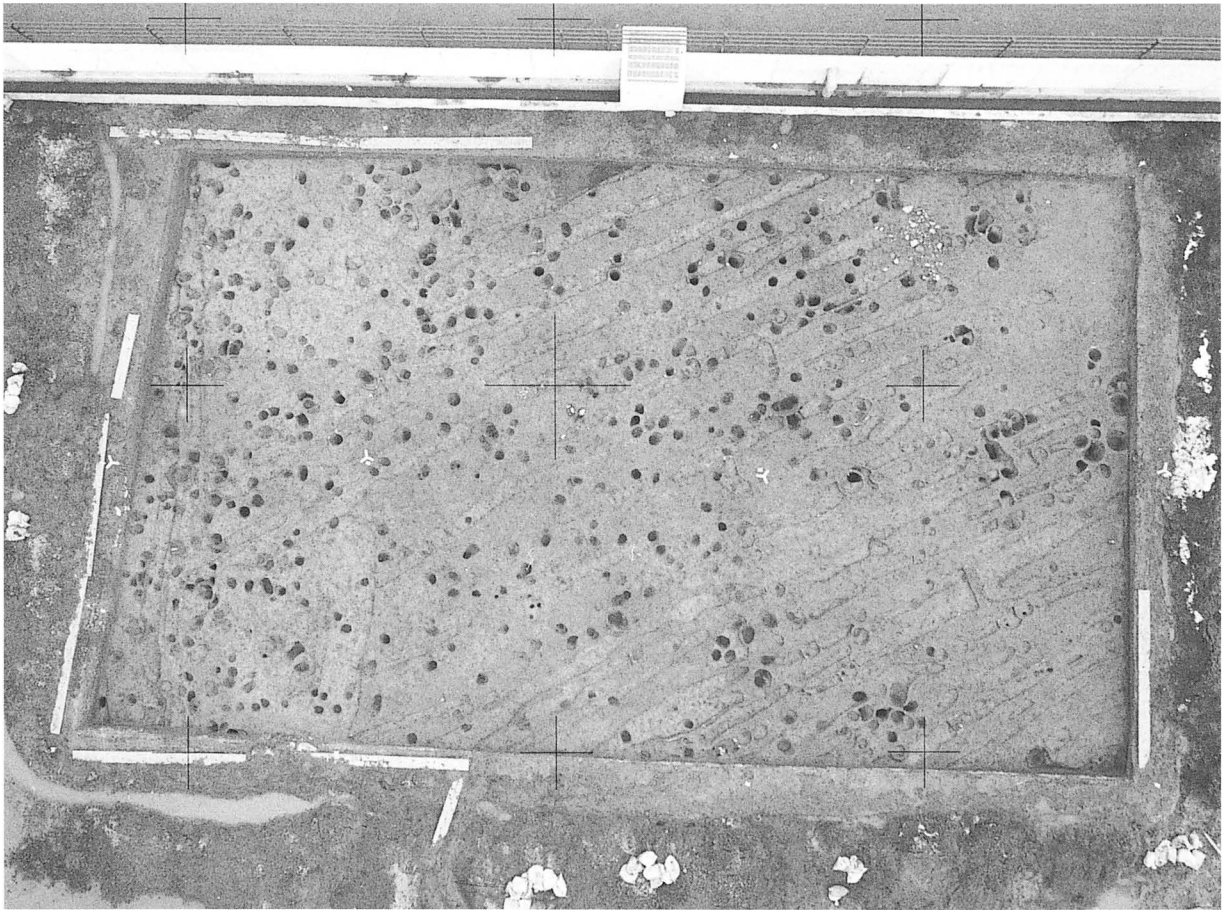
5



6



7



第 22 次調査区 2 区全景 (上空から)



第 33 次調査区全景 (上空北側から)



第33次調査区東側 (北西から)



第33次調査区西側 (南西から)



第33次調査区中央 (東から)



第33次調査区中央小穴 (垣) 群 (北から)



第33次S I 1 (北から)



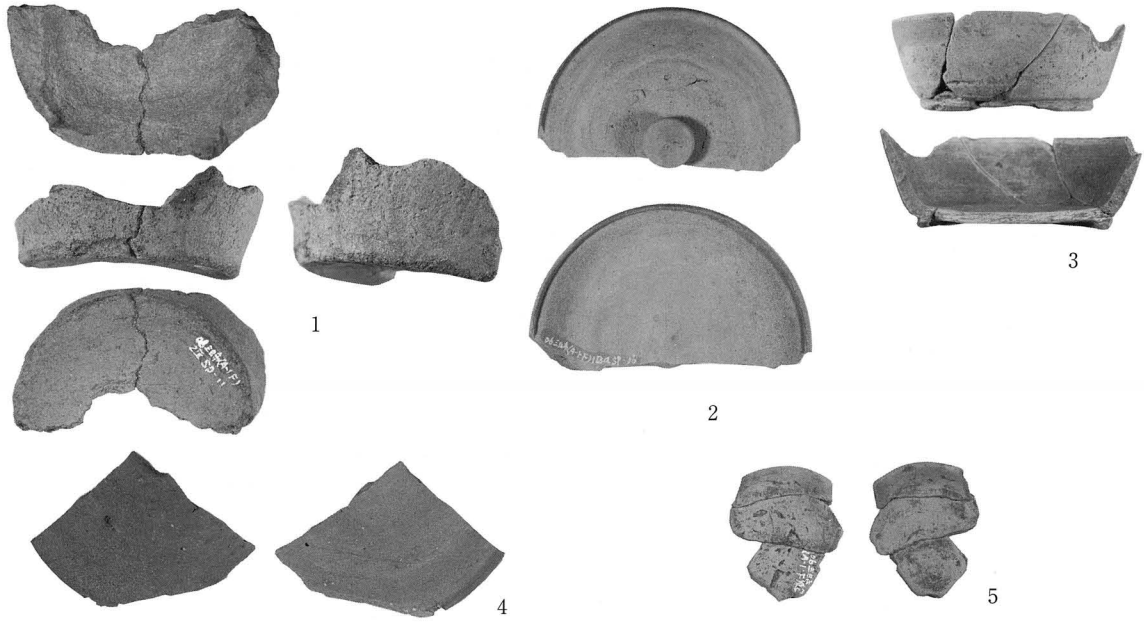
第33次S I 2 (南から)



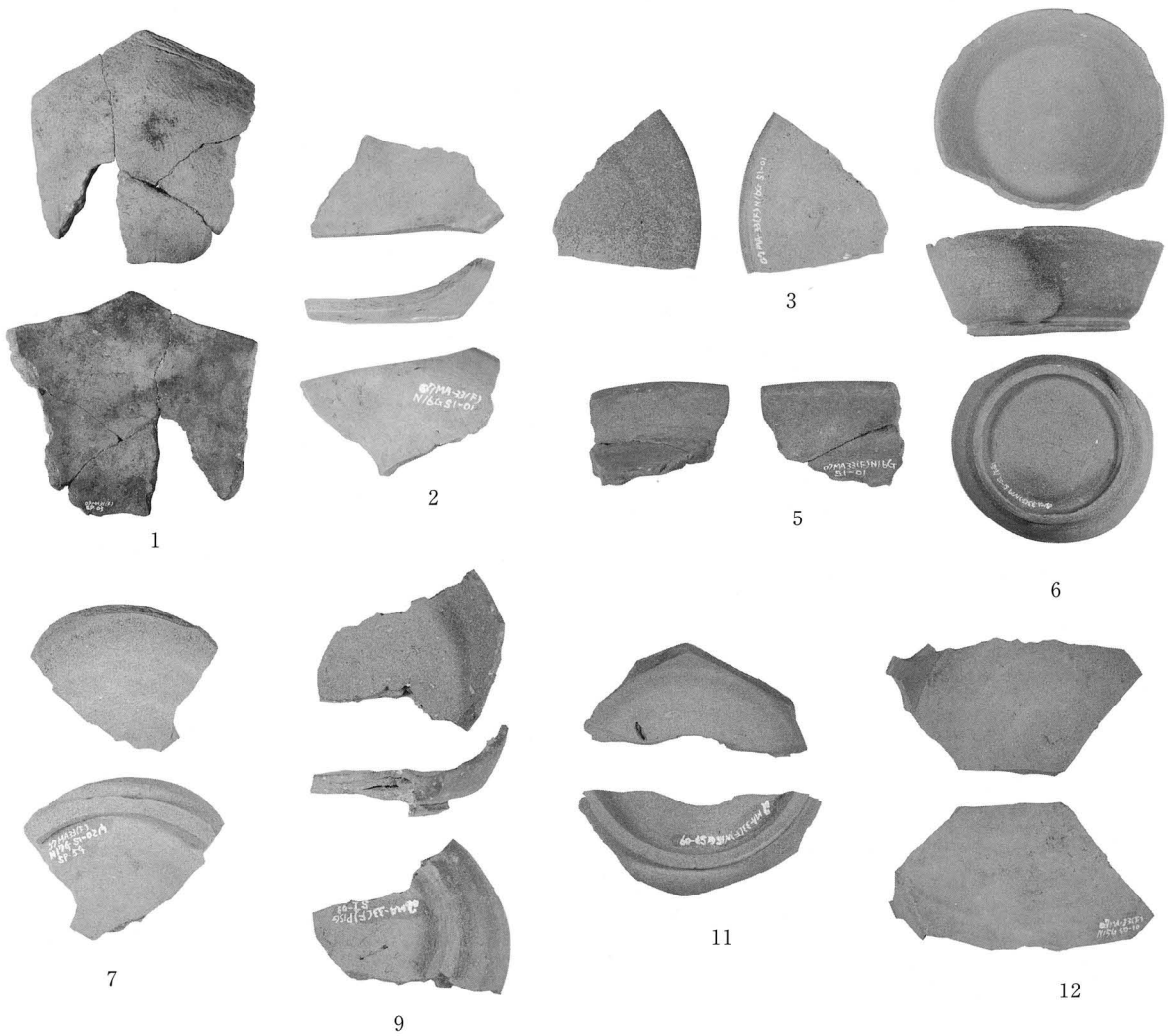
第33次S I 3 (南西から)



第33次S I 4 (南東から)



第22次



第33次



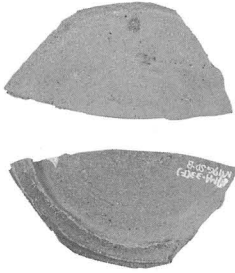
14



15



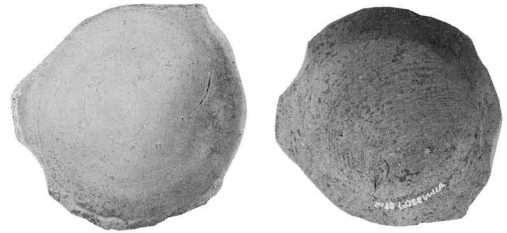
16



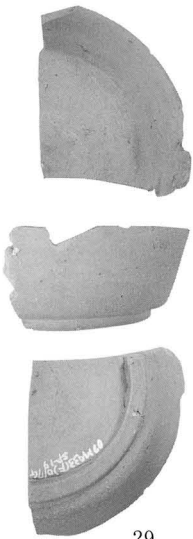
17



23



25



29



34



35

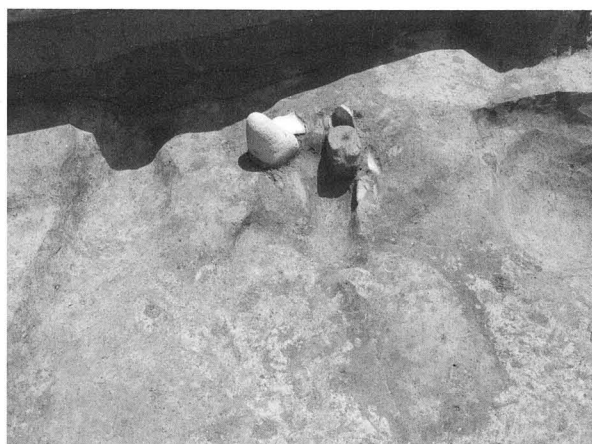


38

第33次



SI 1 (南から)



SI 4 カマド (北から)



SI 2 (西から)



須恵器 18 出土状況 (SI 4)



SI 3 (南から)



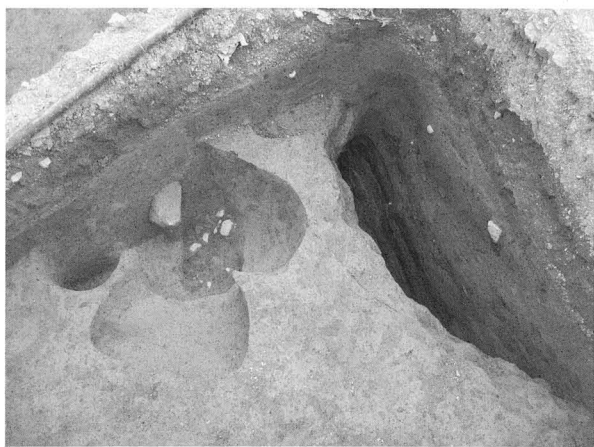
SD 7 II区古代北陸道跡路面 (西から)



SI 4 (東から)



SD 8 III区古代北陸道跡路面 (西から)



SK 1 (北東から)



SK 5 (東から)



SK 2 (南東から)



SK 5 鉄鍋 75 出土状況 (東から)



人歯出土状況 (SK 2)



SK 6・7 (北東から)



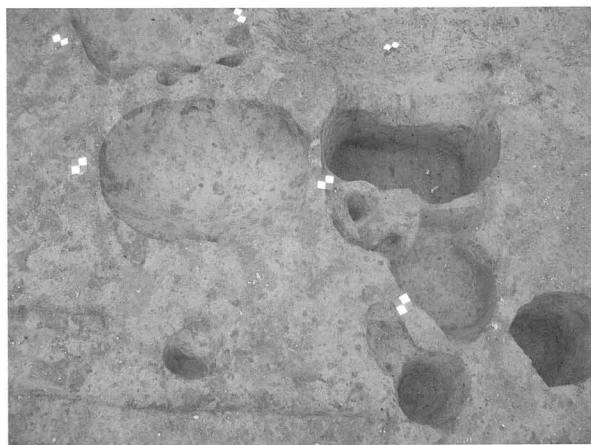
SK 3・4 (西から)



SK 8・9 (東から)



S K 10・11 (北から)



S K 17・19・20 (西から)



S K 12・13 (東から)



S K 21 (南から)



S K 14 (北西から)



S K 22 土層断面



S K 16 (西から)



S K 23・24・25 (南から)





S K 24、25 (北から)



S K 26 (北から)



天目茶碗 39 出土状況 (S K 24)



瀬戸丸碗 38、行火 67 出土状況 (S K 26)



鉄鍋 77 出土状況 (S K 25)



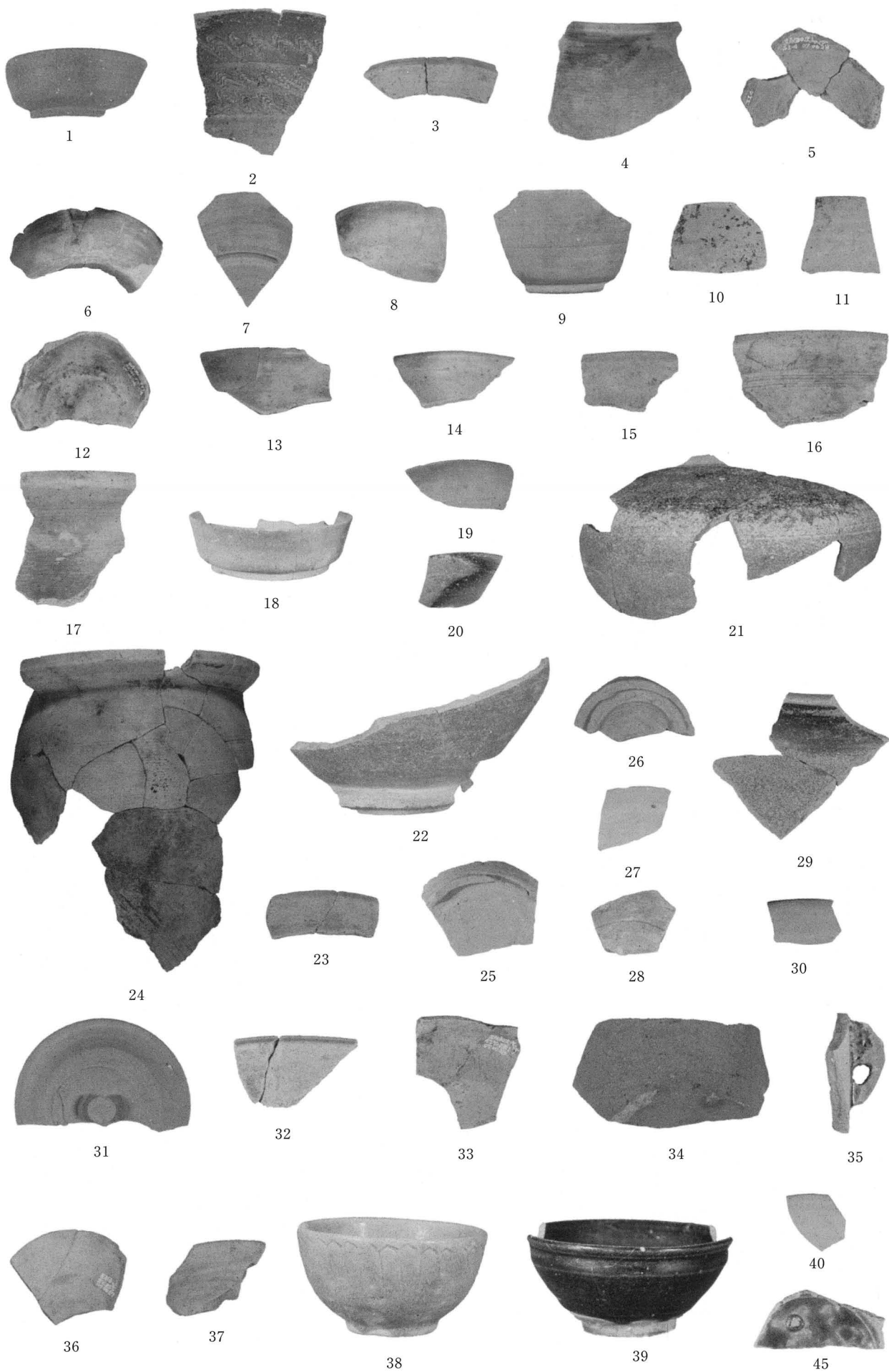
S K 19 ~ 26 (西から)



銅銭 87 ~ 92 出土状況 (S K 25)



S D 2 (南から)

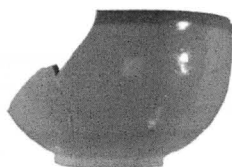




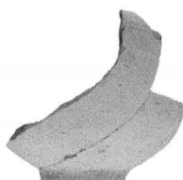
41



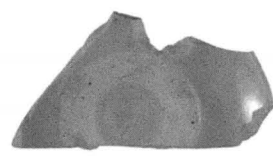
42



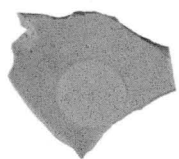
43



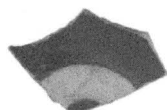
44



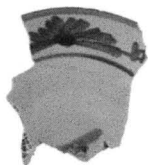
46



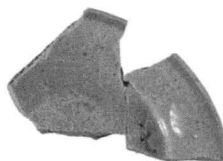
47



48



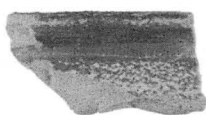
49



50



51



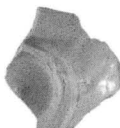
52



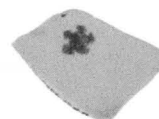
53



54



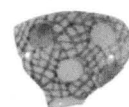
55



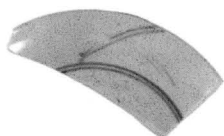
56



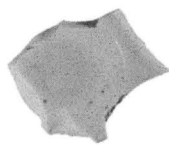
57



58



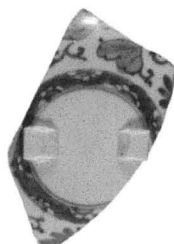
59



60



61



62



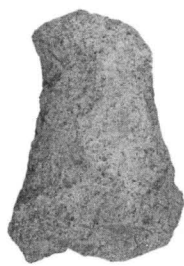
63



64



65



66



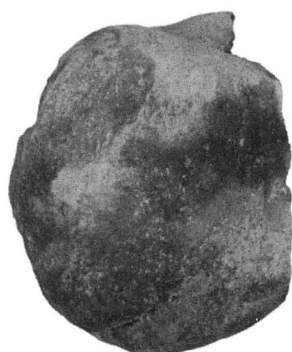
68



69



67



70



71



72



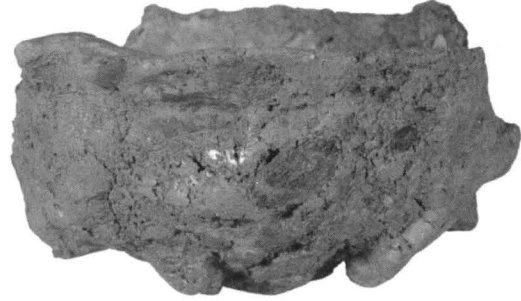
75



73



74



76



77



78



79



80



81



82



83



84



85



86



87



88



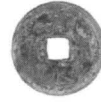
89



90



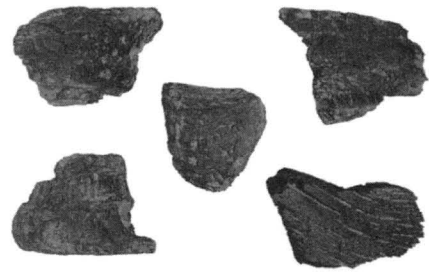
91



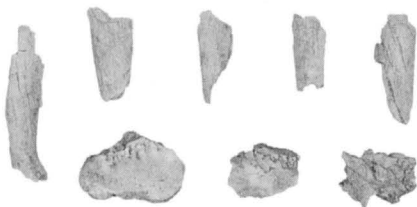
92



93



炭化物(P2)



人骨(SK21)



人歯(SK2)

人歯(SK16)

報告書抄録

ふりがな	みっかいちAいせき							
書名	三日市A遺跡5							
副書名								
シリーズ名	北西部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	6							
編集著者名	田村昌宏 横山貴広							
編集機関	野々市市教育委員会							
所在地	〒921-8510 石川県野々市市三納一丁目1番地 TEL 076-227-6122							
発行年月日	西暦 2012年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °'〃	東経 °'〃	発掘期間	発掘面積 m <sup>2</sup>	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
みっかいち 三日市A遺跡 4次調査	いしかわけんののいちし 石川県野々市市 みっかいちまち 三日市町	17344		36° 32' 4"	136° 35' 47"	20020208 ～ 20020326	830	記録保存 調査
みっかいち 三日市A遺跡 9次調査	いしかわけんののいちし 石川県野々市市 みっかいちまち 三日市町	17344		36° 32' 6"	136° 35' 52"	20030418 ～ 20030707	2,770	記録保存 調査
みっかいち 三日市A遺跡 16次調査	いしかわけんののいちし 石川県野々市市 みっかいちまち 三日市町	17344		36° 32' 4"	136° 35' 36"	20040412 ～ 20040716	1,387	記録保存 調査
みっかいち 三日市A遺跡 21次調査	いしかわけんののいちし 石川県野々市市 みっかいちまち 三日市町	17344		36° 32' 3"	136° 35' 43"	20051018 ～ 20060329	570	記録保存 調査
みっかいち 三日市A遺跡 22次調査	いしかわけんののいちし 石川県野々市市 みっかいちまち 三日市町	17344		36° 32' 12"	136° 35' 52"	20060120 ～ 200602223	822	記録保存 調査
みっかいち 三日市A遺跡 30次調査	いしかわけんののいちし 石川県野々市市 みっかいちまち 三日市町	17344		36° 32' 3"	136° 35' 44"	20070507 ～ 20070629	1,795	記録保存 調査
みっかいち 三日市A遺跡 33次調査	いしかわけんののいちし 石川県野々市市 みっかいちまち 三日市町	17344		36° 32' 10"	136° 35' 52"	20071023 ～ 20071127	1,642	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
みっかいち 三日市A遺跡 4次調査	集落	古代	道路状遺構(古代北陸道)、 土坑、溝		須恵器、土師器、石製品			
みっかいち 三日市A遺跡 9次調査	集落	縄文、古代	道路状遺構(古代北陸道)、 掘立柱建物、土坑、溝		縄文土器、須恵器、土師器、 石製品			
みっかいち 三日市A遺跡 16次調査	集落	縄文、中世	溝、土坑		縄文土器、土師器皿、青磁、 打製石斧、磨石			
みっかいち 三日市A遺跡 21次調査	集落	縄文、古代 中世	道路状遺構(古代北陸道)、 畝溝、土坑		縄文土器、須恵器、土師器、 青磁			
みっかいち 三日市A遺跡 22次調査	集落	古代、中世	土坑、溝		須恵器、土師器、中世土器			
みっかいち 三日市A遺跡 30次調査	集落 墓	古代、中世 近世	道路状遺構(古代北陸道)、 竪穴建物、墓坑、溝		須恵器、土師器、瀬戸焼、青磁 行火、鉄鍋、人骨		近世鍋被り葬	
みっかいち 三日市A遺跡 33次調査	集落	縄文、古代 中世	竪穴建物、土坑、溝		縄文土器、須恵器、土師器、 中世土器、石製品			
要約	縄文時代では、土器と石製品が出土した。古代は、集落跡を確認しており、竪穴建物跡8棟、掘立柱建物跡11棟を検出した。また、各調査区の一部で、古代北陸道跡を確認した。中世は、集落跡の縁辺部と墓跡を確認した。墓は火葬による土坑墓が主体となる。中世の墓域の中には近世前半の墓も認められた。近世墓の中には鍋を頭上に被せた。鍋被り葬を確認した。							

2012年3月30日 発行

野々市市北西部土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書6

## 三日市 A 遺跡 5

著作権所有 石川県野々市市三納一丁目1番地

発行者 野々市市教育委員会

印刷者 石川県金沢市金市町ホ34番地  
前田印刷株式会社

# 三日市 A 遺跡 遺構全体図 (第 4、9、16、21、22、30、33次)

